喜多方まちづくりブック

地域資源を活かしたまちづくりの軌跡と展望

喜多方蔵のまちづくり協議会

喜多方まちづくりブック　地域資源を活かしたまちづくりの軌跡と展望

喜多方　蔵のまちづくり協議会

編著　東京大学都市デザイン研究室
発行　喜多方蔵のまちづくり協議会
平成 20 年 5 月

はじめに

「蔵ずまいのまち」としてその名が全国に知れ渡ってから30年以上が経過した現在、喜多方のまちづくりは、大きな転換期を迎えています。特に、ここ十数年の喜多方におけるまちづくりの動きは、めまぐるしいものがあります。1995年の「喜多方蔵の会」設立に始まり、2001年度からは、学術機関として東京大学都市デザイン研究室がまちづくり活動に加わりました。以降、商店街でのまちづくりイベント、地域のまちづくり団体設立（会津北方小田付郷町衆会）、県道（福島県喜多方建設事務所）・市道整備に伴う官民協力の計画推進、景観協定の締結など、様々な動きが喜多方のまちづくりを広がるあるものとしてきました。特に、2007年には、喜多方市まちづくり推進課が創設され、市民団体としても、NPOまちづくり喜多方が組織されるなど、今後の喜多方まちづくりの基盤となるような出来事も起きています。そして、本格的に「喜多方蔵のまちづくり協議会」が活動の枠を広げ、10月には、「喜多方蔵のまちづくり博覧会（くらはく）」を主催し、大きな成果を得ることができました。

本報告書は、このように積み重ねられてきた喜多方のまちづくりを、特に2000年以降の動きを中心として整理、まとめたものです。喜多方のまちづくりは、特にここ十年、地域・民間（民）、行政（官）、そして学術機関（学）が協働しながら、着実に前に進んできたということができますが、これら、民・官・学それぞれが行ってきたまちづくりに向けてのアクションとその連携の様子を見ることができます。喜多方のまちが生まれながらにして持つ特性や魅力、あるいは、現在は隠れてしまっている資源をピックアップしたほか、これまでの喜多方まちづくりの軌跡、10月に開催された「くらはく」の成果、そして、「学」の核であった、東京大学都市デザイン研究室が7年間に渡りあたためてきた喜多方まちづくりに向けての提案、これからの喜多方まちづくりに役立つであろう事例等を掲載しております。

しかし、これは、まとめではなく、あくまで、喜多方まちづくりの第一歩を記したにすぎません。これからも喜多方のまちが美しく、魅力あるものであり続け、本報告書がこれからの喜多方まちづくりの更なる進展に寄与することを強く願っております。最後になりましたが、本報告書作成にあたってご協力いただきました皆様に感謝申し上げます。

2008年5月

喜多方蔵のまちづくり協議会

喜多方の地域遺産と未来デザイン

私は喜多方（豊川と花園）に暮らしておりましたが、中学 3 年の時に横浜へ引っ越しました。その頃の喜多方の記憶は鮮明に残っています。今も変わらず身近な自然が豊かな町ですが、15 年程前でしたか、米山淳一氏（当時日本ナショナルトラスト）と訪問した際に、蔵の会の会長であった先代佐藤弥右衛門さんの話を聞いたことが大変に印象に残っています。蔵文化の奥の深さと尊敬や愛情が伝わってきました。蔵は日常の生活や風景の中に印象が残っていますが、さらには地域の芸術文化や伝統産業技そして生活、まさに喜多方を育んできたという事実です。東京大学の『喜多方研究』も地域で暮らしている人たちとの協働作業で進めてきたものです。喜多方が忘れつつある豊かさや智慧を整理してきたものとも言えます。4120 棟の蔵。これからの悉皆調査でさらに増えると思われますが，蔵の数としては日本一。座敷蔵から厠蔵，塀蔵とその種類や煉瓦などの素材も豊富で、鏝絵などの職人技は現在も継承されていることは驚くべきことです。

蔵の会や小田付町衆会、喜多方建築士会，東京大学、喜多方市が協力して，小学生の総合学習，高校生の地域計画学習，中学生の蔵調査と，若い世代が地域遺産を知る機会も提供してきたは意義あることだと思います。今年 2 月の中学生の調査発表には本当に感動しました。「身近にこんなに文化遺産があった」と素直に喜び，取り壊しに直面し「大変なこと」と残念がっていました。わたしの子供の頃にはこうした体験がなかっただけに喜多方遺産の継承に多いに期待したしました。それだけに喜多方まちづくり協議会に集まった「公民学」の力を合わせて、喜多方の未来をデザインし次世代に可能性や楽しみを引き継ついでいくことが大切であると思います。

2008年5月

東京大学教授 北沢猛

喜多方まちづくりブック　目次

1章　喜多方まちづくりの基礎　P.5

01　喜多方の概要 …… P.6
02　喜多方・まちの歴史 …… P.8
03　喜多方の「蔵」1 …… P.10
04　喜多方の「蔵」2 …… P.12

2章　喜多方のまちづくり資源　P.15

1. 蔵
資源01　まちなか蔵一覧(小荒井編) …… P.16
資源02　まちなか蔵一覧 (菅原町、小田付編) …… P.18
資源03　喜多方集落の街並みリスト …… P.20
資源04　蔵再生・リノベーションリスト …… P.24

2. 蔵以外の資源
資源05　喜多方・蔵以外の資源リスト …… P.26
資源06　三津谷の登り窯 …… P.28
資源07　喜多方煙突一覧 …… P.29
資源08　喜多方産業・ワザ リスト …… P.30
資源09　喜多方百景 …… P.32

3. みち
資源10　喜多方みちづくりの歴史 …… P.34
資源11　喜多方まちなか連立写真 …… P.35
資源12　うらみち・よこみち …… P.40
資源13　まちなか まちかどリスト …… P.42
資源14　まちなかの駐車場利用状況 …… P.44
資源15　サインの現状 …… P.46

4. 水と緑
資源16　喜多方まちなか水路と河川網図 …… P.48
資源17　喜多方くらにわ候補地 …… P.49
資源18　河川改修・橋梁の歴史 …… P.50

5. 観光
資源19　喜多方の観光行動調査 …… P.51
資源20　喜多方観光資源リスト …… P.52
資源21　喜多方田舎体験 (グリーン・ツーリズム) …… P.54
資源22　喜多方イベント・祭り一覧 …… P.55

6. にぎわいと生活
資源23　商店街用途調査 …… P.56
資源24　商店街意向調査 …… P.57
資源25　喜多方市の人口 …… P.58
資源26　まちづくり・蔵づくり 関係者へのヒアリング …… P.60
資源27　「無尽」と「結」 …… P.64

3章　喜多方まちづくりの軌跡　P.65

実践01　喜多方・まちづくり活動の展開 …… P.66

1. 魅力を引き出す
実践02　蔵みっせーまちかどミュージアム …… P.70
実践03　デスティネーションキャンペーンと レトロ横丁 …… P.72
実践04　アートぶらりー、21世紀シアターと 蔵してる通りフェスティバル …… P.74

2. 蔵を活用する
実践05　「マチコロ」→「寄合所」へ …… P.76

3. まちなみを創る
実践06　のれん景観実験 …… P.80
実践07　駅前通り景観協定 …… P.82
実践08　丸見食堂竣工(駅前通り) …… P.84

4. 次世代を巻き込む
実践09　喜多方まちづくり学会(まなびあい) …… P.86
実践10　喜多方まちづくり教育の歴史 ー蔵学習 …… P.88
実践11　喜多方まちづくり教育の歴史 ーまちづくり塾 …… P.90

5. エリアから育む
実践12　ふれあい通りのまちづくり …… P.92
実践14　市役所通りのまちづくり …… P.94
実践15　駅前通りのまちづくり …… P.98

6. 動きを広げる
実践16　喜多方まちづくり組織の展開 …… P.100

4章　喜多方蔵のまちづくり博覧会(くらはく)　P.103

01　「くらはく」とは …… P.104
02　くらはくコンテンツリスト …… P.105
　　くらはくマップ …… P.106
03　まちづくり展　メイン会場 …… P.108
04　まちづくり展　小荒井会場 …… P.109
05　まちづくり展　小田付会場 …… P.110
06　まちづくり展　サテライトスポット …… P.111
07　くらにわ社会実験 …… P.112
08　おもてなしの花小径 …… P.114
09　蔵カフェ …… P.115
10　まちづくりイベント …… P.116
11　サイン実験 …… P.117
12　まちづくり語り合い …… P.118
13　まちづくりフォーラム …… P.119
14　くらはく歩行者交通量調査 …… P.120

5章　喜多方まちづくり提案　P.121

喜多方まちづくり提案からまちなかプランへ …… P.122
提案01　もう一度蔵を使いこなす …… P.124
提案02　歩いて心地よいみちにする …… P.125
提案03　極上の会津文化を味わう …… P.128
提案04　滞在時間を倍増する …… P.130
提案05　「くら」と「にわ」を育む …… P.132
提案06　「水」と「緑」を中心につくる …… P.134
提案07　まちづくり仲間を増やす …… P.136

6章　喜多方まちづくり参考事例集　P.139

事例01　地域風景資産
事例02　空き家・空き蔵活用仲人事業 …… P.140
事例03　京町家情報センター
事例04　かなざわ町家情報バンク …… P.141
事例05　東京R不動産
事例06　水辺不動産 …… P.142
事例07　町並み委員会
事例08　町屋外観再生プロジェクト …… P.143
事例09　黒塀プロジェクト
事例10　通り名の復活をめざすプロジェクト …… P.144
事例11　小路とサインの一体的整備
事例12　まちかど整備事業 …… P.145
事例13　横浜市公共サイン
事例14　広域公共サイン(看板)整備事業 …… P.146
事例15　石見銀山方式 パーク&ライド
事例16　長崎さるく …… P.147
事例17　佐原マップ
事例18　シブヤ大学 …… P.148
事例19　庵の京町家ステイ
事例20　安心院グリーンツーリズム …… P.149
事例21　オーベルジュ土佐山
事例22　ポートラムフィーダーバス …… P.150
事例23　都市景観形成ガイドライン
事例24　景観自己診断による眺望づくり …… P.151
事例25　湧水を活かしたまちづくり
事例26　近江八幡市の水郷風景づくり …… P.152
事例27　既存の石積みを活かす河川デザイン
事例28　津和野川ふるさとの川整備計画 …… P.153
事例29　日本大通りオープンカフェ
事例30　水辺のオープンカフェ …… P.154
事例31　小布施 オープンガーデン事業
事例32　NPO「こころの森」ファミリーサポートセンター　P.155
事例33　専門高校での実践教育による防災まちづくり
事例34　柏の葉アーバンデザインセンター(UDCK)　P.156
事例35　東京コミュニティーパワーバンク
事例36　世田谷まちづくりファンド …… P.157

1章　喜多方まちづくりの基礎

会津盆地の中で在郷町から始まって独自の発展を遂げた喜多方は、他の都市にはない個性や特徴にあふれている。今では、市内に4100棟あるといわれる「蔵」と、まちなかに20店舗以上が集積する「ラーメン」のまちとして全国区の知名度を得ながら、年間100万人ほどの来訪者が訪れるまでになった。
また、ここ数十年の喜多方の成長には、その背景となるまちづくりへの活動も見逃せない。地域の個性を知り、愛し、高める運動とともに、少しずつ、地域の個性を見直し、磨く活動へと広がっていった。

このような、喜多方のまちの個性はどんなものなのか、これらの個性は、どのような歴史や背景を基に生まれているのかを整理してみる。

01

喜多方って、どんなところ?

喜多方の概要

磐梯山と飯豊連峰に囲まれた、会津盆地の「北方」に位置する喜多方のまち。農業と商人によって発展してきたこのまちの基盤には、なりわい・文化を支える豊かな自然環境が存在している。

広域からとらえた喜多方：磐梯・飯豊の山々に囲まれた盆地の広がり

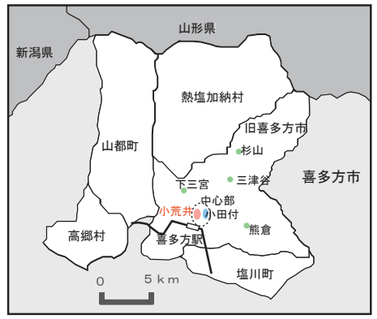
喜多方市は、会津地方の北部に位置し、東は磐梯山・猪苗代湖を含む奥羽山脈に属する山々、西は越後山脈、北は飯豊山系の山々に囲まれた盆地にある。南端に阿賀川が流れ、その支流をなす、濁川、押切川、田付川、大塩川等の河川が、市域の南北を貫いている。周囲を山に囲まれた、閉じられた領域の中で、独自の風土・文化・産業が育まれ、地域をとりまく豊かな自然、山々から流れ出る水、良質な地下水が、まちの基盤を作ってきた。

■喜多方市の概要

会津の北部に位置していたことから北方（きたかた）と称されていた喜多方地方。明治 8 年、昭和 29 年の町村合併により喜多方市（旧喜多方市）となり、平成 18 年に旧喜多方市、塩川町、山都町、熱塩加納村、高郷村の 1 市 2 町 2 村の 5 市町村が合併し、現在の喜多方市となった。人口は約 55,000 人。市内には、市街地から農村部まで、4,200 棟もの蔵が点在する「蔵のまち」として知られている。

農業を基盤としながら、商人のまちとしても栄え、漆器、桐下駄などの伝統工芸や、清酒、味噌、醤油などの醸造業、食べ物ではラーメン、そばなどが有名。特に喜多方ラーメンは全国的にも知名度が高い。

毎年 100 万人もの観光客が訪れる観光都市でもある。



水のまち喜多方：まちをとりまく豊かな自然とその恵み

■山々に抱かれたまち

会津盆地の北部に位置する喜多方市。市内からは、北西に万年雪を冠する飯豊連峰、遠く南に那須連山、東には雄国山、磐梯山、その他にも大峠、高曽根山、館山、琴平山などの山々を眺めることができ、四季折々の表情を見せる。

■まちへと巡る水

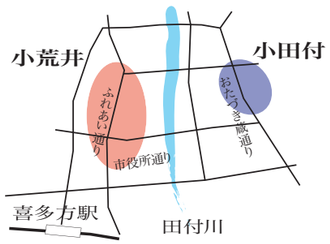
市内は盆地の平坦な地形で、押切川、田付川が中心部を南北に流れている。また、喜多方地方は複合的な扇状地にあり、周囲の山々は降雪・降水量が多いため、この雪融水が恵みとなってまちを潤し、市内の至るところで湧水を見ることができる。

湧水は、田付川とともに古くから農業用水や生活用水として用いられ、江戸時代には湧水をまちへと導く水路のネットワークが形成された。これらの水路は、現在でもまちの中に巡らされており、身近に接することができる。

商人のまち喜多方：双子の在郷町

喜多方のまちは小荒井、小田付の二つの在郷町（農村が町場化したまち）を中心として発展してきた。

小荒井地区は、市の中心商店街であるふれあい通りを中心とした地区である。古くから市が立ち、商人文化が栄えてきた。鉄道や国道の開通により少しずつ表情が変わってきたものの、今も江戸・明治以来の個性的な商家が軒を連ね、その背後には多くの蔵が控えている。



田付川の東側に位置する小田付地区は、小荒井地区と並んで古くから市が立ち、現在もまとまりある蔵の町並みが形成されている。江戸時代には代官所が置かれ、有力な商人が軒を連ねていた。開発を免れたことから、今も地区には約 100 棟の蔵が当時の姿を残している。

蔵ずまいのまち喜多方：豊かな喜多方文化の象徴

まちのいたるところに点在する蔵は、座敷蔵・店蔵・酒蔵・貯蔵蔵など、用途も様々。喜多方では、商業・産業を営む場として、住まいの場として、古くから人々の生活の中に蔵が溶け込んできた。また、建築様式や素材も様々で、白漆喰、黒漆喰、レンガ、土壁など、多彩である。これらの蔵は現在も使われ続けており、喜多方の生活文化の中に、しっかりと息づいている。

02

固有の風土・文化を育んだ、郷土の気概と営み

喜多方・まちの歴史

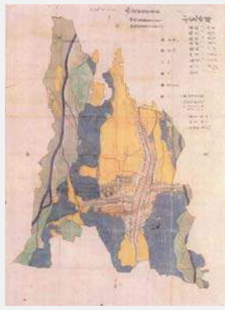
古くは信仰・仏教文化が花開き、やがて農村の定期市によって基盤がつくられた商人のまち喜多方。近代以降は、鋼業化・都市化の波の中で、農-商-工のバランスあるまちへと姿を変えてきた。蔵を中心とした文化あふれるまちとして全国に知られるまでの、喜多方の生い立ちを追う。

喜多方・まちの歴史年表

縄文	雄国山麓に人が住み始める。
弥生	水稲耕作が伝わり、集落が低地に広がる。
807	僧「徳一」が恵日寺を開き会津に仏教文化が栄える。
1055	源義家が熊野神社を岩沢・宇津野・新宮に遷座。
1189	佐原十郎義連が会津最初の領主となる。 上三宮に願成寺開山（鎌倉時代）。
1536	大洪水がおこり、押切川ができる。
1564	芦名盛氏の命により小荒井の町割が行われる。 （これ以前に中田付に市があったと言われている。）
1579	小荒井村に毎月2と7の日を市日と定めて六斎市を開く。
1582	左瀬大和が小田付の町割を行う。市を小荒井村と小田付村で二分し三斎市となる。
1589	伊達政宗が磨上原の戦いで芦名氏を破る。
1590	蒲生氏郷が会津に封ぜられる。
1601	熊倉村に月六斎の市がたつ。
1611	慶長大地震がおこる。
1649	保科正之が会津本街道5筋を定める。
1673	このころより喜多方地方に藤樹学が盛んになる。
1788	熊倉村、小田付村、上三宮村に代官所が設置される。
1858	岩田善内が濁川から阿賀川への舟運を開く。

新宮の熊野神社拝殿（長床）

青山城跡


文化7（1810）年 小荒井駅絵図

（1）古代～中世（縄文時代～弥生時代）

この地方には、1万年前頃から人が住んでいたと言われている。縄文中期、雄国山麓の扇状地上の急斜面には狩猟・採集に適した豊かな自然があり、水の便もよく、縄文文化が発展した。その後、水稲耕作が伝わり、会津盆地に集落が増加する。

（2）平安時代

■仏教信仰

徳一が恵日寺を創建し、会津に仏教文化が花開く端緒となった。また、天保年間（1053～58）に上三宮町、慶徳町、熱塩加納町に熊野神社が勧請され、喜多方は会津における熊野信仰の中心となった。

（3）鎌倉時代～室町時代

■芦名氏の会津支配

会津最初の領主・佐原十郎義連により、青山城や新宮城など領主の居城が建てられた。その後、15世紀室町時代に黒川（今の会津若松）の芦名氏が新宮氏を滅亡させ、佐原氏も姿を消し、芦名一族が会津盆地から喜多方地方を広く掌握するようになった。

（4）安土・桃山時代

■町割りと定期市のはじまり

1564年、82年にはそれぞれ小荒井、小田付の町割りが行われた。山の民と農村の民が物資交換をするため、中田付村で十二斎の位置が開かれ、その後、小荒井・小田付に移された。この定期市が商家の礎となり、在郷町が形成されていった。

小荒井と小田付の市場は、阿賀川舟運と越後裏街道を通じて越後地方ともつながっており、喜多方からは米が、越後からは塩・海産物などが運ばれた。

（5）近世（江戸時代）

■定期市の保護育成

幕府は武士・商工業者を城下町に集住させた一方で、城下町以外の農村には小荒井・小田付などの定期市を育成した。

■酒造と醸造業を支える蔵

喜多方の良質な湧き水を利用した酒造が行われるようになった。味噌や醤油などの醸造業も盛んになり、この頃から喜多方に醸造のための蔵が建てられるようになる。

1868	戊辰戦争が始まる。鶴ヶ城が開城される。
1873	小荒井小四郎が喜多方製糸工場を開業する。
1875	喜多方町制施行される。
1880	喜多方大火。蔵の重要性が再認識される。
1882	県令三島通庸のもとで会津三方道路着工（米沢街道は1884年完成）。 自由党員らによる喜多方警察署の襲撃（喜多方事件）。
1888	磐梯山噴火。
1904	岩越鉄道（若松～喜多方間）開通。
1906	喜多方製糸業組合結成。織物業が発展。
1915	野口英世が帰郷。喜多方でも講演。
1918	喜多方町で米騒動。
1924	喜多方町中央公園設置に関する建議（御清水公園など開設へ）。
1938	国鉄日中線（喜多方～熱塩間）営業開始）。
1939	昭和電工を喜多方に誘致。
1944	東京から喜多方町への学童集団疎開。
1951	昭和26年から喜多方区画整理事業が花園町で行われる。
1954	喜多方市政が施行（1町7か村合併）される。
1965	大峠道路が一般国道121号に指定される。
1972	金田実氏の蔵の写真展開催。
1975	NHK新日本紀行「蔵ずまいのまち喜多方」が放映される。 区画整理事業が盛んになる（市内最大規模の西部区画整理事業など）。
1984	日中線が廃止される。 喜多方ラーメンのブーム（1985～）
1987	HOPE計画が策定される。
1993	「蔵の里」が整備され、蔵が移築される。
1995	「蔵の会」結成。 まちづくりの動きが活発化する（2001年頃～）。
2006	新制喜多方市政が施行（1市2町2村合併）される。

明治期の小田付南町

開通当時の喜多方駅

大正時代の小荒井の街並み

昭和期の祭り

喜多方蔵の里

■藤樹学・庶民文化

藤樹学が北方地方を中心に庶民の間に広がった。明治初期まで多くの人々によって学び継がれ、会津藩校日新館の教育にも影響を与えた。また、村役人や酒造業者を中心に裕福な農民・商人層が成長し、庶民文化として俳諧が盛んになった。

■戊辰戦争

戊辰戦争では会津平野が戦場となった。喜多方にも戦火が及び、小田付が焼かれた。鶴ヶ城に篭城していた会津藩最後の藩主・松平容保は1868年9月に落城した。

（6）明治時代

■養蚕・製糸業

喜多方製糸工場の開業は会津地方での器械製糸のきっかけとなったが、明治末期には経済不況から糸価が下落し、零細企業は淘汰された。

■蔵の重要性を再認識

1880年の大火から焼け残った蔵に対する認識が強まり、他の地方では珍しい蔵屋敷など、多くの蔵が建造されるようになった。

会津三方道路が開削され、喜多方が新米沢街道の重要な経由地となった。

■喜多方町の誕生

1875年に小荒井村、小田付村など5村が合併し、喜多方町が誕生した。また、99年には加納鉱山が稼動されて全国有数の銅鉱山となり、好景気が蔵の増大に寄与した。

■岩越鉄道の開通

まちの人々の運動によって岩越鉄道が喜多方駅を経由して延伸した。漆器や酒造、生糸などの主要生産物に外販の道が開け、生産が飛躍した。

（7）大正・昭和以降

■蔵のまち喜多方

小荒井・小田付の商人たちが残した蔵が、1972年の金田実氏の写真展を契機に注目され、1975年のNHK新日本紀行により「蔵ずまいのまち」として知られるようになった。

■日中線の営業

1938年、喜多方駅と熱塩駅を結ぶ日中線が開業した。当初は栃木県今市から喜多方を経由し山形県米沢に到るという壮大な計画の一部だったが、赤字ローカル線となり1984年に廃止された（現在は線路跡にサイクリングロードが整備されている）。

■ラーメンのまち喜多方

大正期に中国出身者からもたらされ、地域に根づいたラーメン。「蔵のまち」として知られるようになって以降、次第に人気を集めるようになり、現在では蔵と並んで喜多方の観光を牽引している。

03

喜多方の営み・暮らしと蔵のつながり

喜多方の「蔵」1

一棟でも凛として建つ蔵は、喜多方文化のシンボルと言える。その背後には、商業の興隆、酒や漆などの地場産業、それらを支えた豊かな自然と農業、喜多方の高度な文化や人々の誇りなど、多様な要素が広がりをもって連なっている。

幅広い蔵文化との繋がり

「北方」と呼ばれた近世の喜多方は、物資の集積地として、また若松城下と米沢を結ぶ街道のまちとして栄え、喜多方商人により多数の蔵がつくられた。市内（2006年合併前）には、現在も2600棟以上の蔵が存在していると言われる。

喜多方の文化を代表する蔵は近世から農家蔵を中心に存在していたが、広く普及したのは19世紀初頭以降である。明治13年の小荒井地区の大火は、土蔵造りの耐火性を実証することになり、その普及に影響を与えた。その後も温度湿度の調整を要する醸造業、漆器、染色等の地場産業を中心に、作業蔵として広まり、19世紀半ごろからは、店舗（店蔵）や住居の一部（座敷蔵）としても利用されるようになる。現在、市全域で4千以上といわれる蔵の遺構の大半（製造蔵60％、貯蔵蔵は70％）は、明治期の大火後のものである。

また岩越鉄道（現在の磐越西線）の工事開始（明治35年）に及んで、レンガ焼成が始まるとともに、レンガ造りの各種の蔵が加わるようになる。

蔵造りの建造物は、喜多方の市街地のみならず、周辺集落も含めた市域全域に広く分布しているが、中でも特に市街地内の小荒井地区、小田付地区では、蔵造りの町並みが形成されており、昭和54（1979）年には伝統的建造物群保存地区指定に向けての調査が行われている。

また周辺集落では、三津谷集落のレンガ蔵群、杉山集落の農家蔵群などが残り、こちらも昭和56（1981）年に伝統的建造物群保存調査が行われている。この他、下三宮集落には鏝絵（こてえ）のある蔵群が残っている。

このように、量・多彩さをもつ喜多方の蔵であるが、近年、産業構造や生活スタイルの変化、維持管理の困難さゆえ、使われなくなってしまった蔵や姿を消しゆく蔵も少なくない。「蔵のまち喜多方」を後世に受け継ぐ上での大きな課題である。

■醸造業を育む豊かな水・自然の恵み

飯豊山の伏流水などの豊富な水資源は、喜多方に良質な米や農産物を育んできた。同時に美味しい水の存在は、味噌・醤油、日本酒などの醸造業の発展をもたらした。喜多方の蔵は、これらの自然の恵みとも大きく関わっている。（写真：金忠しょうゆ蔵）

■商家と蔵

蔵は、商品蔵、店蔵としてももちろん活用されている。大切な商品を守るために、耐火建築である蔵造りの店舗（店蔵）が数多く建てられた。同時に、その財の象徴として、喜多方の商人たちはこぞって蔵座敷等の高度な文化を築き上げた。
（写真：島慶園(右)、山中せんべい店(左)）

■農家と蔵

喜多方では、周辺部の農家でも、蔵が広く利用されてきた。農作物などの貯蔵や、道具の収蔵、作業場としての利用の他、座敷蔵もつくられた。蔵と母屋との配置関係は様々であり、母屋と連続しているものや、母屋の後方に隠れて通りからは見えないものもある。
（写真：下三宮集落の蔵）

■蔵造りの機能性と伝統産業

醸造業においては、麹や菌の働きを促すために、屋内の温度や湿度を一定に保つ蔵が大いに役立ってきた。また、蔵の持つ断熱・湿度調節機能は、漆器を扱う漆塗り職人にも重宝されている。
（写真：マルサ漆器製造所の作業場）

■耐火建築としての店蔵

店蔵には、延焼を防ぐための工夫が随所に施されている。開口部が少ないことや、分厚い土壁に設けられた堅牢な観音扉などが、耐火建築としての蔵の特徴である。火事の際には、さらに扉や窓の隙間を、壁土や味噌で塗りつぶし、延焼を防いだという。

郷土の気概が生んだ「蔵ずまい」文化

一般に、蔵＝倉庫というイメージがあるが、喜多方では、「蔵ずまいのまち」と言われるように、蔵＝家・座敷という意味合いも強く持たれてきた。高床の上に畳が敷かれ、年に数回しか使われない豪奢な蔵座敷（甲斐家、大善家など）から、長年の思いが結実したものまで、多様で広く浸透した「蔵ずまい」をみることができる。

また、喜多方に多くの蔵造りの建造物がもたらされた背景には、「男40にして、蔵のひとつでも建てられないようでは一人前でない」といった土地の風潮も影響していた。蔵にステイタス・シンボルとしての意味合いが込められることで、一層深みのある「蔵ずまい」文化が育まれた。

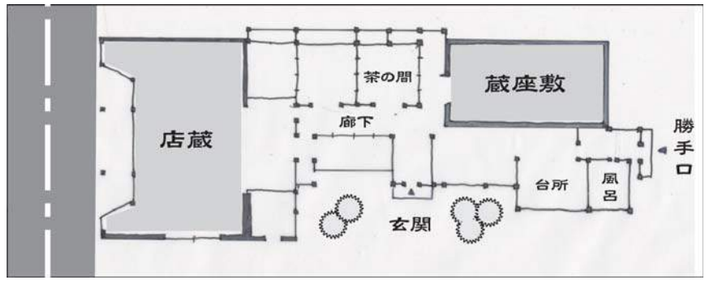
▲大善家蔵座敷（上：外観、下：内観）　▲甲斐本家蔵座敷（上：外観、下：内観）

在郷町の敷地と「蔵ずまい」の空間

倉庫のみならず、住居（座敷）や店舗として、時には厠にも用いられてきた、喜多方の蔵。在郷町を構成する短冊状の敷地には、これらの様々な蔵が、庭のゆとりを取り込みながら配されている。

右図は、典型的な喜多方の商家の敷地配置を表したものである。道路に面して、蔵造り・平入りの店舗（店蔵）があり、その奥に茶の間や台所などの生活空間（母屋）がある。さらにその奥には、「蔵座敷」と呼ばれる、蔵造りの特別な住空間が配され、それらとは別に、収蔵空間としての土蔵が設けられる場合もある。

このように、沿道の町並みだけからは窺うことのできない、多彩で豊かな「蔵ずまい」の空間が、奥行きある敷地に包含されている。



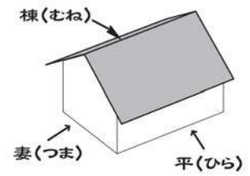
▲商家における蔵の配置

多彩な表情を持つ「蔵の町並み」

「蔵の町並み」というと、一般に、川越に代表されるような、平入りの店蔵が建ち並ぶ景観がイメージされるが、喜多方では、蔵の形態が多様であるのみならず、町並みの表情も多彩である。

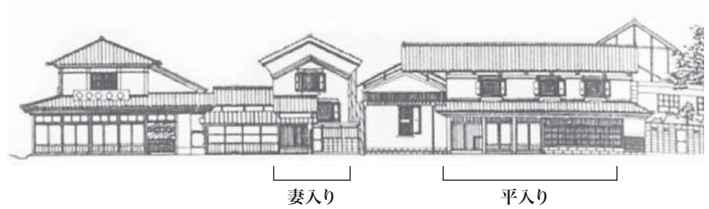
中でも小田付地区では、平入りの蔵と妻入りの蔵が混在して建ち並んでおり、平入り屋根・庇と切妻の破風（屋根の妻面に囲まれた三角形の部分）が組合わさって、独特の表情をもたらしている。

▲小田付地区の町並み



▲家屋の構成面の呼び方

町並みの特徴を表現する際、通りに対して「平」側を向けて入口を設けているものを「平入り」、「妻」側を向けているものを「妻入り」と呼ぶ。



▲小田付地区の町並み立面

04

多彩に使いこなされる喜多方の蔵

喜多方の「蔵」2

地域の暮らし・営みの中で、様々な場面に取り入れられてきた、喜多方の蔵。ここでは、喜多方の蔵の多彩な特徴を、様式・機能、素材、要素の3つの側面から紹介する。

地域の暮らしと営みに溶け込む、多様な蔵

蔵は、伝統に培われた喜多方文化の象徴であり、農・工・商が融合した地域の暮らしと営みに密着した存在である。喜多方の蔵は、そのほとんどが貯蔵・収蔵、商業や産業のための利用だけでなく、寝食の場といった日常的な生活空間としても、広く利用されてきた。

店蔵、蔵座敷(座敷蔵)、農家蔵、醸造蔵、味噌蔵、廁蔵、塀蔵など、多様な用途・規模・意匠を備えた蔵が、日々の生活の中に溶け込んでいる点が、喜多方の蔵の大きな特徴である。

喜多方には、蔵づくりの本堂を持つお寺も存在する。
(写真:安勝寺)

様式・機能

喜多方の蔵の多様な様式と機能について、その由来や使われ方を紹介する。

①蔵座敷(座敷蔵)

蔵座敷とは、蔵を居住スペースとして設えたものであり、甲斐家、大善家のように、冠婚葬祭や主賓を迎える際のみ用いられる特別な応接間から、日常的に居住しているものまで、使われ方は様々である。

喜多方のステイタス・シンボルとして、持ち主の「一人前になった」心意気を表すとともに、耐火建築により座敷を火災等から保護する側面もある。

②貯蔵蔵

土蔵は吸湿性・保温性が高く、温度・湿度が安定しているため貯蔵に適している。倉庫として利用される土蔵は非常に多く、貯蔵物により味噌蔵、醤油蔵、家財蔵等と呼ばれている。

③醸造蔵

吸湿性・保温性等の土蔵の特性は醸造に適しているため、旧来から酒、味噌、醤油等の醸造業に蔵が利用されてきた。多くの醸造業者では、広い敷地内に醸造用の大小の土蔵を何棟も配している。

④店蔵

店蔵とは、店舗を蔵づくりとしたもので、二階建て・平入りのものが一般的である。通りに面して庇のついた下屋を設けているのが特徴で、通りと店内との緩衝空間となっている。二階に座敷を設えているものも多い。

⑤農家蔵

周辺集落等の農家では、土蔵を母屋と一体化して立てる形式も定着している。貯蔵・収蔵のみならず、座敷として利用されるものもある。多くの屋根は茅葺きだったが、現在はトタン等で覆われるものが多い。杉山集落では、「かぶと型」の特徴的な屋根を持つものが見られる。

⑥工房(漆器など)

湿気と埃を嫌う伝統工芸にとっても、土蔵は適しており、現在も蔵で製作が行われる。外見上の定まった特徴はないが、工房として用いられるものを「工房蔵」という。

⑦厠蔵(かわやぐら)

文字通り、蔵づくりのトイレ(厠)である。こういった何気ない空間まで、趣向を凝らすところに、日常生活と蔵との深い繋がりを窺うことができる。

⑧塀蔵(へいぐら)

隣の家との境界を隔てる塀を蔵づくりにしたもので、味噌・醤油などの貯蔵ほか、民具などが収蔵される場合もあり、多くは物置のように使われている。

素材

蔵の印象を特徴づけている、素材やその仕上げを紹介する。

①白漆喰

顔料を混ぜない白い漆喰で壁面を仕上げたもの。内外壁両用に使われる押え仕上げと、光沢を出した磨仕上げがある。

②黒漆喰

黒漆喰も白漆喰と同様の塗り方で仕上げられるが、材料には油煙(松煙)、つのまた糊、酒等が用いられ、手擦りで仕上げる。重厚な印象の黒壁となる。

③レンガ

喜多方出身のレンガ職人、田中又一が、東京で木骨レンガ造の技術を習得したことで、多くの煉瓦蔵が建てられるようになった。厳しい自然環境に耐えるため釉薬(ゆうやく)が施され、紫がかった色合いが、喜多方の煉瓦蔵の特徴である。

④土壁

荒壁の上に土を上塗りして仕上げた壁。漆喰仕上げの壁に比べ、素朴ながらもどっしりとした風合いを見せる。

要素

蔵の細部に宿る、職人技の数々を紹介する。

①扉

蔵の扉は、土と漆喰などで塗り・押さえ・磨きを行って作られる。観音開きの扉はその段がピッタリと合う様に造られていて、ふれあい通りの松本屋では、扉を開けた時にも隣の扉と段があう様に作られる等、趣向を凝らした物がある。

②屋号

壁の妻面の上部などに記された、その家の紋章。江戸時代には、武士以外は苗字を持つことが許されなかったことから、商人や大きな農家などは、屋号を用いるようになったのではないか、といわれている。

③鏝絵(こてえ)

左官職人(壁を塗る職人)が鏝(こて)を用いて、戸袋や壁、土蔵の妻面などに様々な絵柄をレリーフ状に塗ったもの。家が出来上がる際、職人が蔵主に対して感謝の心を表すため、仕上げとして残したという側面もあるといわれている。図柄は七福神や龍、鶴や獅子などのおめでたいものが多く見られる。

④腰壁

雨や雪から蔵を保護するために、影響を受けやすい蔵の地面に近い部分を、全体の仕上げとは別に、防護的な仕上げを施したもの。冬などの厳しい自然環境に対応して、さらなる保護用の葦簀(よしず)をかけるための金具なども、市内の多くの蔵で目にすることができる。

屋根

屋根を葺いている素材は、赤瓦、黒瓦、銅板葺、茅葺など多様で、その色彩や材質感が町並みに影響を与える。またその屋根の構造も、土蔵の屋根の上に瓦屋根が浮かせて二重に乗っていたりする。(二乗屋・二重屋根・置屋根などと呼ばれる)。

また喜多方の蔵の屋根は、雪や雨に対応し、軒が深いのも特徴である。

⑤削屋根(二重屋根)

削屋根は、天井に対して屋根を浮かせているもので、天井部分を土で固め、土垂木をつけ、その上を荒壁、砂壁の順に5寸ほどの厚さで塗り、屋根を支える描石を置く。削屋根は普通、合掌に組まれ、積雪の重さや風等の外圧が加わるほど、堅く締められる工法となっている。

⑥蛇腹付きの屋根

瓦等で葺かれる屋根部分の軒下を、垂木の先端から壁面際まで漆喰等で塗りつぶしたものを「蛇腹」と言う。蛇腹の曲線は、一枚の板や木割にカーブをつけて描かせる方法でつくられ、くり蛇腹と垂直の切り立て蛇腹がある。

2章　喜多方のまちづくり資源

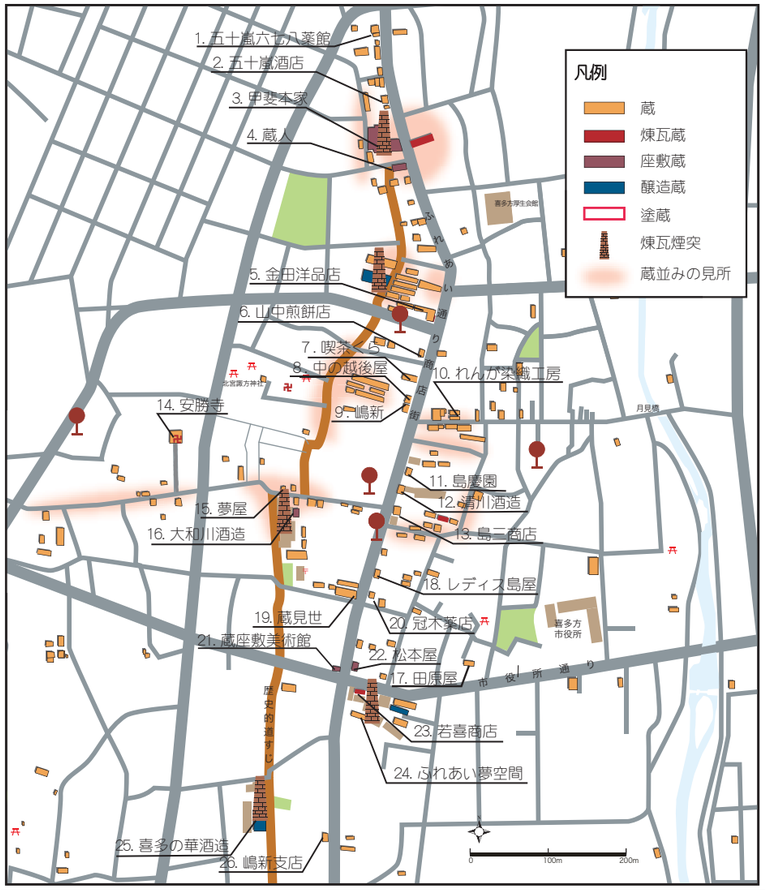
「蔵」と「ラーメン」で観光客を惹きつける喜多方であるが、この両者の存在を支え、かつ、魅力の本質となる部分は、雄国山の麓のように、もっと長く広がり、つながっている。喜多方ラーメンが多加水ちぢれ麺であることにも理由がある。街中を、北から南へと流れる水路、この豊かな水を浄化するには、良質の土壌と美しい自然環境の存在、この豊かな水資源が生み出す豊かな農産物、綺麗で美味しい水による味噌醤油・日本酒などの醸造業、この醸造業で最も大切な、麹や菌を働きを保つための温度・湿度コントロールにための「蔵」、この蔵を上手く利用した漆や織物等の産業・・・。このように、喜多方には、沢山の多様な文化や生活が根付いている。そして、これらは密接に絡み合い、魅力ある喜多方の暮らしを紡ぎ上げているのである。

資源01

まちなか蔵一覧（小荒井編）

喜多方のまちなか、魅力ある蔵の「百花繚乱」

■出典等　　：小荒井地区
■調査時期　　：2002年～
■調査・参加主体　：東京大学都市デザイン研究室



喜多方の中心市街（まちなか）を中心に、うらみち、よこみちを含めて、通りから見え、かつ、重要な資源となる蔵をリストアップした。

◀ 小荒井の蔵

独立しつつ集まる：小荒井地区の蔵

小荒井エリアでは、昔ながらの道すじであるふれあい通り沿いに建ち並ぶが、蔵自身は連続はせず、一棟一棟はしっかりと建ちながらも、集積して並んでいる。また、裏道を通っていても、いくつもの蔵を見ることが出来る。

①建設時期
②蔵の種類
③コメント

1. 五十嵐六七八薬館

歴史を感じさせる看板
①明治中期
②座敷蔵・店蔵・塀蔵・味噌醤油蔵・商品蔵
③店内には様々な時代の看板や、半纏がある。向かいの元「珈琲蔵まほろば」にある漆器や陶器等の道具類は、声をかけると見せてもらえる。

2. 五十嵐酒店

昔ながら蔵群の模型
①大正末期、明治中期
③蔀戸（しとみど）の残る店内には、立派な模型があり、この屋敷は、かつて蔵が群をなしていたことがわかる。通りから見える煉瓦の小さな蔵（非公開）は、厠である。

3. 甲斐本家

豪華な蔵座敷など
①大正後期
②座敷蔵・店蔵
③喜多方では珍しい黒漆喰、51畳の座敷蔵、螺旋階段など喜多方一の贅沢さ。非公開の地下室では戦中に密かに西洋の文化を愉しんでいたという。国登録有形文化財。

4. 蔵人

喜多方ベロタクシーの拠点
①大正初期
②店蔵
③店蔵内には、昔の盤台が残る。甲斐本家が現存の蔵を立てる際にはこの蔵を住まいとして使っていた。その後桐タンス屋を経て現在に至る。

5. 金田洋品店

煉瓦蔵・写真家金田実
①明治末期
②店蔵
③お店を側面から見ると煉瓦蔵であることがわかる。喜多方の蔵の写真をとりつづけ、喜多方が「蔵の町」として注目されるきっかけとなった、故金田氏のお宅。

6. 山中煎餅店

煎餅焼き体験
①明治初期
②店蔵
③蔀戸、座売り空間などが、残っており、店蔵のオリジナルな使い方を今日に伝える。内装はすべて白漆喰。天井の波打ちは最高の職人技。

7. 喫茶くら

蔵の喫茶店
①明治末期
②店蔵
③もともとは綿屋。約20年前に改修して喫茶店としてオープンした。内部の壁も白漆喰。立派な観音扉が、厨房の入り口。2階に上ると釘を一本も使っていない天井の架構がよく見える。

8. 中の越後屋

裏門からの蔵並の眺め
①不明
②座敷蔵・味噌醤油蔵
③細長い敷地に蔵が並んでいるため、蔵と蔵の間は路地のよう。現在も醸造蔵として使用中である。表の店には、昔の面影が良く残っており、店の横には年代物の自転車などもある。

9. 嶋新

映画「遠き落日」の舞台
①明治の初期から中期
②店蔵・味噌醤油蔵
③店蔵は、けやきの総造り。裏には、商品蔵・味噌・醤油蔵などが並ぶ。手前には、明治から昭和中期にかけての生活用品が並べられている。（現在は非公開）

10. れんが染織工房

喜多方会津型染織工房
①不明
②座敷蔵・味噌蔵
③喜多方会津型のギャラリー・教室や織物教室（月・火・土）。予約すると、実際に染色している様子を見たり・体験したりすることができる。

11. 島慶園

座売りの店に並ぶ茶道具
①昭和5年
②店蔵・（座敷蔵・商品蔵は非公開）
③かつて喜多方周辺は茶の産地であり、ここも茶葉製造業として創業。座売りの空間、並べられた火鉢や昔の茶壺などに老舗の風格がある。

12. 清川酒造

①明治～江戸期
②家財蔵・酒蔵（貯蔵・仕込み）
③創業寛永8年。仕込み蔵を無料で公開。試飲コーナーには、昔の徳利など酒作りに関連のある様々な品が並べられている。

13. 島三商店

垣間見える蔵並
①嘉永3年（1850）頃～
②店蔵、座敷蔵、家財蔵、商品蔵、塀蔵など
③表の店蔵は、屋根瓦の幾何学模様が特徴的。敷地内には、9棟の多種多様な蔵がずらりと並び壮観。煉瓦造の蔵座敷もある。（非公開）

14. 安勝寺

①明治中期
②本堂
③応永29年（1422年）の創建。1880年（明治13年）の大火で本堂が焼失し、後に蔵造りの本堂が再建された。窓のかたちが特徴的で、重厚感のある黒い瓦と白漆喰の対比が美しい。

15. 夢屋

アンティークと観音扉
①明治初期
②漆器の倉庫
③飯豊連峰の伏流水で淹れた美味しい珈琲が飲める蔵の喫茶店。店内は、アンティークや観音開きの扉が、素敵なインテリアとなっている。光の漏れてくる夜の外観も美しい。

16. 大和川酒造

北方風土館～酒蔵見学
①江戸～昭和
②酒蔵、座敷蔵
③敷地内には、様々な時代の蔵造りの建物が残され、造り酒屋の屋敷構成が分かる。ここで酒作りの説明を聞ける。和風住宅（現在は蕎麦処）や曳き家してきた蔵座敷が特徴。

17. 田原屋

まちの休憩所
①昭和35年
②現在は店蔵
③10円まんじゅうが有名な和菓子屋。
店蔵は2003年に改修OPEN。

18. レディス島屋

新しい蔵造り
①昭和初期
②店蔵
③かつては呉服屋であったが、昭和43年より婦人服店に。1階にガラスを多用、2階の窓が観音開きでないことから、比較的新しい蔵造りと思われる。

19. 蔵見世

田楽処
①明治
②座敷蔵・家財蔵
③道路際の店蔵が解体されて、この座敷蔵が通りに顔をだした。改修を経て平成12年オープン。福島県建築文化賞準賞を受賞。

20. 冠木薬店

蔵の横の休憩スペース
①明治元年
②店蔵・（座敷蔵・商品蔵・塀蔵・厠蔵は非公開）
③薬屋としての創業は1716年。店蔵の隣には、椅子や湧き水があり、ほっと一息つける場所になっている。

21. 笹屋旅館　蔵座敷美術館

旅館の蔵を改装した美術館
①明治24年（蔵座敷）
②蔵座敷
③平成2年開設。笹屋旅館を訪れた竹久夢二の作品や酒井三良の六曲一双の屏風などを鑑賞できるのに加え、蔵座敷空間の面白さ、喜多方の奥深さをも味わえる。

22. 松本屋

①昭和初期
②表に店蔵、奥に倉庫蔵
③松本屋の2階の窓の扉は、閉じているときだけでなく、開いたときも隣の扉とうまく噛み合うようにできている。現在このような巧みなものを作れる職人は少ない。

23. 若喜商店

縞柿の蔵座敷公開
①明治38年（蔵）
②煉瓦座敷蔵、味噌醤油蔵、商品蔵など
③三津谷の登り窯（広域⑪）を作った樋口市郎がここで働いていた。展示資料室から煉瓦蔵の内部を見られる。国登録有形文化財。

24. ふれあい夢くうかん

生まれ変わったイベント蔵
①明治中期
②味噌醤油醸造の穀物貯蔵
③二階建。天井には長さ12間の巨木が使われている。平成11年に改装され、夢くうかんの名前でイベント蔵に生まれ変わった。

25. 喜多の華酒造

酒蔵見学
①大正8年
②店蔵・酒蔵（仕込み、貯蔵）
③実際に手作りのお酒を作っている酒蔵の中で、酒造りの工程の説明をご主人から直接聞くことができる。店内では利き酒ができ、休憩スペースもある。

26. 嶋新支店

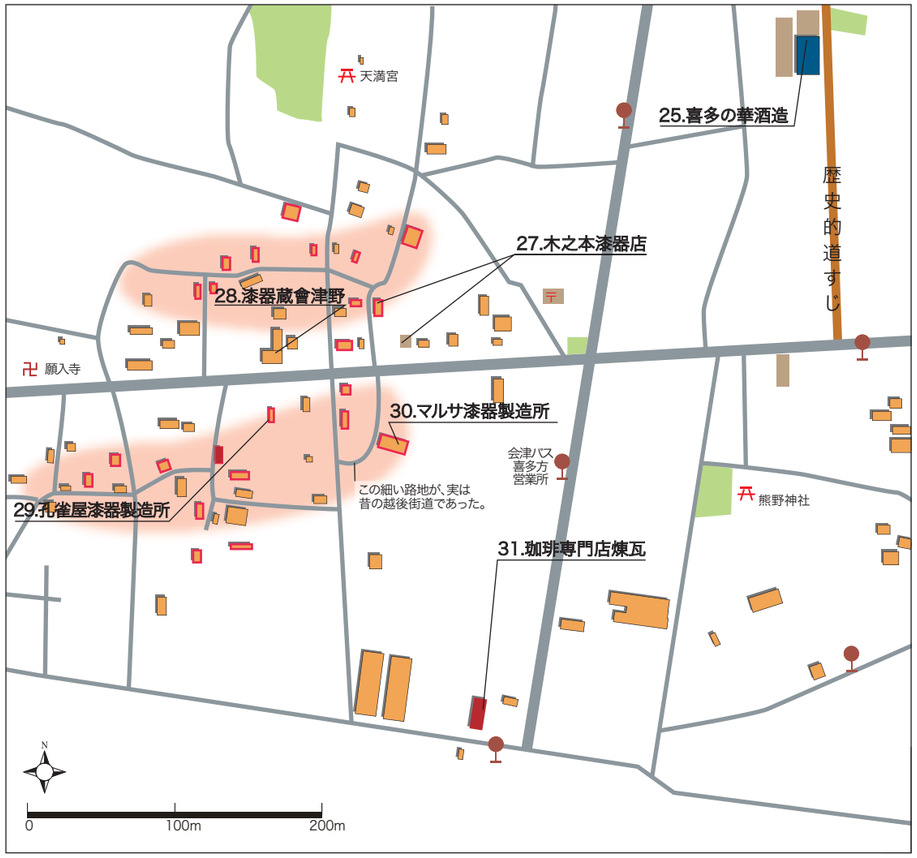
昔ながらの店蔵
①大正13年
②店蔵
③たばこや荒物を扱う商店。店内では、昔からの棚や座敷などが現役で活躍していて、開店当初の面影を色濃く残している。現在でも、蔀を毎晩下ろし毎朝上げる習慣は続いている。

資源02

まちなか蔵一覧（菅原町、小田付編）

喜多方のまちなか、魅力ある蔵の「百花繚乱」

■出典等　：小田付、菅原町地区
■調査時期　：2002年～
■調査・参加主体　：東京大学都市デザイン研究室



◀ 菅原町の蔵

面的な広がり：菅原町の蔵

菅原町界わいにも、蔵が比較的多く集積しており、通り沿いではなく面的に広がっていることが特徴である。

◀ 小田付の蔵

魅力的な蔵の集積：小田付の蔵

小田付の蔵は、おたづき蔵通りの一部に古いものが集積しており、平入りと妻入りが共存していることが特徴である。

また、旧米沢街道沿いであるうらみちにも、立派な蔵がいくつかみられる。

33. 夢心酒造

①年代不明。
②土蔵。
③明治10年創業の酒造元。蔵を利用して酒の製造を行っている。裏通り沿いに大きな蔵が2棟顔を覗かせている。内部非公開。

34. 香具山酒店

①明治初期建造。
②土蔵。
③油屋だった店蔵を先代が明治初期頃買い取り、酒屋を始めた。平成元年からは土産物の販売も行っている。

35. 青山家蔵（二十間蔵）

①年代不明。
②土蔵。
③小田付の裏通りに佇む巨大な蔵。長さが20間あることから「二十間蔵」と呼ばれている。現在蔵の損傷が激しく、存続の危機にある。

36. 喫茶豆○(井上合名金忠商店)

①江戸～明治建造。
②土蔵3棟。
③6代続く味噌醤油の醸造元。写真2棟は現在店舗として使用されているが、内部は今でも建設当時の面影を残している。

37. カフェモーツァルト

①明治初期
②店蔵
③一次空蔵となっていたが2005年に改装され、会津北方小田付郷町衆会により小田付の初代寄合所としてオープン。その後、現在のカフェオーナーがこの蔵のレトロな雰囲気を気に入り、カフェとして開店。

38. 小田付寄合所(大森家店蔵)

①昭和4年
②店蔵
③建設当時は店蔵として利用され、その後しばらくは質屋として使用されていた。町衆会が改修後は、町衆会の寄合所や民芸品販売、東京大学都市デザイン研究室喜多方分室等で使用されている。

39. 小原酒造

①明治10年建造。
②土蔵。
③通りの西側に2棟の店蔵と2棟の酒蔵、東側に3棟の土蔵を持つ。写真は西側の店蔵で、酒の販売、利き酒等を行っている。

40. 菅井屋薬房

①大正3年建造。
②角地に建つ寄せ棟の蔵造り町屋。
③内部は殆ど改装されておらず、建設当時の面影を残している。店内では昔の珍しい看板等も見られる。

41. 大善

①座敷蔵は明治31年建造。
②土蔵。
③敷地内に蔵が数棟建ち並ぶ。中でも、喜多方1,2位を争うほど豪華な蔵座敷(写真)は圧巻。残念ながら非公開。。

42. 渡部家店蔵

①年代不明（明治初期?）
②店蔵
③油屋として使用されていた。町衆会が3番目に開けた蔵

43. うるし美術博物館

①江戸／大正13年建造。
②土蔵。
③かつて福島一を誇った大地主、風間善九郎邸の離れ座敷として建てられた。現在は会津塗りの展示・販売を行っている。

44. あづまさ

①大正時代建造。
②土蔵。
③福島県一の大米穀商として名を上げた、あづまさ(松嶋家)の蔵屋敷を一般公開向けに改修。隣接する木造和風建築も見事。

27. 木之本漆器店

蒔絵体験
①江戸末期
②漆器蔵・塗蔵
③店内やうらの蔵に蒔絵の作業場があり、職人さんの仕事を見ることができるだけでなく予約をすれば自分で描くこともできる。

28. 漆器蔵會津野

蔵と塗物の資料展示
①明治初期
②漆の貯蔵蔵
③1階がお店で2階が塗り物についての資料や金田氏の写真の展示室。店先には昔からの古道具などがあり、入り口の上には立派な神棚がある。蔵を改装した喫茶室併設。

29. 朱雀屋漆器製造所

アイデア漆塗職人の技
①明治24年
②塗蔵
③蔵の2階で作業をし、1階で商品を売っている。アイデア商品をたくさん作っていて面白い。漆塗りについていろいろ教えてもらえ、運がよければ作業風景も見せてもらえる。

30. マルサ漆器製造所

縞柿の漆塗りと掛軸
①江戸末期
②塗蔵
③塗蔵であった蔵を商品の展示スペースとしている。床の間には縞柿の漆塗りがあり圧巻。菅原が漆器のまちになった由来についての掛軸もある。

31. 珈琲専門店煉瓦

煉瓦蔵のカフェ
①明治初期
②米蔵をカフェに改装
③昭和51年からカフェを開始。店内の改修には、煉瓦積職人であった田中又一の孫が関わっている。店内には、ここをよく訪れた写真家金田実氏の作品が飾られている。

32. 和飲蔵

①明治初期建造（推定）
②土蔵。ワインを保管する場所を作るために土蔵を改装。
③内部にワインセラーとテイスティングルームを備えた珍しい蔵。

資源03

喜多方集落の街並みリスト

農村部も含めた市域全体の蔵の街並み

■出典等　：喜多方市内全域
■調査時期　：2007年
■調査主体　：東京大学都市デザイン研究室

周辺集落にも無数に広がる蔵並み

喜多方市全域で4100棟あると言われる蔵は、全てまちなかにあるわけではない。そもそも、現在の喜多方市は、いくつかの集落や町の集合体であり、それぞれ少しずつ特徴の異なる街並みや蔵並みがいくつもみられる。まちなかも少しずつエリア（かつての集落等）ごとに性格が異なるだけでなく、昭和の大合併前の各町（熊倉・村松など）、そして、近年の市町村合併による町（山都など）にも、街道筋や宿場町、農村集落など、多様で魅力的な蔵並みが広がっており、喜多方の大切な資源である。

幾重にも織り重なる
飯豊の大屋根

一の木

山都の北、白装束で青年が成人となるべく登る「飯豊講」など参拝者の登山口にある、大屋根の農家が街道沿いに建ち並ぶ集落。かつて導者宿としての賑わいの面影も残るその街並みは小規模ながらも雄大で、かつては茅葺きだったであろうトタン屋根の立派な母屋と屋根並みの連なりが連峰と溶け合い美しい。

山奥にヒッソリと佇む
蔵の隠れ家

宇津野

杉山集落から熱塩加納へ抜ける道、沢の向こうに忽然と現れる谷沿いの集落。通り沿いにだけでなく、斜面に嵌るように蔵が顔を出し、山あいにヒッソリと寄り添って佇むその姿は、会津の寒い冬を集まって乗り越えようとする家族のようにも見える。中には、コの字型（蔵と民家で庭や畑を挟んだ）の農家もある。

田付川の豊かな水と
戯れる蔵池（くらいけ）

西原

米沢街道（入田付）を杉山に向かわずに奥に進むと、田付川の流れと交わる集落が現れる。農家の母屋と、漆喰・土蔵・煉瓦蔵が織り交ざる艶やかなその風景は、清流と稜線に囲まれながら彩りを放つ。集落には、「蔵池（くらいけ）」とも言うべき空間が設けられ、生活に利用されつつ、憩いの空間を創出する。

お行儀よくみちに並ぶ
譲り屋さん

譲屋

下三宮集落から山裾を南進すると、道に沿って素朴な土蔵の並ぶ集落に出くわす。農村集落でありながら、道路側に平［ひら］を向けて連続して並ぶ。裏や脇の蔵も、これに合わせてに平行に並んでいる。また、このみちは、集落の部分で蛇行しており、道路沿いに並びつつ、奥に妻面を見せた蔵に視線が集まる。

蔵と母屋のリズムに残る
宿場町の面影

熊倉

米沢街道筋の宿場町として発達した集落、熊倉宿は、代官所、地頭屋敷、年貢米を保管する蔵など、往時の面影が残る豪勢な街並みであり、今でも短冊状の町割りに大屋敷が並ぶ。緩やかにカーブする坂道に、大屋根の母屋と大振りの蔵が交互にリズムよく続く。うらみちには、表通りには見えない蔵が顔を出す。

蔵・家・庭が奏でる
協奏曲の街並み

村松

熱塩加納や岩尾銀山に向かう街道筋に開けた集落。豪快な民家や、農家蔵がセットになった邸宅が街道に並ぶ。まちなかよりもゆったりとした佇まいであり、庭の緑が奥に垣間見えながら、母屋と蔵、庭の木々が絡み合って調和を奏でる。庭空間を見ても、立派な中庭、小さな坪庭が「くらにわ」を形成している。

ウラに隠れて並ぶ
恥じらいの蔵

山都

当時は東洋一と叫ばれた鉄橋を超えると、八割が山岳地帯という「山都」に至る。街道筋（みちくさ通り）には、立派な街並みにある興味深い蔵に出会うが、さらに多くの蔵が並ぶのは裏側である。敷地は段丘上にあり、磐越西線沿いから街道筋を見上げれば、表には見えなかった蔵の並びに出会う。

温泉街の奥に潜む
寺院の聖なる蔵

熱塩加納

示現寺の前に開かれた、温泉街を少しずつ登ると、立派な庭園の向こうに蔵が顔を出す街並みが両側に続く。上までたどり着いて、足湯に浸かって振り向けば、示現寺が待っている。その中には、ヒッソリと隠れた蔵や蔵づくりのお堂なども見られ、御仏の聖なる空間にまた蔵の静謐な魅力が調和している。

農村部も含めた市域全体の蔵の街並み
喜多方集落の街並みリスト

菅原町
まちなかに忽然と姿を現す
緑の海に浮かぶ蔵

喜多方駅前から西に広がる菅原町は、まちなかでも有数な蔵の集積地だが、漆職人街としても名高い。埃と湿気を嫌う漆の作業場としてふさわしく、左官職人の技術の結晶でもある土壁や漆喰の蔵として今も生き続ける。道の奥には豪快な農家蔵が多く、駅前ながら田畑も見られ、その奥に農家蔵が点々と浮かぶ。

上三宮
両脇に水路を従えた会津大仏
の懐

元禄時代の楼門、鹿鳴館造りのバルコニーを持つ本堂と、会津大仏の控える願成寺の手前には、街道の両側に水路の流れる上三宮の集落がある。水路の奥には、赤紫の煉瓦蔵と白い漆喰の蔵が輝く。街路幅員も広く、ゆとりのある空気が流れる。南側クランク部分では笹政宗酒造の座敷蔵がアイストップとなる。

杉山
兜屋根に魅せられて

米沢街道、入田付から脇へ入ると、豪快で精密な兜屋根の街並み、杉山。この重々しい兜が、やや雪深い奥地であることも物語る。菅や養蚕で生計を立てたこの集落では、格子戸に観音扉、その周りに袖壁と庇でできた枠が囲い、その上を兜屋根が覆う、何重もの入れ子構造が、集落の重みと深みを感じさせる。

三津谷
薄紅色のうつろひ

木造校舎の旧岩月中（現岩月夢想館）を越え、喜多方煉瓦の製造元、登り窯を過ぎれば、山あいに広がる水田の奥に光る赤蔵群、煉瓦蔵の密集する三津谷集落である。ドイツ人技師による洋風の佇まい、煉瓦アーチや三階建ての蔵等、当時の最先端が随所に導入されている。釉薬がかかった煉瓦蔵は、紫色に輝く。

下三宮
ひしめく農家蔵の
おしくらまんじゅう

旧志ぐれ亭から奥に向かうと、下三宮集落に出る。軒を連ねて並ぶ蔵、妻面の屋根が競り出して通りに覆いかぶさる蔵、庭木とともに映える蔵など、「おしくらまんじゅう」のようにひしめく。単体の蔵をみても、寒さ対策か、母屋と隣接したり、母屋の中に入り込む一体型のものを多く見ることができる。

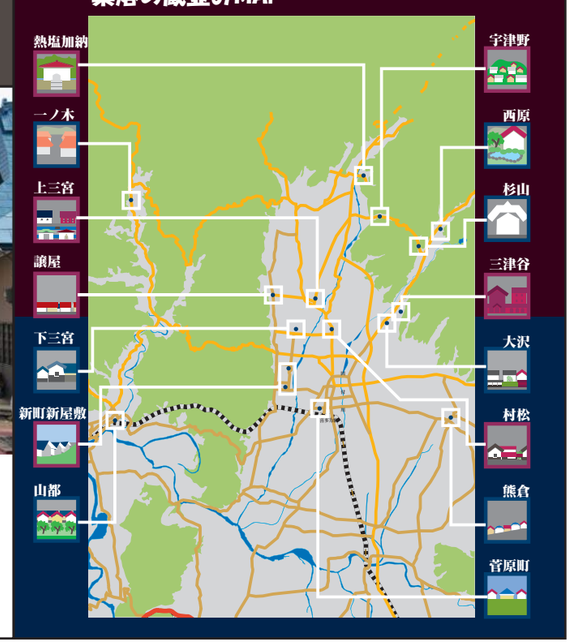
大沢
塀と田んぼとマッチした
しっかり農村蔵

三津谷集落の手前、上岩崎集落の向かい側にある小さな大沢集落も、美しい蔵がわずかながらひしめく集落である。改修の手が行き届いているのか、蔵だけでなく、真壁や煉瓦の塀並み、整えられた屋根並みや母屋も手入れされている。この辺りは三津谷同様、稲作期には、水田が広がる美しい風景が広がる。

新町・新屋敷
ひしめく寄棟と
蔵のハーモニー

当時は東洋一と叫ばれた鉄橋を超えると、八割が山岳地帯という「山都」に至る。街道筋（みちくさ通り）には、立派な街並みにある興味深い蔵に出会うが、さらに多くの蔵が並ぶのは裏側である。敷地は段丘上にあり、磐越西線沿いから街道筋を見上げれば、表には見えなかった蔵の並びに出会う。

集落の蔵並みMAP



資源04

蔵再生・リノベーションリスト

小さな操作で、蔵に魂が再び宿る

■調査範囲　　:喜多方中心市街

＊( )内はP.16～P.19のリストマップに対応

1.昔なじみの「蔵カフェ」

喫茶くら (NO.17)

綿屋の店蔵を改修し、蔵の中でゆっくりできる元祖「蔵カフェ」に（S53年）。一時期、1階部分の外壁は他の意匠で覆われていた。少し暗がりになっている雰囲気が落ち着きを与える。

夢屋 (NO.15)

かつて漆器屋の店蔵であったが、次々と用途を変えた後、空き家となっていたこの蔵を昭和62年に改修し、喫茶店を開始。こだわりの珈琲が飲める落ち着きある店となっている。

喫茶煉瓦 (NO.31)

倉庫だった煉瓦蔵を三十年ほど前に喫茶店に再利用したもの。壁にはツタがつたい、季節ごとに様相を変えてとても美しい。駅前にあり、まずは休みたくなる隠れ家。

2.多様な蔵リノベーション

そばカフェじーま

築130年以上の蔵を再生した、そばとスウィーツのお店。二階には、座敷もあり、歴史とモダンなデザインが絡み合う魅力的な店舗として利用されている。

れんが染織工房 (NO.10)

工房へと再生された蔵の事例。中では、他の蔵で発見された伝統的な会津型を利用して、伝統的な方法で、会津染の織物のための織り、染めを行っており、体験も可能となっている。

豆○（井上合名金忠商店） (NO.36)

店蔵を改修して、（醤油等の）売場から、飲食中心のスペースに再生した。売場は隣接する蔵に移し、ゆっくり休める地域の憩いの場を提供している。

3.歴史空間と現代デザインの競演

蔵見世 (NO.19)

店蔵の解体で表に出てきた座敷蔵を改修。一階にはむくりの庇が回り、現代の意匠も付け加えられた。現在は、田楽なども楽しめる飲食店舗としてにぎわっている。

田原屋 (NO.17)

黒色の壁と立派な前庭との調和がすばらしい、和菓子屋店舗に再生された建物。大きくとられた大胆なむくりの屋根は、喜多方の蔵にはあまり見られないが、新たに加えられた意匠とのそのコントラストが目に入る。

和飲蔵 (NO.32)

1階は、調温調湿機能も備えた和飲セラーに、2階はテイスティングも可能なミーティングスペースに改修された蔵。エントランスなど、、モダンなデザインが歴史的意匠に調和している。

多様な蔵文化継承の技法

喜多方の生活の中に溶け込んだ蔵は、現代の機能にあわせながらも受け継がれている。

ここに挙げられた例は、新たな用途を変更しながら（コンバージョン）、あるいは改修をしながら（リノベーション）蔵そのもの使い続けている事例であるが、喜多方に無数にある事例の一部である。そもそも、「蔵ずまい」を継承してきた喜多方の蔵の多くが、新たな現代の機能にあわせながら受け継がれているという意味では、そのほとんどが、蔵再生事例なのである。

4.「寄合所」から様々な活動へ

カフェモーツァルト (NO.37)

空き蔵を改修して、初代まちづくり寄合所として利用。その後、借主をみつけ、カフェモーツァルトとして、リ・オープン。

まちづくり寄合所（大森家店蔵） (NO.38)

以前は、漆の歴史館などとしても利用されていたが、近年は空き蔵となっていたところを、再利用。二代目まちづくり寄合所としても利用された。

油屋（渡部家店蔵） (NO.42)

古くは、油を売る店蔵であったが、空き蔵（倉庫）となっていた蔵を、50年ぶりに再生。2005-06年と、まちづくり塾の会場として利用させていただくなど、開放的な空間に生まれ変わった。

5.新たなるまちづくりの息吹

島三商店 (NO.13)

喜多方を代表する古くからの店蔵を、チャレンジショップなどに利用している。水回りを改修したのち、「くらはく」では、「蔵カフェ」として利用する実験を行った。

ふれあい夢くうかん (NO.24)

若喜商店の蔵（ビールの貯蔵などにかつて利用していた）を改修し、簡単なイベントなどができるようになっている。かつては、蔵の前に池のある庭があったらしい。

蔵人（KURANDO） (NO.4)

かつては、甲斐本家の建替え時に仮住まいにも利用したといわれる蔵の再生。以前は、桐タンス屋さんであったが、現在は、ベロタクシー・NPOの拠点施設として再生利用。

6.広がる蔵の「遺伝子」

Y 邸

古くから利用されていた蔵を住居として改修するとともに、新たな空間をその隣に付加することによって、両空間の相乗効果を図っている。住宅としての再生は水周りなど困難が多く、チャレンジングな試みである。

丸見食堂

駅前通りに、再生された食堂。こちらは、改修ではなく、完全なる建替えだが、蔵の構造やデザインや喜多方の煉瓦を上手く利用し、蔵の空気を現代に継承するための実験でもある（P.84参照）。

昭和蔵・天空回廊・ファーメントホール

江戸・明治・大正期の蔵を再利用している大和川酒蔵の昭和蔵は、ホールとして利用されていたと共に、ホワイエが天空回廊として再生された。大きなケヤキの木の聳える駐車場・郵便局（ファーメントホール）との一体化が望まれる。

資源05

喜多方・蔵以外の資源リスト

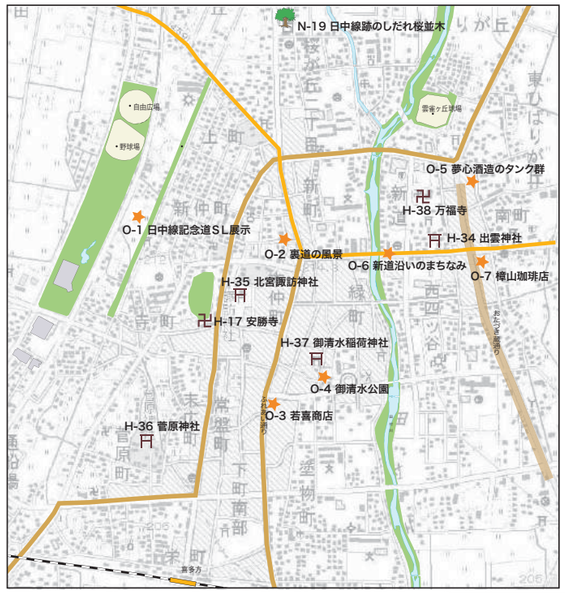
喜多方は、蔵だけじゃない。

■参考等　：JTBF観光資源調査
■調査時期　：2006年
■調査主体　：東京大学都市デザイン研究室

まちじゅうに広がる豊かな地域資源

喜多方には蔵以外にも、さまざまな資源がある。ここでは、寺社や自然を中心に地図にプロットし、表にまとめた。まちなかには寺社が多く、祭が有名な北宮諏訪神社や出雲神社などがある。市域全体では、自然系の資源が多く見られ、喜多方の豊かな自然を知ることができる。また、史跡も多く見られる。

まちなか全体版　S=1:20,000



市域全体版　S=1:1,000,000

【凡例】
- ▲ 山
- 河川・湖沼
- 木
- N-01 自然系
- 神社
- 寺
- 史跡
- H-01 歴史系
- その他特徴的な資源

■社寺

H-1	太用寺	喜多方
H-2	示現寺	熱塩加納
H-3	中善寺	喜多方
H-4	龍泉寺	喜多方
H-5	新宮熊野神社	喜多方
H-6	福聚寺	喜多方
H-7	慶徳寺	喜多方
H-8	慶徳稲荷神社	喜多方
H-9	竹屋観音寺	塩川
H-10	勝福寺	喜多方
H-11	久山寺	熱塩加納
H-12	久昌寺	高郷
H-13	泉福寺	山都
H-14	願成寺	喜多方
H-15	金川寺	塩川
H-16	飯豊山神社	山都
H-17	安勝寺	喜多方
H-18	長福寺	喜多方
H-19	宗像神社	山都
H-34	出雲神社	喜多方
H-35	北宮諏訪神社	喜多方
H-36	菅原神社	喜多方
H-37	御清水稲荷神社	喜多方
H-38	万福寺	喜多方

■史跡

H-20	弾正ヶ原	塩川
H-21	糠塚古墳群	喜多方
H-22	山崎横穴古墳群	喜多方
H-23	別府の一里塚	塩川
H-24	御清水史跡	塩川
H-25	旧一ノ戸村制札場	山都
H-26	蓮沼門三誕生の地	山都
H-27	一ノ戸川鉄橋	山都
H-28	佐原十郎義連の墓	熱塩加納
H-29	青山城跡	喜多方
H-30	新宮城跡	喜多方
H-31	化粧清水	高郷
H-32	小野小町塚	高郷
H-33	大原遺跡	塩川

■その他資源

O-1	日中線記念道ＳＬ展示	喜多方
O-2	裏道の風景	喜多方
O-3	若喜商店	喜多方
O-4	御清水公園	喜多方
O-5	夢心酒造のタンク群	喜多方
O-6	新道沿いのまちなみ	喜多方
O-7	樽山珈琲店	喜多方
O-8	日中ダム	熱塩加納
O-9	日中線記念館	熱塩加納
O-10	三津谷登り窯	三津谷
O-11	旧岩月中学校	岩月

魅力ある喜多方の地域資源リスト

（ここに挙げたものはその一部です）

まちなか・市域全体にわたって、多く散らばっている喜多方の資源たち。寺社など歴史を感じるもの、喜多方ならではの産業が生み出したものなど、様々な種類がある。特徴的な資源を紹介する。

安勝寺(H-17)
応永29年（1422年）創建。1880年（明治13年）の大火で本堂が焼失し、蔵造りの本堂が再建された。窓のかたちが特徴的。黒い瓦と白漆喰の対比が美しい。

日中線記念館(O-9)
旧国鉄日中線の終着駅「熱塩駅」を記念館として整備。駅舎がそのまま保存され、数々の貴重な資料が展示されている。

三津谷登り窯(O-10)
樋口市郎が創業した窯で、明治末から大正にかけて大量の煉瓦を焼いた。周辺には煉瓦造りの建築が多く残っている。

若喜商店(O-3)
昭和6年建築の喜多方では珍しい近代建築の商店。レトロなデザインの天井や柱、照明、棚、看板など店内の様子も興味深い。

新宮熊野神社長床(H-5)
新宮熊野神社は、源頼義が勧請鎮座したのが始まりと伝えられる。拝殿(長床)は、国の重要文化財。柱が立ち並ぶ横27m、奥行12mの建物は見ごたえがある。

旧岩月中学校・養護学校(O-11)
昭和24年に建てられた木造の校舎が、現在も残っている。中学校は昭和41年の統合により移転した。現在はＮＰＯ法人などが利用している。

樟山珈琲店(O-7)
小田付にある珈琲店。民家を改装した店舗は、周囲の蔵のまちなみとうまく調和している。

北宮諏訪神社(H-35)
喜多方のまちなかにある神社。毎年8月には祭りが行われ、多くの人で賑わう。

一ノ戸川鉄橋(H-27)
一ノ戸川と県道383号をまたぐ磐越西線の鉄橋で、1910年完成。長さ445m高さ17mのスケールは完成当時東洋一と謳われ、その姿がほぼ継承されている。

日中ダム(O-8)
高さ約101m、堤長423m。東北有数規模を誇るロックフィルダム。「日中ひざわ湖」と命名されているダム湖では、美しい自然と景観を楽しむことができる。

夢心酒造のタンク群(O-5)
造り酒屋の蔵の隣に醸造のタンクが多く並ぶ。酒のまちならではの面白い景観をつくりだしている。

御清水公園(O-4)
喜多方市役所のすぐ隣にある公園。まちの真ん中にあり、市民に憩いの場を提供している。春には桜が楽しめる。

万福寺と参道(H-38)
まちなかにあるお寺。低い石垣に松が植えられた参道が良い。

新道沿いのまちなみ(O-6)
小荒井と小田付をつなぐ新道。道に沿って町家が立ち並び、情緒あふれるまちなみが見られる。

裏道の風景(O-2)
裏道の風景は喜多方の大きな資源。ここではゆるやかな曲線を描く裏道をまたいで屋根がかかる。

資源06

三津谷の登り釜

喜多方レンガの再生産に向けて

■調査方法：ヒアリング調査
■調査時期：2005年
■調査主体：東京大学都市デザイン研究室

喜多方に広がる紅紫色のうつろい

【登り釜の基礎データ】
・連房式登り釜、焼成室は捨間を含めて10室（段）
・大正時代に、2代目当主の喜市が築造
・規模：焚口は3口、全幅は5.1m、全長は18m
・1回に焼ける煉瓦の数：1万個

01　登り釜の建物外観の現況
02　独特の風合いをもつ釉薬煉瓦
03　レンガ蔵が立ち並ぶ三津谷集落
04　喜多方市煉瓦館
05　登り釜の現況

【経緯】

・明治23年：初代・樋口市郎（当時27歳）がこの地に移住し、7室の登り釜を築く。
・明治末～大正：窯の最盛期
・大正：2代目・樋口喜市、10室の登り釜（現在のもの）を築く。
・昭和45年：閉鎖
・昭和57年：地域振興策の一つとして補修、「有形民俗文化財」として市の指定を受ける。
・昭和58年：再び操業開始。公共施設などに煉瓦が使用される。立教大学や金沢からも発注があった。
・平成2年：市の補助がなくなる等を理由に再び閉鎖。
・平成20年：樋口煉瓦窯再生事業実施に向けて市等が動き出す。

【登り釜の復活について】

・労働力・経験：労働力としては最低4人必要。重労働なため、若い方が良い。また、温度調節等、経験を積まなくてはならない。
・指導者：全工程の指導ができるのは、3代目の樋口氏のみ。部分的な作業をできる人は数名いるが、煉瓦を積める人はいない。
・煉瓦需要：大量な需要が見込まれなければ生産不可。全ての房に煉瓦を入れないと空間が大きすぎて温度が上がらない。
・生産コスト：一般煉瓦の3～4倍。
・用途転換：登り釜は隙間無く敷き詰めることを前提としているので、陶芸作品を焼くには向かない。

喜多方レンガとは

旧喜多方市に2600棟あると言われる蔵のうち、100棟が煉瓦蔵である。その殆どを手がけたのが、煉瓦師・田中又一である。又一は、明治の始めに東京に出て煉瓦の作り方、積み方を修行し喜多方に戻り三津谷地区の蔵など、多くの煉瓦蔵を造った。使った釉薬煉瓦は、明治中期に喜多方に戻り窯を築いた「樋口窯業」初代・樋口市郎（1862-1943）が考案したオリジナル製品である。普通の煉瓦に益子焼の釉薬を掛け焼成する。釉薬煉瓦は雨水をはじく上、煉瓦の強度も高まり、建物の維持に大きな効果をもたらした。また、独特の風合いがあるため、喜多方固有の風景を作る重要な要素の一つとなった。

喜多方レンガ生産復活のためには

「樋口窯業」は明治末期から大正期が最盛期で、当時は、50名以上が働いていたと言う。各自が各工程を専門的に受け持ち、分業で生産を行っていた。しかし、戦後、大量生産時代の波にさらされ、ついに、昭和45年に閉鎖された。最後は、15名ほどの従業員が働いていたと言う。昭和57年に市の有形民俗文化財に指定され、翌年再び操業されたが、課題も多く、再び閉鎖してしまった。現在、登り釜は修理されぬまま、放置状態となっている。

こうした状況の中で、喜多方レンガの生産復活のためには、2つの方法が考えられる。第1に、登り釜を復活させてレンガの再生産を図ることである。このためには、登り釜復活のためのコスト、レンガ生産のコスト、人材（指導者・従業員）集め、需要の掘り起こしといった課題をクリアする必要がある。第2に、登り釜に隣接する「高齢者支援センター」のガス窯で喜多方レンガの生産を行うことである。このためには、人材（指導者・従業員）集め、燃料コスト、生産効率、需要の掘り起こしといった課題をクリアする必要がある。この場合、登り釜については、喜多方の産業遺産として補修、整備することが望まれる。

平成20年、県地方振興局の地域づくり総合支援事業からの助成が決まり、「樋口煉瓦窯再生事業」が具体化しつつある。このようにイベントで試しに稼働させながら先に挙げた課題を少しずつ解決していくのも有効である。

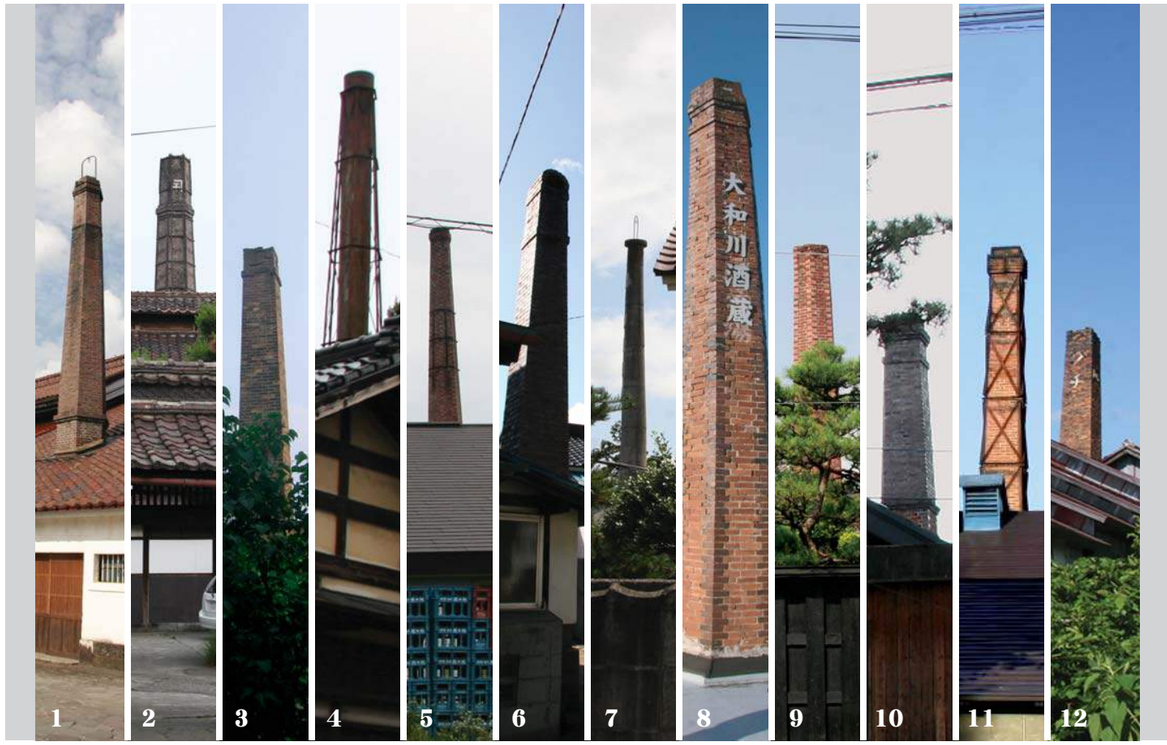
資源07

喜多方煙突一覧

醸造業が生み出す景観

■出典等　：喜多方市全域
■調査時期　：2000年～2007年
■調査・参加主体　：東京大学都市デザイン研究室

天に向かって延びる、レンガの塔と白煙の風景



甲斐本家　若喜商店　小田付　喜多の華　吉の川　西原集落　村松集落　大和川　小原酒造　笹屋の裏　峰の雪　三津谷登り窯

喜多方の風景を彩るレンガの煙突

喜多方は、日本酒を始めとして、味噌醤油といった、醸造業が非常に盛んな街である。飯豊山の伏流水を用いて、良質の酒米や大豆を種として、温度も湿度も変化しにくい蔵の中で発酵させる製品を中心とした産業は、喜多方の風土にフィットしている。

そのため、喜多方の街には、いくつもの煙突がみられる。現存する造り酒屋や味噌醤油業を営む店にはには必ずといっていいほど、煙突があり、かつての生業を現す煙突もある。そして、その多くがレンガでできており、登り窯を中心としたレンガの広がりが見て取れる。

低層の街喜多方で、天まで届きそうな煙突は、貴重で興味深い存在である。

喜多方煙突マップ

今ではカットされた煙突（大和川酒蔵）

煉瓦の煙突の大本、登り窯（休止中）

煙突を建物内部から見上げる

資源08

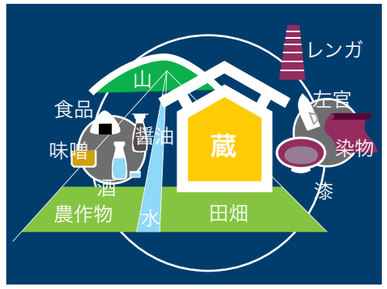
喜多方産業・ワザ リスト

蔵ずまいの文化をとりまく産業たち

豊かな生活文化の「広がり」と「つながり」:喜多方の産業

喜多方の魅力は、何も蔵だけに限らない。非常に多様で高度な工芸・技術・産業が会津盆地の中で育まれてきたのである。美味しい日本酒、壊れない桐細工、優美な輝きを見せる会津漆器、力強く落ち着きのある会津染の織物…。いずれも喜多方の誇る産業である。

これらの文化・技術は、それぞれが独立しているわけではない。喜多方の豊富な水でできたお酒、これを醸造するための蔵、蔵をつくるための左官技術、蔵を作業場とするのに適した漆、蔵をつくるために焼かれたレンガ…。このように、「蔵ずまいの文化」とはとても広く多様なものを含んでいて、これらは密接に関わりあいながら、お互い成長を繰り返している。



■喜多方の産業

煉瓦

紫がかった釉薬煉瓦は喜多方独特のもの。明治の中ごろに三津谷に登り窯が築かれてから大正にかけて、ここで大量の煉瓦が焼かれ、それを使って多くの蔵が造られた。

漆

江戸期からの漆産業奨励策の結果、「会津塗」の漆器は伝統工芸として残っている。漆器づくりは、埃と湿気を嫌うため、蔵が作業場として適している。漆職人の多く住む菅原町には蔵自体も沢山残っている。

農業

飯豊山に積もった万年雪は、地下水となり、やがてミネラル豊富な伏流水として湧き出てくる。この伏流水と肥沃な土地により、良質な米が生産されている。また、アスパラガスは東北一の生産高を誇る。

会津染め

「会津型」と呼ばれる型紙（和紙を3枚柿渋で貼り合わせて、型染用の模様を切り抜いたもの）を用いて、藍などで染める。とある蔵から出てきた多数の会津染の型紙をもとにして、「染色工房れんが」では、会津染を残すべく染物の生産、体験などを実践している。

桐

軽くて割れの少ない桐製品は古くから重宝されてきた。桐下駄をつくるには、桐の木片を外部で積んで風雨にさらし、完全に乾燥させてから細工をする。桐下駄の輪積みは、それだけでも一つの芸術作品のようだ。

ラーメン

蔵を見に来た観光客の昼食として市の職員が紹介したことで、全国に広まった喜多方ラーメン。昭和初期に屋台で売られた「支那そば」が発祥で、市内の食堂に受けつがれて行った。地元産醤油を使ったスープと、太めの平打ち縮れ麺が特徴である。

鏝絵

蔵をつくるには、土壁や漆喰をぬる職人、左官屋の手なくしては完成をみない。左官職人のワザとアソビ心が現れるのが、この「鏝絵（こてえ）」である。幻の職人の手によると言われる鏝絵が、市内の蔵に散在している。

味噌・醤油

蔵の町・喜多方を古くから支えてきたのは、味噌、醤油などの醸造業。飯豊連邦の良質の伏流水と米、小麦、大豆を使用し、長い伝統の中で培われてきた技術をもとに、それぞれの醸造元でじっくりと、蔵の中で熟成されている。

酒

飯豊連峰からの豊富な伏流水と良質な酒米を使ったおいしいお酒は、喜多方の魅力の一つである。江戸時代から酒造が盛んに行われてきた。まちのあちこちで酒蔵が見られる。

飯豊の恵み:喜多方の造り酒屋

数ある産業の中でも酒は、古くから喜多方を代表するものである。造り酒屋も多くあり、昭和51年発行の「蔵のまち喜多方」によると、かつての喜多方には17の酒屋が残っていたという(右表参照)。

その造り酒屋も、平成８年には12件になり、現在では９軒にまで減少しているが、各社それぞれのワザを競い合っている。

■昭和42年に存在した酒屋

夢心	喜多方市北町2932
国光	喜多方市南町646
花錦	喜多方市字一本木下783-1
喜多の華	喜多方市字前田4924
大和川	喜多方市字寺町4761
年男	喜多方市字二丁目4678
清川	喜多方市字二丁目4659
吉の川	喜多方市字一丁目4635
峰の雪	喜多方市松山町村松字桜壇160
香久山	喜多方市松山町字常盤町2698
ほまれ	喜多方市松山町村松常盤町2706
大和錦	喜多方市松山町村松常盤町2716
笹正宗	喜多方市上三宮町字離山675
米美川	喜多方市熊倉町熊倉83
星竜	山群加納村大字加納字堰東
竜門	耶麻群山都町字木曽501
栄川	耶麻郡西会津町野沢字本町1184

■廃業した酒屋

９代続いた老舗酒屋の年男酒造は、洋酒の売れ行きに押され、後継者もはっきりしないという問題も相まって、昭和47年、廃業に踏み切ったという。(蔵の夢より)

■現存する造り酒屋

□合資会社　喜多の華酒造場
喜多方市字前田4924
喜多の華酒造場は、大正８年(1919年)「星正宗」の銘柄で創業。戦後、【喜多の華】の銘柄で復活し、現在に至っている。

□合資会社　吉の川酒造店
喜多方市字一丁目4635
明治３年(1870年)創業。販売の98%以上を地元喜多方で売る、本当の地酒。

□小原酒造株式会社
喜多方市字南町2846
享保２年(1717年)創業。クラシック音楽を蔵に流し、醪(もろみ)に聞かせて醗酵させるという新しい手法にも取り組んでいる。

□合資会社　清川商店
喜多方市字二丁目4659
寛永８年（1631年）創業。370年酒造り一筋の歴史を誇る、会津盆地で最も古い造り酒屋のひとつ、喜多方では最も古い酒蔵。

□合資会社　大和川酒造店
喜多方市字寺町4761
江戸時代中期の寛政２年（1790年）創業。以来、九代にわたって酒を造り続けている。

□有限会社　峰の雪酒造場
喜多方市字桜ヶ丘１－１
昭和17年(1942年)創業。大和錦から分家した、比較的新しい酒屋。酒造名は「四方の春慶雲爛たり峰の雪」の俳句から命名。

□ほまれ酒造株式会社
喜多方市松山町村松字常磐町2706
大正７年(1918年)、加納酒造株式会社として設立。昭和２４年(1949年)８月にほまれ酒造株式会社を設立。

□夢心酒造株式会社
喜多方市字北町2932
明治10年(1877年)創業。その名の通り夢の有る心で酒造りをしている。伝統に培われた変わらぬ味わいが地元に愛され続けている。

□笹正宗酒造株式会社
喜多方市上三宮町上三宮字離山675
文政元年(1818年)創業。あくまでも品質第一をモットーとし、過度の近代化、量産化を拒否し昔ながらの造り方でうまい酒造り一筋を貫いている。

資源09

喜多方百景

文化によって形作られる、次代に伝えていきたい風景の数々

■調査範囲　：喜多方市内エリア
■調査時期　：2002～2007年
■調査・参加主体　：東京大学都市デザイン研究室

周辺集落　―静かに流れる雪解け水と雄大な空の景色

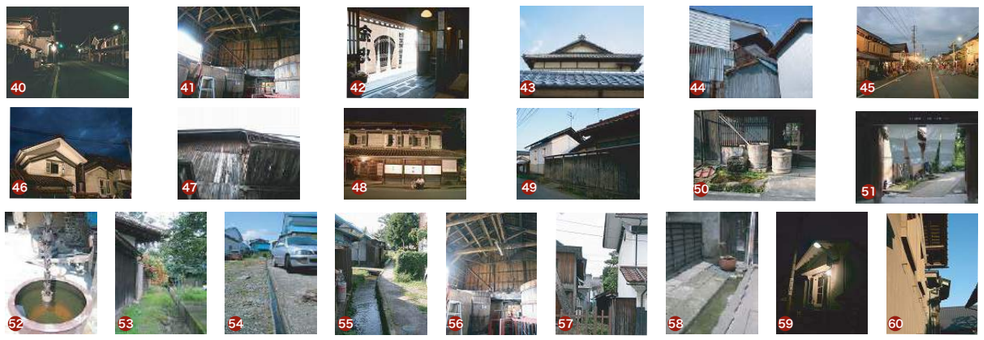
豊かな自然に囲まれた三津谷、下三宮、上三宮、菅原町、山都、舞台田の各集落には手入れの行き届いた蔵が残る。集落を流れる水の音と共に味わいたい。

小荒井地区　―商店街のにぎわい、近代酒造の織りなす風景

甲斐本家の黒漆喰蔵、若喜商店の煉瓦煙突、夢心の近代酒造の風景、染色工房の職景など。人で賑わう商店街、特徴ある商店の形など、残して行きたい。

小田付地区　―職人街の蔵並と一歩入った職景

蔵の中にはものづくりの道具が並び、伝統産業が持つ景色のダイナミックさを感じさせる。脇に流れる水と共に、文化にまつわる風景として残したい。ライトアップされた蔵もまた味わい深い。



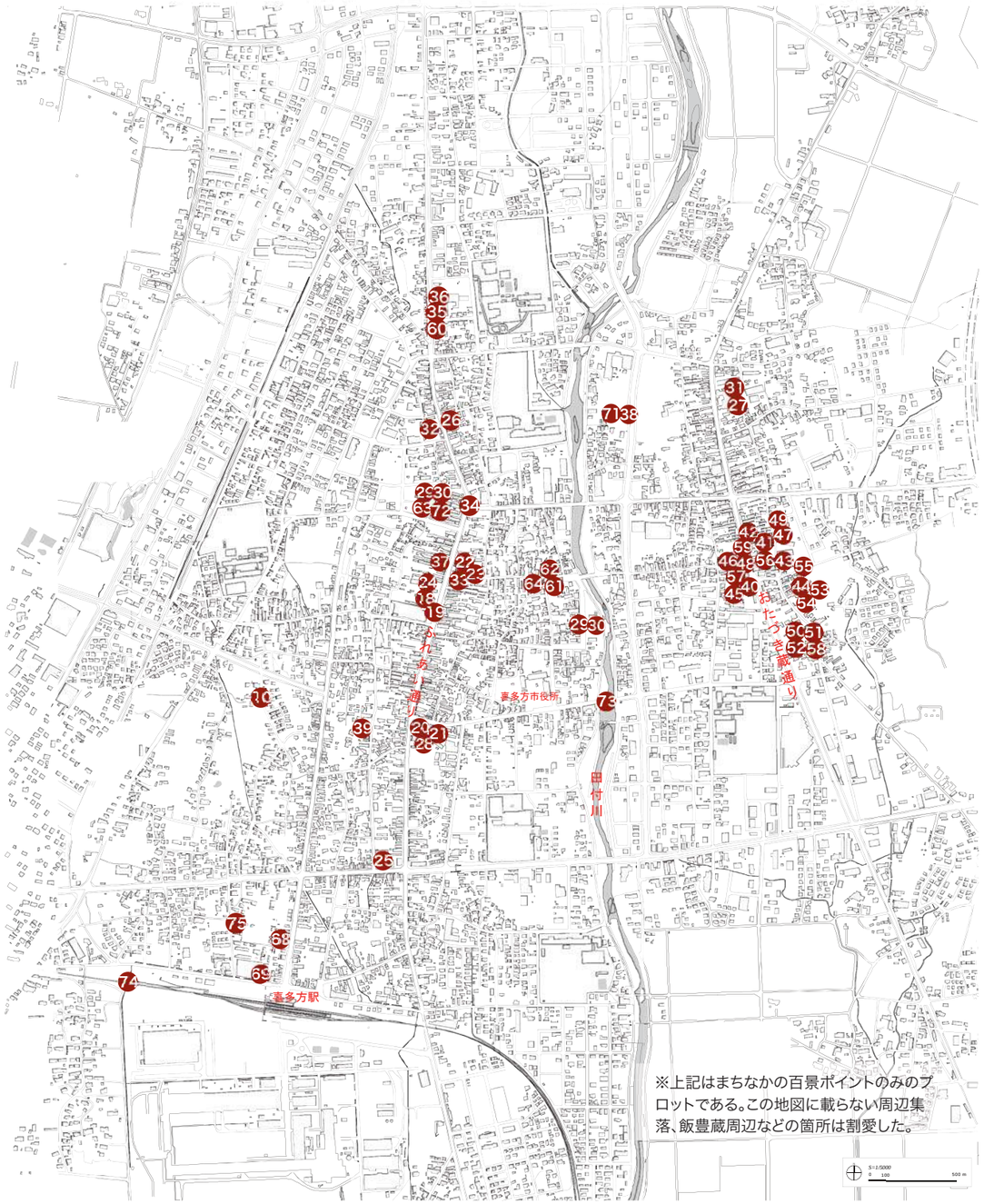
緑、奥行き、蔵横　―駅前、隙間、蔵が息づく街の魅力

蔵の敷地割りによって生み出される奥行き景、蔵が連なるまちかど、緑と建物によって作り出される景色などは、喜多方ならではのもの。

ゆっくり、じっくりと気づく、喜多方風景の魅力

毎日の暮らしの中では気づきにくい、それでも残して行きたい喜多方の風景を集め、「蔵のまちづくり博覧会」で展示した。その一部を以下に示す。喜多方ならではの蔵の街並みの他、周辺集落の静謐な農業の風景、人が憩うまちかどの景色、若喜商店の煉瓦の煙突や小田付の醤油蔵内部など。これらの他にも、奥に長い蔵に挟まれた「奥行き景」など、独自の建築文化によって作り出される景色は、まちあるきの楽しみを増やしてくれる。喜多方市内を縦横に流れる水路など、評価して残していくことで、「喜多方らしさ」を伝えて行きたい。

喜多方百景 プロット図



※上記はまちなかの百景ポイントのみのプロットである。この地図に載らない周辺集落、飯豊蔵周辺などの箇所は割愛した。

資源10

喜多方みちづくりの歴史

みちが発達し、つながりあい、まちができる

■出典等　：ヒアリング等
■調査主体：東京大学都市デザイン研究室

骨格の上に重ねられた道路整備網

■～江戸期：まちの骨格が形成

安土・桃山時代に定期市が開かれるようになった小荒井と小田付。市場は、阿賀川舟運と越後裏街道を通じて、越後ともつながっており、喜多方からは米が、越後からは塩・海産物などが運ばれた。江戸時代になると、城下町以外の農村の定期市として、小荒井・小田付の市場は保護育成され、「在郷町」として発展していく。その在郷町の南北軸が、現在の「ふれあい通り」と「おたづき蔵通り」である。また、同時代には、この2つの通りを繋ぐ道として、緑町～西四ツ谷のよこみちは既に形成されており、このみちは越後街道の裏街道としても使われていた。

■明治～大正期：うらみち・よこみちの増加と、米沢街道（大峠ルート）の形成

小荒井と小田付を結ぶ道として、新道、市役所通り（坂井四ッ谷線）が形成される。これと同時に、これら東西軸の間を南北に走るうらみちが発生してくる。また、岩越鉄道が喜多方まで延伸したことで、駅前の通りが新たに形成される。さらに、明治15年、福島県令三島通庸が会津三方道路（次の3つを結ぶ道路：①会津～米沢～山形、②若松～大田原～東京、③若松～新潟）を計画した。このうち、①は、三島が住民を使って山道を拡張開削させて完成した道路（大峠ルート）で、米沢街道の一つである。

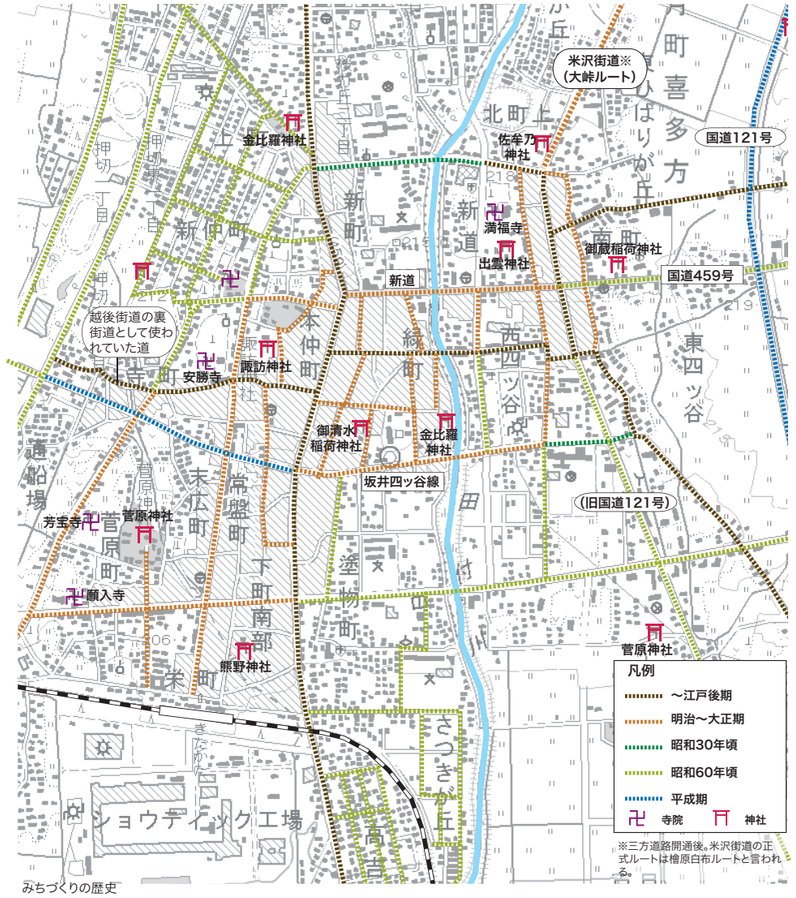
■昭和期：まちの外側に道路を新設

戦後、喜多方も、他都市と同様、モータリゼーションが進展し、自動車に合わせたみちが次々と計画され、造られるようになった。例えば、江戸期以来、市場として発展してきた小田付には、旧国道121号が貫入し、自動車中心の道路に変わった。

また、まちの外側において、区画整理事業が盛んになり、新たに宅地や工場が造成される。これに伴い、整然とした道路や広幅員道路が整備された。

■近年の動き：新国道121号の開通

大峠ルートにおける最大の難所「大峠（米沢と喜多方の間の峠）」は、冬季には通行できなかった。そこで、冬の積雪時にも通行できる道路をめざし、新しく大峠道路を整備することとなった。これが、現在のバイパス・国道121号であり、平成4年に完成した。



みちづくりの歴史

■近年の動き：既設道路の再整備

ふれあい通りの西に位置するうらみちで、歩いて心地よい道を目指して、昭和62年～平成14年、歴史的地区環境整備街路事業が実施された。蔵のある町並みに合わせ、石畳風の舗装に整備された。

また、現在、ふれあい通りがアーケード撤去と街路事業を実施の予定で、景観協定を締結する等、道路の再整備を契機としたまちづくりが盛り上がりをみせている。

■近年の動き：既設道路の幅員拡幅

一方で、既設の道路の幅員を拡幅する事業が数多く進行中である。

平成19年、まちなかの東西軸の一つである、坂井四ッ谷線（市役所通り）が西に延伸した。これは、20mという広幅員の都市計画道路である。これに伴い、市役所通りのアイストップとなっていた笹屋旅館が曳き家する等、まちの景観が大きく変容した。今後、若喜商店～旧121号バイパス区間も、現在の9mから20Mに拡幅される予定である。まちの賑わいの中心として、道路と合わせて「まちづくり」についても考えていく必要があるだろう。

また、市役所通りと同様、駅前通りも20mに幅員を拡幅する事業が進行中である。

参考：
・国土地理院　二万五千分の一地形図
・喜多方地域資源調査懇談会(2007)喜多方の歴史～まちづくり・みちづくりの歴史～

資源11

喜多方まちなか連立写真

通り沿いの風景

■調査場所　：喜多方まちなかエリア
■調査時期　：2005年
■調査・参加主体　：東京大学都市デザイン研究室

■　駅前通り

東側は道路拡幅前の立面であり、拡幅後にほとんどの建物が建て替わり、新たな街並みを形成している。西側もこれにあわせ、ところどころ建て替わっている。一方、資源である蔵がなくなったり、空地が残されたりしており、さらなる街並み形成が期待される。

1）　東　側

（▼印は蔵）

（1）北部（西会津線交差点～矢部米店）

←北　西会津線交差点　矢部米店　南→

（2）南部（矢部米店～キタカタホテル）

←北　矢部米店　キタカタホテル　南→

2）　西　側

（1）北部（会津バス～西会津線交差点）

←南　会津バス　西会津線交差点　北→

（2）南部（甲斐商店～会津バス）

←南　甲斐商店　会津バス　北→

通り沿いの風景

喜多方まちなか連立写真

■　ふれあい通り

特に北部を中心に真壁づくりの建物が連なっている。中部には真白な壁をもつ蔵が点在しているものの、アーケードに隠れているため、よく見えない。南部には緑地の少ない洋式建物や駐車場が連なり、やや寂しい。

1）　東　側

（1）北部（野口京染店前交差点～東北電力前交差点）

←北　　野口京染店前交差点　　南→

←北　　東北電力前交差点　　南→

（2）中部（東北電力前交差点～若喜商店前交差点）

←北　　東北電力前交差点　　南→

←北　　南→

←北　　若喜商店前交差点　　南→

（3）南部（若喜商店前交差点～さつきビル前交差点）

←北　　若喜商店前交差点　　南→

←北　　さつきビル前交差点　　南→

2）　西　側

（1）北部（野口京染店前交差点～吉野川酒造）

←南　　野口京染店前交差点　　北→

←南　　吉野川酒造　　北→

（2）中部（ほまれ酒造～笹屋前交差点）

←南　　北→

←南　　北→

←南　　北→

（3）南部（若喜商店前交差点～さつきビル前交差点）

←南　　北→

←南　　北→

通り沿いの風景

喜多方まちなか連立写真

■　市役所通り

レンガ蔵である若喜商店などの文化遺産が点在しているものの、建物の間の空地が目立つなど、やや寂しい。一方、黄色などの派手な看板がかなり目立つ。

1）　南　側

（1）東部（幸橋～蔵品美術館）

←東　　幸橋　　蔵品美術館　　西→

（2）中部（蔵品美術館～清水屋）

←東　　蔵品美術館　　清水屋　　西→

（3）西部（清水屋～若喜商店前交差点）

←東　　清水屋　　若喜商店前交差点　　西→

2）　北　側

（1）東部（東洋軒～幸橋）

←西　　東洋軒　　幸橋　　東→

（2）中部（沢井ビル～東洋軒）

←西　　沢井ビル　　東洋軒　　東→

（3）西部（若喜商店前交差点～沢井ビル）

←西　　若喜商店前交差点　　沢井ビル　　東→

■　おたづき蔵通り

蔵が点在している他地域より、蔵が連なっており、喜多方まちなかの代表的な蔵の街並みをもつ。さらに妻入り・平入りの様式、白漆喰・レンガの壁など多様な形の蔵が存在しており、街並みとしての意義は高い。しかし、建物の間などに植栽は少ないものの、駐車場などの空地が多いため、若干寂しい。

1）　東　側

（1）北部（夢心酒造～会津喜多方蔵々亭）

←北　　夢心酒造　　会津喜多方蔵々亭　　南→

（2）中部（会津喜多方蔵々亭～小桧山珈琲店）

←北　　会津喜多方蔵々亭　　小桧山珈琲店　　南→

（3）南部（小桧山珈琲店～ライフストアーツタヤ）

←北　　小桧山珈琲店　　ライフストアーツタヤ　　南→

2）　西　側

（1）北部（エスポアほし～北町公園）

←南　　エスポアほし　　北町公園　　北→

（2）中部（吉川商店～エスポアほし）

←南　　吉川商店　　エスポアほし　　北→

（3）南部（株式会社大膳～吉川商店）

←南　　株式会社大膳　　吉川商店　　北→

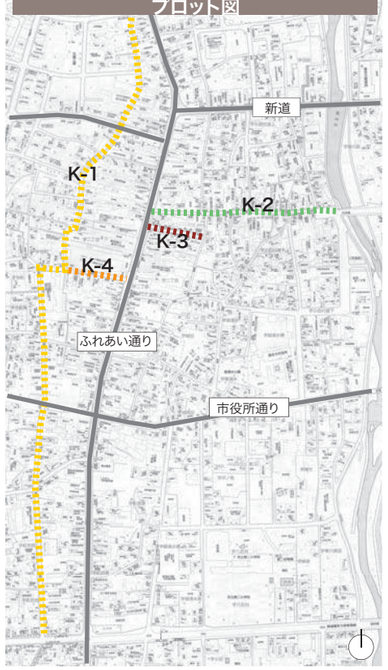
資源12

うらみち・よこみち

表通りとは異なる魅力

■出典等　：うらみちよこみち調査
■調査時期：2006年、2007年
■調査主体：東京大学都市デザイン研究室

小荒井の特徴的なうらみち・よこみちプロット図



ヒューマンスケールなみち

小荒井のうらみち・よこみちは、それぞれ特徴的であり、ふれあい通りや市役所通りのような表通りとは違った味わいがある。また、表通りに比べて車通りが少なく、歩行者にとって心地よい空間である。

P.34で示すように、江戸時代に既にその存在を確認できるのが、越後街道の裏街道としても使われていた緑町のよこみちである。その他のよこみちの殆どは明治時代頃に形成された。つまり、殆どのうらみち・よこみちが車社会到来前に形成されており、そのため、いずれもヒューマンスケールの空間で、また、そこで暮らす人の生活が色濃くにじみ出た空間となっている。

各うらみち・よこみちには、蔵などの歴史的建造物が面していたり、味のある小さな飲食店が集積していたり、手入れの行き届いた植栽があったりするなど、様々な魅力がある。一方で、大規模駐車場や空地、放置されたままの建物なども面しているという課題もある。

K-1

ふれあい通りと平行に走るうらみち。昭和62年～平成14年に歴史的地区環境整備街路事業が実施されたため、その事業の名前から「レキミチ」とも呼ばれている。事業により、石畳風の舗装が施されたが、傷みがはげしかったことから、多くの部分でインターロッキング舗装に置き換わっている。

K-2

小荒井と小田付をつなぐ緑町のよこみちで、越後街道の裏街道としても使われていた。江戸時代から職人街として栄え（P.34参照）、今でも、畳屋や桐下駄屋などがあり、当時の姿を今に伝えている。「れんが染織工房」の蔵などの資源があるが、その一方で、殺風景な空地や駐車場も目立っている。

K-3

ふれあい通りから東に延びるうらみちである。戦後すぐに小さな飲食店が集積した。現在でも、小規模な居酒屋やラーメン屋などが多く店を構えており、通称「マーケート」と呼ばれている。また、マーケットにある店舗で共同のトイレがある。

K-4

ふれあい通りから西に延びるよこみちで、越後裏街道でもある。「大和川酒蔵」や「楽篆工房」といった観光客の多いスポットが面しており、またK-1と同様、歴史的地区環境整備街路事業により石畳風の舗装となっている。一方で大規模店舗の駐車場も面しており、歩行者環境とのバランスが課題となっている。

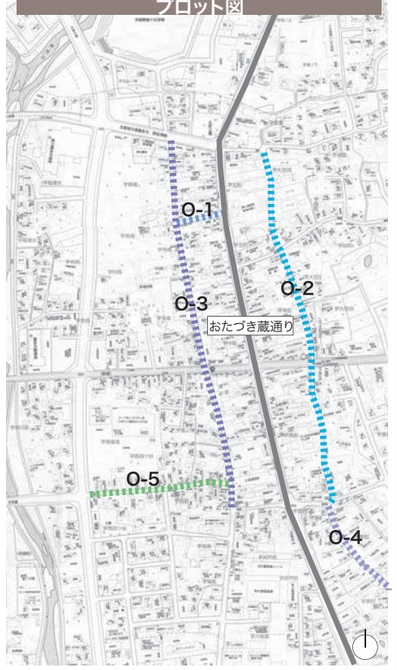
歩いて心地の良い「うら」のみち、「よこ」のみち

当調査では、喜多方のまちなかで特徴的なうらみち・よこみちを抽出し、その特徴について分析、考察した。

小荒井と小田付で共通することは、どのうらみち・よこみちも、賑わいのある表通りとは違った魅力があり、ヒューマンスケールで歩くととても心地が良いということである。

一方で、各うらみち・よこみちは、それぞれ個性がある。蔵がひっそりと佇んでいるみちや、飲食店が軒を連ねているみち、緑が豊かなうらみちなど、様々である。これは、P.34で見る通り、それぞれの道の成り立ちにも深く関係していると思われる。

小田付の特徴的なうらみち・よこみちプロット図



人が行き交う歴史みち

小田付のうらみち・よこみちも、小荒井同様、それぞれ特徴的であり、表通りであるおたづき蔵通りとは違った味わいがある。

P.34で示すように、江戸時代に既にその存在を確認できるのが、小荒井と小田付をつなぐ西四ツ谷のよこみちである。このみちは、現在でも畳屋等があり、当時の職人街としての姿を今にとどめている。また、油屋の蔵（渡部家店蔵）がある通りは、もともと越後街道の裏街道としても使われていたり、米沢街道（大峠ルート）の一部でもあり、人の往来が盛んであったと考えられる。おたづき蔵通りに平行して南北を走る二つのうらみちは、住宅が中心であるが、蔵が点在し、また水路が通っていて、緑も豊かであることから、歩いて心地よい空間となっている。万福寺の境外参道も一つの特徴的なよこみちとなっている。

一方で、うらみち・よこみちの良さを活かしきれていな面もある。蔵がフェンスで隠されていたり、駐車場や空き地があったりといった点であり、改善が必要である。

O-1

万福寺の境内の外側に位置す参道空間としてのよこみちである。参道の両側には石垣があり、その上には常に維持管理が行き届いている植栽がある。春にはツツジが咲き誇り、とても美しい風景が見られる。

O-2

おたづき蔵通りと平行に走るうらみちである。金忠の三五八蔵や二十間蔵といった大規模な蔵から、近年建築された蔵に至るまで、多様な蔵を見ることができる。一方で、このうらみちの東側は新興住宅街となっており、このうらみちは小田付の景観を規定する上で極めて重要である。

O-3

O-2と同様、おたづき蔵通りと平行に走るうらみちである。蔵などの歴史的建造物は多くはないが、住宅が立ち並び、緑が豊富で、落ちついた雰囲気を見せている。水路もあるが、活かしきれていないため、水質の改善等が望まれる。

O-4

米沢街道として江戸時代は栄えた通りである。現在も油屋の蔵（渡部家店蔵）等が残り、往時をしのぶことができる。また、「あづまさ」の木造住宅や民家の板塀、水路などが景観資源となっている。一方で、駐車場や空地、町並みに似合わない明るい色彩の建物もあり、課題である。

O-5

小荒井と小田付を繋ぐよこみちであり、K-2と繋がっている。今でも畳屋などがあり、職人街としての姿をとどめている。小荒井から見ると、蔵がアイストップになっているが、その前にブロック塀やフェンスがあり、その蔵を活かしきれていない。小田付の玄関口の一つであるため、改善が必要だ。

資源13

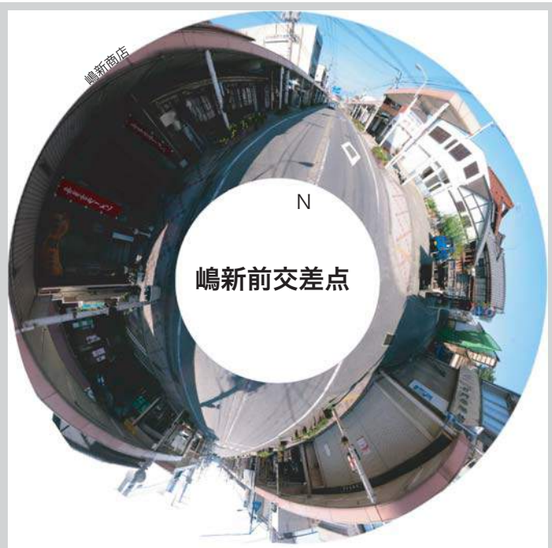
まちなか まちかどリスト

まちを印象づけ、まちの分かりやすさをつくる

■出典等　：まちかど調査
■調査時期：2005年
■調査主体：東京大学都市デザイン研究室

01
・まちかどの空間資源：若喜商店の近代建築、蔵造りの笹屋旅館
・課題：西側の20m幅員の道路部分のあり方
・市役所通りとふれあい通りが交差する地点であるため、まちなかで観光客の最も多いまちかどと言える

02
・まちかどの空間資源：島三商店、道標、よこみちの石畳
・課題：大規模スーパーマーケットの駐車場
・西に延びるよこみちは越後街道の裏街道として使われていた



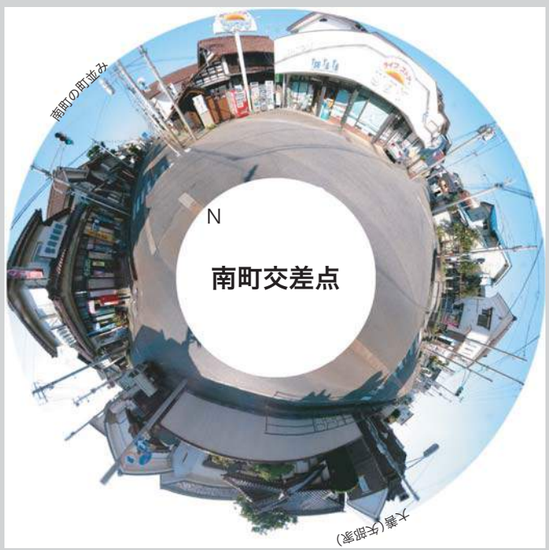
03
・まちかどの空間資源：嶋新商店（ただしアーケードで隠れているためわかりずらい）
・課題：東側空地
・緑町のよこみちとふれあい通りが交差する地点であり、小田付方面へと人を導く上で重要な地点

04
・まちかどの空間資源：金田洋品店の煉瓦蔵
・課題：東側空地（大東銀行前）

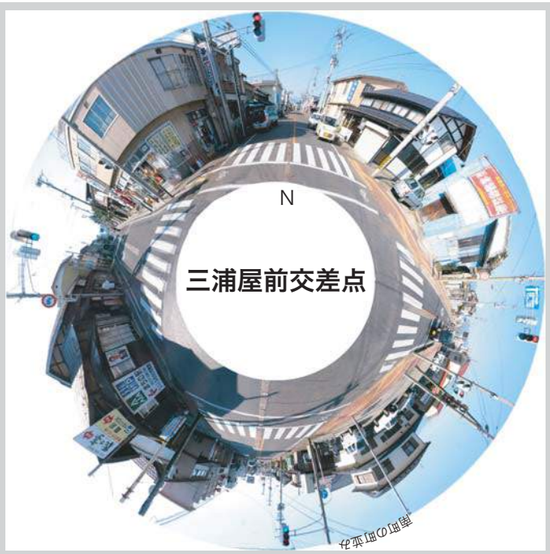
まちかどに集まり表情をつくる多様な資源

まちなかには、古いみち、新しいみち、狭いみち、広いみち、蔵が並ぶみち、色々なみちがあるが、これらが交わるのが「まちかど」である。喜多方のまちなかにおいて、代表的な8つのまちかどについて調べた。何気なく通っているまちかどをこうして並べて見てみると、実に様々な表情があることに気づく。蔵や神社など、喜多方らしさを表す資源が面しているまちかども多い。しかし、その一方で、大規模な駐車場や空地があり、殺風景な空間をもつまちかども少なくない。

05
・まちかどの空間資源：吉の川酒造の蔵、佐藤歯科医院の木造建築
・課題：東側駐車場
・甲斐本家といった蔵が集積する上町へと人を導く上で重要な交差点



06
・まちかどの空間資源：大善（矢部家）、南町の町並み
・課題：ツタヤ、てんぞう前の空地
・喜多方を代表する蔵の町並みをもつ南町への玄関としての交差点



07
・まちかどの空間資源：南町の町並み
・課題：派手な看板類、東側駐車場
・新道とおたづき蔵通りが交差する地点

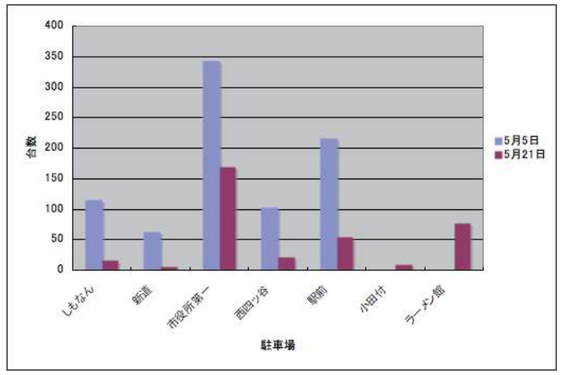
08
・まちかどをの空間資源：佐牟野神社、北町公園
・小田付の最北端地点としての交差点

資源14

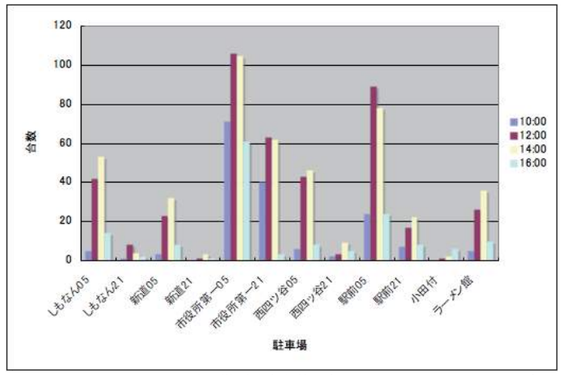
まちなかの駐車場利用状況

歩行者環境や歴史的町並みとのバランスを図る

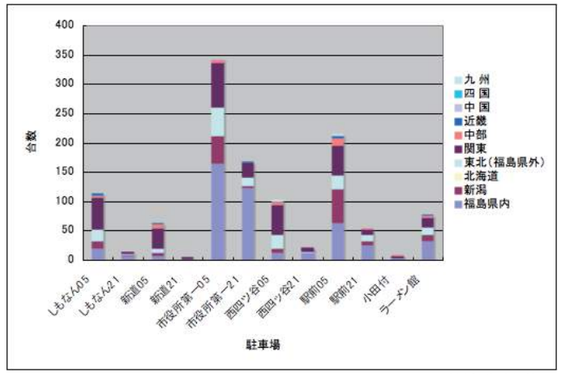
■調査範囲：市内中心部
■調査時期：2005年
■調査主体：東京大学都市デザイン研究室



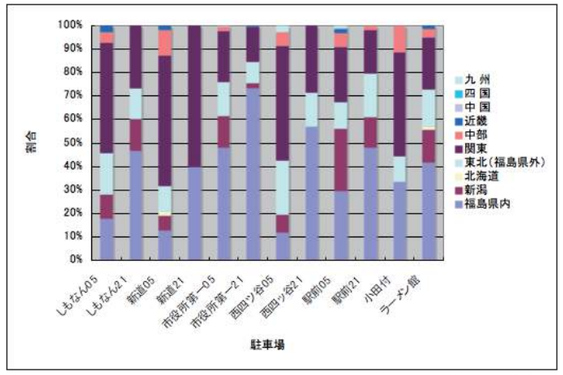
一日の駐車場別台数（GWと一般の休日の比較）



一日の時間帯別駐車台数　（05=5月5日GW、21=5月21日）



地域別別台数



地域別駐車場別台数の割合

モータリゼーションの進展に伴い、喜多方においても、他都市と同様、駐車場のあり方は重要な課題である。歩行者環境の向上と歴史的な町並み・景観の維持と駐車場とをどのようにバランスをとっていくかについて検討する必要がある。そこで、当調査では、まちなかにおいて虫食い的に増加しつつある駐車場の分布と利用状況を明らかにした。

盛況なGWの市役所通り（GW、一般休日比較）

GW（5月5日）の合計は838台で、一般の休日（5月21日）合計は263台（新道、西四ッ谷、駅前、市役所、しもなんのみの合計）であった。

両日を通して、最も利用されている駐車場は、市役所第一駐車場である。これは、有名ラーメン店に最も近い上、土日休日は無料であることから、このような結果になっていると考えられる。駅前、ラーメン館がそれに続いている。その他の駐車場も、GW期には、通常の2倍以上の利用が見られた。GW期には、来客数が飛躍的に伸びることが確認された。

集中する昼間（時間帯別駐車台数比較）

1日の中での駐車場利用のピークを把握するために、時間帯別駐車場台数の調査を行った。

GW期、一般の休日のどちらにおいても、12:00と14:00での利用率が高い。一方、多くの駐車場で、16:00の時点での利用台数は急激に落ちている。やはり、ピークは昼頃であり、夕方以降の駐車場利用はほとんど見られない。しかし、市役所第一駐車場だけは、約60台と他の駐車場に比べて夕方でも利用されていることが分かった。

駐車場別台数と地域別の利用

各駐車場における来訪者の居住地域の比較を行った。

市役所駐車場は、県内の利用者が圧倒的に多いのに対し、新道・西四ッ谷は県外利用者が極めて多い。また、GW期には県外利用者が多いことが確認できる。駅前駐車場は新潟県からの利用者が比較的高いことも特筆すべきことである。

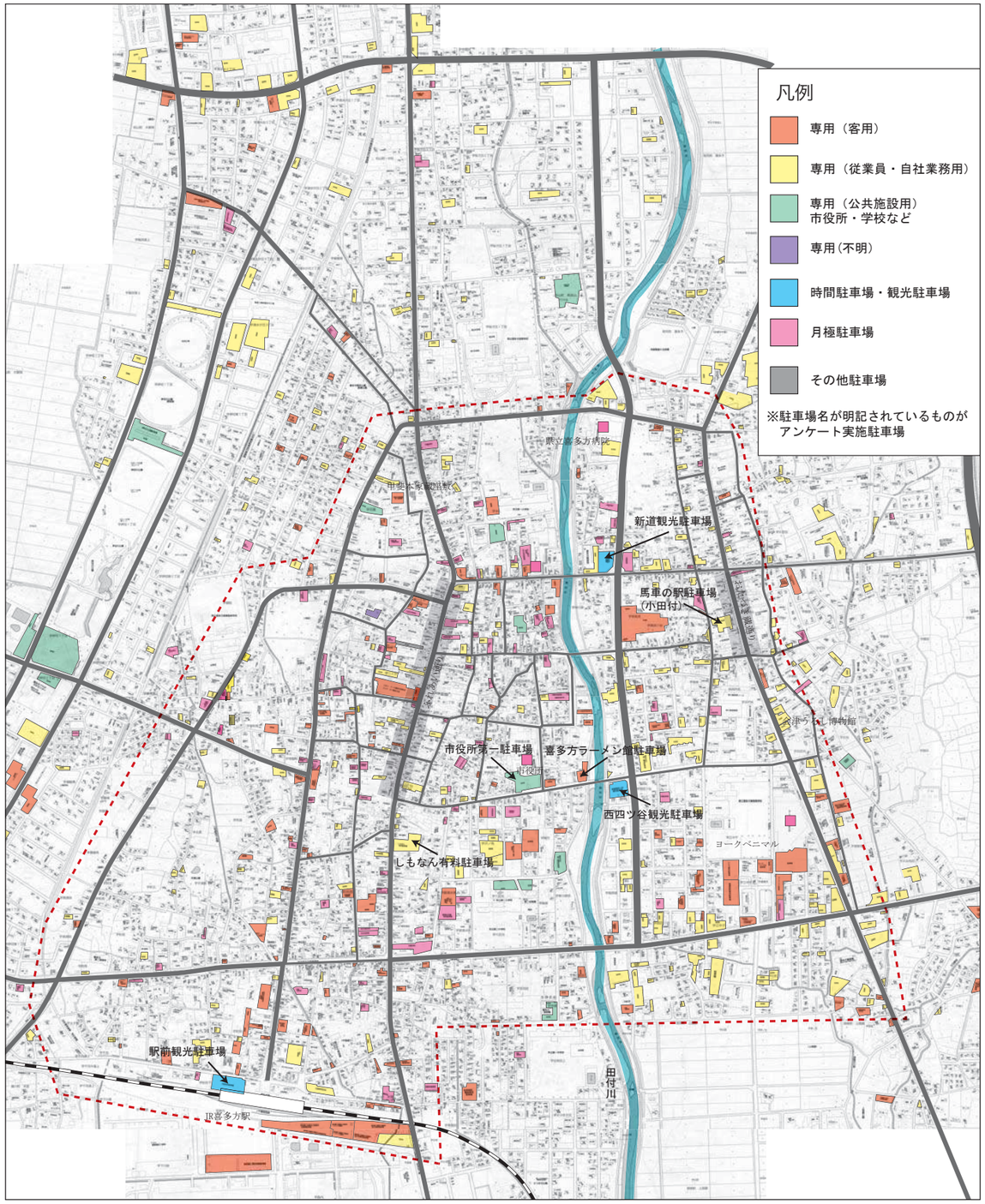
調査概要

■調査手順
1.調査対象地域内の駐車場・駐車場として利用されている場所を住宅地図・既存データで洗い出す。
2.調査員による現地調査で駐車場の規模・利用形態（一時利用・月極・店舗利用者のみ）を把握する。
3.[2]の調査で把握したデータをもとに、観光客の動向を把握する上で重要であると考えられる大規模な駐車場を5～10カ所、選定する。
4.[3]で選定された駐車場について、期日を設定し、調査員によるナンバー調査を行う。
■実施日時：
・2005年4月：既存データの収集
・2005年5月初旬：現地調査による駐車場データベースの作成
・2005年5月5、21日：駐車場ナンバー調査、利用者アンケート調査実施
※駐車場利用者ナンバー調査
■調査対象駐車場：
・新道観光駐車場・西四ッ谷観光駐車場
・駐前観光駐車場・市役所第一駐車場（休日開放）・しもなん駐車場・小田付馬車の駅（※21日のみ調査）・ラーメン館（※21日のみ調査）
■調査方法：10時、12時、14時、16時に各駐車場に駐車中の車のナンバープレートや台数を記録

各種類が万遍なく分布する駐車場（分布図）

住宅地図と目視より、どこに、どのような駐車場があるかを調査し、地図に示したのが下記の図である。

この図から、まちなかには多様な駐車場が万遍なく分布していることが確認できる。適宜、必要に応じて、駐車場を増設していったのが現状であるとすれば、今後は、より戦略的に駐車場の配置や規模を考えていく必要がある。



種類別駐車場のプロット図

資源15

サインの現状

喜多方のまちなか、サインの現状把握

■調査範囲　：市内中心部（小荒井・小田付）
■調査時期　：2007年
■調査・参加主体　：東京大学都市デザイン研究室

主なサインの種類と凡例

①案内表示サイン

地図や経路図などを表示し、空間の構造と所在地との関係を表示しているもの

住宅地図

道路標識

英語青看板

②誘導表示サイン

移動の方向を矢印などで表示しているもの

木製の方向誘導サイン

茶色標識

③名称表示サイン

特定の地点、施設の名称や、通り名などを記しているもの

木製の通り名サイン

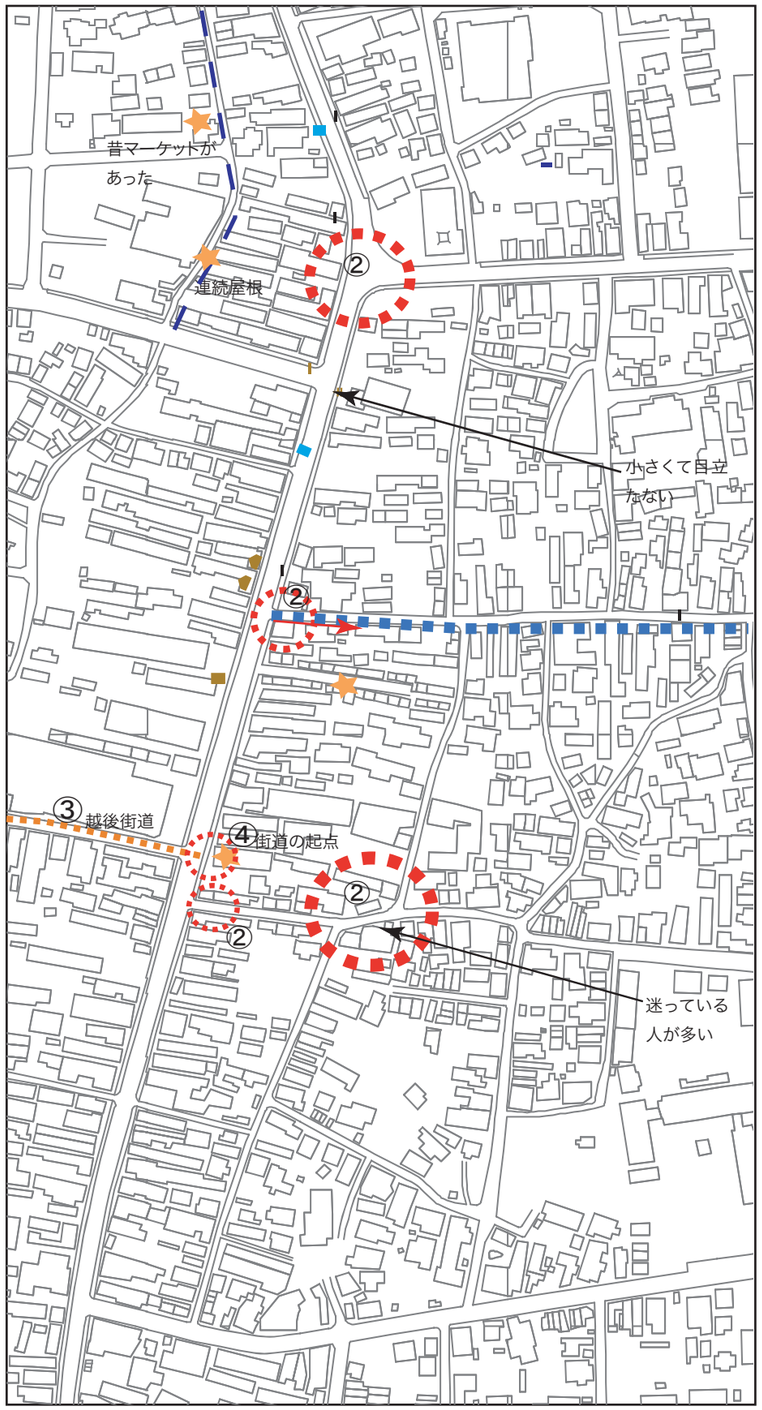
看板(大)

④説明表示サイン

対象の説明や解説を記しているもの

教育委員によるもの

▶ <小荒井エリア>



多種多様なサインの共存

案内が分かりにくいといわれる喜多方。その一方で同じ箇所にいくつものサイン・看板が乱立しているところもある。また、同じ内容を示す異なるサインも見られる。市内に広がるサインを戦略的に整理し、誰にも分かりやすく、まちを結びつけるようなサインのあり方が期待される。

■現状の喜多方サインの課題

1）同じ箇所に複数の誘導サインがある

例：駅前通り先の広場
銀（蔵の里/美術館/プラザ）、茶（桐の博物館・蔵の里美術館・安勝寺・若喜商店・南町）

2）裏道で迷う人が多い

裏道に関する情報が非常に少ない。裏道も通りとして位置づけ、サイン表示（通りの表示・誘導表示もしくは施設表示）を取り入れてゆく

3）教育委員会の案内サインがあるが、老朽化した上、見つけにくい

規格統一を機会に説明表示サインを入れ換えてゆく。

4）その他説明サインはバラバラである

上記を除いて、（商売をしているところを除いて）蔵や歴史的建造物等を示すためのサインがほとんど存在しない。

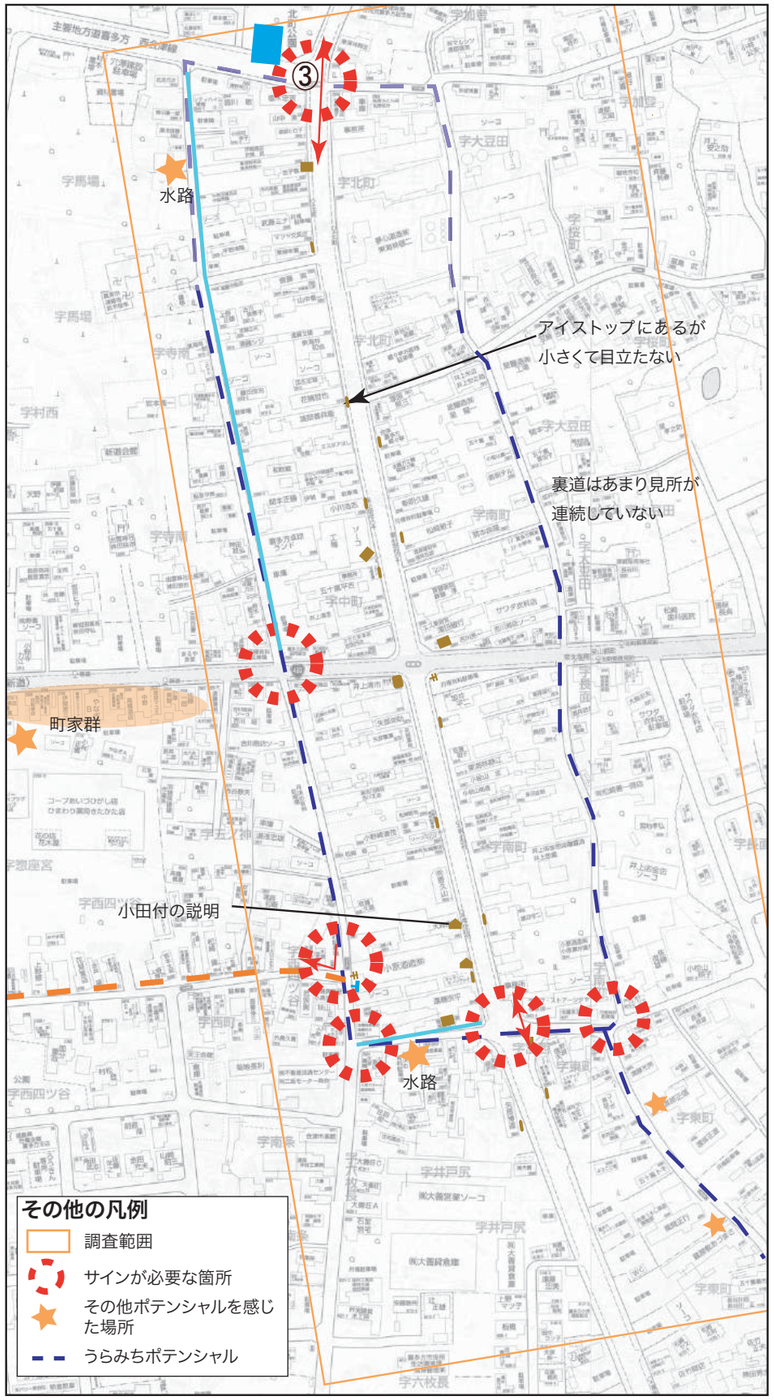
5）適切な位置に表示がない

※歴史的道すじの入口／歴道の表示がない（名前を付けるか）
※ふれあい通りの入口（しもなんと舞台田上勝線の交差点）・出口に表示がない
※ふれあい通り上に通りを示す表示がない
※おたづき蔵通りには、地域が自主的に看板を設置している（約10箇所）
※小田付と小荒井を結ぶ部分・ルート上にサインがない（市役所通り、月見橋の通りなどに、両者を示すサインがない）

6）位置を示す表示が少ない

現在地がわかりにくい。また、どこに行けばよいかを伝えるのが難しい。

<小田付エリア>

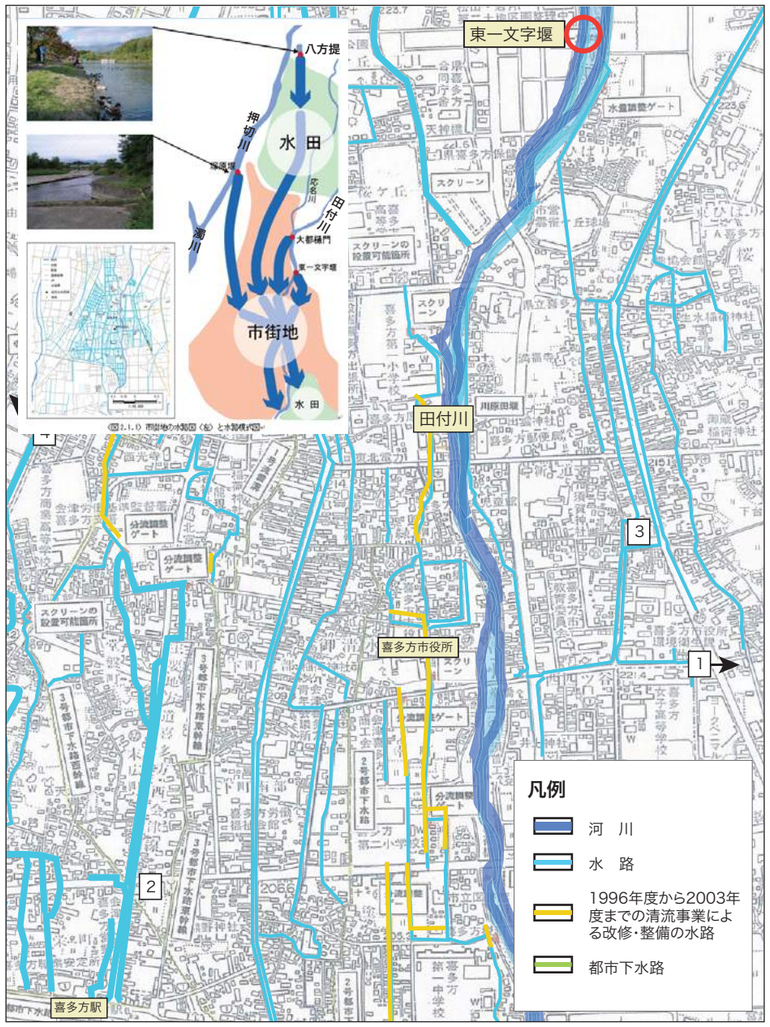


資源16

喜多方まちなか水路と河川網図

豊富な水に囲まれたまち

■出典等　：喜多方まちなかエリア
■調査時期　：2004年
■調査・参加主体　：喜多方市都市計画整備課



次世代へ残そう清流を！（喜多方都市計画整備課　平成16年4月）

南北に流れる3本の河川の幹

喜多方は飯豊山系の連邦から流れる雪融け水を中心に、北から南へと、様々な川や水路、地下水が流れ込む、水の豊かなまちである。市内に御清水（おしみず）という地名があることからもそれがよく分かる。

喜多方市街地付近を濁川、押切川、田付川と3本の河川が流れ、その河川やその水をためている八方提などを水源とする水路がまちなかに網の目のように張り巡らされている。これらの水路の水は、上流の水田を通ってまちなかにいたり、また下流の水田へと流れていく。

まちじゅうに広がる水路の「網」

かつて水路は洗い場や打ち水などの生活用水として利用されていた。つまり、表堀、中堀、裏堀と3つの水路に分かれており、打ち水、伝馬、防火など主に公的に利用されたり、台所で使い排水路になったり、雑用水として利用されるなど、多様な用途として使われていた。このような水路には魚が棲み、子供たちの遊び場となっていたのであろう。

しかし、車社会の到来に伴い、現在は多くの箇所で水路に蓋がかけられ暗渠になっている。また、水路の形が残っていても使われていない状況である。したがって、生活場としての便利さは得たものの、昔ながらの風情ある風景はどんどんなくなってくる。

もちろん、現在でも喜多方蔵の里や大和川酒蔵のように、喜多方の代表遺産ともいえる蔵と水路をうまく組み合わせ、趣のある空間をつくっているところも何ヶ所もある。

1　小田付の裏通りの水路1

2　駅前付近の裏堀

3　小田付通りの表通り沿いの水路

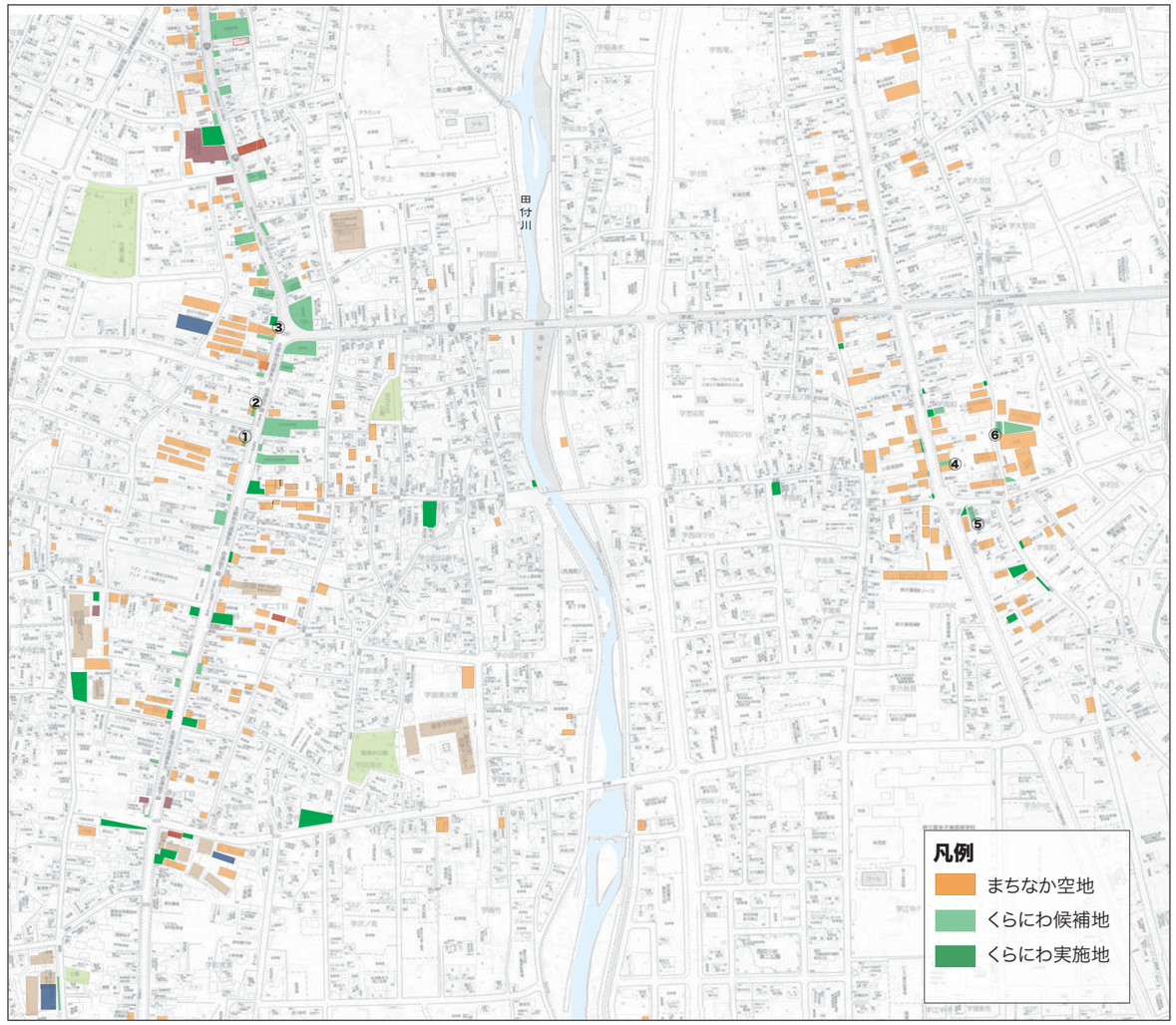
4　「蔵の里」の水路

資源17

喜多方くらにわ候補地

空地の有効活用

■出典等　：喜多方まちなかエリア
■調査時期　：2007年
■調査・参加主体　：東京大学都市デザイン研究室



喜多方くらにわ候補地

多様な前庭のポテンシャル

「くらにわ実験」（喜多方蔵のまちづくり博覧会にて実施）のため行われたまちなかの空地調査の結果、まちなかには視界の開いた空地が多いものの、植栽がうまく施されていなかったり、憩いの場として活用されていない場合が多かった。このようなまちなかの空地をうまく管理し活用することで、まわりに潤いと賑わいをもたらす必要があると考えられる。

・くらにわ候補地のリスト（一部）

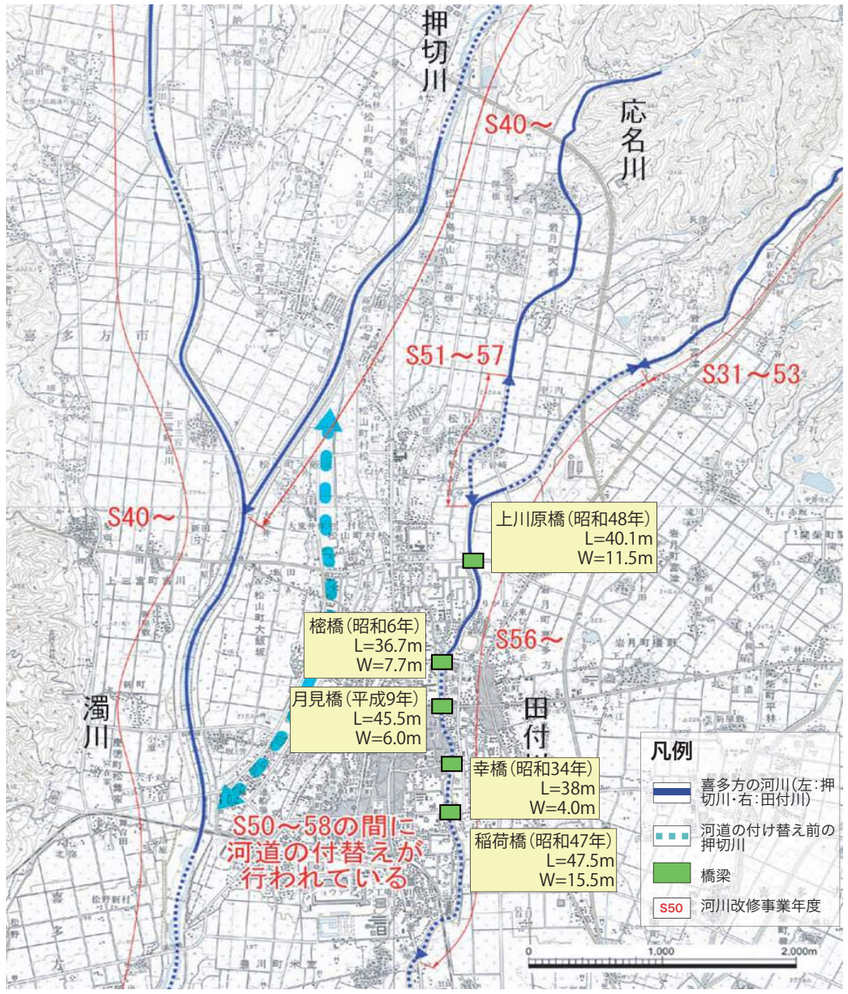
No	所有者	蔵と隣接	候補タイプ	サイズ（mm）	状態	他図面	No	所有者	蔵と隣接	候補タイプ	サイズ（mm）	状態	他図面
くらにわづくりの候補となるところ							くらにわづくりの候補となるところ						
1	コーヒー蔵	○	半間庭認定		店の前がすでに休憩スペースとして整備されている。		4	カフェモーツアルト横	○		幅5800×奥行き12600	蔵に隣接する他、道を挟んだ正面にも寄合所等の蔵が見える。また奥に立派な庭が見える点が良い。アスファルト敷き。	
2	山中せんべい店	○	半間庭認定		店の前がすでに休憩スペースとして整備されている。		5	大善てんぞう横	○		一辺の長さが7800、5500の直角三角形	角地。歩道には小さな花壇が既に設置されている。休息スペースには良さそう。	
3	吉野川酒造	○	見え庭認定	認定	素敵なお庭が垣間見える。周辺（F-31、F-32）とあわせて公共空間作り。くらみっせでの提案場所。		6	二十軒蔵横	○		駐車場部分（OE-21）幅14000×奥行き6500	二十軒蔵に隣接した駐車場部分及びその奥の空き地。二十軒蔵の威圧感を感じるにはとても良いスペース。ちょっとだだっ広いのが難点。	

資源18

河川改修・橋梁の歴史

まちなか水辺空間をつくる

■実践場所：喜多方まちなかエリア
■実践主体：福島県喜多方建設事務所、喜多方市
■開始時期：1960年



河川改修事業（喜多方建設事務所管内河川現況図（2003年9月））

幸橋の姿とそこからの風景

喜多方のレンガをモチーフにした橋

河川改修事業

喜多方流域は会津盆地に位置し、年間を通して降雨量は比較的少ないものの、7月～10月にかけて集中豪雨や、春先の融雪出水が多く、現在まで幾多の災害を被ってきた。

このため、昭和40（1975）年度から中小河川改修事業が行われている。

濁川と田付川の改修工事

当初の改修計画にある「合流する支川について築堤」により計画され、濁川、田付川の築堤が施工された。濁川の改修工事は合流点より約1.9kmにわたり、昭和3年より施工が開始され昭和23年に概成した。また昭和31～32年には床固工事も実施された。田付川の改修工事は合流点より約1.0kmにわたり、昭和7年より施工が開始され昭和15年に完成した。

橋梁の歴史

喜多方まちなかの場合、濁川の樒橋が昭和6（1931）年造られて以来、次々と橋梁が造られる。特に田付川沿いの橋梁の場合、幸橋（昭和34年）・稲荷橋（昭和47年）・上川原橋（昭和48年）の順に完成したのである。

幸橋の拡幅事業

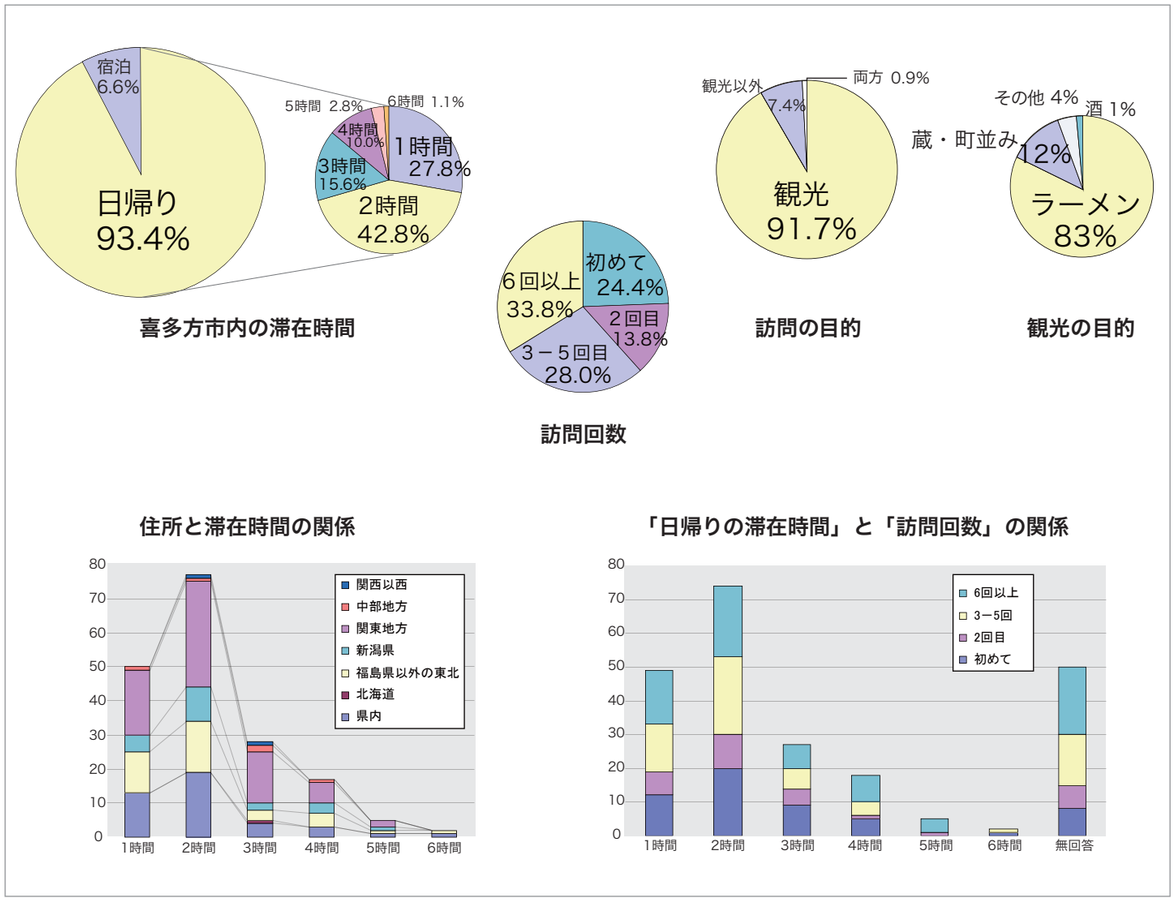
田付川と市役所通りと交差するところに幸橋は位置している。この市役所通りを9mから20mまで拡幅するとともに、幸橋も架け替える計画が発表された。しかし、通りの拡幅に対する市・県・住民間の意見差により、「市役所通りまちづくり検討委員会」を通し、色々な議論が行われた。そして、2006年12月に市と地元の間で、まちづくりの方向性に関する合意が形成され、現在は「幸橋デザイン等小委員会」を中心に施工に関する検討が行われている。

資源19

喜多方の観光行動調査

平均滞在時間はわずか2.2時間

■出典等　：現況分析（観光行動）調査
■調査時期：2005年
■調査主体：東京大学都市デザイン研究室



P.44の駐車場調査とあわせ、喜多方中心市街地における駐車場利用者にアンケートを行い、喜多方を訪れる観光客の行動（滞在時間、訪問回数、訪問目的）を調査した。

2.2時間と短い平均滞在時間

結果は上の通り、日帰りが9割以上であった。宿泊をして帰る人は現状ではほとんどおらず、駐滞在時間は2～3時間程度が約7割を占める。居住地と滞在時間の関係についてみると、関東など遠くから来た人の滞在時間は県内の人に比べて滞在時間も長いという傾向が見られた。

まちなかに長く滞在してもらうための仕掛けとして、わかりやすいサインの設置などが求められる。また、従来の宿泊施設のほかに、喜多方の資源である蔵を活かしてホテルとし、蔵泊を多く受け入れることで、喜多方の魅力を体感してもらうことにもつながるのではないだろうか。

リピーターの多い喜多方

喜多方への訪問回数については、初めてと答えた人が約2割であった。その一方で6回以上と答えた人も3割を超えており、喜多方ファンともいえるようなリピーターも少なからず見られた。

日帰りの滞在時間と訪問回数の関係をみると、6回以上と答えた人数は、1～2時間に多く、ラーメン目的の観光のリピーターである可能性が高いと思われる。

観光・ラーメンがメインの訪問目的

喜多方を訪れた目的は9割の人が観光と答え、その目的は大部分がラーメンであった。次いで多かったのが蔵の町並み観光であるが、その回答は12%にとどまり、「蔵のまち」として知られる喜多方であるものの、まだラーメンと比べ相対的な認知度の低さがうかがえる。昼食などでラーメンを食べに訪問し、食事が終わるとそのまま帰ってしまうというケースが多いようだ。

ラーメン以外にも、喜多方の魅力的な資源である蔵や農作物、自然などを広く伝えていく工夫が必要である。

資源20

喜多方観光資源リスト

来訪者を魅了する資源が多く点在

■出典等　：JTBF観光資源調査
■調査時期　：2006年
■調査主体　：東京大学都市デザイン研究室

これは、2006年度にJTBF（財団法人日本交通公社）により、喜多方の資源調査を行った中から、観光資源（美術館などの文化施設や各種体験ができる施設、観光案内所、ファーマーズマーケット、および温泉・温浴や飲食店・宿の集積）を一覧にしたものである。

市街地を中心とした「まちなか全体版」と喜多方市広域の「市域全体版」に分けてまとめた。

まちなか全体版

S=1:12,500

通り沿いに各施設が並ぶ

喜多方中心市街では、ふれあい通りや市役所通り、おたづき蔵通り沿道を中心に、美術館や博物館、文化体験場などの施設が存在している。

また、駅前や駐車場付近には観光案内所が置かれ、来訪者を迎える場所となっている。

【凡例】
- 美術館・博物館
- 体験
- 観光案内所
- ファーマーズマーケット
- 観光施設

（F-01 施設系）

E-01 飲食店の集積

■美術館・博物館（11ヶ所）

F-8	蔵座敷美術館	美術館
F-9	桐の博物館	博物館
F-10	大和川酒造酒蔵北方風土館	博物館
F-11	うるし美術館	美術館
F-12	喜多方市美術館	美術館
F-13	喜多方蔵品美術館	美術館
F-15	喜多方市郷土民俗館（市立図書館内）	博物館
F-16	近代美術史料館（第一中グラウンド南）	博物館
F-18	100年カエル館	博物館
F-21	蔵のまち美術館	美術館
F-23	ぎゃらりー山形	ギャラリー
F-24	喜多方蔵座敷美術館（笹屋旅館内）	美術館

■体験（16ヶ所）

F-25	木之本漆器店	蒔絵体験
F-26	黒澤桐材店	下駄の鼻緒付け体験
F-27	桐の博物館	桐工芸体験
F-28	染色工房れんが	染型（会津型）紙彫り体験
F-30	若喜商店	赤べこ絵付け体験
F-31	楽豪工房（蔵見世2階）	篆刻体験
F-44	山中煎餅本舗	たまりせんべいの手焼き体験
F-45	老舗　鳴海屋	駄菓子づくり体験
F-46	喜多方市観光課	ヘラブナ釣り
F-47	喜多方ラーメン館	喜多方ラーメン体験
F-49	ほまれ酒造	酒蔵探訪
F-50	小原酒造	酒蔵探訪
F-52	喜多の華酒造場	酒蔵探訪
F-53	観光蔵馬車	乗り物体験
F-54	ベロタクシー	乗り物体験
F-55	清川商店酒造所	酒造探訪

■観光案内所（5ヶ所）

O-13	喜多方観光協会(市商工観光課内)	観光案内所
O-14	喜多方駅前観光案内所	観光案内所
O-16	蔵のまち案内所	観光案内所
O-17	西四ツ谷観光案内所	観光案内所
O-18	新道観光案内所	観光案内所

■その他（4ヶ所）

O-2	喜多方蔵の里	観光施設
O-3	いいでの四季　喜多方店	ファーマーズマーケット
O-4	手づくり市くまさん	ファーマーズマーケット
O-5	岩月豊友会（新道駐車場）	ファーマーズマーケット

市域全体版

S=1:750,000

温泉や店・宿の集積が点在

周辺集落を含む喜多方市全体では、温泉や宿の集積が各所に見られる。また、山間部では、そば打ち体験が多く実施されていることがわかる。そばの飲食店群も目立っている。

体験プログラムの申し込み仲介も行っているグリーン・ツーリズムサポートセンター（P.54参照）は、熊倉地区に本部を持ち、そこでは農業体験ができる。

【凡例】
- 美術館・博物館
- 体験
- 観光案内所
- ファーマーズマーケット
- 観光施設

（F-01 施設系）

E-01 飲食店の集積

H-01 宿の集積

■温泉・温浴（7ヶ所）

F-1	熱塩温泉	温泉
F-2	日中温泉	温泉
F-3	山都町温泉保養センター「いいでのゆ」	温泉
F-4	ふれあいパーク喜多の郷温泉「蔵の湯」	温泉
F-5	大森温泉保健福祉センター「夢の森」	温泉
F-6	ふれあいランド高郷	温泉
F-7	保健福祉センター「はなしょうぶの湯」	温泉

■美術館・博物館（5ヶ所）

F-14	喜多方市煉瓦館	博物館
F-17	高郷郷土資料館	博物館
F-19	日中線記念館	博物館
F-20	飯豊とそばの里センター	博物館
F-22	ギャラリー隠れ里	ギャラリー

■体験（18ヶ所）

F-29	蔵の街ステンドグラス工房	ステンドグラス体験
F-32	そでやま夢交流館	炭焼き体験
F-33	そでやま夢交流館	化石発掘体験
F-34	そでやま夢交流館	ボート体験
F-35	三ノ倉スキー場	スキー場
F-36	磐越西線	SL体験
F-37	グリーン・ツーリズムサポートセンター	喜多方ふれあい農業体験
F-38	福島農場	畜産体験
F-39	そでやま夢交流館	高郷農作業体験
F-40	飯豊とそばの里センター	そば打ち体験
F-41	そでやま夢交流館	そば打ち体験
F-42	創作塾「夢の森」	そば打ち体験
F-43	蒲生そば工房	そば打ち体験
F-48	喜多方ラーメン工場（朝日屋）	喜多方ラーメン体験
F-56	喜多方らーめん本舗	ラーメンの製造工程見学
F-57	おぐにの郷（熊倉公民館雄国分館内）	雄国竹細工体験
F-58	おぐにの郷「蕎麦オーナー」	そば体験
F-59	おぐにの郷（熊倉公民館雄国分館内）	そば打ち体験

■その他（11ヶ所）

O-6	大森温泉夢の森地区	ファーマーズマーケット
O-7	JA会津いいで女性部 熱塩加納支部女性広場	ファーマーズマーケット
O-8	そでやま夢交流館	ファーマーズマーケット
O-9	塩川ふれあい市	ファーマーズマーケット
O-10	COOPとねがわ山産直会	ファーマーズマーケット
O-11	やまと恵即売所	ファーマーズマーケット
O-12	塩川物産館　川番所	観光施設
O-15	ふれあいパーク喜多の郷観光案内所	観光案内所
O-20	山都町観光協会（喜多方市山都総合支所産業課内）	観光案内所
O-21	塩川町観光協会(町企画商工課内)	観光案内所
O-22	高郷村観光協会(村企画商工課内)	観光案内所

■飲食店・宿の集積

E-2	宮古集落周辺のそば	商店群
E-3	一の木地区のそば	商店群
E-4	広野地区のそば	商店群
H-1	熱塩温泉	温泉
H-2	飯豊鉱泉	温泉
H-3	荻野漕艇場周辺のペンション	ペンション

資源21　喜多方田舎体験（グリーン・ツーリズム）

蔵泊・農泊支援と、喜多方の魅力体験プログラム

■実践場所：喜多方市全域
■実践主体：喜多方市農林課グリーン・ツーリズム推進係
■開始時期：2005年

福島県農家経営安定資金（農林漁業体験民宿開設資金）

利率の内訳

基準金利	利子助成	左の負担割合		実質金利
		県	市	
2．7％	2．0％	1．0％	1．0％	0．7％

注）平成１７年１２月１日現在

実践の経緯・概要

平成17年4月旅館業法施行条例が改正されたのを受け、翌月、「地域グリーン・ツーリズム実践団体の一元化を図り、グリーン・ツーリズムの総合窓口機能及び各実践団体の活動を支援して、グリーン・ツーリズムを積極的に伸展させ、農業・農村の持続的発展と地場産業の振興を図る」（喜多方市ホームページより）ことを目的とする喜多方市グリーン・ツーリズムサポートセンターがオープン。平成20年現在、ホームページ「喜多方田舎体験」にて田舎体験を受け入れている49軒のうち、10軒が農泊（蔵泊）を実施している。

農泊（蔵泊）実施への支援：蔵の改修も可能に

農泊の開業にあたっては、喜多方市・福島県から資金の利子助成を受けることができ、これを蔵泊のための蔵の改修にあてることができる。県が2.6％の利率の1％を「福島県農家経営安定資金」として利子補給し、さらに市が1％を「農泊開設資金利子助成事業」として利子補給する。利子補給は資金の融資機関に対し行われ、利用者の負担は0.6％に軽減される（平成17年5月1日現在）。

福島県農家経営安定資金
（農林漁業体験民宿開設資金）
（1）貸付条件
償還期限：
１０年（うち据置３年）以内
（運転資金のみの場合３年以内で据置なし）
資金使途：
農林漁業者が客室等を民宿の経営に必要な客室、厨房、浴室等に改修する場合または面積を増加して客室、浴室、厨房を新設する場合(民宿部分だけが対象。増改築・改修・新築可)
限度額：
５００万円（うち運転資金として利用できるのは３００万円まで）
（2）貸付対象者
農林漁業体験民宿業を行う農林業者

喜多方市「農泊開設資金利子助成事業」
助成条件
・福島県農家経営安定資金・農林漁業体験民宿開設資金の決定を受けていること。
・グリーン・ツーリズムサポートセンターの会員であり、農泊について積極的に取組もうとする農業者等が借受者であること。
・農泊の開業時期について明らかであり、償還期間内の営業が見込まれること。

田舎体験プログラム

（平成20年1月現在）
農村体験、農泊（蔵泊）以外にも、喜多方市内における体験プログラム全般を含み、ホームページ上からグリーン・ツーリズムサポートセンターを通して申し込みができる。
http://www.kitakata-gt.jp/

資源22　喜多方イベント・祭り 一覧

楽しいイベントがいっぱい

■出典等　：JTBF観光資源調査
■調査時期：2006年
■調査主体：都市デザイン研究室

下のイベント一覧を見ればわかるように、喜多方では一年を通じて多くのイベントが開催される。その中でも代表的なイベントを取り上げて紹介する。

喜多方イベント一覧

小荒井初市	1月	旧喜多方市
塩川「初市」開運舟引き祭り	1月	旧塩川町
小田付初市	1月	旧喜多方市
新春そば舌調べ	1月	旧熱塩加納村
喜多方ふるさとそばまつり	2月	旧喜多方市
蔵のまち喜多方冬まつり	2月	旧喜多方市
寒晒しそばまつり	3月	旧山都町
福寿草まつり	3月	旧山都町
下柴・中村の彼岸獅子	3月	旧喜多方市
桜の並木市民ウォーキング	4月	旧喜多方市
桜祭り	4月	旧塩川町
大仏山山開き	4月	旧喜多方市
しだれ桜並木イベント	4月	旧喜多方市
小町のさとまつり	4月	旧高郷村
鳥屋山山開き	4月	旧高郷村
黒森山山開き	5月	旧山都町
ひめさゆり祭り	6月	旧熱塩加納村
蔵のまち喜多方さつきまつり	6月	旧喜多方市
花しょうぶ祭り	6月	旧塩川町
たかさと交流しガッタ	6月	旧高郷村
慶徳稲荷神社田植神事	7月	旧喜多方市
花しょうぶの里塩川健康マラソン大会	7月	旧塩川町
きたかたサウンドチャレンジ予選	7月	旧喜多方市
飯豊山山開き	7月	旧山都町
願成寺の練供養会式	7月	旧喜多方市
おぐにの郷「蕎麦オーナー」	7月	旧喜多方市
日中飯森山沢開き	7月	旧熱塩加納村
日橋川「川の祭典・花火」	7月	旧塩川町
飯豊の集い	7月	旧山都町
喜多方レトロ横丁	8月	旧喜多方市
喜多方発２１世紀シアター	8月	旧喜多方市
北宮諏方神社祭礼	8月	旧喜多方市
久昌寺御開帳	8月	旧山都町
出雲神社祭礼	8月	旧喜多方市
夏まつり花火大会	8月	旧喜多方市
夏まつり会津磐梯山庄助おどり	8月	旧喜多方市
夏まつり太鼓台競演	8月	旧喜多方市
6000人の盆通り	8月	旧山都町
勝福寺御開帳	8月	旧喜多方市
小沼念仏摂取講	8月	旧喜多方市
幽玄の杜に舞う三島神社太々神楽	9月	旧喜多方市
そばの花見と味わう会	9月	旧喜多方市
駒形神社祭礼	9月	旧塩川町
渓流釣り大会	9月	旧山都町
メグスリノキウォーク	１０月	旧塩川町
会津塩川バルーンフェスティバル	１０月	旧塩川町
やまと新そばまつり	１０月	旧山都町
雷神新そばまつり	１０月	旧高郷村
農業まつり	１１月	旧塩川町
農業まつり	１１月	旧熱塩加納村
喜多方ふれあい農業まつり・商工フェア	１１月	旧喜多方市
蔵のまち喜多方健康マラソン大会	１１月	旧喜多方市
たかさと産業文化際	１１月	旧高郷村
新そばまつり	１１月	旧塩川町
新そばまつり	１１月	旧熱塩加納村
三ノ倉スキー場オープン	１２月	旧熱塩加納村
長床絵ろうそく祭り	１２月	旧喜多方市

＊開催月は調査当時のもの

■初市

□設立　昔から
□時期　1月
□場所　ふれあい通り おたづき蔵通り

古くから小荒井と小田付で行われていた市のなごり。小荒井では1月12日、小田付では17日に開催され、縁起物の屋台が並ぶ。

■ひなの蔵めぐり・天神様の蔵めぐり

□設立　2006年
□時期　2月末～3月初め、4月末～5月初め
□場所　ふれあい通り おたづき蔵通り
□主催　「極上の会津」喜多方推進委員会「見たい部会」

桃の節句、端午の節句の合わせて、商店街の店に雛人形や会津天神が並ぶ。珍しいものや蔵の中に眠っていたものもある。(写真は天神様の蔵めぐり)

■レトロ横丁

□設立　2005年
□時期　7月末～8月初め(2日間)
□場所　ふれあい通り付近
□主催　会津喜多方商工会

2005年の会津ディスティネーションキャンペーンをきっかけに始まった。小荒井のふれあい通り商店街を舞台に、昭和30年代を再現する。

■北宮諏訪神社祭礼

□設立　昔から
□時期　8月(2日間)
□場所　諏訪神社周辺

8月の2日、3日に行われる。
多くの太鼓台がまちを練り歩く、喜多方の伝統的な祭である。

■会津喜多方夏祭り

□設立　昔から
□時期　8月
□場所　ふれあい通り

花火大会や子どもまつり囃子会津、磐梯山庄助おどり、会津喜多方蔵太鼓、太鼓台競演などの各種行事が、数日間にわたり盛大に行われる。

■21世紀シアター

□設立　2000年(本格的には2003年)
□時期　8月
□場所　ふれあい通り
□主催　喜多方プラザ自主文化事業推進協議会

蔵や店舗を使って、芝居や音楽、人形劇、大道芸などの公演が開催される。まち全体が大きな文化祭のようになる。

■蔵してる通りフェスティバル

□設立　2004年
□時期　9月
□場所　おたづき蔵通り周辺
□主催　小田付郷町集会

おたづき蔵通りを一日歩行者天国にし、獅子舞・蔵巡りツアー・路上ライブ・太極拳表演・蔵ライトアップ・ふるまい酒などのイベントが行われる。

■蔵の町・アートぶらりー

□設立　2001年
□時期　10月
□場所　市内各地
□主催　蔵のまち・アートぶらりー実行委員会(喜多方市美術館他)

市内にある蔵や店舗、公立の美術館・ギャラリー・工房・博物館などが連携し、一斉に展覧会を開催する。

■喝采喜多方

□設立　2000年
□時期　11月
□場所　ふれあい通り
□主催　会津喜多方YOSAKOI庄助祭り実行委員会

ふれあい通りを歩行者天国にし、多くの参加者が喜多方流「よさこい」を熱く踊る。その他にも出店や野点など、多彩なイベントが繰り広げられる。

資源23

商店街用途調査

今後の商店街のあり方を探るために

■調査時期　:2005年6月
■調査・参加主体　:東京大学都市デザイン研究室

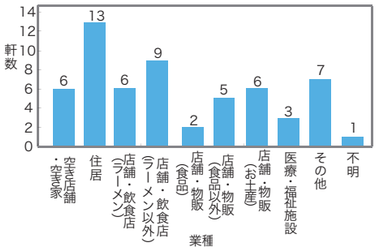


図　市役所通り・沿道建築物１階業種

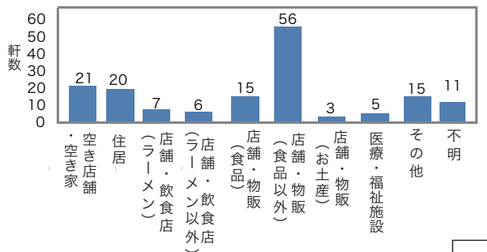


図 ふれあい通り沿道建築物用途

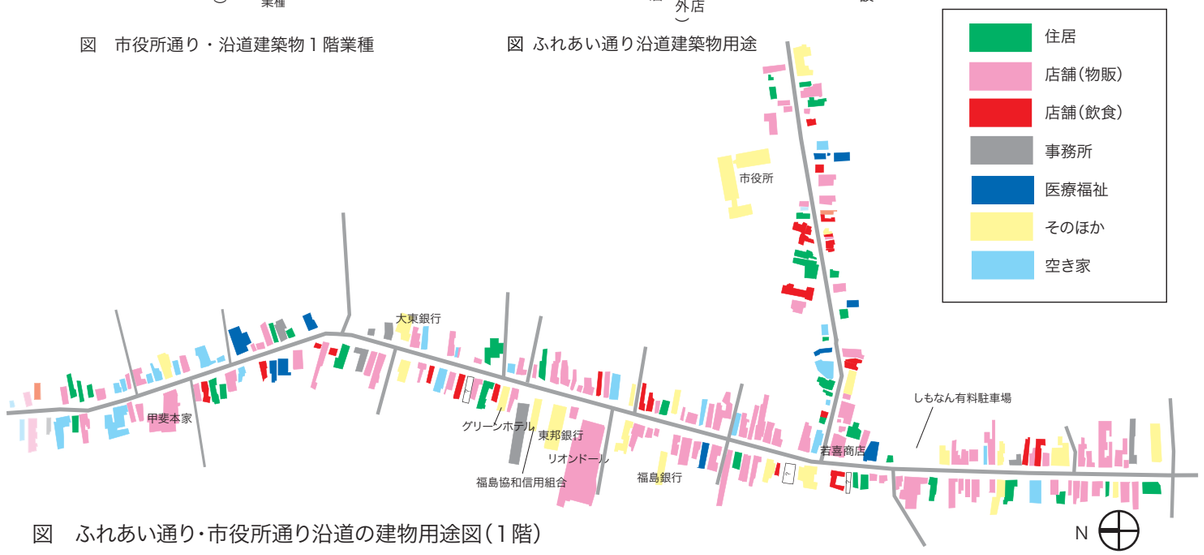


図　ふれあい通り・市役所通り沿道の建物用途図（1階）

商店街の現状把握

多くの地方都市の例に漏れず、喜多方市でも郊外大型店舗の進出、モータリゼーションの進展に伴い、商店街の空洞化が進んでいる。本調査は、2005年6月19～20日にかけて実施された建築物の用途調査である。市役所通り、ふれあい通りの２商店街に関して現地調査を行い、各々の特性把握を目的とした。具体的には、市役所通り、ふれあい通りの各店舗の１階用途を調査し、その分布を調べた。その結果、それぞれの商店街で次のような違い、特徴が見られた。

市役所通り：飲食ストリート

市役所通りの一番の特徴として、店舗の中でも飲食店が多いことが挙げられる。市役所職員の昼食需要を見込んだ店舗や、周囲のラーメン人気店の存在がその理由と考えられる。一方、市役所通り沿いの建築物には「住居（13軒）」「空家・空き店舗（6軒）」も多い。市役所通りは「人が一番多い通り」と言われ、休日には観光客も多いことから、喜多方の顔となる通りであるといえる。沿道建築物の用途も含め、将来的な通りの在り方を検討し、まちのイメージを作り上げる上で重要な通りとして考えていくことが重要である。

ふれあい通り：日用品なら何でも

ふれあい通りの特徴は、店舗、中でも物販が多いことである。データを見る限りでは、「日用品なら何でもそろう」商店街である。加えて、銀行などのサービス、医療福祉施設も充実している。これだけの用途がそろっているのは、喜多方ではふれあい通り商店街の他にはないと思われ、喜多方市民の生活にとって欠かせない商店街であるといえる。しかし、日々の暮らしは郊外型大型店舗に支えられているといわれていることは事実である。商店の商品自体の魅力向上など、消費者動向を踏まえた品揃えの努力などが必要であろう。また、現在は空き店舗も21軒と多いが、これらの活用を考える必要もある。

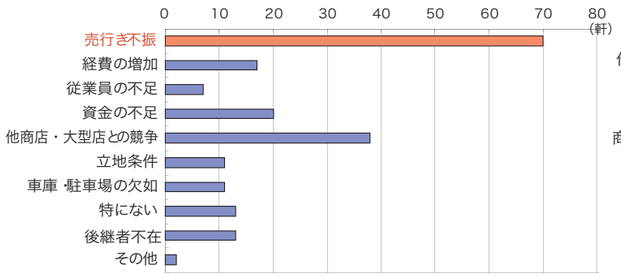
資源24

商店街意向調査

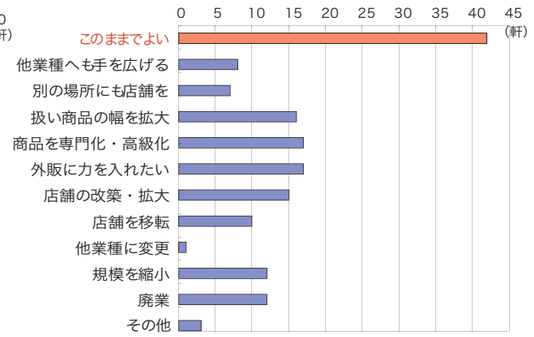
現状把握と将来の展望を聞く

■調査時期：2005年12月～2006年2月
■調査・参加主体：東京大学都市デザイン研究室

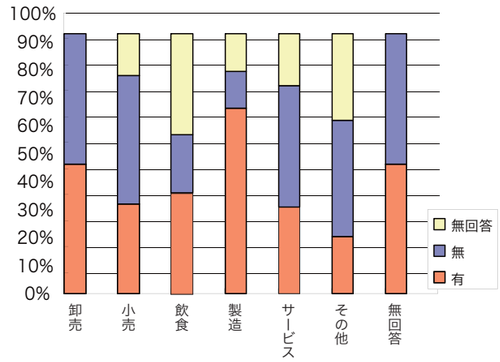
現在抱えている問題は



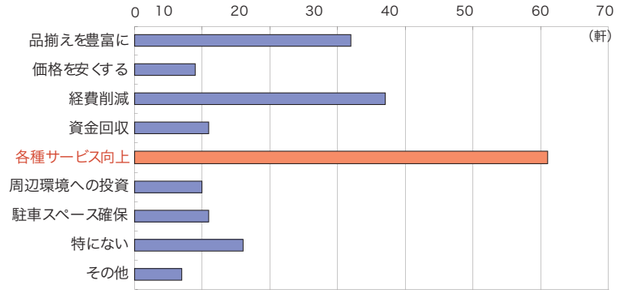
今後の経営方針について



業種と後継者の見込みの有無の関係



今後特に強化したい経営策



製造業への後継者の増加

町の活性化に重要な役割を果たす商業従事者である商店主が、実際どのように現状を把握しているのかを明らかにし、今後の商業用途における方向性を模索するため、アンケート調査を行った。有効回答は小田付・駅前大通り・駅前商店街合わせて137得られた。調査内容は、商店の経営内容、経営・店舗形態、経営状況、今後の経営意思に関するものだった。

喜多方を離れる人口の多さが危惧されているが、製造業の後継者見込みは70軒以上と、危機的な状況ではない。小売業・サービス業については、契約店舗も含まれるため、継続の必要がなく、後継者見込みは無しの割合が高い。

売行き不振をサービスでカバー

最も多い問題として挙げられたのが「売れ行き不振」（70軒）、次いで「他商店・大型店との競争」（38軒）、資金の不足（20軒）と続く。ロードサイドへ進出している大型店に客を取られ、客数が減少している状況が見て取れる。しかし今後の経営方針は「このままでよい」が40％以上を占め、今後強化したい経営方針としては「各種サービスの向上」（60％以上）となり、他の店舗との差別化を図ることで今後の経営継続へとつなげたい意向が見られる。多くの場合が「自宅・店舗所有型」であるため、今後商売をたたむ場合にも、他者への賃貸意思は低いようだ。

地元客との関係

５年前と比較して、地元客は減っている（下図）。観光客も減少していると答えた店舗が多くある現在、サービスの向上など、地元ならではの店づくりが必要とされている。経営者の高齢化と同時に店舗の老朽化も予想され、今後の後継に伴う上物の建て替えやサービス転換の配慮が必要である。

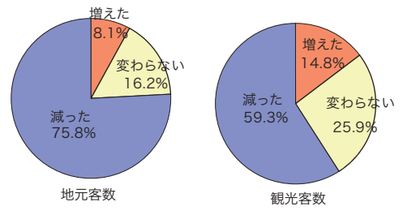


図 5年前と比較した客数の変化

資源25

減少し続ける人口ー住み続けるためのまちづくりの必要性

喜多方市の人口

■出典　　：喜多方市役所HP
【福島県の推計人口】福島県現住人口調査
■調査時期　　：2007年
■調査・参加主体　：喜多方市

この10年間、人口が微減し続けている喜多方。その背景には若者の就職難があり、そして喜多方は現在、高齢化進展の問題に直面している。数値データと高校を対象に行った意識調査から、中心市街地衰退の構図を読み解く。

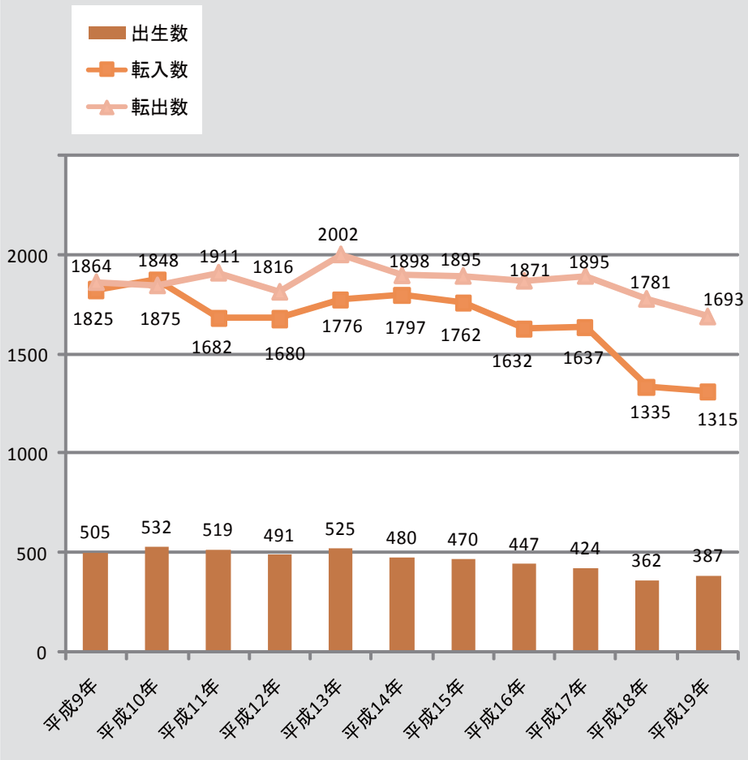


図1. 喜多方市の人口動態（平成9～17年は合併前旧5市町村の合計値）

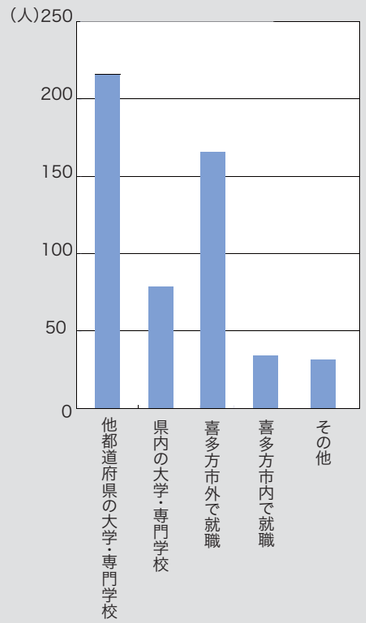


図2. 高校卒業後の進路希望（回答者数532人）

「自然が多い住み良い町」ー住みたい人を支えるシステムの必要

減少する人口

平成 18 年に喜多方市、塩川町、山都町、熱塩加納村、高郷村の１市２町２村の５市町村が合併し、現在の喜多方市となった。現在の人口は 54876 人（平成 19 年７月）。しかし、社会動態を見てみると、平成９年～ 19 年６月時点まで、人口は継続的に減少している。特に平成 11 年を境に毎年 100 人以上が喜多方市を去っている。主な要因としては、喜多方の高校生が卒業後に就職・進学などで市外へ出ることが挙げられる。

市外への転出のほか、出産による人口も減少しつつある。平成 8 年には 515 人の新生児が生まれたが、18 年には 362 人にまで落ち込んでいる。

高校生が抱く喜多方への不安と愛着

平成 17 年に行われた高校生の意識調査では、約 8 割が卒業時点で喜多方市を離れるつもりでいることが分かる。将来的に喜多方での就職を希望する声もあるものの、「就職する場が限られる」「希望職種がない」等、雇用に対する不安のほか、「戻って来たいと思うほどの魅力が無い」「何も無く不便」といった声も聞かれる。

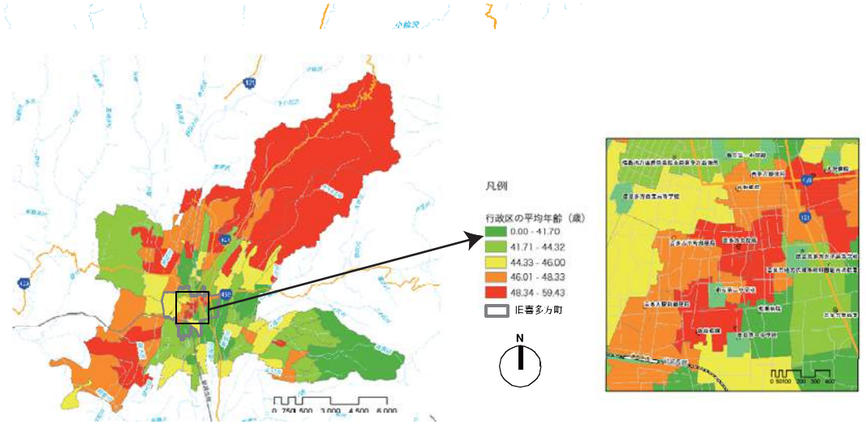
それでも喜多方で就職したいと考えている高校生も多く居るようである。その理由としては「生まれ育った町だから」という故郷意識の他、「自然が多く落ち着き、住みやすいから」など住環境の良さを挙げる声もあった。将来的には喜多方に戻って来たいと思っている人も約6割となっている。

喜多方で住み続けるために

このような声に応えるためにも、企業の誘致・地元企業への事業支援などの雇用対策が必要だろう。その他、地元ならではのものを生かした企業の立ち上げ支援など、若者の企業支援も考えられる。

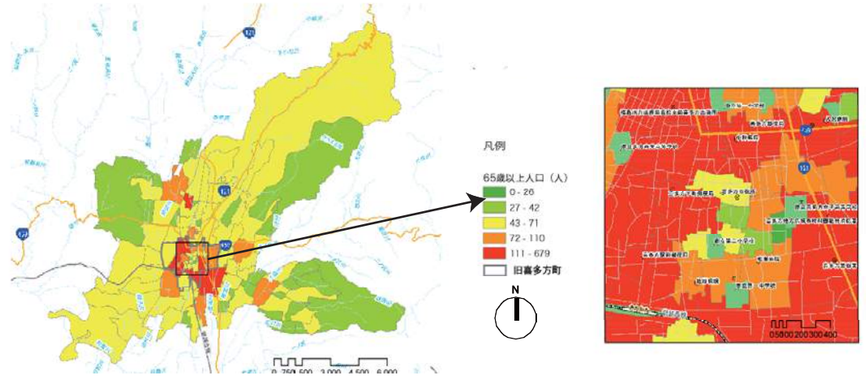
また、「故郷で子供を生みたい」と思えるような環境整備を行うことも重要だろう。自然の多さ、多くの高齢者＝人生の先輩達が居ることなど、喜多方には子育てについてアピール出来るポイントが多くある。喜多方で生まれた子供たちが成長し、やがて自身の子供を喜多方で育てる。ライフサイクルの様々な段階を支える計画を立てることも、人口減少を抑える一助になるのではないだろうか。

■行政区別平均年齢　旧喜多方市における行政区別平均年齢の5段階表示（平成12年国勢調査をもとに作成）



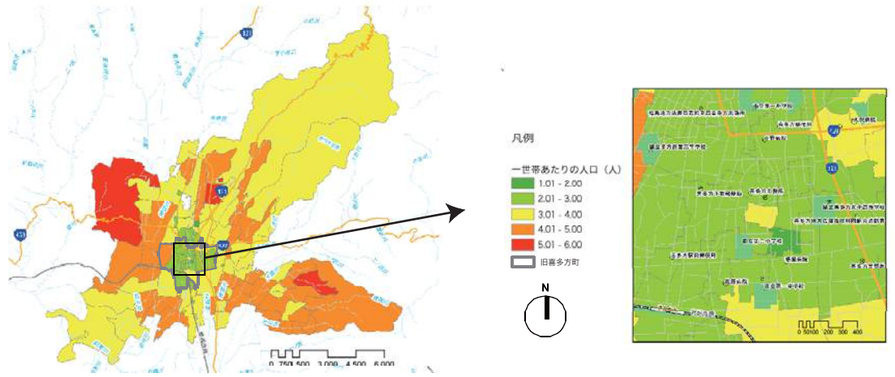
平成 12 年度調査を基にした地区別平均年齢の 5 段階表示図。周辺の山間部とともに、まちなかに平均年齢の高い地区が集中していることがわかる。

■65歳以上人口の行政区別分布　旧喜多方市における65歳以上人口の行政区別分布（平成12年国勢調査をもとに作成）



上図からさらに、65 歳以上人口を地区ごとに 5 段階で表示した。まちなかに多くの高齢者が暮らしている現状が読み取れる。

■行政区別平均世帯人員　旧喜多方市における行政区別平均世帯人員の5段階表示（平成12年国勢調査をもとに作成）



地区別の平均世帯人員を 5 段階で示す。喜多方市の平均世帯人員は年々減少しているが、とりわけまちなかに世帯人員の少ない地区が集中しており、高齢者の単独世帯が多いことがうかがえる。

資源26

まちづくり・蔵づくり関係者へのヒアリング

喜多方のまちづくり、蔵への思いを語る

■調査時期　　：2007年
■調査・参加主体　：東大都市デザイン研究室

熱きキタカタ、ここにあり

これは、2007年に、くらはく（蔵のまちづくり博覧会）に先立ち喜多方や蔵の魅力を多様な観点から知るために、喜多方でのまちづくり活動や、蔵づくり、地場産業、観光などまちを支える様々な活動に関わっている方を対象として、「自分にとっての蔵・まち」と、それらの将来に対する思いをヒアリングした概要である。

珈琲店経営 樟山淳一さん

目標は、かっこいいおたづき蔵通りにあるかっこいい珈琲豆屋。

Q. 自分にとっての喜多方
A. でかいお城。
自分は村民だけど、楽しみ、面白み、期待度10、満足度10にしたい。横のつながりが欲しい。連絡網を土台に連鎖反応がある仕組み。1人で考えることが1なら、 2人なら3、3人なら9、というように。
現状把握するために子供のうちから興味津々になるシステムづくりが重要。

Q. 蔵について
A. 蔵は昔の古い空間と今の子供ももちろん、今ここに生きている人たちの文化をつなぎ合わせるようなシステムを作るうえで必ず必要な一つ。

JR喜多方駅駅長 溝井弘さん

喜多方は寒い土地だけれども温かい場所。

Q. 自分にとっての喜多方
A. 喜多方ってすごくいい町だと思います。
東北地方特有の暖かさがある。人、人対人、人に対する温かさがある町だなって思う。
雪の降る東北地方っていうのは人恋しいというか、誰でもお友達になれる。なじめる。
人柄も良いし。

Q.　今後の喜多方のまちづくりについて
A.　喜多方のまちづくりは、人の良さを前面に押し出して。
自分から押し売りではないのだけれど、いいところがありますよ、というのを、よその人にも知っていただく。

河京社長　佐藤富次郎さん

蔵を回遊する中で、驚くものがどれだけ提供できるかどうか。

Q.　今後の喜多方のまちづくりについて
A.　もっと徹底して蔵をだして、一つ一つの店も古いものにこだわって磨き上げる。その中でお客さんもくれば、中の商品も変わってくる。お客さんが来てくれるようなびっくり現象や感動する場面を作ってあげないとお客さんは動かない。
それがないと、これくらいの蔵はうちの街にもあるよなってことを言われかねない。
この町に来てよかったなと思うまちづくりを。
まちづくりではもう食べること、喜多方ラーメンを充実させていくことは出来る。古いものは壊さないで、蔵はつぶさないで磨こうと。そういったシンボリックなものを残す努力を。

NPOまちづくり喜多方　江花圭司さん

このまちの良さは、だめと言わない「よかんべ」の精神。

Q. 自分にとっての喜多方
A. ベロタクシーの仕事は、お客さんにまちの魅力を伝える自己満足感がある。
ここまでドライバーみんなが知っているのだから、お客さんに満足がもらえる。それで自分も自己満足の世界に陶酔できる。
俺ってすごいんだ。その「俺ってすごいんだ」というのが大事で、それが自分の街の誇りにつながっていく。

Q.　今後の喜多方のまちづくりについて
A.　喜多方は根本的な生活の美しさ、文化の美しさが残っている。
景観的に早くやっていかないと、何でもありな街になってしまう。

建築士　荒井裕人さん

蔵直しの仕事だったら全て私に持ってきなさい、って本当は言いたい。

Q. 今後の喜多方の蔵について
A. やっぱり蔵をいじるって言う仕事が好きなので、蔵は壊さずにずっと残してほしいと思います。壁の場合、土壁とかぼろぼろになっていたり、漆喰も汚れていたとしても、私たちは現状のままにしておきたいのです。新しくするのは簡単なのです。だから昔の材は手をつけないで残そうと思っています。歴史でしょう、やっぱり汚れでも壊れでも。きれいにしてしまったらそれで終わってしまいます。
喜多方の蔵が結局福島県会津の宝だったら日本の宝ともなると思うし、また世界の宝ともなるかもしれないので、やっぱり維持はしていってほしいと思います。

漆器職人　佐藤達夫さん

蔵はやっぱり漆の仕事に欠かせない場所。

Q. 自分にとっての喜多方の蔵
A.　うちみたく蔵を最大限利用していこうという人にとっては蔵は欠かせないもの。蔵の中は湿度も保たれてるし蔵の中って保存するには最高の場所。
漆器も出来上がったものを寝かしておくのだけども、そのためにも蔵はいい。

Q. 今後の喜多方の蔵について
A.　蔵もやっぱり時代に合った進化をしないと残っていかないんじゃないかなと思う。
歴史的遺産なのかとも思うんだけども、現代の生活にあった使い方をすれば残ってくと思う。

ギャラリー経営者　山形洋一さん

蔵の中で展示するって不思議な魅力があるんですよね。

Q. 自分にとっての喜多方
A.　喜多方ってとてもいい町だと思います。人間がいいですね。安心して暮らせますよね。いい景色があるし面白い人も沢山いる。

Q. 今後の喜多方の蔵について
A.　アートと蔵って合いますね。蔵に展示しただけで、蔵も生きるしアートも生きる。それはいい蔵の生かし方だと思う。大作を手がけている人は沢山作品がたまっているのに発表の機会がない。その点で蔵はいいと思う。下手な絵をやると蔵に負けるんです、蔵のつくりのほうが立派で。でも、蔵に負けない作品だと蔵ならではの展覧会ができる。そういうことを蔵のオーナーに一度味わってほしい。

あづま旅館女将　斉藤百合子さん

まちづくりは人づくり。横のつながりが重要。

Q. 今後の喜多方の蔵について
A.　蔵を元気にしないと喜多方のよさはなくなる気がします。蔵はどこにでもありませんので。学習塾に使うような生かし方をすれば、「何か動いてるな」って言う雰囲気を発信できる気が。蔵を利用しながらの人づくりが、喜多方にとって大事だと思います。

Q.　自分にとっての喜多方
A.　喜多方の魅力は、やっぱり飯豊山。飯豊山の懐に抱かれてるっていう感じがした。飯豊山は万年雪なので、みずみずしさはすごく感じました。実際伏流水が町のあちこちにあるので、地下水で生活できるのを実感できるところがよかったです。

喜多方のまちづくり、蔵への想いを語る

まちづくり・蔵づくり関係者へのヒアリング

農家　小林芳正さん

本物の農業を営まなければ、誇りとか生きがいは得られない。

Q.自分にとっての喜多方地方と農業
A. 熱塩加納はとても自然の豊かな地域。その中で食べた人が感動を覚えるような野菜や米を作ろうと、そして作っている人が誇りを持てるような農業を、ということで有機農業を選んでやってきた。簡単にはいかないけれど、それでも追い求めながらやって行かないといけないと思う。

Q. 今後の喜多方について
A. 蔵は昔の古い空間と、今ここに生きてる人たちの文化をつなぎ合わせるようなシステムを作るうえで、必ず必要な一つ。これからは、農業も含めて、自分の住んでる地域を子供たち孫たちに、たしかな誇りをもって手渡せるような地域づくりが大事だと思っている。

まちづくり推進課　五十嵐哲矢さん

推進課の仕事は、市民と一緒になってまちづくりを考えていくこと。

Q. まちづくり推進課の仕事は
A. 景観づくりや蔵の魅力を創出すること。蔵を、そして喜多方にあった情景をいい形で残していくためにはどうしたらいいかを考えること。それが推進課の大きな仕事です。

Q.今後の喜多方、まちづくりについて
景観を考えながらまちづくりをして、イベントが複合的にできるようになれば、住んで楽しいまちになるんじゃないかって思いを持ってやっています。まちづくりを進める上では、市民の方と歩調を合わせることが重要。それぞれの立場を尊重しあえば、行政も市民も、みんなで一緒の目標に向かって前進できるだろうと思っています。

喜多方商業高校　岸孝容さん

学校の外でいろんな人と関わることで、何かつかめるのかなって気がする。

Q. まちに関わろうと思ったきっかけは
A. 喜多方商業高校の特徴は、やっぱり商店街がすごい近くにあるってこと。あと、喜多方のまちはすごく元気があるって感じた。
それで、地域の人となにかやれたらなって思ったのが、まちにでたきっかけです。

Q. 高校生とまちづくりについて
A. 去年まちづくりに参加してみて、最初は手さぐりだった生徒たちも回を重ねるごと自信をつけたみたいです。それで学んだのが、まちって、そこに生活してく人たちが作るんだっていうこと。こういう活動の成果っていうのは、将来、子供たちが大人になったときに、まちに生かされていくのかなって思います。

観光ボランティア　宮城マツ子さん

お客様に楽しんでいただきたいし、自分も一緒に楽しみたい。

Q. ボランティアをはじめたきっかけは
A. 観光ボランティアをはじめたのは、何か外と関わりたいと思ったからと、喜多方に住んでいるのに、何も喜多方を知らなかったから。それでやってみようと思いました。
Q. ボランティアのやりがい
A. お客様から、楽しかったよ、という声を聞いたときはやっぱり嬉しいです。

Q. 今後の喜多方のまちづくりについて
まちづくりって言っても、最初はよくわからなかった。でも、とにかくみんなでなんかやっていこう。っていうそれだけのこと。こういうふうに参加してることがまちづくりのひとつなんだって、やっと思えるようになって来ましたね。

大和川酒造　佐藤陽子さん

ここで私が教えていただいたことは、ひととおり次の代に伝えたい。

Q.伝統行事について
A. 酒屋は伝統的な行事を大切にしているので、歳時記っていわれる年中行事は、ずっとやってきてますね。
やめちゃうのは簡単だけど、教えてもらったことはやっぱり私の代で消してしまうのは申し訳ないなって思っています。

Q. これからの喜多方のまちづくり
A. 喜多方には、人との関わりあいながらみんなでやっていくっていうのが残っていて。これって大切なことだと思う。大事な遺産、文化的な遺産もあるので、そういうことに関わりあいながら、次の代にもつないでいけるような役目をしていけたらって、そんなふうな気持ちですね。

井上合名会社金忠　井上忠蔵さん

地場で取れたものを加工して、ここでしかないってのをつくりたい。

Q. これからの醸造業
A.ずっと醸造業でやってきて、やっぱり次の世代まで継続したいなっていうのはありますね。それで、味噌醤油を単体で売るだけじゃなくて、なにか地元産と融合したものをやりたいなと。そうしないと生き残れないかなとも思います。

Q. これからの喜多方のまちづくり
A. まちづくりって、なかなかすぐにできるってことじゃないし、一人の力じゃできないと思う。それぞれの地区で、リーダーになる人たちと地区の人たちとがうまくコミュニケーションとってやっていかないと。関心を持っていない人にも関心を持ってもらう努力も大切なんじゃないかな。

左官　原昌昭さん

喜多方の左官屋なら当たり前のように蔵の仕事ができます。

Q. 左官の仕事について
A.蔵を建てる、直すっていうのも、喜多方では一般的な左官の仕事なんです。
私は古い難しい仕事が好きだから、蔵を手がけたら負けたくない。あいつに任せた蔵はかっこよく仕上がるっていうふうに言われたいですね。

Q. 喜多方の蔵とまちづくりについて
A. まちづくりに蔵を利用するんというよりも、まちづくりをする上で蔵も活用できる、そういうスタンスが自然なんじゃないかな。
百年前の建物を今でも当たり前のように使ってる、そういう自然の風景を見に来てもらうっていうまちづくりがいいのかなって思います。

若喜商店　冠木紳一郎さん

なんとか自分たちで蔵を守り、次の世代につなげる工夫がしたい。

Q.自分にとっての蔵
A. 代々このお店と蔵を守ってきた先代っていうのは、店の経営やまちづくりに対して前向きに関わってきた。
なんとかその遺産を次の世代に持って行きたいな、と思っています。
お店の基本は味噌醤油、醸造業ですね。
その分野を大事にしつつ、蔵を生かしてうちらしい商品を売って行きたいです。ラーメンで有名な喜多方ですが、蔵にまつわることを大切にしていきたい。

Q. これからの喜多方のまちづくり
A.主役ではないにしても蔵の部分を観光客の方に見せたりしていけば、より広域交流の幅が広がるんじゃないか、と思っています。

資源27

「無尽」と「結」

喜多方を支える助成システムの歴史

■実施場所　：会津地方
■開始時期　：鎌倉時代

無尽（むじん）とは

一定の口数と給付金額を定め、加入者を集めて定期に掛け金を払い込ませ、抽選や入札により金品を給付すること。頼母子講(たのもしこう)。（大辞林より）古くは鎌倉時代に始まった。

現在の無尽

無尽は山梨県甲府市、愛媛県今治市、会津若松市で現在も盛んに行われている。実態は無尽の名を借りた小規模な集まりとして、知人、友人、親戚などの相互金融援助の会となっている。

何人かで講、無尽講をつくり、月毎の掛け金を決め、利率を競って一番高い利の条件を出したものが借りる、というのが本来の姿。毎月１人2〜3個、多い人は10個以上の無尽を掛け持ちして資金ぐりをしている。夜の無尽が多く、お酒を飲みながらお金を出しあって落札者を決めるのだが、講によって掛金の額やルールも違い、利率を競るのではなく、低利率で順番に借りるものや、借りた月もしくは返す月の宴会代を利の変わりに全額払うものなど様々である。定額5000円の掛け金を毎月払って積み立て、飲み食いや旅行などに使うものも。昔は旦那様方の無尽では一回の掛け金が10万、などというものもあったようだ。中には1人何十万円〜何百万円の無尽を行い、「誰それが無尽を落札してから夜逃げをした」との実話が聞かれたことも。でも、そうなった場合はたいがい仲間内でのことなので泣き寝入りが多い。ゆえに、無尽のグループに入る時は誰でもが入れるものではなく、確かな人の紹介がないとなかなか仲間には入れてもらえない。

喜多方の無尽

商人の方々によるもの、または一族が集まる、屋号や家紋名の講を持つもの（例：岩田家一族の笹の会、屋号笹屋から）、ネズミ年生まれの会などが存在している。農村部や職人達が集まる講もある。旦那様方以外の人の無尽は昔から、低利で順番に借りるものが多かったようだ。回数も月毎や年何回、と決めているものもある。また何かの目的で立てる講もあったようで、磐越西線を敷く時の寄付の一種にも似たようなものがあったかもしれないという。

結（ゆい）とは

田植えや屋根替え、味噌搗(みそつ)きなど、一時に多くの労働力を要する仕事をする際に、互いに人手を貸し合うこと（大辞林より）。つまり、人と人が結びつき、助け合って生きていく生活様式のことである。

現代の農家は兼業化が進み、職業も多様化しているが、もともとは専業農家の集まりだった。そこでは同じ水を使い、並んだ田畑を耕し、災害や不幸のときに助け合うことで、お互いの仕事と暮らしを守ってきた。そういう地縁と同時に、農村では親戚同士が多いため、いわゆる血縁が濃い。そういう農村では自ずと人間同士の結びつきが強くなっていった。

農漁に結が必要だったもう１つの理由は、労働力の集約が求められたことにある。田植えや稲刈り、漁労などは家族単位では難しい大労働で、親類や近隣集団で労力を交換する必要があった。自分の家でやってもらったら、今度は労働で恩を返す、このことを結返しというが、それは母屋の建築や屋根の葺き替えでも同じことである。ワイワイガヤガヤと賑やかな作業風景を想像するが、機械化が進んだ戦後は機械作業を返す行為が結返しとなったため、複雑なイメージを持っている農家も少なくないようだ。

3章　喜多方まちづくりの軌跡

近年、喜多方のまちづくりは新たな局面をみせている。「蔵の会」の結成を皮切りに、東京大学都市デザイン研究室の調査開始から７年、その間に、研究室・地域・行政とともに、様々な調査や活動が繰り広げられた。同時に、地域のまちづくり活動も活発に行われている。蔵の会による蔵の保全活用の取組み、ふれあい通り等の商店街を中心とした活動、南町には「会津北方小田付郷町衆会」が発足し、独自の地域活動を広げている。まちには、ベロタクシーが走り、運営母体であったNPO団体は、「まちづくり喜多方」としてまちづくり支援を視野に入れている。喜多方市にも、2007年4月「まちづくり推進課」が創設され、まちづくりを戦略的に実行する体制も見据えている。こうした喜多方まちづくりが積み重ねてきた成果を、改めて整理してみる。

実践01 喜多方まちづくり活動の展開

まちづくり活動の積み重ねと発展の軌跡

「蔵ずまいのまち」の「発見」

金田実氏が喜多方にて、蔵ずまいの文化の魅力を発信する写真展を開催したのが1972年（1974年には東京でも開催）。1975年には、NHK新日本紀行にて『蔵ずまいのまち』として紹介されるなど、喜多方の蔵が全国に知れ渡ってから三十有余年が経過した。その後、1979年には、伝建調査も実施され（81年に杉山・三津谷も調査）、蔵の価値が明らかになったのが70年代である。80年代には、「歴みち事業」や「HOPE計画」等の事業を通して、「蔵」の価値再生をハードを通して実現することが試みられてきた。同時に、蔵とともにラーメン人気も全国区となり、観光客も急増するにつれ、生活の中に息づいていた「蔵のまちづくり」に対する想いも少しずつ陰りを見せ始めていた。

着実に広がるまちづくり活動の息吹

再び蔵のまちづくりが行われたのは、90年代後半からである。1995年に有志により結成された「蔵の会」による、蔵の保全活用の取組みに始まり、2001年以降、東京大学都市デザイン研究室が喜多方に調査に訪れてからは、研究室・地域・行政（県・市）が協働しながら、様々な調査や活動を繰り広げてゆくこととなる。

蔵の資源について話し合う「蔵のフォーラム」（2001）、ふれあい通り等を舞台に行われた「蔵みっせ」（2002）による資源を活かした賑わいづくり、まちづくり団体「会津北方小田付郷町衆会」の発足（2003）と、寄合所・まちづくり塾活動・のれん実験などの独自の地域活動、東北のまちづくり団体が一同に介する「まちづくり学会」（2004-05）、小中学生とともに調査する蔵のまちづくり教育である「蔵探検」（2003）や「蔵調査」（2006）等、多主体によるまちづくり活動が展開された。同時に、あいづデスキャン（2005）やレトロ横丁（2005-）等の各種イベントも実施され、街の活気も育まれた。一方、駅前通りやふれあい通り、市役所通り等の都市空間再生事業に向け、民官学が検討しあう場面も訪れた。

様々なまちづくりの主体が喜多方のあり方について議論する「まちづくり研究会」（2005）を母体に設立された「蔵のまちづくり協議会」（2006）は、民・官・学各種のまちづくり団体が一同に介してまちづくりの議論や活動を行う場である。そして、2007年には「くらはく（蔵のまちづくり博覧会）」が開催され、まとまりある喜多方のまちづくりに向けての取組みが試みられたのである。

喜多方・まちづくり活動の歴史
（2000年以前）

■1972　金田実氏の蔵の写真展

1960年代から進んだモータリゼーションにより、喜多方でも蔵がどんどん取り壊されていった。そのような中、喜多方の文化遺産を後世に残そうと、蔵を撮り続けていたのが地元写真家の金田実氏である。金田氏の蔵の写真展は1972年に喜多方で、その翌年に会津若松、翌々年には東京で開催されることとなり、回を重ねる毎に有名になった。

■1975　NHK新日本紀行放送

1975年、NHKの「新日本紀行」で、「蔵ずまいのまち喜多方」が紹介されたことで、喜多方を訪れる観光客が急増した。

■1979　伝建調査実施

喜多方まちなかでは、特に市街地内の小荒井地区（中央通り沿い）、小田付地区（小田付蔵通り沿い）に蔵造り商家の町並みが形成されており、1979年に伝統的建造物群保存調査が行われた。周辺集落では、三津谷集落の煉瓦蔵群、杉山集落の農家蔵群などが残り、1981年に伝統的建造物群保存地区調査が行われた。

■1985　歴みち事業開始

喜多方市は1985年「歴史的地区環境整備街路事業」に取りかかった。整備したのは、大和川酒造前の越後裏街道と、甲斐本店の南側の小道であり、道路美装化が行われた。

■1987　HOPE計画策定

1987年度には「ＨＯＰＥ計画」を策定して、風土に根ざした建築づくりを奨励する。1988年には「蔵移築再生事業」を立ち上げ、「まちづくり特別対策事業」（自治省）の補助金を受け「喜多方蔵の里」の建設・移築が始まった（1993年）。

■1995　蔵の会発足

蔵主有志によって蔵の会が結成された。民間で蔵を中心に地域資源を守ろうとする団体として、一品会例会やフォーラム、蔵の調査や蔵の見学会などを実施してきた。また、喜多方蔵のまちづくり協議会の主な構成員になるなど、まちづくり活動に大きく貢献している。

1970～

- 民　● 金田氏の蔵の写真展(1972)
- 民　● NHK新日本紀行放送(1975)「蔵ずまいのまち喜多方」
- 官　● 伝統的建造物群保存地区調査(1979)

1980～

- 官　● 歴みち事業開始(1985)
- ● 喜多方ラーメンのブーム(1985～)
- 官・学　● HOPE計画策定(1987)
- 官　● 喜多方市蔵保存補助金交付要綱(1989)

1990～

- 官・民　● 蔵の里移築(1993)
- 民　● 蔵の会結成(1995)

移築された蔵の里

喜多方・まちづくり活動の歴史
（2000年以降）

■2001　蔵のフォーラム

東京大学都市デザイン研究室が、文化庁・（財）ナショナルトラストから依頼を受け、喜多方の歴史的建造物の保存・活用状況などを含む調査を実施した。その報告としての「喜多方観光まちづくり提案」をお披露目する「蔵のフォーラム」が行われた。

■2002　蔵みっせ

この年には、「蔵みっせ」が開催された。ふれあい通り商店街を中心に、蔵の会・東大の共同開催によるまちなか空間への提案を基にしたイベントである。普段は中を見られない蔵を開放し、蔵の豊かさ、空間の魅力の背後にある豊かな文化を住む人や訪れる人に実感してもらうという趣旨であった。また、他の地区に先駆けて駅前通りの景観協定が結ばれ、景観整備への意識が向けられ始めた。

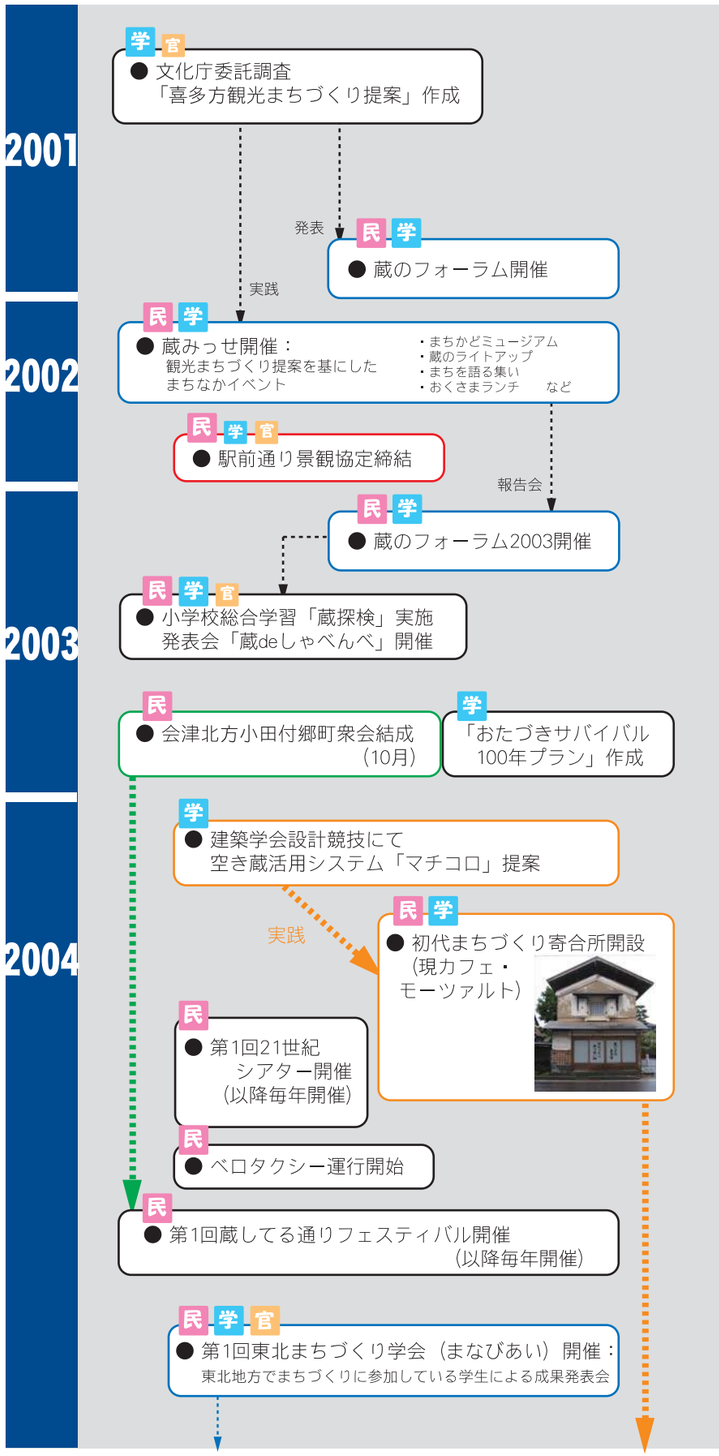
■2003　小田付郷町衆会の結成

この年には、蔵みっせの報告会として「蔵のフォーラム2003」が開催された。また、小学校総合学習「蔵探検」が実施され、その発表会として「蔵deしゃべんべ」を開催するなど、小学校を巻き込んだ動きが実施された。小田付ではまちづくり団体で「会津北方小田付郷町衆会」が結成され、小田付でのまちづくり機運が高まるとともに、東大からは「おたづきサバイバル100年プラン」が出された。

■2004　地域イベントの開催

２００４年には、「21世紀シアター」、「蔵してる通りフェスティバル」などの地域イベントが行われ、まちづくりの機運が高まった。

またこの年には、東大都市デザイン研究室の現地拠点でもある「まちづくり寄合所」が立ち上げられた。これは、空き蔵を学生と地域がともにまちづくり寄合所として実験的に利用しながら今後の活用への展開を図るものである。初代寄合所はその後「カフェ・モーツァルト」に転用され、新たな寄合所を設けるなど、まちのストックを生かしたまちづくりが展開されている。



■2005　まちづくり研究会の発足

2005年には喜多方まちづくり研究会が開催され、次年に発足される喜多方蔵のまちづくり協議会のきっかけとなる。

■2005　「レトロ横丁」の実施

さらに同年には、ＪＲによるあいづデスティネーションキャンペーンに合わせて商店街イベント「レトロ横丁」が開催されるなど、喜多方の魅力を打ち出す動きが加速する。

■2006　まちづくり塾、道路整備事業の進展

2006年には、小田付郷町衆会と喜多方商業高校、東大の連携による「まちづくり塾」が行われた。また、喜多方市における観光戦略が検討され、前年度からのデスティネーションキャンペーンと相まって、喜多方の魅力発信に向けて本格的な動きが始まった。

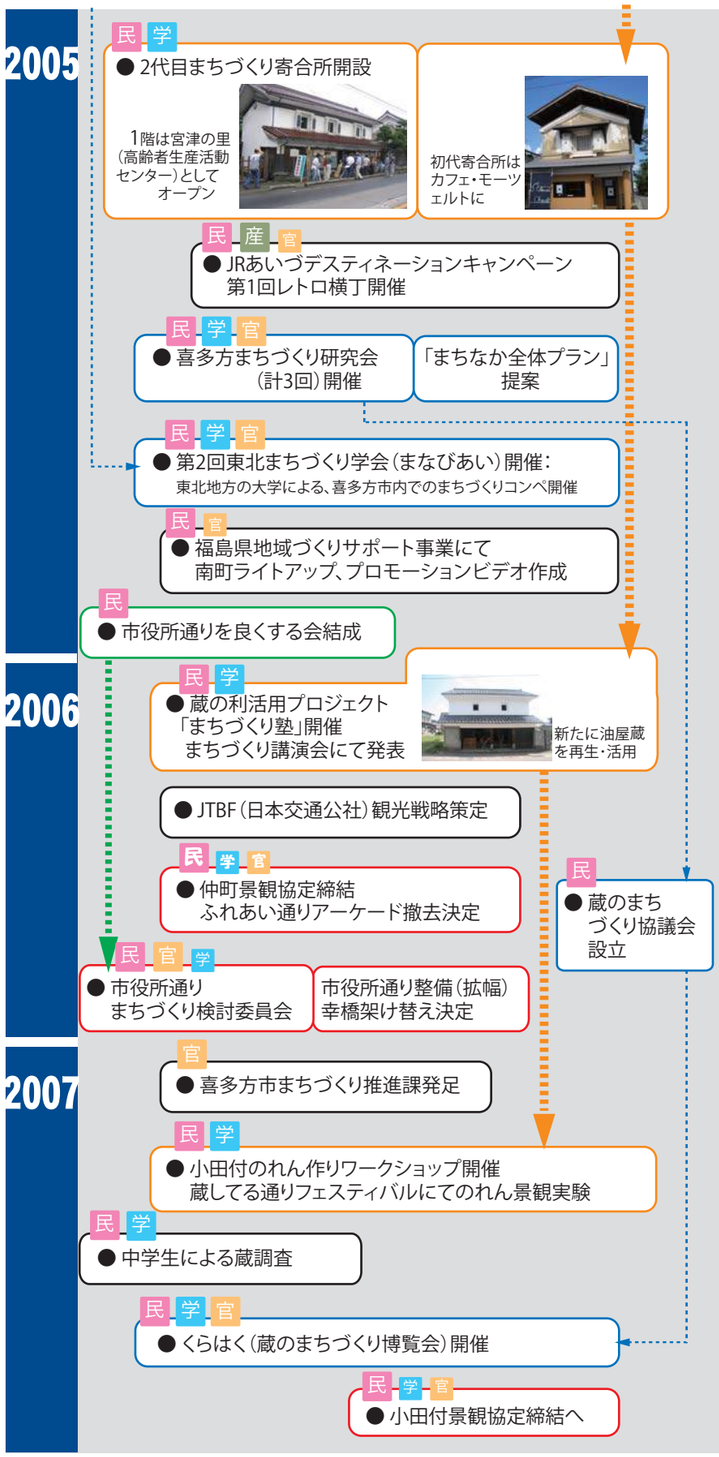
一方、仲町では景観協定が締結され、ふれあい通りの蔵を隠しているアーケード撤去が決まるなど、景観保全に向けて大きな一歩を踏み出した。市役所通り、駅前、ふれあい通りなど相次ぐ道路整備事業が決定し、街並みとまちづくりのあり方が議論された。

■2007　まちづくり推進課、NPOの設立

中学生による蔵調査、小田付のれんづくりワークショップの開催など、さまざまな動きがあった２００７年。中でも、一連のまちづくり活動の流れを受けて市側でまちづくり推進課が発足し、行政でのまちづくり活動の窓口ができたことは重要な成果である。また、これまで活発に動いてきた団体を元にNPOまちづくり喜多方が設立され、民間側で動いてきたまちづくり活動の団体がよりしっかりした母体を持ったことで、今後の動きの促進が期待されることとなった。

■2007　蔵のまちづくり協議会とくらはくの開催

１０月には東大都市デザイン研究室がかかわり始めてからの７年間の総括として、「蔵のまちづくり博覧会（くらはく）」が開催された。３つのメイン会場での展示、まちかどでの社会実験、まちづくり語り合い・フォーラムなど、地元住民・行政・大学の３者の協働体制により、多くの内容を含むものだった。



実践02 蔵みっせーまちかどミュージアム

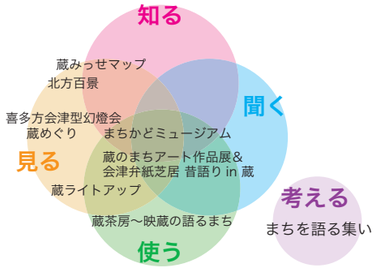
まちじゅうで文化に触れる、さまざまな試み

■実践場所　：小荒井地区
■企画・運営　：蔵の会、都市デザイン研究室など
■実施年　　：2001年～2007年

喜多方のまちなかを調査して見えてきたことは、蔵だけでなく、豊かな生活文化の中にありながらも隠れている「地域資源」を活かすことが、にぎわいにもつながるのではないかいうことである。そこで、商店街を中心とした資源を活かした活性化実験として「蔵みっせ」が提案・実施された。この取組みでの精神はその後の「ひなの蔵めぐり」や「天神様の蔵めぐり」、「くらはく」にも受け継がれていく。

蔵みっせ(2002年)

2001年、東京大学都市デザイン研究室は、文化庁・(財)日本ナショナルトラストから調査委託を受け、まちかどミュージアムの提案を含む「喜多方観光まちづくりの提案」を行った。昔から喜多方では、自分の蔵や蔵座敷を一般公開し、生活の一部を観光客に紹介するという試みが、自発的に、多くの人によって行われており、その1つ1つの試みをつなぎ、まち全体を博物館のようにしよう、という考え方がまちかどミュージアムである。その提案の実践として、2002年11月、ふれあい通りを中心に、「蔵みっせ喜多方」というまちづくりの第一歩となるイベントを開催した。



蔵みっせ喜多方の各企画の位置づけ

01. まちかどミュージアム

店先や自宅の一室や仕事場の一角で喜多方の歴史を物語るお宝や生活文化を公開し、まち全体を一つの博物館のようにすることを目的として実施された。

[開催場所]
五十嵐六七八薬館、五十嵐酒店、甲斐本家、やまき、山中煎餅、島慶園など、計 20 カ所

市内のまちかど博物館すべてに共通のサインである看板を設置した。看板には喜多方会津型を下地に用いた。

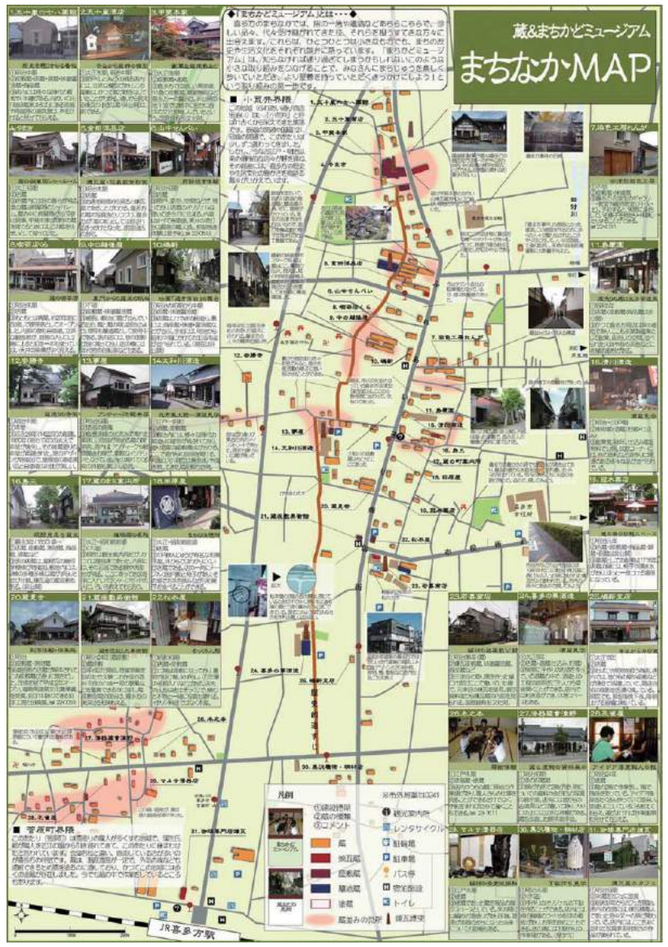
02. 蔵めぐり

普段公開されていない蔵を公開し、蔵と共にある生活文化への理解を深めること目的に行った。

若喜商店のレンガ蔵前にて。
2 回行い、計 40 名が参加した。

03. 蔵みっせマップ

まちかどミュージアムと連携して喜多方の蔵や生活文化、歴史を紹介するため、蔵などの歴史的建造物や喜多方の魅力的な空間をプロットしたマップを作成した。



合計 5000 部。まちかどミュージアムの情報も掲載し、観光案内所や駅、各まちかどミュージアム、ご理解をいただいたお店の店先などに置いていただいた。

04. 蔵ライトアップ

普段と違った蔵の見方をすることで蔵の魅力を最認識することを目的として行った。

[開催場所] 13 カ所：

若喜商店、松本屋、蔵座敷美術館、蔵見世、冠木薬店、レディス島屋、大和川酒造、島三、島慶園、冠木商店、嶋新、山中せんべい、金田洋品店

05. 蔵のまち「ふれあい」アート作品展&会津弁紙芝居　in 蔵

空き空間を活用し、喜多方市民の才能・技能を紹介する場をまちなかに設けることが目的。空き店舗や一般公開されていない蔵座敷をお借りして、アート作品展と紙芝居を行った。

写真は会津弁紙芝居・昔語りの様子。松本屋２階の蔵座敷で行われ、子供も大人も楽しめる会となった。

06. 蔵茶房～映蔵の語るまち～

蔵を活用し、まちなかに溜まれる場所をつくることが目的。ふれあい夢くうかんで行った。

喜多方百景の展示や喜多方を紹介した番組のビデオ上映などを行い、二日目には多くの人が訪れた。

07. 喜多方百景

学生のこれまでの活動記録を発表するとともに、外部の視点から見た喜多方の写真を展示し、喜多方の素晴しさや問題点を感じてもらうことが目的。

蔵茶房やふれあい通りの店舗に展示した。観光客だけでなく、地元の方々にとっても新鮮な「百景」だった。

08. 喜多方会津型幻燈会

喜多方の伝統文化である喜多方会津型を今までと違う方法で紹介すること、まちなかを周遊してもらうことが目的。開催場所は松本屋横、東邦銀行、福島協和信用組合駐車場。

壁にプロジェクターで会津伝統型を投影した。予想以上に大好評。写真やディスプレイで見るよりもずっと美しいものであった。

09. まちを語る集い

蔵みっせの参加者・企画者約 40 名が集まり、活動の経緯やまちづくりイベントを振り返りつつ、今後やるべきこと等についてお酒を交えて議論した。

イベントの反省と、新たな人材・組織の発掘のために行われたもので、終始和やかに、自由に意見が交換された。

まちなか全体を博物館にしようという試みは、その後のイベントにも受け継がれていく。

ひなの蔵めぐり・天神様の蔵めぐり(2006年～)

ひなの蔵めぐり・天神様の蔵めぐりでは「まちじゅうがギャラリー」と称し、商店街の店の中などに、雛人形や天神様を飾って、訪れた人を楽しませる催しが行われた。

毎年2月～3月に開催されるひなの蔵めぐりでは、古くから伝わるものや、全国から集められた珍しいものなど、様々な雛人形が展示される。2008年には、約90店舗が参加した。

また、5月の端午の節句に合わせて開催される天神様の蔵めぐりでは、菅原道真をかたどった東北最古の張子の人形で、昔から会津では男の子が生まれると親戚や知人から贈られたという会津天神が、店の中などに飾られる。

上)ショーウィンドーや蔵に飾られた雛人形や会津天神
下)天神様の蔵めぐりのマップ・ポスター

くらはく(2007年)

2007年に開かれたくらはく(蔵のまちづくり博覧会)において、蔵みっせ以来の考え方を受け継いで、さまざまなイベントが行われた。特に、サテライトスポットとしてまちなかの特徴ある蔵や、都市デザイン研究室が提案を行ってきた場所などにパネルを設置して、行った展示は、喜多方のまちなか全体を展示会場にしよう、という考えの下で実施された。サテライトスポットには、共通のサイン、イーゼルを使用して、それぞれのスポットが一連の展示であることを示し、まちじゅうで一つの博覧会を行っていることを見た人に感じさせるような演出を行った。

また、くらはくでは、幻燈会や蔵ライトアップ、冠木商店の蔵公開のイベントや、展示での喜多方百景など、蔵みっせで行われたことを参考にした企画が多く行われた。
(詳細は第4章くらはくとそのまとめ参照)

サテライト会場の様子。くらはくサインが掲げられている。

実践03 デスティネーションキャンペーンとレトロ横丁

イベントをきっかけとした観光推進戦略

■実施時期：2005年～
■主催　　：会津地方の自治体、地元観光関係者、ＪＲ６社

JRを中心として展開された「あいづデスティネーションキャンペーン」は、会津地方が全国的にアピールされる絶好の機会であった。このイベントにあわせて行われた、「レトロ横丁」では、大勢の観光客を集め、喜多方のポテンシャルを証明した。この手のイベントは、一過性のものとなりがちであるが、このパワーを受け継ぐべく、「極上の会津喜多方推進委員会」へと展開するなど、持続に向けて動きが見られる。イベントのパワーを「まちづくり」に落とし込めるか、これからの動きが期待される。

上)あかべぇがペイントされた特別列車
右上)駅員などによる観光客の出迎えの様子
右下)特別列車から降りてくる観光客

福島県あいづデスティネーションキャンペーン

主催：JRグループ、福島県他　　実施時期：2005年7月～9月

2005年夏、JR東日本を中心とした「福島県あいづデスティネーションキャンペーン」が展開された。「会津～あったんです。まだ、極上の日本が…」をキャッチフレーズとして、福島県会津地方をメインエリアとして実施された。長い歴史の中でこだわりを持って受け継がれてきた暮らし、自然、文化などを、多くの人に味わってもらうことを目的として、直通の特別列車の運転や、多くの地元イベントなどが行われた。会津地方全体で取り組んだこのキャンペーンは大盛況を収めた。

この成果を受けて、翌年の2006年もＪＲ東日本の重点販売地域に指定され、7月～9月まで「極上の会津キャンペーン」が行われた。同様に「この夏も会津へ２００７キャンペーン」が展開されるに至った。

2006年からは、車体を会津漆器のイメージに合わせて赤と黒にラッピングされた列車「特急あいづ」が、7月から9月までの土・日・祝日、上野から喜多方まで運行された。特急あいづが到着する日には喜多方駅で横断幕を掲げ、観光パンフレットとノベルティを配りながらの歓迎も行われた。

このデスティネーションキャンペーンがきっかけとして生まれたイベントの一つ、喜多方サウンドチャレンジは、歌、ダンス、バンド、パフォーマンス、など多彩な種目でエントリーできるオーディションで、優秀者にはソニーからのデビューに向けてのレッスンの機会も与えられる。市内の蔵など数ヶ所を使って予選を行い、本選進出者を決める。

デスティネーションキャンペーンをきっかけに始まったもう一つの大きなイベントが、7月末から8月初めの2日間、ふれあい通りで行われる、レトロ横丁である。コンセプトは昭和30年代。ふれあい通り商店街を舞台に、懐かしい品を飾ったり、屋台を出したり、当時の空気を再現される。　2日間行われる祭の間には、屋台だけでなく、レトロモータショー、昔の遊び塾、ミニＳＬ、駄菓子マーケットなど、昭和30年代を意識したさまざまな催し物が行われる。商工会議所婦人会による、浴衣の着付けと無料レンタルのサービスなどもあり、商店街は多くの人で非常ににぎわう。昭和の中ごろまで商工祭等で開催され賑わいを見せていた仮装行列も復活し、市民参加型イベントとして開催される。

このようにデスティネーションキャンペーンは、喜多方に新たなイベントが生まれるきっかけとなった。そして一連のキャンペーンは、改めてまちの観光資源に気付く絶好の機会となり、観光客の増加だけでなく、様々な成果を生み出した。

喜多方レトロ横丁

主催：会津喜多方商工会議所　　実施時期：2005年～2007年

2005年、2006年、2007年と開催されたレトロ横丁は、今では夏の喜多方を代表するイベントとなっている。2007年には15万人が訪れた。毎年この時期に、レトロ横丁に参加するために喜多方にやって来る観光客もいるという。

主催は会津喜多方商工会議所、2005年は平成18年度福島県地域づくり総合支援事業補助金事業が、2006年、2007年は「喜多方レトロ横丁」運営委員会・実行委員会が主管となって行っている。

また、このイベントは、福島県地域づくり総合支援事業補助金事業として行われ、県からの補助金によって運営されてきた。

この補助金の交付は2007年でいったん終了する。3回継続されたレトロ横丁を、2008年以降も続けていくのか、どのような形で存続させて行くのか。喜多方の伝統のイベントとして残し、続けていくために、これからの運営方法やイベントのありかたが問われている。

七夕飾りが並ぶふれあい通り商店街

昭和を感じさせる展示

道路を走るミニＳＬ

夜のレトロ横丁

極上の会津喜多方推進委員会結成

結成時期：2004年10月

このディスティネーションキャンペーンをつなげていくために、「極上の会津喜多方推進委員会」が結成された。これは２００４年１０月に、翌年に実施されるあいづデスティネーションキャンペーンにおける観光客の受け入れ策の検討のために観光協会が立ち上げた「福島県あいづデスティネーションキャンペーン喜多方地区推進委員会（推進委員会）」が発展したものである。それまでの「観たい・遊びたい部会」、「食べたい部会」、「癒されたい部会」を「見たい」「遊びたい」「食べたい」「癒されたい」の4つの部会に再編し、現在でもそれぞれの部会で、ひな・天神様の蔵めぐりの企画、喜多方うまいもの２００選の選定、雪小法師コンテストの実施、仏都・会津のイメージアップキャンペーンなど、さまざまな活動を行っている。

このように、デスティネーションキャンペーンでの活動を、継続するものに発展させたということは、非常に大きな収穫である。

また、レトロ横丁でシンボリックな役割を果たしている「昭和レトロミュージアム」が、2007年１０月からリニューアルオープンし観光客の目を楽しませ、まちなかに賑わいを創出している。さらにこのレトロミュージアムが、2008年度の地域づくり総合支援事業に選ばれた。空き店舗を活用したミュージアムを4月から11月の観光シーズン中、常時公開し、商店街の回遊性や滞在時間向上を図ることが目的である。

デスティネーションキャンペーンをただの一過性のイベントで終わらせないために、様々な動きが広がっている。

実践04 アートぶらりー、21世紀シアターと蔵してる通りフェスティバル

盛り上がる「地域発」イベント

■実践場所：喜多方まちなかエリア

「蔵のまち・アートぶらりー」、「喜多方発・21世紀シアター」、そして、「蔵してる通りフェスティバル」。喜多方のまちなかを彩るこれらのイベントは観光目的だけのために行われたものではない。市民が中心となって、文化・芸術の推進や、地域力の向上のためにはじめられたものであり、それが次第に外部にも開かれ、発信されるようになったものである。多くの観光客が集まる、喜多方を代表するイベントではあるが、一番の目的は何よりも、地元が中心となって、自分たちが楽しむことにある。

蔵のまち・アートぶらりー

開始年：2001年　主催：蔵のまちアートぶらりー実行委員会　場所：喜多方まちなかエリア

実施の様子

ポスター

「蔵のまち・アートぶらりー」とは、市内のギャラリーや酒蔵、店のスペースなどを利用し、一定期間内に一斉に展覧会を開いて、市民や観光客に、喜多方のまちを回ってもらおうというイベントである。ほとんどの場所で無料で美術作品を見ることができ、自分のまちの新しい発見があるということで、地元市民に非常に喜ばれている。期間中は喜多方市民だけでなく、県内外からもたくさんの観光客が訪れ、喜多方のさかんな文化芸術活動と蔵の文化とを同時に味わえるこのイベントを楽しんでいる。

蔵のまちアート・ぶらりー実行委員会会長である山形洋一氏は以前、喜多方市立美術館の館長を務めていた。そして、いろいろな作品を多くの人に見てもらうために、喜多方市内の空き蔵や店舗に呼びかけて、一定の期間で、一斉に、美術展を開き、まちを歩きながら芸術を味わってもらう機会を設ければよいのではないかと考え、アートぶらりーをはじめることにしたという。

最初はほんの数店からはじまったイベントは、2007年には24店が参加し、書、日本画、漆、ステンドグラス、陶、アートフラワー、木版画など、盛り沢山な展覧会を一部の会場を除き入場無料で開催し、のべ一万四千人もの人が期間中に訪れる、たいへん大きなイベントに成長した。

蔵の中に展示するのはふしぎな魅力があると山形さんは言う。そうやって展示に用いることで空き蔵の利用を促進し、蔵の文化を見直すきっかけにもなっている。また、発表の場の少ないアーティストにとっては、多くの人に自分の作品を見てもらう非常によい機会になっている。

年々参画者が増えるアートぶらりー。今後も地域の資源を発掘し、多くの人々のふれあいを創出していくことが期待される。

喜多方発・21世紀シアター

開始年：2000年　主催：喜多方プラザ自主文化事業推進協議会　場所：喜多方プラザ周辺、喜多方まちなかエリア

「喜多方発・21世紀シアター」は、蔵や店舗などのスペースを使って公演を開催し、まちに賑わいを生み出そうというものである。期間中は約60のプロの団体が芝居や音楽、人形劇や大道芸など、4日間で100を越える公演を行う。普段何気なく通り過ぎたり使ったりしている蔵や店舗が、芝居小屋となって多くの人でにぎわい、まち全体が大きな文化祭と化す、全国に類を見ないイベントである。子どもを中心対象とした演目が多く、家族全員で楽しめるアートフェスティバルになっている。

はじまりは2000年、そして本格的には2003年、喜多方プラザ開館20周年記念事業として、プラザの企画公演を運営してきた「喜多方プラザ自主文化事業推進協議会」を中心に、これまで喜多方プラザと一緒に活動してきた13団体が実行委員会を設立することで本格化したこのイベントは、喜多方市、各市町村教育委員会、マスコミを含む後援29団体および協力90団体が協力し、さらに運営ボランティア約200名が登録、1日80～90人がボランティアで運営に参加するなどして、大成功を収めた。

21世紀シアターのきっかけは、夏場に声がかからずに遊んでいる役者さんたちを喜多方に集め、子どもを中心とした多くの人たちに見てもらおうというものであった。

公演場所についても、特に蔵は、出演者にとって「“落ち着き”や“イマジネーションをかきたててくれる”不思議な場所」と映るようで、観客にとっても「身近に観れる」「こんな蔵があったとは知らなかった」などの意見が多くあり、「喜多方でしか観ることができない」オリジナル性の高い公演となっている。

蔵してる通りフェスティバル

開始年：2004年　主催：会津北方小田付郷町衆会　場所：小田付蔵通り

「蔵してる通りフェスティバル」は小田付のまちづくり団体「会津北方小田付郷町衆会」の手によって、2004年にはじまった。生活に密着した蔵を活かした取り組みとして定着してきている。

イベント当日は、午後2時ごろから夜の9時ごろまで小田付蔵通りが歩行者天国となり、蔵巡りツアー・路上ライブ・ふるさとクイズ・太極拳表演・昔遊びコーナーなどが設けられる。屋台も並び、多くの人が訪れる。夜は蔵がライトアップされ、観光客や浴衣を着た市民らが夜のまちあるきを楽しんでいる。2006年からは行灯による夜の演出や、油屋での振る舞い酒などが実施された。2007年には小田付のれんワークショップで作成されたのれんがまちに掛けられた。

ライトアップや獅子舞など、実施の様子

■きっかけは喜多方プラザ

喜多方プラザ

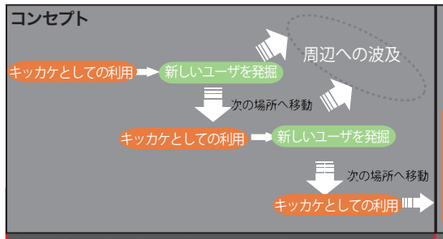
アートぶらりーや21世紀シアターのきっかけとなったのは、「喜多方プラザ」である。喜多方プラザとは、様々な文化活動の拠点として、喜多方地方の文化を支える事業を展開する施設である。プラザは、設立当初から様々な試みを行ってきた。たとえば運営ボランティアを募集したこと。当時、アマチュア劇団が芝居をやるとなると、裏方の人員はすべて外注することになり、人件費がかかりすぎてしまうという問題があった。そこで、その裏方の部分を地元の人たちにやってもらおうと考え、オープン前から市民に呼びかけたのである。それに応じて約50人が集まり、舞台についての研修を重ね、柿落としをアマチュア50人のスタッフで行い、無事に成功を収めたのである。

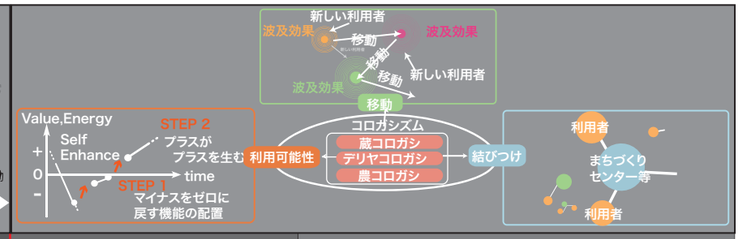
このときのボランティアたちの一部は今でも喜多方のまちづくりに関わり、小田付蔵してる通りフェスティバルの裏方として活躍している人もいる。現在喜多方のあちこちで行われている市民の手によるイベント。これからの展開が楽しみである。

実践05 「マチコロ」→「寄合所」へ

空き家再生を増やしてまちを活性化するアイデア

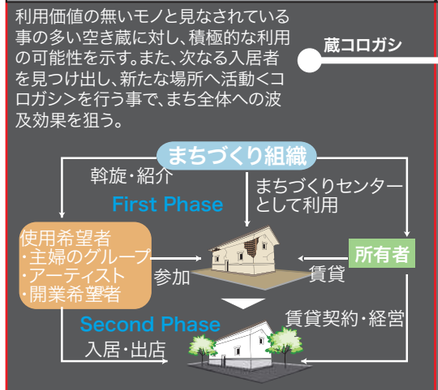
■実践場所：小田付エリア他
■実践主体：会津北方小田付郷町衆会他
■開始時期：2005年



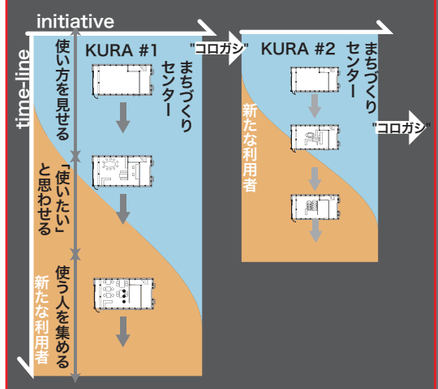


利用価値の無いモノと見なされている事の多い空き蔵に対し、積極的な利用の可能性を示す。また、次なる入居者を見つけ出し、新たな場所へ活動<コロガシ>を行う事で、まち全体への波及効果を狙う。

蔵コロガシ



中心市街地の利用の途絶えた蔵は再生の機会なく朽ち果てていくものもある。一度朽ち始めると無価値なものだ思いがち。最初の段階はまちづくりセンターが修繕をして入居し、使い方を実際に見せる。

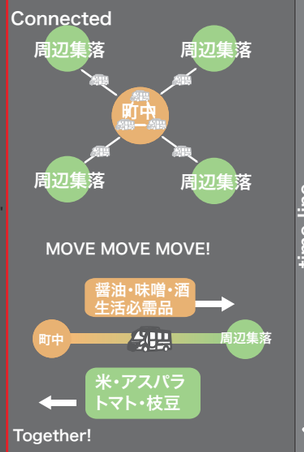


まちづくりセンターは自らが入居する蔵の次のユーザを発掘する役目も担っている。「こんな使い方してみたいなあ・・・」と思った新ユーザが出てくればそろそろコロガシどき。

デリヤコロガシ

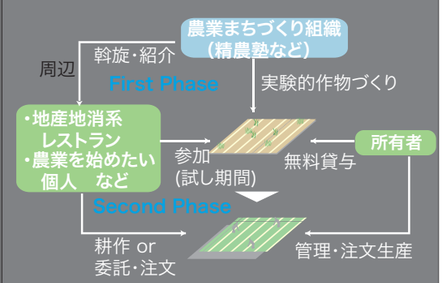
デリヤは失われた周辺集落とまちなかとの関係を、再び取り戻す役割を持つ。また、利用できる潜在力をもつDead Spaceを利用することで、積極的な活動の場をつくりだすきっかけとなる。

ガソリンスタンド跡をステーションとして利用し、まちなかと周辺集落をつなぐワゴンを走らせる。



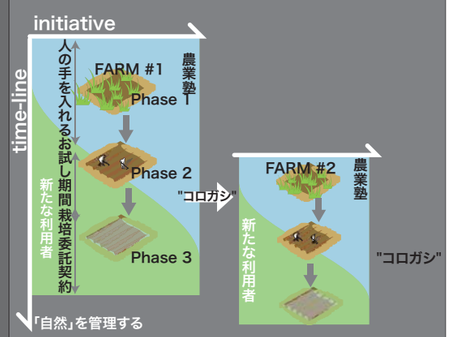
農コロガシ

生産性の問題などから使われなくなってしまった耕作放棄地に対し、実験的な農業実践の場や、体験農業の場として利用する機会を設ける事で、新たな農業のあり方へとつなげていく。



農業塾コロガシ

周辺集落に広がりつつある耕作放棄地。
農業塾がコロガシを行うことで再生する。
小さな土地に労力をかけて収量を最大化する必要はない。肩の力を抜いたスタンスで、こなせる範囲の作業しかしない。自分でできないところは、栽培委託という形で希望者に貸し出す。



自然と野生は異なる。
人が切り拓いた土地だからこそ、責任をもって管理し続けるしくみづくりが求められる。そして何よりも土に触れる悦びを。

「マチコロ」（2004年度日本建築学会設計競技提案）

この提案は、東京大学都市デザイン研究室（安田啓紀・大野友平・小林有吾・内山隆史・黒瀬武史・戸田惣一郎）が、2004年度日本建築学会設計競技「建築の転生・都市の転生」に応募したものであり、全国佳作に入選した。
喜多方を題材として、空き家・農地・デリヤ（ワゴン）を利用して、市街地の利用可能空間の活用促進を考える提案である。

現在の喜多方は、4つの課題を抱えている。

1. まちなかの空き蔵
喜多方の蔵は、単体だけでなく群として機能してきたが、近年、生活文化を育んできたこの連担システムが崩れつつある。

2. デッドスペース
都市構造や生活の変化により、低未利用地が増加している。

3. 耕作放棄地
農村部においても、耕作放棄の結果荒れた農地が点在している。

4. まちなかと周辺の分断
農業と市というまちなかと周辺の関係性はほとんどなくなってきている。その結果地域間の交流機会は減少し、豊かな生活文化、活気のある町の姿が消えつつある。

こうした、喜多方がもつポテンシャルでありながら低・未利用となっている空間を活用するための方法論として「コロガシ」を提案する。

提案コンセプト：コロガシ

コロガシとは、特定組織が、現在使われていない場所を一次的に利用するなかで、定常的な利用法を構築し、受け渡した後に、次の低利用空間へと移動していくというものである。これにより、低未利用地の活性化を波及的にもたらす。

1. 利用可能性の提示：低未利用地を特定組織により一時的に活性化し、利用可能性を提示する

2. 移動：様々な場所に移動し、町全体への波及効果を促す

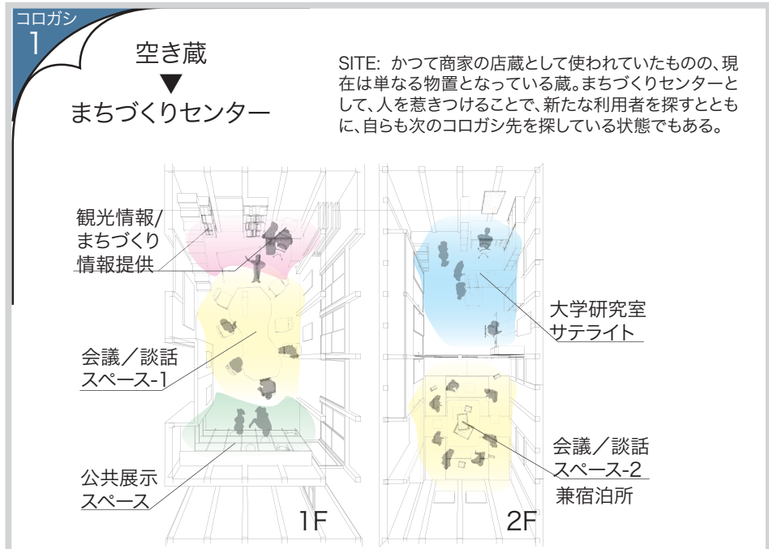
3. 結びつけ：潜在的な利用者同士（所有者と賃貸者）を結びつける

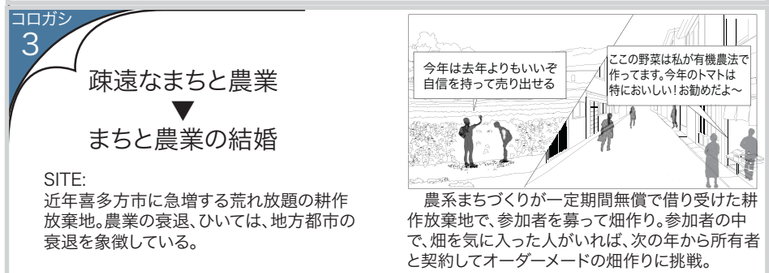
3つの「コロガシズム」

■コロガシ1. 蔵コロガシ（空き蔵活用）
空き蔵の利用促進システム。詳細後述。
■コロガシ2.デリヤコロガシ（ワゴンによる低未利用地活用）
ガソリンスタンド跡などのデッドスペースをステーションとして利用し、まちなかと周辺集落をつなぐワゴンを走らせる。
■コロガシ3. 農コロガシ（耕作放棄地活用）
生産性の問題などから使われなくなってしまった耕作放棄地に対し、実験的な農業実践の場や、体験農業の場として利用する機会を設ける事で、新たな農業のあり方へとつなげていく。

蔵コロガシ：空き蔵の利用促進

第１段階：
まちづくりセンターが修理をして入居し、使い方を実際に見せることにより次のユーザーを発掘する。
第2段階：
まちづくりセンターに変わって新たな入居者が蔵を賃貸契約し利用することで、コロガシが実現する。まちづくりセンターは、新たな空き蔵へ移動し次なる利用者を開拓する。
このプロセスを繰り返していくことによって、空き蔵を有効活用する。
このコンセプトを小田付の寄合所システムとして実践した。



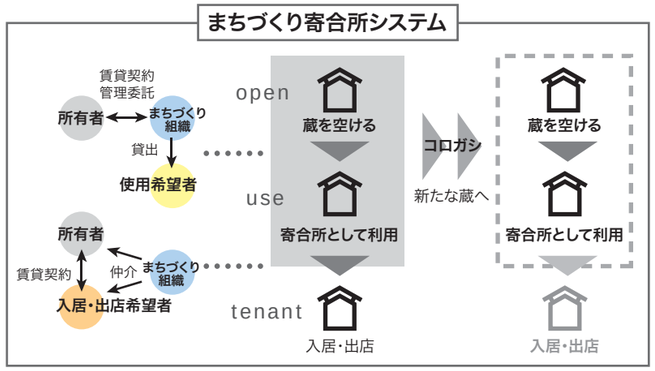


空き蔵再生システムとしてのまちづくり寄合所の実践

町衆会による空き蔵再生の実践

● 初代まちづくり寄合所（小原酒造の蔵）　Reuse >> Revitalize　no.1

町衆会による空き蔵の再生は、おたづき蔵通り沿い、小原酒造店蔵の向かいにある、妻入りの土蔵からはじまった。
改修の後、初代「まちづくり寄合所」が開設され、蔵再生のあり方を地域に示すとともに、まちづくり活動の拠点となった。現在はさらなる入居者により改装され、カフェとして使用されている。



④＋ 新たな空き蔵を利用して「2代目寄合所」を開設
>>定常的な利用者を探す

コロガシ
（新たな蔵へ）

① 物置状態の蔵（空き蔵）

② 自分たちで掃除・改修

③「初代まちづくり寄合所」として一時的に利用

④ 定常的な入居者が見つかる（現カフェ・モーツアルト）

1. まちづくり寄合所として一時的に利用《初代寄合所》（2004年－2005年）

小田付地区では、「まちづくり寄合所」による空き蔵の再生・活用システムを、継続的に展開させてきた。

まず、会津北方小田付郷町衆会等を中心として、物置となっていた小原酒造店蔵向かいの空き蔵（低未利用蔵）を所有者から貸借し、地域の手で掃除及び改修を行った（一階の開口部を障子とした）。

開けられた蔵では、地域におけるまちづくり活動の拠点として、「まちづくり寄合所」が開設された。機能としては、会合や情報交換等が自由に行われる場、大学等の「サテライト研究室」、そして観光ボランティアの小拠点としての役割など、多様な活動の器として、その言葉通り、「寄合所」という形で運営された。

このように、一時的ながらも実際に蔵が魅力的に使われている姿を見せることで、利活用の可能性を地域に示すとともに、自ら蔵の活用可能性を提示しながら、新たな利用者を探すという試みを行った。

2. 定常的な利用者への仲介と活用（2005年）

前述のような利活用のあり方を示しながら、所有者及び周囲に呼びかけ、定常的な利用者を探したところ、2005年には新たな借り手（出店希望者）が見つかった。

新規利用者によって1階部分を中心に改修が行われ、喫茶店（「カフェ・モーツァルト」）として新たに利用されることとなった。

3. 新たな空き蔵の利用《2代目寄合所》（2005年－2006年）

初代寄合所の借り手が見つかったことから、「寄合所」の機能を他の空き蔵に移すことが検討された。

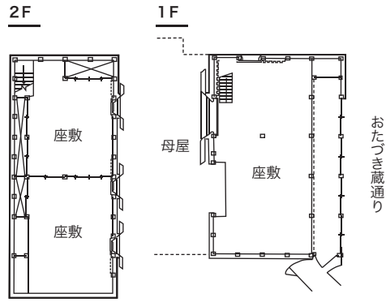
そして、おたづき蔵通り沿いの大森家店蔵（初代寄合所のはす向かいにある空き蔵、かつては立派な店蔵として利用され、一時期は漆器の展示場としても利用されていた）を町衆会が借り受け、「2代目寄合所」としてオープンさせることとなった（この蔵は、すでに内部がしっかりした状態で維持されていたため、初代のような改修等は必要なかった）。

2代目寄合所の機能としては、店蔵1階は喜多方市高齢者生産活動センターによる販売スペース「宮津の里」としてサブリースし、週に数日間、陶器や布製品等の製作作品の販売所として利用しながら、管理してもらうこととなった。また2階は、町衆会等の会合場所および、大学のサテライト研究室、また地域のワークショップ等の会場として、まちづくり活動の拠点となっている（2007年度現在）。

空き蔵再生の展開

● 大森家店蔵（2代目寄合所）　Reuse >> Revitalize　no.2

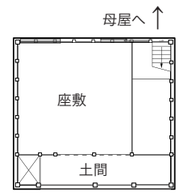
おたづき蔵通りの中心的な町並みを構成する、3つの観音開き窓を備えた趣きある店蔵。当初は店蔵として、その後暫くは質屋として使用されていた。
空き蔵となっていたところを、町衆会が2代目「寄合所」として開けたもの。1階は高齢者生産活動センターによる民芸品販売、2階は町衆会の会合や地域のワークショップ会場、サテライト研究室としても使用。



大森家店蔵　平面図
s = 1 : 300

● 渡部家店蔵（油屋）　Reuse >> Revitalize　no.3

現在は裏道となっている旧街道沿いに佇む、黒瓦・白漆喰の風格ある店蔵。町衆会が3番目に開けたもの。
2代目寄合所はまだ健在であるが、先行的に次の蔵の開放・活用を行った。2006年の「まちづくり塾」の教室としての利用を皮切りに、「ひなの蔵めぐり」等の地域のイベントや、2007年「くらはく」の小田付地区の展示会場としても活用。



渡部家店蔵（油屋）　1階平面図
s = 1 : 300

4. 空き蔵の一時的な再生活用の広がり《油屋》（2006年）

おたづき蔵通りの裏側、かつての米沢街道であると言われる通り沿いにも、長らく閉ざされた店蔵が存在していた。

一方、町衆会の事業として、地元の高校生等を対象としたまちづくり教育実践事業「まちづくり塾」（後述）を実施するための場所を模索していた。蔵のまちづくりを学ぶ上で、蔵を利用した教室が効果的であるということから、空き蔵の利用が検討された。

かつては油を売る蔵（油屋）であったものの、50年ほど物置となっていた渡部家の店蔵を、町衆会が事業期間中のみ借り受け、塾の会場として利用させてもらうこととなった。

地域の方々を中心に、蔵を開け、清掃・改修を行った（当初は数cmもの埃が積もっていたという）。内部を覗くと、立派な曲がり梁などの構造体をはじめ、蔵づくりの風格が際立つとともに、保管されていた多くの貴重な資源（享保雛、襖、屏風）も見つかり、喜多方文化の豊かさが垣間見られる。

畳を張り替えた一階部分の空間が、月に一度のまちづくり塾の会場となった。店蔵であるため、蔀戸を開け放つと、縁・土間を挟んで通りと絶妙につながり、塾の様子が通りから窺える格好となった。

当初は事業時のみの利用であったが、改修と利用の様子から、所有者のご厚意により、その他イベント時等にも一時的にあけていただき、展示や催し物スペースとして活用させていただいた（くらはく会場としても利用）。

5. 今後の展開に向けて

町衆会を中心とした一連の活動によって、ここ数年間で小田付地区の3棟の空き蔵を再生・活用することができ、うち1棟は入居（出店）者もみつかった。今後は、利用者と所有者のマッチング部分をより強化する展開が考えられる。

小田付での実践を手掛かりとしながら、まちなか、喜多方市域全域に、空き蔵再生の輪を広げ、活動主体に関しても、町衆会だけでなく、市全体へ広がりのある地域組織（NPOなど）を加えてゆくことで、より効率的かつ効果的な再生活用システムとして拡大してゆくことが可能となる。

また、「まちづくり寄合所」という拠点づくりの考え方も非常に重要である。蔵の使用・管理を行うためだけでなく、実際のまちづくり情報の収集・まちづくり活動の拠点としての役割を位置づけることによって、地域のまちづくり意識を高め、まちづくり活動の効率化を図ることができる。現在は、地域の会合や大学研究室による一時的利用が中心であるが、今後は多様なまちづくり活動を広く受け入れる場として育むことも期待される。

実践06 のれん景観実験

町並みに対する住民の意識啓蒙のためのワークショップ

■実践場所：おたづき蔵通り
■事業名　：地域づくり総合支援事業
■実践主体：会津北方小田付郷町衆会、
　　東京大学都市デザイン研究室
■実施時期：2007年

景観に対する意識を高めるねらい

「おたづきのれん作りワークショップ」(P.91にも詳述)は、高校生へのまちづくり教育としてのほかに、町並み景観に対する住民の意識を高めることを大きなねらいとして実施された。通りにのれんを連続して掲出することで、町並みを引き立たせ、通りの一体感を強めることを目的とした社会実験としての位置づけを持っている。

これは、駅前通り、ふれあい通りに続いて、おたづき蔵通りでも、蔵の町並みを守るため、景観協定に向けての動きが高まりつつあることも受けている。

社会実験としての簡易のれん作り

今回のワークショップでは、今後の町並み作りにヒントを得るための実験であること、また高校生や住民・商店主の共同作業や交流に重きをおいたものであったため、本格的なのれん作りは行わず、ワークショップの実施期間内で簡易的なのれんを作成することとし、あらかじめ色の付いた布にペンキで彩色する方法を採った。気仙沼市の景観実験を参考に、のれんを並べたときに全体としての統一感を持たせるため、紺色の布に白色のペンキで彩色する方法に統一した。

個性あふれるデザイン

のれんのデザインについては、条件を設定するかどうかが事前に議論されたが、同一色で作成されることからある程度の統一感が見込めるだろうということで、ワークショップ時の説明では「喜多方・小田付のまちの雰囲気に合うもの」をコンセプトとし、参考例を紹介するにとどめ、具体的なデザイン案は住民や商店主、高校生の個人の嗜好に任せることとした。

結果、屋号や商店の名物、店のキャラクターや店名を表したものなど、また、住民の趣味や喜多方、蔵の町並みを表現したものなど、それぞれ特徴のある個性的なデザインののれんが製作された(下写真参照)。左下には統一して「小田付」のロゴを入れた。

福島民報に取り上げられたワークショップの様子

ワークショップスケジュール

□ 第1回ワークショップ(7/31-8/1)
1日目：
全体説明、小田付まち歩き(のれん設置区間を中心に)、蔵見学、ふれあい通りまち歩き、染色工房見学、住民・商店主と顔合わせ
2日目：
会津若松まち歩き、のれん裁縫、住民・商店主と顔合わせ、宿題の指示
□ 第2回までの宿題
高校生が住民・商店主へヒアリングし、のれんのデザインを相談
□ 第2回ワークショップ(8/26)
ヒアリング結果＆デザイン案発表、のれん筆入れ、説明パネル作成、のれん仮設置
□　残りののれんについては、小田付の住民・商店主がお披露目日までに作成
□ のれんのお披露目(9/8)
蔵してる通りフェスティバルにて
□ 発表会(9/9)
高校生による成果報告、住民・商店主を中心に振り返り、意見交換

完成したのれん
(32枚のうち一部)

のれんを掲げたおたづき蔵通りの連立写真

のれんの掲出

のれんのお披露目の舞台となる「蔵してる通りフェスティバル」当日は、午前の重石集めに始まり、午後までに32枚ののれんが設置された。歩道の部分までのれんが飛び出すことは、道路占有許可を得ている時間内に限られたため、フェスティバル開始(午後)時間に合わせた、急ピッチの設置作業となった。(右上写真：のれん設置作業の様子(左)/樟山珈琲店(中央)/フェスティバルの露店(右))

町並みに与えた効果
-来場者アンケート、発表会から-

フェスティバル来場者に尋ねたアンケート(有効回答数25)では、9割近く(89%)が「のれんによって町並みが良くなった」と回答、概ね好評を得ることができた。特に、「蔵の町並みと良く合っている」、「店舗などそれぞれの個性がのれんに表れていて良かった」、との意見が聞かれた。

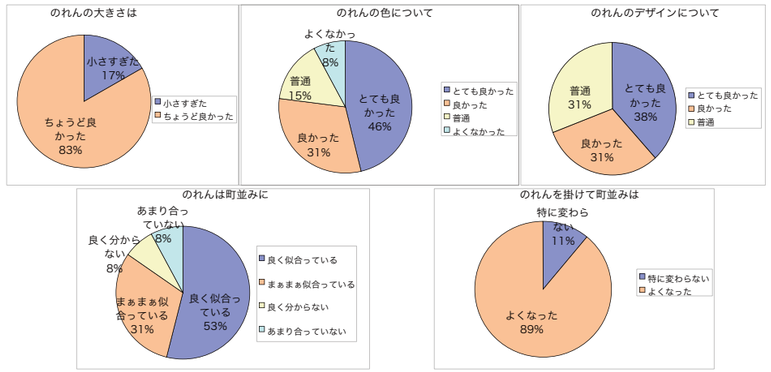
一方でアンケートや翌日の発表会では、のれんの大きさや色、デザインなどについての改良案も出された。今回は実験として簡易でできるのれんを作成したが、各設置場所に合わせた布の大きさや設置方法など工夫することで、より通りになじんだのれんの町並みづくりが今後期待される。

景観実験の成果と今後

連続して掲出したのれんがもたらす視覚的なまちなみ変化は非常にわかりやすく、地域住民の景観への意識を向上させ、景観を活かしたまちづくりへの参加意識を高めるという目標は達成された。

さらに、のれんという媒体を選んだことで、蔵の持ち主に限定せずに沿道の住民・商店主全員が関係することができ、参加意識が共有できたこと、また、手作りのれんの製作過程における裁縫や描画というシンプルな作業には、これまでまちづくりの場には疎遠であった主婦層や高齢者、子供の参加が多数得られたことは、今後の小田付地区における住民参加型まちづくりにとって大きな布石となったといえる。

来場者アンケート



来場者アンケートで寄せられた意見

□　のれんによって町並みはどのように変化したと思うか？
・蔵の街並みに似合ってとても良い。
・蔵にマッチしていた。
・街並みの印象が良くなった。
・それぞれの店舗で特徴が出て面白い。
・色が統一されているのと、デザイン(商屋号)がすばらしかった！
・いつもと異なり、イベント色を感じた。
　(街→イベント)
・目立っていない。特徴がない。
・目に付かなかった。あまり気にしなかった。明るく、目立って、和風な感じの方が良い。
・街の印象(イメージ)となじんでいるところが良かった。
・のれん作りを通して"まち"に関心を持つ機会がある方が増えたのではないでしょうか。すばらしい！！と思いました。

□ その他感想(特に印象に残ったのは？)
・素敵。
・絵がのびのびしていて良い。
・同じ型、色、紋でそろえてあるのが良い。
・そのお店の特徴がわかって良かった。
・入り口にあった方が目立ち、引き付ける。
・もっと生き生きした感じ。染め方がより多様なほうが良い。
・色合いが良い。色は目立ったほうがより良い。もうちょっと白いほうが良い。
・のれん以外のじゃまものがより気になった。電柱、看板など。
・生活観出している。けっこう考えたな～悩んだなぁ。
・個性的。各々のお店に合う気がする。

実践07 駅前通り景観協定

景観協定運用とデザイン提案

■実践場所：喜多方駅前通りエリア
■実践主体：栄町地区整備委員会
　　福島県喜多方建設事務所
　　沿道店舗・住民
（東京大学・山中建築造形舎の助言・支援）
■開始時期：2000年～

駅前通り拡幅事業を契機とした駅前まちづくり

経緯

県道喜多方停車場線（通称・駅前通り）の拡幅事業に合わせて、民家部分の沿道景観整備を一体的に図る必要が生じ、このための検討をベースとして景観協定の締結におよんだまちづくりの動きである。

平成12年から14年にかけて、駅前通りの整備の方向性や沿道建築物の沿道景観協定について行政と地元協議会による検討、住民アンケートなどを行いながら検討案がまとめられるなかで、平成14年に景観まちづくり協定が締結された。

その後も道路整備に伴うワークショップが行われていたことを受けて、駅前通りの新しい街並みを創りつつ、喜多方らしい新たな建築モデルとしての位置づけが目指され、これに基づき、拡幅事業と合わせて進む沿道建替えにより運用も活発化している。

道路拡幅線に合わせて、ボリューム・リズム・デザインを合わせた建物が並ぶ。

喜多方駅前通りまちづくり協定

喜多方市初・駅前通りの景観協定

このように、地域での協議を経た結果、平成１４年２月より、駅前通り地域の住民（43世帯による）景観協定として締結された、「喜多方駅前通りまちづくり協定」（以下景観協定）を執行している。

協定内容としては、右表にある通り、建築物の位置、形態、色彩、素材、緑化、看板設置、建築付属物、駐車場・空地に関する協定事項を定められており、景観運営委員会によって、運用するという仕組みとなっている。運用としては、新築・増改築、外観の模様替え・色彩変更、屋外看板設置、門・塀・生垣等の設置、建築設備等の行為に対して、委員会と事前に協議にかけ、（行政的には）確認申請時に確認するという形でコントロールされる。また、協定を遵守し、景観に寄与した場合は、市の要綱により、市の審査を経て補助金交付が受けられる（後述）。

表1　喜多方駅前通りまちづくり協定・協定事項

1位置	2階以上の建物の場合には、1階と2階の間に、庇をつけることにより連続性を見せることとする。従って壁面は、道路境界から庇の幅だけ後退させることとする。自動販売機、その他の設置物を置く場合も、また同じとする。
2形態	屋根は勾配屋根とすることが望ましい。陸屋根とする場合は縁を飾り庇で修景する。窓は、縦長の形とするか、あるいは格子を設置することが望ましい。
3色彩	建築物等の屋根・外壁・開口部等の色彩は、無彩色（白、明るい灰色、黒色）及び茶系統の色の落ち着きのある色彩とするよう努める。
4素材	レンガ又はレンガに類似する色・素材を建物の一部に使用することにより、街並みに共通性を形成するよう努める。
5緑化	通りに面する省スペース（隣家との間、または、道路境と壁面までの空地）には、植樹・植栽等により極力緑化に努める。
6看板等	屋外看板は、個性を出しながら原色の使用は避け、建物と調査するデザイン（色、形）とし建物の前面を隠すことのないよう、必要最小限の数と大きさとし、通行を妨げる看板や、幟等の設置は避けることとする。
7建築付属物等	水槽・空調室外機などの建築付属物は、通りから見えにくい位置に設置するか、目隠しをする。なお、自動販売機の色彩については、建物と調和するものとする。
8駐車場・空き地	駐車場・空き地の道路に面した側は、生垣等により緑化を図りながら、街並みの連続性を保つよう努める。又、車庫にシャッターを設置する場合は、グリルシャッターとすることが望ましい。

県の景観協定認定

福島県景観条例に基づく優良景観形成住民協定の認定

福島県の景観条例に基づいて、景観形成に関する住民協定のうち、県土の景観形成に資するものについて、知事が「優良」として認定し、広く公表する制度である。「喜多方駅前通りまちづくり協定」として、H１４年３月認定されている（H１９年には、喜多方仲町商店街景観協定も認定）。

市の景観協定補助支援

喜多方市まちなみ景観形成事業費補助金交付要綱

喜多方市も住民主体の景観協定とこれに伴う景観整備に対する補助支援の仕組み。住民による景観協定を締結した個人・団体を対象に、市独自の基準に照らし合わせて、最大100万円までの補助が行われる。

表3　喜多方市まちなみ景観形成事業費補助金交付要綱による交付の条件

事業	補助対象項目	補助対象経費	補助率	補助限度額	軽微な変更
喜多方市まちなみ景観形成事業	建築物	住民協定に基づき景観に配慮するためにかかる次の経費 1　飾り庇 2　格子 3　壁面のレンガ 4　その他市長が特に必要と認めるもの	1／3以内	万円 50	次に掲げる変更以外の変更 1　事業主体の変更 2　経費の額のそれぞれ20％以上の増減
	境界構築物（門、塀等）	住民協定に基づき景観に配慮するためにかかる次の経費 1　構築物のデザイン 2　構築物の設置	1／3以内	20	同　上
	建築附属物	住民協定に基づき景観に配慮するためにかかる次の経費 1　室外空調設備、自動販売機の目隠し 2　グリルシャッター等による修景 3　その他市長が特に必要と認めるもの	1／3以内	10	同　上
	看板	住民協定に基づき景観に配慮するためにかかる次の経費 1　看板のデザイン 2　看板の設置	1／3以内	10	同　上
	推進事業	住民協定の締結、運営にかかる事務経費（3年間）	1／2以内	1	同　上
	その他	市長が特に必要と認めるもの	1／3以内	10	同　上

栄町地区振興整備委員会

駅前通り景観運営委員会

平成14年に発足した、協定締結者（のうち数名）を中心とした、駅前通り拡幅事業を含めた調整、上記景観協定における景観運営委員会開催の準備委員会も兼ねた委員会。実際は景観協定の委員会として機能し、駅前通りの景観形成に重要な役割を果たす。協定者外の専門家からの助言を受けることは可能。

初の運用事例

その後、運用第一号の事例適用が行われた（民藝あくた川）。

協議提案による検討

阿部クリーニング店では、委員会との協議（山中建築造形舎、東京大学による専門的見地からの支援協力）により、当初の計画から、喜多方レンガ（またはそれに類するもの）を利用した意匠、大きく見えすぎないような壁の分節化、窓の形状、広告看板の設置位置および、切り文字広告の利用などが変更となった。

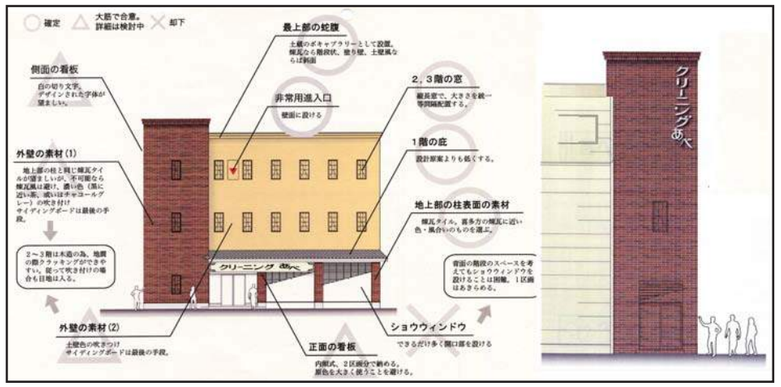
他の街並みへの展開

その後も駅前通り拡幅事業の進展に伴う建替えも進んだため、平成18年以降、3件以上の景観協定運用事例が現れており、市による補助も進められている（佐藤石材店、丸見食堂、矢部米店）。特に、道路拡幅事業の影響もあり、通りの東側を中心に運用が進められている。

協定運用第一号物件

協議により修正後改善された建物

協定エリア内の建替



景観協定における委員会との協議内容事例（建物分節・レンガの使用・切り文字看板）

景観協定と補助による街並み（駅前通り東側）

実践08 丸見食堂竣工(駅前通り)

蔵のまちに活きる「新しい」建築空間像の実験と実践

■実践場所：喜多方駅前通りエリア
■設計　　：山中建築造形舎
　　(山中公一、倉橋哲裕)
　　北沢猛／野原卓
■竣工時期：2006年

(設計：北沢猛+野原卓+山中公一［山中建築造形舎］)

01 蔵の遺伝子を受け継ぐ「新築」の丸見食堂
02 夜間の様子
03 敷地脇に設けられたオープンスペース
04 街並みのイメージ
05 移転前の丸見商店
06 かつての丸見商店

道路拡幅事業に伴う沿道景観整備

駅前通り(県道西小原北町線)の道路整備(20m拡幅整備)に伴って移転し、新たに建替える飲食店舗の計画である。

もともと1929年の創業時から駅前に構えていた旧店舗から数十m北に移動した敷地に2階建店舗として新たに建替えられた。

駅前通りの拡幅に合わせて、平成１３年度に駅前通りの景観まちづくり協定が締結され、その後も行われた道路整備に伴うワークショップを経て、駅前通りには、新しい街並みを創出するとともに、沿道には、喜多方らしい新たな建築モデルの必要性と位置づけが示された。

地域性を読み込んだ新たな街並み

本計画は、改修ではなく、新築であるため、地域の意匠や空間を読みながらも、物まねではなく、新たな空間モデルを必要とする。そこで、喜多方の特徴である蔵の特質（壁のあり方、二重屋根の概念、建物形状）を踏襲しながら、現代の快適な店舗空間との両立が図られた。

街並みを誘発する仕掛け　-レンガ壁

地域素材である（喜多方）煉瓦による煉瓦壁を設け、一階ファサードによる連続的なまちなみの誘発を試みた。煉瓦壁の高さを合わせ、開口により開放性を獲得した。この仕掛けにより、街並みに商店だけでなく住宅が挿入されても共存させることが可能となる。

駅前地区に必要な空間構造の強化

また、周辺の状況も読み込み、不足している東西方向への路地空間についても検討を行った。駅前通りの状況も考慮すると、壁同士のすき間のない「街並み」とは異なる形式が考えられた。そこで、主屋部分は空地をとりながら建て、側面の空地によって、駅前に不足していた落ち着きある外部空間「ニワ」を設けている。

地域に開放的な内部空間

二階は、地域の会合や活動に使えるように、ホール空間を確保している。ガラスと土壁色の外皮の中にまた蔵が包まれているような内部空間となっている。普段は、学校帰りの高校生が駅から立ち寄りたくなる、気軽な空間としている。

検討案段階のイメージ

▼

©山中建築造形舎

設計案のイメージ

▼

通り全体へと広がるイメージ

▼

実際に建てられた様子

喜多方ならではの現代的街並みへの検討

設計の当初の段階から、

①新しい建物においていかに、蔵の遺伝子を受け継ぎながら、現代的な空間となるか
②連続するほどの状況にない駅前通りで、オープンスペースを確保しながらも連続的街並みをどう実現するか
③喜多方ならではの街並み作りという意味で、煉瓦塀の使用可能か

という点がコンセプトとして挙げられた。

街並みへの広がり1：喜多方の風土性

飲食店舗でもあるこの建物は、建替え前の店舗と異なり、開放感あるものとなっている。内部での熱気が外にもこもれ出る。奥の座敷の窓は雪見窓となっている。「よこみち」空間は、状況や天候などに応じて自在に変化する空間となっており、通路としてだけじゃなく、テラスなど、多様な使い方に対応できる。エントランスは吹き抜けとなっており、蔵のダイナミックな空間を受け継いでいる。

構造的にも蔵の架構のように細やかなデザインとし、二重屋根とすることで、本来の蔵が持つ保温性や調湿性の技術を継承する。色彩も土壁の雰囲気や、レンガも喜多方レンガの持つ釉薬の色合いを考慮して、風土との調和を目指す。

街並みへの広がり1：景観まちづくり協定

栄町振興整備委員会における景観まちづくり協定の考え方に則り計画されている。

そのため、道路整備後の街並みの連続を考慮に入れながら設計を行っているとともに、今後の駅前通り、喜多方の街並みづくりのあり方も視野に入れた計画となっている。

街並みへの広がり2：隣接店舗

丸見食堂の南側店舗においても、全体の街並みの連続性を考慮して設計されている。

両店舗の中央には、新たに裏道まで連続する路地が設けられており、駐車場アクセスとともに、これに面してオープンスペースを設置することで、落ち着きと賑わいのこもれ出る路地空間とすることを意図している。

煉瓦塀は同じ高さで並び、まちなみのつながりを意識したものとしている。

実践09 東北まちづくり学会（まなびあい）

東北でまちづくりを実践・研究する学生のネットワーク

■実践場所：喜多方まちなかエリア
■実践主体：東大都市デザイン研究室など
■開始時期：2004年、2005年

第１回東北まちづくり学会

シンポジウムの様子

蔵めぐりツアーの様子

民泊観光モデルの試み

全体プログラム

■１日目：東北まちづくり学会シンポジウム
・場所：大和川酒蔵昭和蔵
・まちづくりのビジョン
1) 各地の事例発表（カッコ内は各研究室のまちづくりのフィールド）
　・東北芸術工科大学三田研究室（山形県西川町睦合地区／大井沢地区）
　・新潟大学工学部岡崎研究室（新潟県村上市／新潟市）
　・福島大学行政社会学部地域計画研究室（福島県福島市荒街／中町／柳町／御倉町）
　・東京大学工学部都市デザイン研究室（福島県喜多方市）
　・早稲田大学理工学部佐藤研究室（山形県鶴岡市）
　・東北芸術工科大学三田研究室（山形県山形市）
2) ディスカッション
　・学生とまちづくり
　・喜多方のアーケード
3) 懇親会
　→参加学生は、喜多方市民の家に民泊

■2 日目：東北まちづくりまなびあい
1) 蔵めぐりツアー
　・小田付地区（町並み・裏通り・まちづくり寄合所）
　・下三宮地区（伝統的な周辺集落・農家の蔵）
　・小荒井地区（アーケード・喜多方を代表する蔵々）
2) 喜多方のまちづくりに関する意見交換会
　・場所：北町郵便局２階ファーメントホール

東北の他都市の取組みから学ぶ

現在、全国各地で、大学と地域が連携したまちづくりが多数行われている。他都市のまちづくりを見聞きし学び合うことは、今後、自分たちのまちづくりを進める上で非常に重要である。

そこで 2004 年、喜多方の位置する「東北地方」を対象にまちづくりを支援する学生と市民が学び合い、ネットワークを構築すると共に市民のまちづくりに対する意識向上を図るため、「第 1 回東北まちづくり学会（まなびあい）」を開催した（2004 年 12 月 11 日～12 日）。東北地方でまちづくりを支援する 5 大学 6 研究室が参加した。

積極的な意見交換

１日目のシンポジウム第１部の事例発表では、会場から参加学生への質問が多く出された。質問の内容は、活動経費に関するもの、行政支援の有無・方法などに関するものが多く、市民や行政関係者がまちづくりに対し、どのようなことに関心を抱いているかが伺えた。第２部パネルディスカッションでは、会場を巻き込んだ議論が盛り上がりを見せ、関心の高さを伺うことができた。

また、シンポジウム後半では、撤去・維持が課題となっている（当時）ふれあい通りのアーケードの話題を中心に盛り上がり、市長や商工会議所会頭からは、行政・商工会議所のアーケードに対する意向や、組織としての動きに関する発言が見られた。一方で市民側からは、実際にアーケードを撤去する計画が発表された。その中で、撤去後の除雪問題や町並みについて、県・市・市民で全体的に議論する「まちづくり会議」のような場を設けてはどうかという意見も出た。

民家宿泊型観光モデルの試み

今回、参加大学の学生は、市民の方のご厚意で、民家に泊まるという体験もできた。民泊を体験した学生からは「普通では体験できない喜多方の魅力を感じることができた」などの声が多く聞かれ、民泊モデルの可能性を確認することもできた。

第２回東北まちづくり学会

夜を徹して作業が行われた

蔵めぐりツアーの様子

シンポジウム（３部）の様子

優勝チームには賞状などが贈られた

優勝したグループCの提案

【Shase 蔵～蔵の所有から共有へ～】

提案概要
　蔵が失われる大きな原因の一つである、蔵主の経済的負担を軽減するために、蔵をみんなで使い、その費用をみんなで少しずつ負担していくという提案。
　Share蔵に、リタイア後の生涯学習機能、児童のまなびや機能を入れることで、新しい町と古い町、高齢者と若い世代の交流を作る。蔵ファンドなどの資金運営に関する具体的な提案も行っている。

全体プログラム

■１日目
1)「きものの大善」にて趣旨説明
2) 喜多方蔵めぐりツアー
　・小荒井地区
　（喜多方を代表する蔵・ふれあい通り商店街）
　・小田付地区
　（町並み・まちづくり寄合所・蔵）
3) 懇親会

■2 日目
1) 午前：作業
2) 午後：喜多方蔵めぐりツアー
　・下三宮地区（伝統的な周辺集落・農家の蔵）
3)14 時～: 作業

■3日目
1) 午前：作業
2)13 時～: まちづくりシンポジウム
　・場所：大和川酒蔵昭和蔵
　・１部
　　・開会
　　・主催者挨拶
　　・写真コンテスト表彰式
　　・北沢先生講演
　　・まちづくりの取組み（事例発表）
　　1. 東北芸術工科大学蔵プロジェクト
　　2. 日本大学有賀研究室
　　3. 東京大学都市デザイン研究室
　　4. 須賀川商工会議所
　　5. 会津北方小田付郷町衆会
　　・会場との意見交換
・２部
　　・コメンテーター紹介
　　・コンペ（４チームの提案発表、質疑）
　　・まとめ
・３部
　　・フリーディスカッション
　　・投票、コンペ審査結果発表、表彰式
3) 夜：懇親会

喜多方まちづくりへの提案

第 1 回東北まちづくり学会を継続し、さらに、喜多方まちづくりに関する具体的な提案・議論をする場へと発展させるため、第 2 回東北まちづくり学会を開催した（2005 年 11 月 10 日～12 日）。

喜多方のまちなかには、蔵などの地域資源が多くあるが、一方で、他都市と同様に、モータリゼーションが進展し、空洞化が目立ってきている。こうした問題意識から、３大学３研究室が大学混合で４つのグループに分かれて、コンペ形式で喜多方のまちなかにある空き店舗（きものの大善・ふれあい通り商店街）または空き蔵（おたづき蔵通り）に対するまちづくりの提案をしてもらった。提案にあたっては、「地域への反映」、つまり一つの建物から地域全体を再生させることを条件とした。

また、提案を考えるために、蔵めぐりツアーのプログラムを用意し、地元の蔵に詳しい方に喜多方のまち、蔵を丁寧に案内していただいた。

空き店舗の実験的活用

学生が提案を考え、作業するスペースとして、提案対象である空き店舗の「きものの大善」を実験的に活用した。すると、地域の方は、のぞきに来たり、会話をしに来たりして、こうした「にぎわい」の場所の重要性を改めて実感した。しかし一方で、実際に空間を使ってみることで、「きものの大善」は奥行きがあり、建築物内部の様子が、通りからはわかりづらいという課題が明らかになった。にぎわいに寄与するためには、空間上の工夫が必要であることが分かった。

コンペを通した市民との交流

学生の提案は、11 月 12 日の「まちづくりシンポジウム（福島県主催）」の２部で発表した。「きものの大善」が提案対象であるグループ A は［「学び会い」サロン］、B は［KitakatART］、小田付の空き蔵が提案対象であるグループ C は［Share 蔵～蔵の所有から共有へ］、D は［結びつける蔵］と題した提案を行った。いずれも、地元の人が思いつかなかった斬新な発想の提案であり、その後のフリーディスカッションではこの提案を元にして熱い議論が繰り広げられた。喜多方の具体の場所に関する提案であるだけに、市民にとってもイメージしやすかったものと思われる。蔵を地域で共有するという発想が評価され、僅差でグループ C が優勝した。

実践10 喜多方まちづくり教育の歴史ー蔵学習

小中学生からはじめる蔵のまちづくり

■実施地域　：喜多方市内小中学校学区
■実施時期　：2003年、2007年
■実施・参加主体：蔵の会、東京大学都市デザイン研究室、地元小中学校

喜多方で育つ小中学生に、蔵や喜多方の魅力を楽しく学ぶことで自分たちのまちを知り、愛着を深めてもらう目的で、総合学習の一環として蔵学習プログラムが実施された。2003年は5つの市内小学校を対象に、蔵のまちを巡り、蔵主に話を聞く「蔵探検」と、その成果発表会「蔵deしゃべんべ」が行われ、蔵に対する知識や理解を深めた。2007年は中学生を対象に、蔵の実数や保存状態の調査を行い、各中学校で工夫を凝らした成果発表も行われた。今後もこのような蔵学習を通じ、先人たちの想いを次世代に受け継がせていきたい。

小学生×まちづくりー蔵探検・蔵deしゃべんべ(2003年)

総合学習の時間を使って、5つの小学校で蔵学習を行った。市教育委員会、指導に当たる小学校教師、蔵の会メンバー、東大の4者で事前打ち合わせを行った後、喜多方第二、熊倉、松山、入田付、豊川小の5校のうち3校については蔵の会会員・東大学習ボランティアが授業をサポートしながら蔵学習が実施された。児童はそれぞれ蔵主へのインタビューなどを通して、蔵についての理解を深めた。

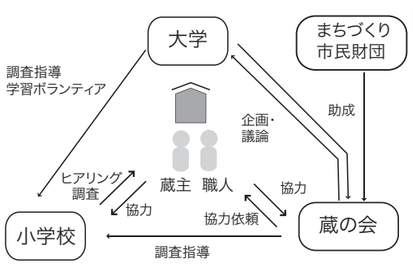
これらの成果は、大和川酒蔵で行われた「蔵deしゃべんべ」のフォーラムの中で発表された。更に児童へのアンケート、担当教員や校長へのインタビューを実施し蔵探検ニュースレターも作成した。

左図：
現地でボランティアと一緒に探検中の様子

表：2003年度蔵学習実施校（2003年6月現在※）

実施校名	実施学年	人数	可能実施時間	備考
市立第二小学校	３年生	８０名	２０時間程度	旧市街地南
市立豊川小学校	３年生	４０名	１５～２０時間	市内南部
市立松山小学校	５年生	４７名	１０～１５時間	市内北部
市立入田付小学校	５，６年生	１３名	１０時間	杉山、岩月地区

※実際に参加した熊倉小学校は、この段階では、参加が決定していなかったため、含まれていない。



上図：
事業関係主体連携相関図

■入田付小学校ー蔵の模型で理解を助ける

旧米沢街道（国道121号線）沿いの農村集落、入田付の小学校では近隣の杉山集落に残る蔵並みを調査した後、蔵の模型を制作した。その過程で材料や大きさといった蔵に関する知識を習得した。

■熊倉小学校ー今後の蔵はどうなるの？

熊倉小では蔵主へのヒアリングを通して、蔵の建設時期、蔵の建てられた目的、現在の用途などをまとめた。既存の蔵の歴史だけではなく、「これからの蔵はどうなって行くのか」という視点が含まれていた点は重要である。

■豊川小学校ー新鮮な驚きをクイズで表現

豊川小学校では「喜多方博士になろう」と題した総合学習で、喜多方の蔵の特徴をスライドにまとめて発表した。南町、ふれあい通りの蔵を中心に、クイズなどを織り交ぜるなど、得られた知識を生かした工夫が見られた。

■松山小学校ー「ぼくも大工や蔵職人に」

松山小学校では、蔵の構造、蔵の歴史、蔵が多い理由など、幅広く蔵についての情報を調査した。蔵の壁を模型として実際に作ったことで、蔵の構造を分かりやすく学ぶことが出来た。

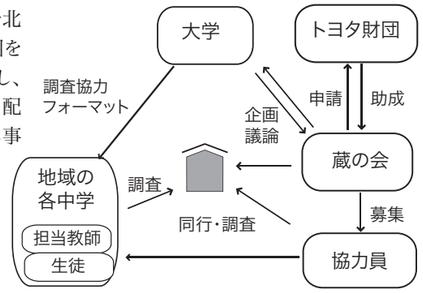
■第二小ー専門家と7回の蔵探検

他の学校と比べて80人と人数が多かったため、まとめるのが困難であったが、7回も蔵探検に行くなど、意欲は高かった。残念ながら蔵ｄｅしゃべんべでの発表はならなかったが、学習発表会での発表を行った。

中学生による蔵調査(2007年)

「蔵の会」の主催で、喜多方に約4200棟あるといわれる蔵の実数把握のための調査が行われた。2003年の蔵学習と同様、ここでも中学生の総合学習の一環として行われた。調査項目は蔵の材料、建設時期、写真、こて絵の有無など、本格的なものだった。調査フォーマットは東大・蔵の会の協力によって作成され、実際の調査には蔵の会会員が同行した。調査に先立って、東大から中学生への蔵レクチャーも行われた。

調査範囲は、喜多方一中、二中、三中、会北中の学区を対象として、各学校で随時範囲を設定した。蔵の会は、事前に調査員を募集し、できるだ各地域（学区）から集められるよう配慮した。また、蔵の会は、トヨタ財団の助成事業に応募し、調査のための助成金を得た。



調査関係主体連携相関図

■事前準備

①中学校への打診（3～6月）

中学校名	経過	回答
第一中学校	3月下旬に訪問	１年生全体で総合学習で実施
第二中学校	3月下旬に訪問	１年生全体で総合学習で実施
第三中学校	6月上旬打合せ	１年全体で総合学習で実施
塩川中学校	3月下旬に訪問、６月上旬に回答を督促	総合的学習の時間では実施が困難、９月以降1年の社会科で取り上げる
山都中学校	4月中旬に訪問、６月上旬に回答を督促	1年生の総合的学習で野外調査は行う。蔵だけをテーマとすることは不可能
会北中学校	4月中旬に訪問	学校全体で総合的学習の時間に実施
高郷中学校	4月中旬に訪問、６月上旬に回答を督促	１年生の総合学習で実施、蔵もテーマの選択肢の一つとして生徒に選ばせる

調査に先立って、蔵の会が市内の中学校に協力を打診した。市内7校の中学のうち、4校で、第１学年の生徒または全校生徒が、総合学習の時間に野外調査を実施するとの回答が得られた。

②ガイドライン作成（6月）

蔵調査のフォーマットは、蔵の素材、築年数、こて絵・観音扉といった特徴の有無など、蔵の基礎情報を網羅的に把握できるよう作成した。蔵主への聴き取り調査の行いやすさ、また写真との対応などを考慮した。

③市民協力員募集（6月）

左：配布された市民協力員募集のチラシ

喜多方市の広報配布ルートにて、5万枚の募集チラシを市内全域に配布した。その結果、旧喜多方市（6名）、旧塩川町（1名）、旧山都町（1名）、の計8名からエントリーがあった。

■調査実施・発表

④オリエンテーション（6～9月）

調査に先立って、第一中学、二中、三中、会北中にて、生徒は喜多方の蔵に関する基礎知識を学んだ。東京大学から蔵調査のための蔵レクチャーを行い、事前に喜多方の蔵について学び、注意すべき点などを抑えた。今回部分的に調査実施を予定していた山都中、高郷中にも蔵の会会員が出向いた。また、市民協力員にも同様にオリエンテーションを実施した。

⑤蔵調査（7月～10月）

ボランティアの市民調査員、また蔵の会会員が同行して蔵調査を実施。雪が降る前に野外調査を行った。最終的に、喜多方第二中学（1年生）・喜多方第一中学（1年生）・会北中学（全学年）は7月に調査を行った。喜多方第三中学は10月に調査を行った。高郷中学では、1年生3人が調査を行った。

⑥成果発表会（2008年2月）

今回の蔵調査の成果は、アイカム喜多方で行われた「喜多方まちづくりシンポジウム」で発表された。今回は初回ということもあり、集計の仕方や材料の見分け方、蔵の見分け方などに課題が残ったため、今後はこれらを改善しての調査が望まれる。しかし今後も蔵の全数の把握に向けて、こういった生徒への働きかけも含め、地域学習と絡めた方向での調査にかける期待は大きい。

実践11 喜多方まちづくり教育の歴史ーまちづくり塾

多くの人々と共に考えるまちづくりプログラム

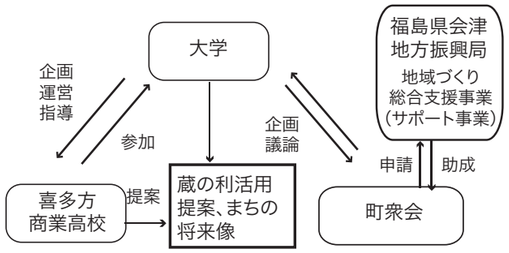
■実施場所　　：渡部家店蔵
■実施時期　　：2006年～2007年
■実施・参加主体：東京大学都市デザイン研究室、喜多方商業高校、小田付郷町衆会

会津北方小田付郷町衆会の事業として行われた、喜多方の次代のまちづくりを担う高校生に、蔵など地域に目を向け関心を持ってもらうための教育プログラム。半年間かけた2006年のまちづくり塾事業では、まちの将来像を具体的に考えるというプロセスを通して、まちづくりへの意識向上という成果があった。2007年は実際に街並みを視覚的に変化させることで、更にまちへ目を向けるきっかけをつくった。また、実際に住民も高校生と共同作業を行うことで、まちづくりに一歩を踏み出した。今後は高校の授業プログラムの一環としてこのような活動が継続されることが望まれる。

高校生が考える、半年間のプログラムー「蔵の利活用」(2006年)

まちづくり事業の初の試みとして、東京大学、小田付郷町衆会の協力により、半年間を通して蔵の利活用を考えるプログラム「まちづくり塾」を空き蔵だった店蔵を利用し行った。

喜多方商業高校から5名の生徒を迎え、まちあるきに始まり、自分達の生活や趣味・関心を通して蔵の利活用を考えた。模型や模造紙などの成果物は地元住民への発表・意見交換を通してビジョンの共有が行われた。今後まちづくりの担い手となる若者を育成する上で、示唆的なプログラムである。



上図：2006年度まちづくり塾事業主体協力関係図

第1回：開校式～まちを歩いてみよう！

7月26・27日

普段から歩いている通学路とは別の場所を歩きながら、蔵やまちを再発見。蔵のまちに合う姿をイメージしながら、表と裏通りのつながり、あってほしいお店・勉強部屋など、様々なアイデアを出し合った。

第2回：実際につくってみよう！

8月26・27日

自分なりのアイデアを実際に絵や模型で作成。実際に手を動かして形にすることで、漠然としたアイデアが具体的なものとなり、まちの将来像を描く楽しさを実感。

第3回:まちの全体像をつくってみよう！

9月30日、10月1日

まずはテーマに従うタイトルやコンセプトを決め、その具体的な案をスケッチ。お店・中庭の様子など面白い絵がどんどん出来上がる。

第4回：展示会・ミニ発表会

11月18・19日

「自分が住みたいまち」に関するパネルと模型で展示を行う。会場の「油屋」の内部を、生徒たちが案内し、地元の方々の意見を聞くことが出来た。

第5回：まちづくり講演会の発表準備

12月2日

「まちづくり講演会」の発表準備を早めに終わらせ、生徒たちのお疲れ様会を行った。地元の町衆会の方々も参加し、それぞれの提案の発表練習を行った。

最終回：まちづくり講演会発表・修了式

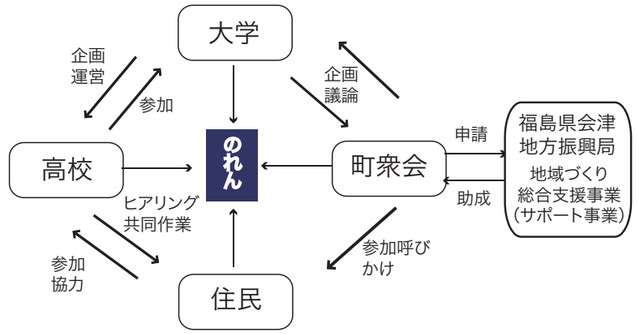
12月3日

大和川酒蔵にて景観ワークショップとともに、まちづくり塾の成果について発表た。生徒達は自分の理想像について発表した。

地元の人と協働で、街並みを変えるー「小田付のれんづくりワークショップ」(2007年)

景観ワークショップなども開催された小田付地区で、整った街並みを形成し、人々の街並みへの意識を高める社会実験として、手作りのれんをおたづき蔵通り沿道に掛けた。

町衆会は助成金の獲得、東大との協働によるのれん作成作業準備、東大は企画運営を行うなど連携体制により実現した。住民・高校生はチームに分かれ、屋号や趣味など、それぞれの顔が見える手作りのれんが沿道を彩った。



上図：2007年度まちづくり塾事業主体協力関係図

■1回目ワークショップ

1日目：7月31日(火)小田付・小荒井まちあるき、班分け

のれんを作るだけでなく、小田付・小荒井、近隣の会津若松へのまちあるきを通して喜多方の歴史に触れることも今回の目的である。油屋さんでは油を売っていた頃のお話を伺う。住民の方と班分けし、ヒアリング日時を決める。多くの女性の参加は大きな成果である。

2日目：8月1日(水)会津若松まちあるき、布裁断

末廣酒造では酒造の工程見学をした後、2階の蔵座敷も見学。野口英世ゆかりの場所で歴史を感じる。高校の家庭科室でのれん布の裁断・縫製。住民の方や家庭科の先生の協力を得て、予想を上回る数が完成した。

■第2回ワークショップ「筆入れ」

金忠駐車場にて筆入れ　(8月26日(日))

寄合所でデザインの調整をし、その後金忠の駐車場に移動して、いよいよ筆入れ。ヒアリングシートを元に、住民の好きなもの、屋号などの歴史、店で扱っているものを聞き出して、それぞれ個性的なデザインが出来上がった。

■発表会

蔵してる通りフェスティバルにてお披露目(9月7・8日(土・日))

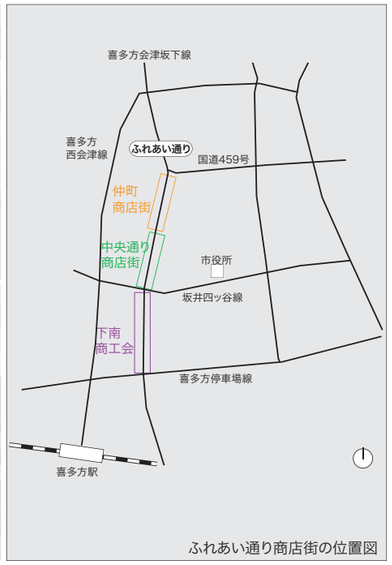
出来上がった32枚ののれんは、小田付蔵してる通りフェスティバルでお披露目された。観光客や住民へのアンケートからは、「街並みに良く似合っている」という好意的な意見が寄せられた。

実践12 ふれあい通りのまちづくり

アーケード撤去を契機とした景観づくりとイベントによる商店街活性化

■実践場所：小荒井地区
■実践の中心：ふれあい通り商店街（仲町商店街、中央通り商店街、下南商工会）
■開始時期：2005年

ふれあい通りの景観まちづくり（県道整備・アーケード撤去・沿道修景）



ふれあい通り商店街の位置図

ふれあい通りの景観まちづくりに関する近年の動き

2005	■仲町商店街が、アーケードの老朽化のために撤去を総会で決定。県の方からバリアフリーの歩道・無散水の道具を考えたらどうかという提案を受ける。
2006	■4月：第1回仲町景観勉強会（内容：景観協定の概略と具体例、締結方法） ■5月：仲町商店街振興組合で県に無散水・電線地中化のための要望書を提出しよう試みるが、市長よりふれあい通りは一つの商店街だから3商店街一緒でなければ市としては応援できないと言われる。 ■5月：市長の意見を受け、中央通り商店街の総会でアーケード撤去を決定。仲町より5年遅れてアーケードが造られたため未だに反対者は多い。 ：下南商工会は、アーケードがないため、すぐに総会でアーケード撤去が決定。 ■5月15日：市長に要望書提出 □10月：第1回打ち合わせ会（整備計画素案についての意見交換） □11月：地元主催勉強会勉強会（内容：街歩き, 景観協定の内容検討、建物補修方法など） □11月：第1回策定委員会（整備計画素案についての意見交換）
2007	□1月：第2回打ち合わせ会（まちづくりコンセプト及びゾーニングの検討） □1月：第2回策定委員会（まちづくりコンセプトの検討） □2月：地元主催勉強会（まちづくりについての勉強会） □2月：アンケート調査（ふれあい通りで大事にしたいものについて） □2月：ワークショップ（まちづくりコンセプトの検討） ■2月：仲町商店街景観協定締結 □3月：策定委員会（コンセプト・具体的整備方針・今後の進め方について） ■7月：再度県に道路の無散水を含めて要望書提出 □10月：第1回打ち合わせ会（道路幅員等の整備計画素案について意見交換） □10月：商店街勉強会（道路構造やゾーニング等について意見交換）
2008	□2月：整備計画委員会（整備計画案の検討）

□：ふれあい通り整備計画委員会
■：その他の動き

アーケード撤去決定までの道のり

喜多方の賑わいの中心、ふれあい通り。この通りは、主に3つの商店街から成っている。北から、仲町商店街、中央通り商店街、下南商工会。総長900mにも及ぶ商店街である。

現在、このうち、2つの商店街にアーケードが設置されている。デザインはやや異なるが、片側式アーケードで、主に雪／雨／日除けの機能を果たしている。

仲町商店街のアーケードが設置されたのは1946年、そして中央通り商店街のアーケードが完成したのがその5年後の1951年である。時は高度経済成長期。ふれあい通り商店街には、今とは比べ物にならないくらい賑わいがあった。

しかし、現在、それらのアーケードは老朽化が進んできているという安全面での課題、また、蔵を隠しているという景観面での課題を抱えている。

そこで、仲町商店街は2005年に、中央通り商店街では2006年に総会でアーケード撤去を決定。加えて、下南商工会でも、アーケード撤去に合意がなされた。

街路整備事業

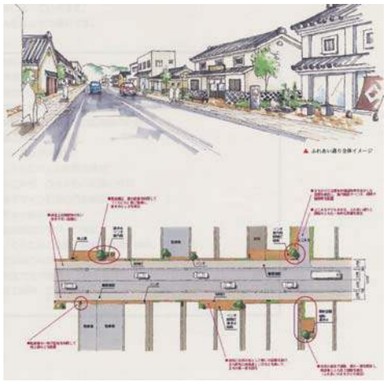
アーケード撤去決定には、県が実施主体の街路事業も一つの契機となっている。この事業では、街路の無電柱化と無散水消雪化が予定されており、これがアーケード撤去と連動することになった。また、この無電柱化に伴い、トランスの置き場が課題となるが、沿道の民地もしくは公共の取得した土地に確保し、そこをオープンスペース（くらにわ）として整備するシステムで検討している。（整備イメージはP.93上図を参照。）

県は、ふれあい通りのまちづくりの方針について地元と協働で検討できるよう、「ふれあい通り整備計画委員会」を2006年に発足させた。委員長は、北沢猛（東京大学教授）、副委員長は北山恒彦（福島県景観アドバイザー）、委員として各商店街会長や喜多方市の関係諸課、喜多方建設事務所などである。これまで、打ち合わせ会や策定委員会、勉強会などを開催してきている。

沿道修景としての仲町商店街町並み協定

仲町商店街では、今後実施されるアーケード撤去、街路事業を一つの契機として、魅力的な景観をつくり調和のとれたまちづくりを進めるため、2007年2月、「仲町商店街町並み協定」を締結した。またこれには、街路だけでなく、沿道のまちづくりも一体的に行うことの重要性への認識も背景となっている。

この協定では、主に、協定者が住宅等について、①新築、②増築、③改築、④外観の大規模な模様替え、⑤外観の大規模な色彩の変更、⑥屋外看板の設置、⑦門、堀、生け垣等の設置、⑧建築設備等（屋外の建築設備等）を行おうとする場合は、協定事項（右欄参照）に配慮するとともに、委員会と事前に協議しなければならないということを定めている。


ふれあい通り整備計画委員会で提示された具体的整備イメージ

協定事項
店舗等の新築、増築、改築、外観の大規模な模様替え・色彩の変更等に当たっては、下記の事項に配慮するものとする。

1)形態:建築物等の形態については、「明治　大正　昭和　平成」という時代の違った建築物が混在する歴史性を鑑みその時代の建築物の特長を生かしつつ、町並み全体の調和を図ることとする。

2)意匠:建築物のデザインは、区域内の他の建築物等との調和を考慮したデザインとする。

3)色彩:建築物等の屋根、外壁、開口部等の色彩は、高明度、高彩度をさけ、町並み全体の調和を図るものとする。

4)素材（材料）:建設された時代に適した材料を生かしつつ、屋根、外壁、開口部等の素材は町並み全体の調和を考慮することとする。

5)緑化:通りに面する空地、小スペースについては、極力植樹、植栽等による緑化を検討する。

6)看板等:屋外看板は、必要最小限の数、大きさとし、原色の使用はできる限り避け、かつ町並み全体と調和したデザイン、素材とする。

7)門、堀等:門及び堀は、町並み全体と調和したデザイン、色調、素材とする。

イベントによる商店街活性化

商店街に来てもらう仕掛け

喜多方においても、他都市と同様、モータリゼーションの進展により、郊外に大規模ショッピングセンターが進出している。そのため、人々は、そうしたショッピングセンターで日用品などの買い物をすましており、商店街で買い物を楽しむことは少なくなっている。

そこで、ふれあい通りでは、まずは商店街に来てもらうこと、ふれあい通りの商店街の魅力を知ってもらうことを目的として、多彩なイベントを行っている。

具体的には、下記のイベントがある。

・蔵みっせ(2002)　「蔵の会」とふれあい通り商店街が実施主体となり、当研究室がサポートするかたちで行われたイベント。蔵の魅力、蔵をもつ商店街の魅力を発信した（P.70参照）。

・レトロ横丁(2005～)　2005年会津デスティネーションキャンペーンのイベントの一環として実施したのが始まり。非常に好評だったため、翌年以降も継続して実施している。ふれあい通り商店街が中心となり、「レトロ」テーマにしたショーなどを行っている。

・100円商店街(2007)　中央通り青年会のメンバーらが、Webで山形県新庄市の商店街で実施している「新庄１００円商店街」の取り組みを知ったことが契機となっている。「新庄１００円商店街」を構築した新庄市役所職員でＮＰＯ団体代表の斎藤一成さんを招き、勉強会を開催。１００円商店街のメリットや課題、ノウハウなどを学んだ。実施当日は、多くの人で賑わった。

レトロ横丁のポスター

蔵deしゃべんべ（蔵みっせのコンテンツの一つ）の様子

１００円商店街のシステムは１００円の商品を店頭に並べ販売、店主は店頭に出て客と会話し、精算は店内で行う。客が店内に足を運ぶことで、店内の商品やその店の魅力を知ってもらえるメリットがある。

100円商店街の様子

実践13 おたづきのまちづくり

会津北方小田付郷町衆会の取組み

■実践場所：小田付地区
■実践主体：会津北方小田付郷町衆会
■開始時期：2003年（町衆会設立）

おたづきまちづくりの概略

小田付は、喜多方では小荒井と共に古くから栄えていた。その後、市街化が進み、「蔵が多いもののまちなみに活かしきれていない」という思いを持った有志が立ち上がり、会津北方小田付郷町衆会が結成された。

町衆会の取り組み

会津北方小田付郷町衆会とは、小田付地区に残る蔵の町並みを保存し、最大限に利活用することで、この地区のみならず地域全体の活性化に寄与することを目的に、平成15年10月、民間のまちづくり団体として設立された。会員は、住民と各種スペシャリストで構成され、約50名。

活動拠点

おたづき蔵通りに面した「まちづくり寄合所」を中心に活動を行っている。

▲まちづくり寄合所

町衆会の活動履歴

■平成16年度
・「蔵のまち喜多方まちづくり寄合所」立ち上げ[5月]
・空き蔵の清掃活動[6月～7月]
・南町蔵の町並み試験的ライトアップ[8月]
・「蔵してる通りフェスティバル」[10月]
・「第１回まちづくり学会（まなびあい）IN喜多方」に参加[12月]

■ 平成17年度
・「小田付の蔵で民話とそばを楽しむ会」[2月]
・南町大森家店蔵に「小田付寄合所」開設[4月]
・「蔵のまち活性化事業」南町の町並みライトアップ開始[7月]
・「蔵してる通りフォトコンテスト」実施[7月～9月]
・「第2回蔵してる通りフェスティバル」秋の小田付宵祭り[9月]
・喜多方まちづくりシンポジウムに参加[11月]

■平成18年度
・愛称公募による「おたづき蔵通り」表示板設置[3月]
・「歴史的景観を活かした住民と学生による地域活性化事業」
・「第3回蔵してる通りフェスティバル」/　獅子舞フェスタ[9月]
・「まちづくり塾」「景観ワークショップ」開催[7月～10月]
・「まちづくり講演会」開催[12月]

■平成19年度
・「まちなみのれん事業（のれんわーくしょっぷ）」開催[7月～9月]
・「蔵のまちづくり博覧会（くらはく）」開催[10月]

▲第１回まちづくり学会IN喜多方の様子

▲「小田付の蔵で民話とそばを楽しむ会」の様子

▲のれんのまちなみ（"くらはく"時）

取り組み01：蔵の活用

空き蔵の開放・「まちづくり寄合所」開設

現在のカフェモーツアルト、寄合所（大森家店蔵）、油屋（渡部家店蔵）という3棟の蔵を空けた。最初に空けた蔵は、初代寄合所として使用後、新たな借り手が見つかったため、2棟目にあけた蔵を現在寄合所として使用している。寄合所は、高齢者生産活動センターとしてサブリースするほか、東京大学都市デザイン研究室喜多方分室としても機能している(P.78参照)。

▲初代寄合所開設時（平成16年）

▲渡部家の蔵を開放（平成17年）

取り組み02：イベントの実施

「蔵してる通りフェスティバル」開催

小田付蔵通りを歩行者天国とし、太極拳の演舞や、普段は非公開の蔵の開放、夜はうらみちのライトアップなど、さまざまな催しを行っている。2004年から毎年開催され、地域に密着したイベントとして、親しまれている(P.75参照)。

▲「第１回獅子舞フェスタ」（平成18年）

▲景観実験の様子（平成19年）

取り組み03：まちなみの演出

「蔵の町並みライトアップ」・幻燈会

蔵の魅力を向上させるためにライトアップや幻燈会により、通りを演出している。

幻燈会は、白漆喰の蔵の壁面をスクリーンに見立てて、小田付のまちづくりの取り組みや会津型などの写真をプロジェクタで投影している(P.116参照)。

▲町並みライトアップの開始（平成17年）

▲幻燈会（平成19年）

取り組み04：通りの統一

愛称「おたづき蔵通り」公募

通りの愛称を公募し、通り沿いに表示看板（写真）を設置した。また、のれんを用いた景観実験を行い、おたづき蔵通り沿道に統一されたのれんを連続して掲げることで、通りの一体感の向上を図った（P.80参照）。

▲通り名看板の設置（平成18年）

▲のれんのまちなみ（平成19年）

取り組み05：まちづくりの教育

勉強会やまちづくり塾の開催

景観協定の締結やまちの将来を構想に向けて、勉強会やワークショップの開催を行っている。また、のれんワークショップやまちづくり塾では、地元高校生と共に取り組みを行い、住民と高校生との交流を促進するなど、次世代の担い手の育成にも力を入れている(P.90参照)。

▲第１回景観ワークショップの様子（平成18年）

▲まちづくり塾での高校生による発表（平成18年）

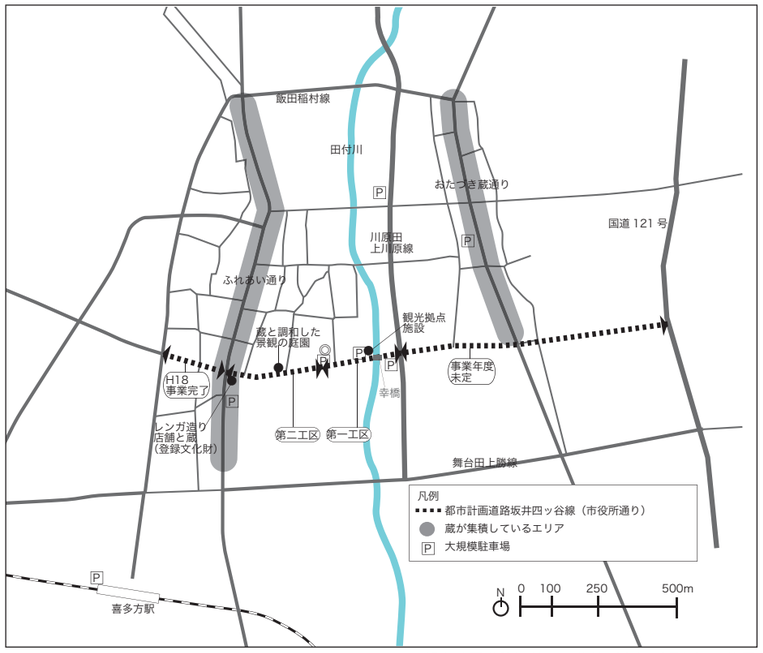
実践14 市役所通りのまちづくり

都市計画道路拡幅を通してまちづくりのあり方を考える

■実践場所：市役所通り
■実践主体：「市役所通りを良くする会」、「市役所通りまちづくり検討委員会」など
■開始時期：2005年

道路拡幅が予定されている市役所通りの現況

整備済みの市役所通り
（西原北町線交差点～笹屋旅館前の区間）



都市計画道路坂井四ッ谷線（市役所通り）の位置

市役所通りを巡る一連の経緯

・2000 年：市役所通りを、幅員 20m に拡幅するという都市計画決定。同時に、福島県の事業として、幸橋の架け替えが計画された。
・2005 年 10 月：住民の意向に合わせて道路事業を進めてもらうことを目的として、市役所通りを構成する４つの町（幸町・御清水・下町北部・下町南部）を横断的に連絡する会「市役所通りを良くする会」が設立。
・2006 年：西原北町線交差点～笹屋旅館前の区間について、事業完了。
・2006 年 8 月：「喜多方市のまちづくりを考える市民有志」が、喜多方市に公開質問状を提出。
・2006 年 10 月：行政・専門家・市民が「市役所通りまちづくり検討委員会」を設立、第 1 回を開催。
・2006 年 10 月末：第 2 回「市役所通りまちづくり検討委員会」。
・2006 年 11 月：第 3 回「市役所通りまちづくり検討委員会」。
・2006 年 11 月末：第 4 回「市役所通りまちづくり検討委員会」。現地確認。
・2006 年 12 月：第 5 回「市役所通りまちづくり検討委員会」。まちづくりの方向性に関する基本的な合意に至る。

喜多方中心部に相応しい通りとは

喜多方市中心部に位置し、小田付地区と小荒井地区を繋ぐ東西の動線である道路（通称・市役所通り）は、現在、幅員 9.0m の通りである（ただし笹屋旅館より西側は、これまでは私有地で通りではない）。この市役所通りは、市民だけでなく観光客も多く利用する通りであるが、「通りが狭くて歩きにくい、危ない。」という声が多く聞かれ、また田付川に架かる橋である幸橋も老朽化が進んでおり、何らかの改善を求められていた。

そうした中で、1998 年に策定された喜多方市都市計画マスタープランにおいて、「シンボルロードとしてゆとりある幅員をもつ道路とする」と方針づけられ、2000 年、全長 1,612.0m について幅員 20.0m の道路として整備するという都市計画決定がなされた。またそれと合わせて福島県は幸橋の架け替えを計画した。

意見対立からまちづくりのビジョンの共有へ

しかし、2005 年以降、20m という道路幅員などの整備方針を巡り（論点は P.97 上の囲み参照）、一部市民と市で意見対立が起きる。2005 年 10 月には地権者を含むメンバー約 40 名が「市役所通りを良くする会」を結成し、「市民の意向を尊重して事業を進めてほしい」とを市に訴えた。また、市内でまちづくりを積極的に行っている市民から計画の整備方針の再検討を求める声があがった。そこで、市役所通りのまちづくりのあり方を検討する組織として、「市役所通りまちづくり検討委員会」が設立された。

委員会は計５回開催され、2006 年 12 月、市と市民の間で「まちづくりの基本構想」及び「第一工区の整備方針」など全 10 項目からなる「確認書」について合意に至った。具体的には、「街路事業とまちづくり事業を一体的に進めること」、「市役所通りの特性を活かし、観光情報、生活賑わい、歴史文化の各ゾーンに区分し、それぞれの個性に応じた整備を行う」、「幸橋を含む 260m を第一工区、西側 290m を第二工区として区分し、第一工区は計画幅員 20m で整備を図る」などである。

市役所通りを巡る主な論点

●市役所通りのまちづくりのビジョン・市役所通りの位置づけ
●20m という幅員
●沿道空間
　・レンガ造り店舗と蔵（登録文化財）
　・蔵と調和した景観をもつ庭園
　・駐車場
　・残地
●景観

模型や事例などによる検討

東大都市デザイン研究室も、「市役所通りを良くする会」のメンバーとまちづくりのあり方について検討を重ねた。

具体的には、当研究室が作成した通りの模型（道路幅員が 9m、12m、16m、20m という４種類）や都市計画道路拡幅事例集などを元に、市役所通りのあり方について検討した。

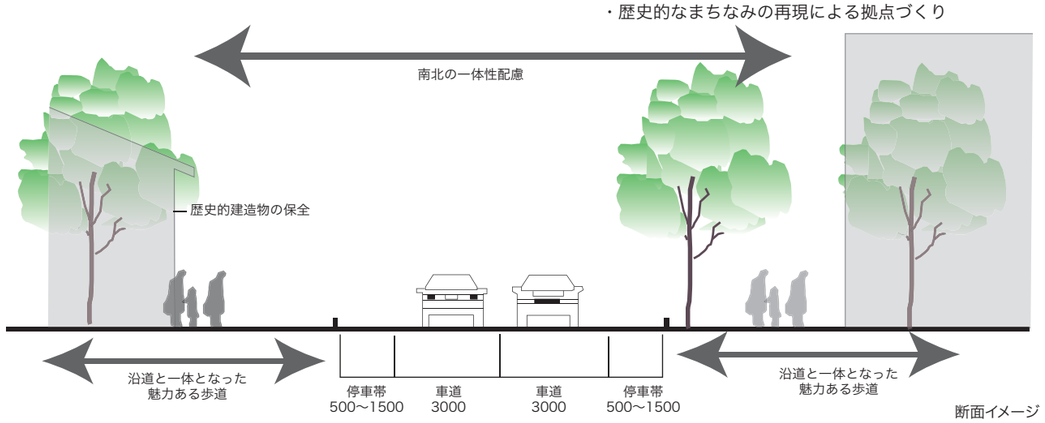
「市役所通りを良くする会」メンバーと東大学生の検討風景

喜多方市市役所通りまちづくり基本構想　市役所通り・全体整備方針

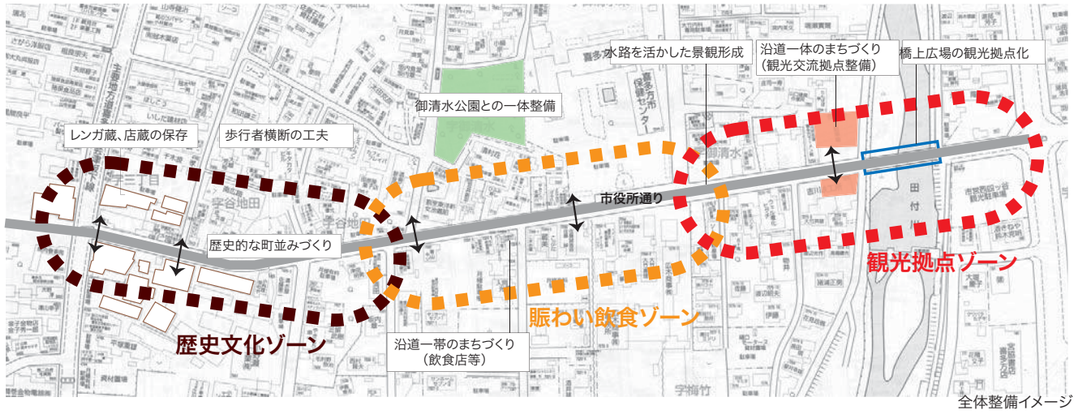
（2006 年「市役所通りまちづくり検討委員会」で合意）

（まちづくり・みちづくりコンセプト）
食と蔵、水とみどりを活かした生活、観光交流のあるまち
～まちなかの回遊へと誘う喜多方のシンボルロード～

（1）歩行者優先の歩きやすいみちづくり
　・南北歩行者横断への配慮
　・市役所以西～ふれあい通りの車両交通の抑制
（2）水や蔵など地域資源を活かしたみちづくり
　・水路の活用
　・田付川を活かした景観形成
　・蔵を核とした歴史的なまちなみの形成
（3）沿道土地利用を促進し、賑わいと魅力あるみちづくり
　・幸橋周辺の観光交流拠点の整備
　・飲食店舗の立地誘導促進
○幸橋整備
　・地域のシンボルとなる特色のある橋梁整備
　・歩道等を観光拠点、広場として活用
○観光拠点ゾーン
　・街路と沿道の一体整備により、観光交流機能の強化
○賑わい飲食ゾーン
　・街路と沿道の一体整備により、商業機能の強化
　・水路等水を活かした修景整備
○歴史・文化ゾーン
　・若喜商店のレンガ蔵及び松本屋の店舗の保存
　・歴史的なまちなみの再現による拠点づくり



断面イメージ

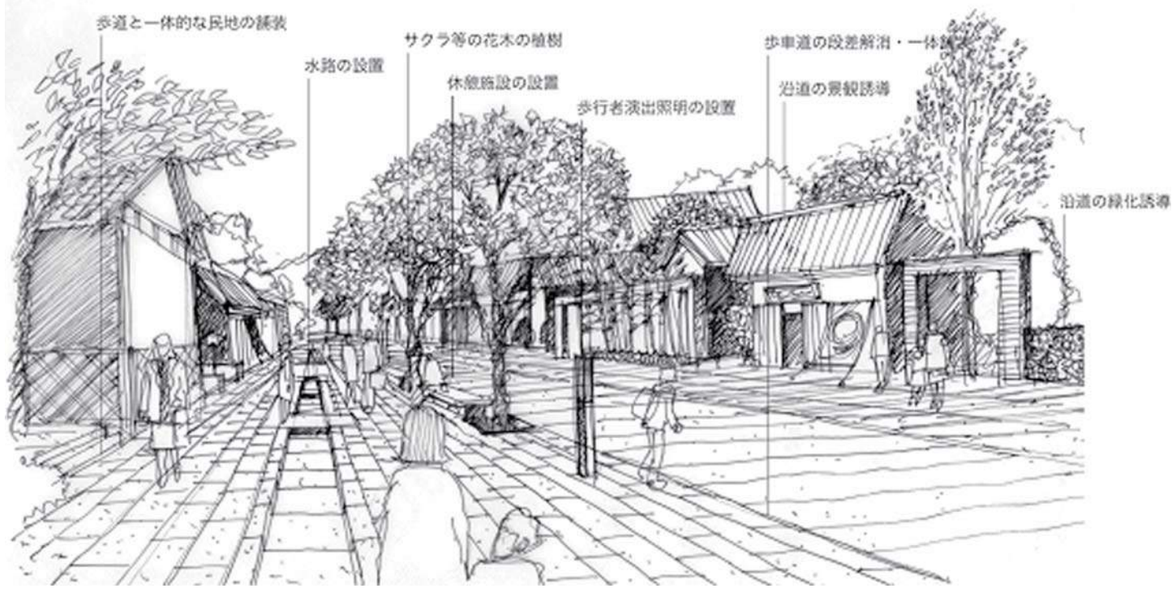


全体整備イメージ

実践15 駅前通りのまちづくり

駅前通り拡幅整備を中心とした空間再編の展開

■実践場所：喜多方駅前通りエリア
■実践主体：福島県喜多方建設事務所
　　栄町地区振興整備委員会
　　沿道店舗・住民
■開始時期：2000年～



計画検討時の駅前通りのイメージスケッチ

水と緑で迎えるゆとりある駅前空間に向けて

駅前通り（県道西小原北町線）の20m道路拡幅事業を契機とした駅前通り地区（栄町地区他）におけるまちづくりの展開である。

昭和16年に都市計画決定された西小原喜多方線（駅前広場含む。後に西小原北町線に変更）は、平成4年の都市計画変更により幅員20mとなる。

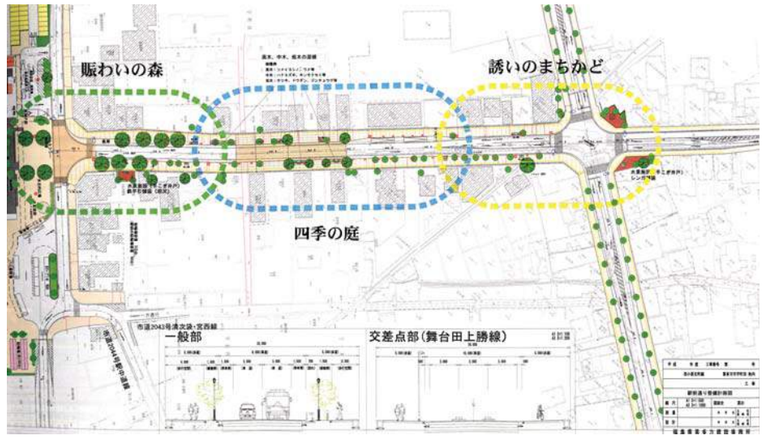
平成11年度に市・県喜多方建設事務所により、駅前広場及び駅前通りの整備に関する具体的な調査提案が行われた後、平成12年度に、喜多方駅前沿道景観形成計画策定協議会が設置され、住民の任意の意向による景観協定制定の動きを経て、平成14年に「喜多方駅前通りまちづくり協定」（景観協定）が締結される。

その後も、駅前広場・駅前通りの景観デザイン検討（H14年度）、道路整備に伴う駅前まちづくりワークショップ（H15-16年度）が行われ、市民・行政・地元による整備構想の原案が議論されていた（駅前広場についても平成16年度に基本計画が検討されている）。

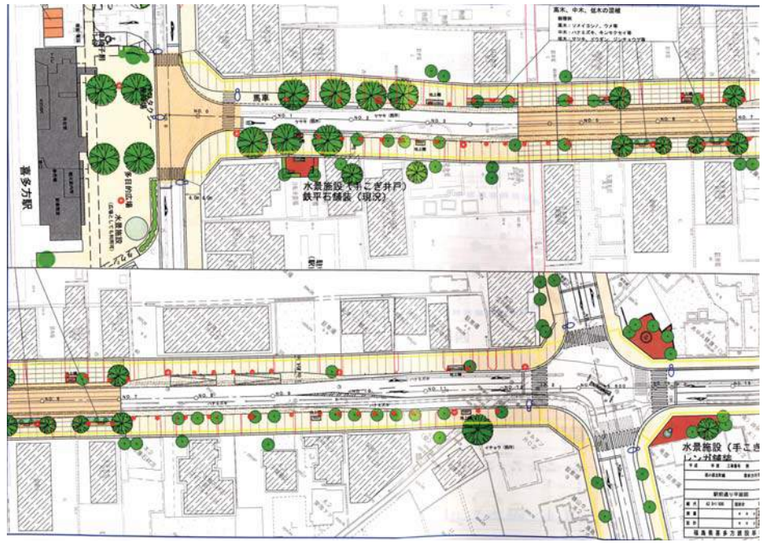
これを受けながら、平成17年度は、喜多方中心のまちなかプランの検討（民官学の連携した喜多方まちづくりの実践その2）が実施される中で、駅前通りの位置づけが再確認されるとともに、平成18年度には、西小原北町線整備計画策定委員会が開かれ、具体的な整備計画について、行政・地元・市民・専門家を含めて検討されている。

と同時に、拡幅に向けての用地買収は並行的に進められ、18年度には、ほぼ概ね完了し、平成19年度には、電線等を含めた工事が開始している。今後の工事においては、道路だけでなく、その沿道及び、駅前広場整備についても、同時に検討・実施される必要がある。

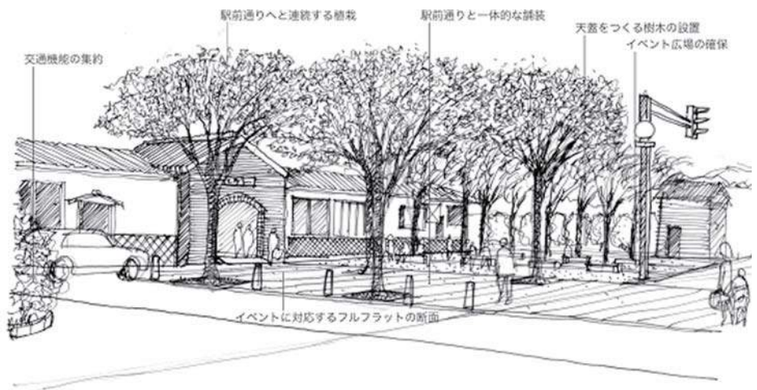
沿道については、前述の景観協定によって、沿道景観の考え方が共有され、拡幅の進展による建替えに伴い、特に東側沿道については、多くが建て替わっており、修景が進んでいる。また、地域の貴重な資源である蔵などが建替えに伴って失われたこともあり、今後の道路整備への示唆も見られる。



駅前通りゾーニング計画（H19.3）



駅前通り整備計画図（H19.3）



計画検討時の駅前広場のイメージスケッチ

県道拡幅整備の設計計画

無電柱化・無散水消雪化の実施して、機能を確保しつつ、歩車道の差が大きくならないよう、フラット化して植栽・水路・ボラード等でのコントロール、素材も歩車道で異ならない検討がされている（標準断面、5.5m-9m-5.5m）。

また、駅前通りを駅から「賑わいの森」（駅前広場との接続）-「四季の庭」（沿道部）-「誘いのまちかど」（北側交差点部）とゾーニングし、デザイン・植栽・空間の計画を行う。駅前付近の既存のケヤキの木は生かしながら、中央部四季の庭に豊かな植栽を配し、残りの箇所にはハナミズキ等の中木を整備することが検討されている。両端部及び四季の庭内、中央部には、重点的な植栽・オープンスペース・水路空間などを整備することでメリハリのある空間整備を行う。

「くらにわ」の展開

ふれあい通りも含めた喜多方市における道路沿道の考え方として「くらにわ」が検討されている。これは、蔵や資源を中心とした沿道における小広場空間である。蔵の前の沿道の小広場空間を植栽豊かな、ゆとりと憩いの空間として整備することで、沿道の資源を活かすとともに、ふくらみのある快適な歩行空間の整備を両立するものである。

駅前通りでは、北側交差点部に二箇所、駅前付近に一箇所、水と植栽の豊かなポケットパークの設置が検討されている。

沿道景観への展開

栄町地区振興整備委員会における景観まちづくり協定の考え方に則り計画されており、道路整備後の街並みの連続を考慮に入れながら設計を行っており、今後の駅前通り、喜多方の街並みづくりのあり方も視野に入れた計画となっている。

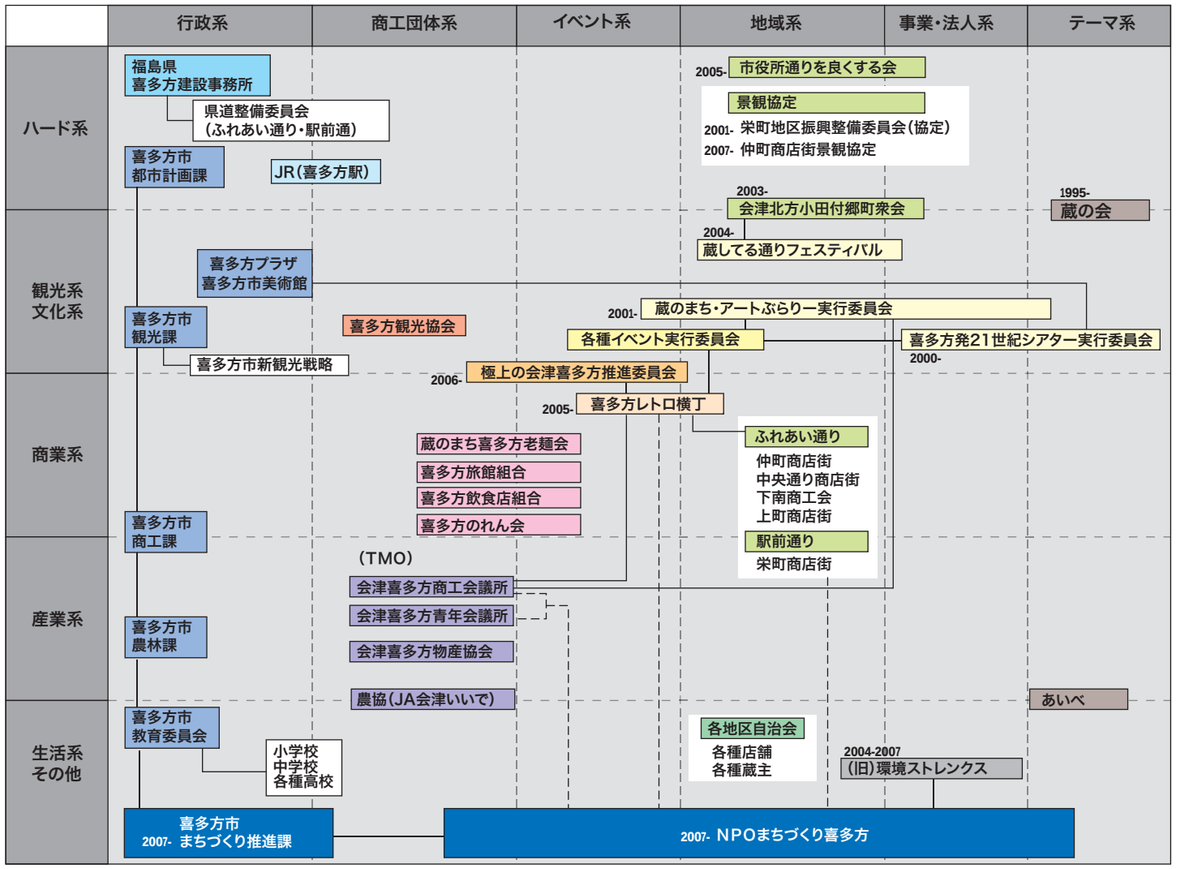
駅前広場整備：「喜多方の森」

駅前通りの拡幅実施にあわせて、駅前広場についても同時に検討する必要がある。平成１６年度に基本計画が策定され、その後詳細について検討中である。喜多方の豊かな自然の感じられる駅前として、植栽豊かな広場であるとともに、イベントも可能な、ゆとりある、そして、駅前通りと一体となる歩行者空間（広場）の確保及び、交錯することのないよう、バス・タクシーバースと自家用バースを分離する計画をベースに検討が進められている。

実践16 喜多方まちづくり組織の展開

まちづくり活動を推進する器の広がり

■実践場所：喜多方市全体
■実施時期：2000年～（蔵の会は1995年～）



喜多方において、いわゆるまちづくり活動が盛んになってくるのは、ここ十年であるが、その間に、非常に多岐に渡る活動への展開が見られる。

喜多方まちづくりの象徴である蔵の保全活用と、これにまつわる文化の継承育成を目的として、蔵主を中心とした任意団体である**喜多方蔵の会**が1995年に設立され、蔵を中心とした積極的活動が展開される。2000年度以降も、東京大学・ふれあい通りの各商店街と協力しながら、イベント「蔵みっせ」を開催したり、蔵の調査を行うなど活発に活動している。

また、文化芸術を活かしたまちづくりの展開として、喜多方市美術館や喜多方プラザ等の企画を基とした、**「喜多方発２１世紀シアター」「蔵のまちアートぶらりー」の実行委員会**など、企画を中心とした組織活動も展開した。

また、会津DCを機会にレトロ横丁の実行委員会など、商工会議所を中心とした動きも展開され、**「極上の会津喜多方推進委員会」**など、喜多方の観光を中心とした組織的連携も起きている。

地域活動を見ると、小田付地区南町を中心に、地域の蔵の保全活用を中心としたまちづくり団体として2003年より**「会津北方小田付郷町衆会」**が、地域独自の活動を展開している。また、道路沿道整備や拡幅事業を契機として、**「市役所通りを良くする会」**や、**栄町地区振興整備委員会**や仲町商店街などが、これに伴う景観協定を運営している。

そして、2007年４月には、これらを統括するための市の行政担当組織として、**「まちづくり推進課」**が創設された。一方、民間・市民の側でもNPO法人環境ストレンクスが、さらなる広いまちづくり事業全般を担うために、2007年11月、**NPO法人まちづくり喜多方**へと改組し、喜多方のまちづくり活動を戦略的に展開する器として機能している。今後、この両組織を軸としたまちづくりの連携が期待される。

また、これら諸団体が連携する組織として、「喜多方蔵のまちづくり協議会」が2006年に設立され、民官学連携により「蔵のまちづくり博覧会」を始めとした協働まちづくりを展開している。

主なまちづくり活動・まちづくり組織

喜多方蔵の会

設立：1995年8月
形式：任意団体（喜多方市内の62名の蔵を愛する有志によって設立。蔵主が多い。）
参加：誰でも可。蔵の所有にかかわらず多くの賛同者により会を組織する。
概要：喜多方のまちや文化の象徴である「蔵」とこれをとりまく文化を保全活用・これにまつわる事業等により、地域経済、社会、文化振興への寄与を目的とする。
※伝統文化の継承と発展に関する事業（蔵に関する調査研究・実測／学習会の開催等）
※蔵再生・町並み保存／蔵文化維持のための環境整備事業）
※市民ニーズによるイベントの企画

「喜多方レトロ横丁」実行委員会

設立：2005年
概要：JRあいづデスティネーションキャンペーン実施にあわせて、喜多方市の中心市街地振興を目的とした、商店街（商工会議所等）を中心としたイベント「喜多方レトロ横丁」を実施するための委員会。キャンペーン終了後も、継続的に実施されており、2007年で３回を迎えた。
　また、その後も、空き店舗を利用し、2008年4月に「昭和レトロミュージアム」（県地域づくり総合支援事業）を予定するなど、恒常的なまちづくりへの動きにも派生している。

極上の会津喜多方推進委員会

設立：2006年
概要：会津デスティネーションキャンペーン終了を受け継ぐ形での極上の会津プロジェクト協議会設立にあわせて、喜多方観光協会内で設立された組織。「福島県あいづデスティネーションキャンペーン喜多方地区推進委員会」の発展的再組織化でもある。委員会は、「見たい」「遊びたい」「食べたい」「癒されたい」部会の4部会に分かれ、「見たい部会」の「ひなの蔵めぐり」「天神様の蔵めぐり」や、「遊びたい部会」の「雪小法師づくり」「喜多方ナイトマップ」など、各部会が独自の活動として展開している。

ふれあい通り商店街

概要：県道21号（会津坂下線）に並ぶ、仲町商店街（S49-）、中央通り商店街、下南商工会は、通称あわせて「ふれあい通り商店街」と呼ばれ、各種イベントを含めて協力的に行われており、蔵みっせなどのイベント時にはふれあい通りを中心として協力的に実施された。
　2007年には、ふれあい通りにかかるアーケード撤去および県道整備（無散水消雪・無電柱化等）への合意がなされ、実施に向けて検討が進められている。また、2007年には、仲町において、景観協定（喜多方仲町商店街景観協定）が締結されるなど、景観まちづくりの動きもある。

栄町地区振興整備委員会

設立：2001年
形式：任意団体
会員：地権者他
概要：駅前通り（県道）拡幅整備及び沿道整備の受け皿として、組織された地権者の委員会であるとともに、地域の景観協定（景観まちづくり協定）における運営委員会の準備委員会としての役割も併せ持つ。
　駅前通りの沿道整備のあり方を中心としながら、駅前通りを含めた地区全体の再生についてもあわせて議論する機関となっている。

市役所通りを良くする会

設立：2005年10月
形式：任意団体
会員：会費制（地権者12名を含む約40名、会員には誰でもなれる）
概要：市役所通り（坂井西四ツ谷線）の拡幅事業（都市計画決定）を契機にしながら、市役所通りを中心にしたまちづくりをどのように考えるかをキッカケにしてできた任意団体。
　当団体から、市への質問状提出をきっかけに、市・市民・専門家等の関係者が一同介した協議の場（市役所通り検討委員会）が誕生し、喜多方まちづくりの進展ともいうべき協働の姿が現れる。

会津北方小田付郷町衆会

設立：2003年10月
形式：任意団体（民間まちづくり団体）
会員：地元住民・市職員他・会員は50名程度
概要：南町・小田付のまちづくりを考える任意団体。
　喜多方の小田付地区に今もなお残る蔵の町並を保存し、最大限に利用する事で、この地区のみならず地域全体の活性化に寄与する事を目的とする
※「蔵してる通りフェスティバル」開催
※ まちづくり寄合所の開設運営
※「まちづくり塾」の開催

NPOまちづくり喜多方

設立：2007年11月（NPO法人環境ストレンクス［任意団体としては2004年6月、法人化は、2005年8月］より改組）
形式：NPO法人
代表：代表理事 江花 圭司
概要：ベロタクシーを運営していたNPO環境ストレンクスが、さらに幅広いまちづくり活動を運営するために改組。
　喜多方のまちづくりに関する情報を集め、事務局等を行いながら、戦略的なまちづくり事業を展開してゆく。
　「くらはく」等でも中心的な役割を果たした。

喜多方市まちづくり推進課

設立：2007年4月 新設
形式：行政担当課
代表：課長 五十嵐 哲矢
概要：幅広くまちづくりに関する企画事業を統括管理するために、2007年度の新たに創設された喜多方市内の部署。
　主に以下の点を中心に運営する。
　※国土利用計画
　※景観形成
　※まちなか再生、
　※蔵のまち魅力創出、
　※構造改革特別区域計画
　※蔵サイン事業（2007年度）

「まちづくり研究会」から「蔵のまちづくり協議会」へ

喜多方のまちづくり活動を俯瞰したとき、個々の活動は充実しながらも、これらの連携がないために、喜多方まちづくりの推進力となりえていないことから、幅広いまちづくりの主体が一同介してまちづくりの議論をし、情報交換する場として、東京大学都市デザイン研究室の協力も得ながら、2005年、**「まちづくり研究会」**が発足し、準備会を経て、同年８月に第一回研究会では、まちなか居住と交流人口、10月に第二回ではふれあい通りについて、第三回でまちなかの考え方が議論されるなど幅広い議論が展開された。

その後、この研究会での幅広い主体の連携という方向性を踏まえ、2006年7月**「蔵のまちづくり協議会」**が設立された。2006年度は、上町地区の煉瓦蔵の一部をまちづくり研修所として、担い手育成のための研修会等が実施された。

2007年度は、主に、「くらはく」（蔵のまちづくり博覧会）の実施運営主体、及び、喜多方市の中心部に対する任意プランである「まちなかプラン」の策定に関する委員会としての運営が行われた。

組織構成は、市民団体（喜多方蔵の会、会津北方小田付郷町衆会、NPOまちづくり喜多方、会津喜多方YOSAKOI庄助祭り実行委員会その他）、商工団体（会津北方商工会議所、喜多方のれん会、商店街等）、行政（喜多方市、県会津振興局、県喜多方権津事務所）、学術機関（東京大学）と多岐に渡る、総合的なまちづくり推進機関である。

「まちづくり研究会」による任意プラン「喜多方まちなかプラン」（2005年度）

2005年に発足した「まちづくり研究会」での検討を経て策定された任意プラン「喜多方まちなかプラン」は、後のまちづくり協議会を中心とした、まちの全体ビジョンに関する議論の土台となったものである。

まちなか全体の基本理念として**「歴史・文化・自然を活かした持続可能なまちづくり」**を掲げ、以下の3つの基本方針を位置づけた。

①喜多方の「蔵」文化、歴史を活かしたまちづくりの実践
②水と緑あふれる都市空間・都市環境の実現
③快適でコンパクトな「生活環境」の形成

さらに交通・歩行者環境、街路空間、水・緑、住環境・公共サービス、観光、歴史・文化資源の6つのテーマ毎に、目標と方針を定めた。

これらの全体的な考え方を踏まえ、まちなかの骨格となる以下の4地区について、ハード・ソフト両面からの具体的な提案を盛り込んだ地区別プランを策定した。

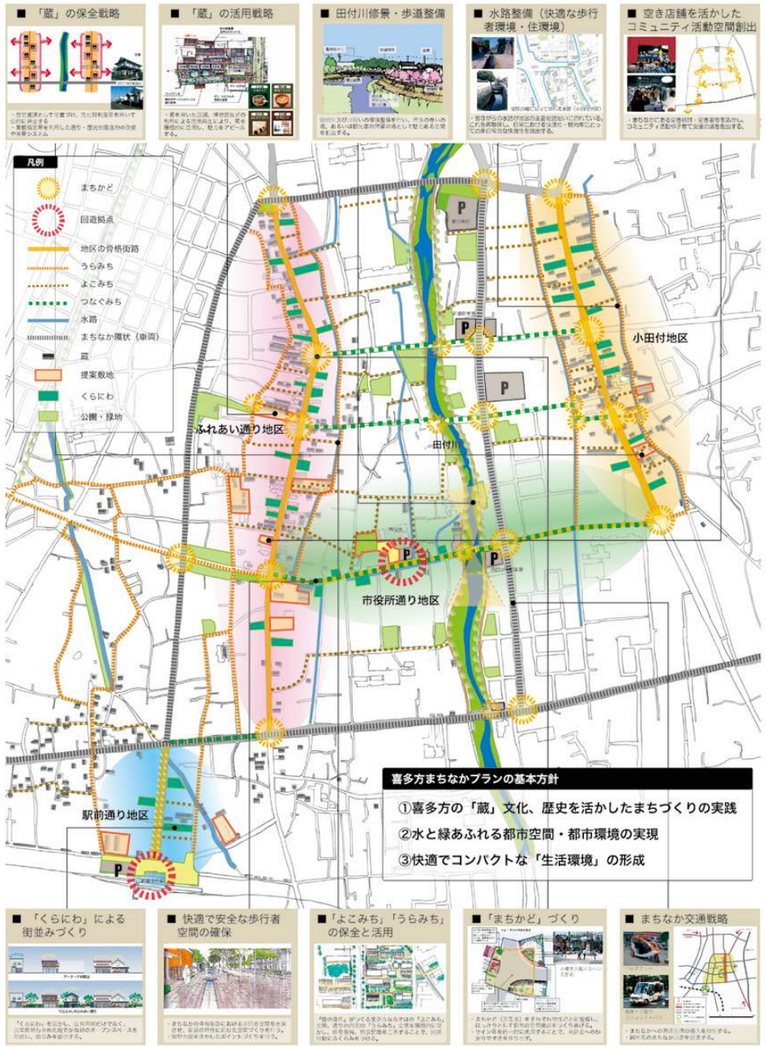
ふれあい通り地区：喜多方のシンボルエリアとして位置づけ、蔵をはじめとしたまちの個性を磨くとともに、生活サービス機能を充実させ、多様な賑わいを創出する。

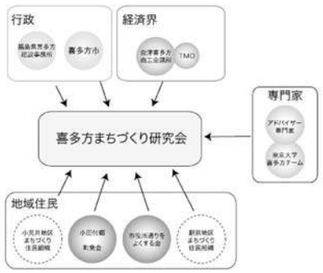
小田付地区：歴史的な町並みを継承しながら、伝統産業に根ざした蔵のあり方を、現代の住環境の側面からも再考し、喜多方らしい独自のライフスタイルを構築する。

市役所通り地区：市役所やラーメン店の集積、田付川の身近な自然を活かし、市民・観光客共通の憩いのエリアとして、また自動車利用者を想定した第二の回遊拠点として位置づける。

駅前通り地区：現状のゆとりある空間配置を活かし、水と緑による憩いのある駅前空間創出とともに、交通拠点としてあらためて位置づけ、コンパクトな土地利用の展開を図る。

■喜多方まちなかプラン■





上図：「喜多方まちなかプラン」全体図
右写真：第1回まちづくり研究会の様子
左図：まちづくり研究会の構成

4章　喜多方蔵のまちづくり博覧会（くらはく）

「くらはく」とは、①喜多方のまちが積み上げてきた魅力の再発見、②多様なまちづくり活動の発信、③喜多方の未来に向けての提案と議論を共有するための、「まちづくり博覧会」である。喜多方まちづくりの現状を整理しつつ、これを広く市民、来訪者、そして、喜多方に愛着のある方々に伝え、新たなまちづくりの方向性をみんなで考えるための博覧会である。会場は、喜多方のまち全体を舞台として行う。それ自体が、まちづくり活動の成果であり、資源が至るところに隠された、いわば「まちじゅうが博覧会」である。また、この博覧会自体が、ある種、まちづくりの実験でもある。まちじゅうに展示の仕掛け、活用可能性のある空蔵や空地の利用、まちづくりの議論を細やかに行うための語合いなど、「くらはく」自体が「まちづくり実験」であり、これを通して、今後のまちづくりの方向性を見出すことも目的とする。

01 喜多方のまちづくりが一堂に会する「博覧会」
「くらはく」とは

くらはくで配布したブックレット

喜多方蔵のまちづくり博覧会（くらはく）

・開催期間：2007/10/05（金）～14（日）
・主催：喜多方蔵のまちづくり協議会
・共催：NPOまちづくり喜多方、東京大学大学院都市デザイン研究室
　　福島県、喜多方市
・後援：会津喜多方商工会議所
　　福島民放社、福島民友新聞社
　　喜多方シティエフエム、喜多方観光協会
・同時開催：蔵のまちアートぷらりーvol.7

喜多方まちづくりの展開

飯豊連峰に抱かれた会津盆地でじっくりと紡がれてきた「蔵ずまいのまち」喜多方。金田実氏の写真展を皮切りに、NHK新日本紀行「蔵ずまいのまち」にて日本全国に紹介されてから三十有余年を経た現在、ラーメン人気も全国区となり、今では年間100万人もの人が訪れるまちへと成長した。一方で、まちの賑わいは徐々に少なくなっているとともに、まちのシンボルである蔵の数も年々減少しており、喜多方においても21世紀のまちのあり方が議論されるべき時期にさしかかっている。

また、ここ十年の喜多方のまちづくりは、新たな局面をみせている。「蔵の会」を中心とした蔵の保全活用の取組みを皮切りに、大学による地域資源調査やまちづくりに関する活動を経て、研究室・地域・行政（県・市）と共に、多くの調査や活動が繰り広げられている。これに伴い、地域活動も活発となり、ふれあい通りなどの商店街を中心とした取組み、南町には「会津北方小田付郷町衆会」が発足し、独自の地域活動を展開。まちには、ベロタクシーが走り、この運営母体であったNPO団体は、「NPO法人まちづくり喜多方」として、枠を広げた活動を視野に入れている。行政においても、市の部局として、2007年に「まちづくり推進課」が創設され、まちづくりを総合的・戦略的に実行する体制も見据えつつある。さらに、2006年には、これら数々のまちづくり活動を束ね、民官学が連携しながら、総合的に喜多方のまちづくりを議論するための組織として「蔵のまちづくり協議会」が発足し、現在まで活動は続いているなど、喜多方のまちづくりは広がりを見せてきている。

くらはくとは
：まちじゅうが博覧会、まちづくり実験

様々な盛り上がりを見せる喜多方のまちづくりの現況を整理しつつ、これを広く喜多方市民、そして、喜多方を訪れる方々、喜多方に愛着のある方々に広め、新たなまちづくりの方向性を考えるための博覧会として、2007年10月、「くらはく（喜多方蔵のまちづくり博覧会）」が先のまちづくり協議会を中心に開催された。

「くらはく」とは、喜多方のまちなか（市街地）を舞台として行う、①これまで喜多方のまちが積み上げてきた魅力の再発見、②喜多方における様々なまちづくり活動の発信と整理、③喜多方の未来に向けての提案と議論を共有するための、「まちづくり博覧会」である。

会場は、喜多方のまちなか全体である。喜多方のまちなか（あるいはその周囲を含めた喜多方市全体）は、それ自体がこれまでの生活、そしてまちづくり活動の積み重ねの成果であり、資源は至るところに隠されている、まさに「まちじゅうが博覧会」なのである。

また、この博覧会自体が「まちづくりの実験」でもある。まちじゅうに展示を仕掛け、活用可能性のある空き蔵やオープンスペースを利用し、まちづくりの議論を細やかに行うための語り合いを開催するなど、この実験を通して、今後のまちづくりのアイデアや方向性を見出すこともまた一つの目的として行われた。

02 まちじゅうを博覧会とするための多様な仕掛け
くらはくコンテンツリスト

くらはくまちづくり展

メイン会場
大和川酒蔵北方風土館
昭和蔵・天空１階

喜多方のまちのおいたち、喜多方のもつ蔵をはじめとする文化の魅力を紹介した。また、個性的な蔵や町並みをもつ喜多方の魅力あふれる集落、今まで気がつかなかった喜多方の美しい風景などを紹介した。さらに、これまでの喜多方まちづくりの取組みや喜多方まちづくりに携わる人々もあわせて紹介し、以上を踏まえてこれからの喜多方に向けての提案を展示した。

小荒井会場
若喜商店ふれあい夢くうかん

喜多方の「顔」であるふれあい通りと市役所通り（小荒井）界隈に関するまちづくりについて展示した。小荒井界隈の成り立ちや蔵の紹介、東大が実施した調査の結果を展示、また近年のまちづくりの動きとしてふれあい通りのアーケード撤去と街路整備事業、市役所通りの都市計画道路拡幅事業について紹介。以上を元にした、まちづくりの提案も展示。

小田付会場
まちづくり寄合所（大森家店蔵）
油屋（渡部家店蔵）

小田付地区は、喜多方の中でも特に蔵が集積する地区である。まちづくり寄合所では、小田付の成り立ちや「町衆会」の活動について展示した。油屋では、東大による調査の結果、東大と町衆会が協働で行った「まちづくり塾」や「おたづきのれんづくりワークショップ」等の取組み紹介、まちづくりの提案等について展示した。

サテライトスポット
まちなか各所（全28カ所）

くらはくは、「まちじゅう」が博覧会である。そこで、まちなかの商店、蔵等の前や横に、魅力的な蔵や再生事例の紹介、まちづくりの提案、人物紹介等を展示した。スポットには、パネル展示のみならず、目印として、小さなのれんを使ってくらはくサインも設けた。

くらにわ社会実験

蔵のまちをゆっくりと堪能し、居心地のよいまちなか空間を創出するために、期間中、まちなかの主要な通り沿いのオープンスペース各所に「くらにわ」（休憩スペースのあるポケットパーク）を設置する社会実験を行った。中には、カフェなど、おもてなしの行われた箇所もある。

[くらにわでのおもてなし]
くらにわカフェ
蔵の前でゆっくりとした時間を過ごす
極上の農産物直売
喜多方の恵み、おいしい農産物
極上の会津米おにぎり試食販売
黄金のさゆり米を振舞い、直売も

くらはくイベント

くらはく期間中は、まちを活性化させるための仕掛けとして、様々なイベントを開催した。蔵を利用したカフェ、農産物販売やおにぎりの試食によるにぎわい創出、のれんのお披露目など、今後のまちづくりにつなげるための創意工夫あふれた「実験」が行われた。

[開催イベント等]

おもてなしの花小径	：みちを草花が彩る
蔵Bar	：喜多方の夜を楽しむ
くらはくベロツアー	：ベロでまちじゅうを隅々まで
のれんのまちなみ	：街並みで行う景観実験
夜の幻燈会	：白壁に映像が写された

まちづくりフォーラム/まちづくり語り合い

喜多方のまちづくりには、まちの将来像についてみんなで自由に語り合い、目標像を共有することが重要である。様々な声をまちづくりに活かすために、分科会としての「語り合い」と、総合的な「フォーラム」を開催して、熱い議論を繰り広げた。

まちづくり語り合い（分科会）
各地域やテーマについて、自由な雰囲気で意見を出し合う語り合いの夕べ。（各分科会場：30～40人程度）

まちづくりフォーラム
喜多方の将来について、意見を出し合い、具体的な策を共有した。（メイン会場：150人程度）

くらはくマップ

くらはくまちづくり展　会場

メイン会場
大和川酒蔵・北方風土館
昭和蔵/天空　1F　期間中無休

小荒井会場
若喜商店　ふれあい夢くうかん
OPEN:5・6・7・8・13・14日

小田付会場
小田付寄合所・渡部家店蔵
OPEN:5・6・7・8・13・14日

くらにわ

新設
既設

蔵やお店の前などに、心地よく過ごせる庭・休憩スポット「くらにわ」を設置しています。

1. ふれあい夢くうかん
2. 下町まちかど
3. 若喜商店 レンガ蔵前
4. 田原屋菓子店
5. くらにわ瀬文（せぶん）
6. 蔵見世
7. 大和川・大けやきの木陰
8. 島三商店
9. 楽篆工房
10. 良志久庵
11. 島慶園
12. 路地の駅・瀬野伊
13. 吉の川酒造　個人宅ですので外からご覧ください
14. 甲斐本家蔵座敷　※有料　大人400円　小・中学生200円
15. 路地の駅・緑町
16. 路地の駅・月見橋
17. 路地の駅・きゅうりの神様
18. まちの駅・てんぞうまちかど
19. 小原酒造・名水と緑の門
20. 金忠前
21. 寄合所・軒の花かご
22. 樟山珈琲店
23. 平成蔵前　個人宅ですので外からご覧ください
24. 水路の小花たち
25. 五十嵐邸くらにわ
26. 油屋・軒の秋花
27. あづまさ

おもてなしの花小径

散策路では、活け花やオブジェ、お花を並べて、「おもてなしの花小径（はなこみち）」としてみなさまをおもてなしいたします。

サテライトスポット

まちなかの商店、蔵などを利用して、展示を実施します。蔵の紹介や再生事例、将来への提案などが展示され、まちじゅうが博覧会場に変わります。

28 五十嵐酒店

29 蔵人

30 吉の川酒造 非公開

31 金田洋品店

32 山中煎餅本舗

33 喫茶くら

34 嶋新 蔵公開中

35 れんが染織工房

36 島慶園

37 島三商店

38 夢屋

39 大和川酒蔵

40 蔵見世

41 きものの大善

42 松本屋

43 笹屋旅館

44 若喜商店

45 和飲蔵

46 樟山珈琲店

47 井上谷 金忠豆○

48 カフェモーツァルト

49 小田付寄合所

50 菅井屋薬房

51 大善 非公開

52 うるし美術博物館

53 あづまさ

54 渡部家店蔵

55 ぎゃらりー山形

03 大和川酒蔵北方風土館（昭和蔵・天空１階）
まちづくり展 メイン会場

01　07年のれんワークショップで小田付の地域住民と高校生が協働で作成したのれんが会場を彩る

02

03

04

05

06

02　パネルを真剣にみるお客さん
03　頭上のパネルでは喜多方のまちづくりに携わる方々を紹介
04　1/500のまちなかガリバーマップ
05　来場者アンケートも実施
06　「天空」では喜多方にある個性豊かな集落を紹介

博覧会としての多様な展示

まちづくり展のメイン会場として、喜多方のまちやその魅力、まちづくりの現状などについて、より多くの喜多方の市民や喜多方を愛する人々に知ってもらうとともに、これからの喜多方のまちづくりのあり方を一緒に考えてもらうきっかけとすることをねらいとした。会場としては、これまでも展示会やフォーラム会場とし馴染みがあり、また観光スポットとしても実績のある大和川酒蔵北方風土館（昭和蔵）を使用した。

展示は、受付のある天空回廊１階を導入（魅力紹介）ゾーンとして位置づけ、「集らく探訪」「新・北方百景」を展示した。昭和蔵の前半部分は、生い立ち・魅力・現状を知るゾーンとして位置づけ、「クラシカタログ」「数字で見る喜多方」といった展示を、後半部分は、まちづくりの取組み・提案ゾーンとして位置づけ、「喜多方まちづくり７つの提案」と具体的な取組みを展示した。また、ヒアリング記録は、コラム的なパネルにまとめ、各所に散りばめた。

また、昭和蔵の大空間を活かすべく、2007年に小田付地区で行ったのれんワークショップで作成したのれんを梁に吊るし、ダイナミックに空間を演出した。さらに、1/500のまちなかガリバーマップを作成し、来場者にまちをいつもと違った視点で見てもらうきっかけとした。昭和蔵の奥には、スクリーンを設置し、新北方百景などの映像を流した。

来場者の反応：分かりやすいと好評

くらはく期間中毎日開催し、10日間で来場者数は1175名以上に上った。喜多方市民のみならず、天空2階で実施されていた「アートふらりー（手代木展）」に訪れた方々や、大和川酒蔵でのツアーガイドに参加していた観光客の多くも、当展示会に立ち寄っていた。

市民からは「喜多方まちづくり・７つの提案」に対する反応が多く寄せられ、「これは良いね」、「これは生活者としては嫌だ」といった声が聞かれた。観光客は、喜多方のポテンシャル、東大の喜多方でのまちづくり活動に感銘を受けていた。また、「クラシカタログ」、「数字で見る喜多方」、「喜多方まちづくり・７つの提案」を特に興味深く見る人が多かった。「数字で見る喜多方」については、分かりやすいと好評だった。ガリバーマップは、マップに座り込んでまちを眺める人が多く見受けられた。

パネル展示コンテンツ

［昭和蔵］
・喜多方・クラシカタログ：喜多方ならではの蔵を中心とした文化、空間、生活の型
・豊かな風土まちの変遷基礎知識：喜多方のまちの成り立ちや蔵の基礎知識
・数字でみる喜多方：データから喜多方の現状を捉える
・まちづくりヒアリング録：喜多方のまちづくり人、16名にインタビュー
・喜多方まちづくり・７つの提案：東大によるまちづくりの提案

［天空］
・集らく探訪：蔵と町並みに魅力ある喜多方の集落紹介
・新・北方百景：今まで気づかなかった喜多方の魅力ある風景紹介

04 若喜商店ふれあい夢くうかん
まちづくり展 小荒井会場

01　奥行きがある空間を活かした展示

02

03

04

05

02　会場となったふれあい夢くうかん
03　ふれあい通りの連続立面写真を展示
04　ふれあい通りアーケード撤去前と撤去後の写真を展示
05　来場者アンケートを実施

奥行きがある空間を活かした展示

喜多方の「中心」として発展してきた小荒井界隈（ふれあい通り、市役所通り周辺）。この界隈は、ふれあい通りのアーケード撤去・街路事業、市役所通りの都市計画道路拡幅を前に、大きく変わろうとしている。そこで、当展示会では、これまで小荒井界隈を中心に行われてきた調査や提案を展示し、これからの小荒井のまちのあり方を考えてもらうきっかけとすることをねらいとした。会場としては、ふれあい通りと市役所通りが交差する地点のすぐ近くにある、若喜商店ふれあい夢くうかんを利用し、会場前にはくらにわも設置することで、相乗効果を狙った。

パネル展示は、「１．喜多方の中心・小荒井」、「２．小荒井の５つの事実と３つの声」、「３．小荒井の転換期におけるまちづくり」、「４．小荒井のまちづくり９つの提案」という内容で、壁面や喜多方の地酒の箱を利用して行った。また、画像処理ソフトを使ってふれあい通りの「アーケード撤去後」の様子を作成し、「アーケード撤去前（現状）」と比較できるようにパネル展示した（写真04）。さらに、奥行きのある空間を活かして、会場左右に、ふれあい通りの連続立面写真を展示した（写真03）。

アーケード撤去後の町並みを考えるきっかけに

当会場は土日を中心に開催し、来場者数は６日間で261名以上に上った。観光客で賑わう場所に立地しているため、地域住民のみならず、観光客が途絶えること無く来場していた。また、会場前に設置した「くらにわ」も会場内にお客さんを呼び込む一要因となった。

住民については、１（まちの紹介）は既知の事実であることが多いため、２（調査結果）や４（提案）を真剣に見ていた。２には、商店が減っていること等に驚く様子が伺えた。４の提案には「これは面白い」等といった感想が聞かれた。ふらっと立ち寄った観光客も、半数以上が真剣にパネルを見ていた。観光客には、１の中の「小荒井の蔵紹介」が好評だった。「この蔵、今見てきたところだ」、「こんなにいろんな蔵があるのね」といった声が多く聞かれた。

住民、観光客問わず、アーケード撤去前・撤去後の写真については注目を集めていた。じっと見入る人の姿が多く見られた。「絵」でなく、実際の「写真」を加工したため、より現実味があって、伝わりやすかったと考えられる。町並みの連続写真についても、「実際の町並みを再確認できる」と好評だった。

パネル展示コンテンツ

1. 喜多方の中心・小荒井：小荒井界隈のまちの成り立ちや蔵、自然、祭・イベントの紹介
2. 小荒井の５つの事実と３つの声：アーケード、緑、駐車場、蔵、商店街等についての調査結果
3. 小荒井の転換期におけるまちづくり：ふれあい通りのアーケード撤去・街路事業、市役所通りの都市計画道路拡幅についての一連の取組み紹介
4. 小荒井へのまちづくりの９つの提案：東大の提案

05 まちづくり寄合所（大森家店蔵）・油屋（渡部家店蔵）
まちづくり展 小田付会場

01　01　油屋の梁を使ってパネル展示

02

03

大森家店蔵：小田付のまちと活動紹介

小田付会場の展示では、小田付のまちの魅力を知ってもらうとともに、小田付において活動を行ってきた町衆会・東大の活動内容を紹介し、小田付のまちのあり方を考えてもらうきっかけとすることをねらいとした。おたづき蔵通り沿いのまちづくり寄合所1階を「小田付プレゾーン」とし、そして小田付のまちなみ紹介を行うと共に、地区会場（油屋）への導入となるよう位置づけた。

具体的には、「1. 小田付と町衆会（小田付地区と町衆会の紹介）」、「2. まちづくり寄合所の紹介」についてパネル展示を行った。立地が良いこともあって、住民だけでなく、観光客も来ていた。

油屋：まちづくり塾と提案、お客さんは蔵そのものにも感動

ねらいは大森家店蔵と同様であるが、当会場では、「参加型まちづくりの取組み」と「小田付における東大の調査・提案」というゾーン区分で展示を行った。会場は、2006年からまちづくり塾等で利用している油屋（渡部家店蔵）である。蔵の前には、「くらにわ」として設置した花かごやサテライトスポットのパネルも併せて並べた。

具体的なパネル展示の内容は、「3. まちづくり塾」、「4. のれんワークショップ」、「5. 住み手のおたづき育成プラン」である。また、スクリーンを設置し、まちづくり塾の映像等を流した。

当会場は裏通りに立地しているため、初めての人には分かり難かったが、休日には多数の来訪者があり、5日間で約100人の来場者があった。住民のみならず、観光客も多く来場していた。

パネル、映像共に解説を加えると興味を持ってくれる人が多かった。のれんWSについては、特にWS参加者を中心に多くの人が関心を持ってパネル、映像を見ていた。

また、油屋所有者である渡部さんのご好意で、油屋2階の案内やおひな様の公開も実現した。そのため、蔵そのものに興味をもつ訪問者が多く、大変満足していた。蔀戸などの細かい仕掛けを知って感激していた人も多かった。一方で、展示パネルを見て町衆会や東大の取り組みに関心を寄せた方も多かった。「非常に感激した」とコメントした方もいた。

来場者は、パネルを見た後は、油屋の空間でお茶を飲んだり、渡部さんや学生との交流を楽しんでいた。来場者の数は多くはないが、満足度は高かったものと思われる。

04

05

02　油屋の所有者、渡部さん（おばあちゃん・写真左）もお客さんと交流
03　パネルを見るお客さん
04　のれんと軒下の草花（くらにわ）でお客さんを出迎える
05　まちづくり寄合所での展示風景

パネル展示コンテンツ

［まちづくり寄合所］
1. 小田付と町衆会：まちの成り立ちや蔵の紹介と町衆会の取組み紹介
2. 寄合所の紹介：まちづくり寄合所のシステム等の紹介

［油屋］
3. まちづくり塾：まちづくり塾での取組みや成果物紹介
4. のれんWS：のれんWSの内容紹介
5. 住み手のおたづき育成プラン

06 まちなか各所
まちづくり展 サテライトスポット

まちなか各所にスポット展示

喜多方は，専門家が推薦する「散策したい蔵の町並み」東日本第一位（2006年9月日経新聞より）である。その一方で、よく聞かれるのが、蔵を前にしての「蔵のまちはどこですか？」の声。まちじゅうに資源が眠っているのに、なかなか気づいてもらえないのが実態である。そこで、くらはく中、まちなかを歩きながら、まちの魅力とまちづくりの展開をわかってもらえるように、まちなかの全28カ所にスポット展示を仕掛けた（スポット位置はP106-107のくらはくマップを参照）。まちなかの蔵紹介や、具体的なまちづくりの提案、まちづくりの成果などを現地でパネル展示し、何気なく歩いている住民や観光客に、足を止めて、その場所の魅力や経緯などについて知ってもらうことをねらいとした。展示は、パネルとしてイーゼルに立てかけ、ミニサイズののれんをサテライトスポットの目印にした。

スポットでは、次の5つのテーマに沿った展示が行われた。

●蔵紹介：蔵の魅力や特徴、見どころを紹介
●まちづくりの提案：東大による、喜多方のまちなか提案をその場で展示
●まちづくりの成果：まちなか中に広がるまちづくりの成果を紹介
●蔵の活用事例：倉庫蔵や店蔵などの伝統的な使い方とは一味違った、現代の暮らしに合わせた活用の事例紹介
●人物紹介：喜多方のまちづくりに関わる方々を紹介

「蔵紹介」スポットが好評

観光客も地元住民も、足を止めてパネルを見ていた。中でも、「蔵紹介編」のパネルをよく見ていた様子だった。具体的には、「大善」と「菅井屋薬房」の向かい合わせがとても好評で、多くの人がセットで合わせてみていた。小荒井から歩いてきて小田付に入る、良い玄関口になっていた。今後、蔵の前に、その蔵を紹介するサインができると、足を止めて見る良い案内になと考えられる。

また、笹屋旅館のまちかど等、交差点にあるサテライトスポットでは、信号待ちの人が真剣にパネルに見入る姿が見られた。

一方で、提案編はわかりずらい（中に入れない箇所はイメージしずらい）ためか、見ている人は少なかった。

大善

［蔵紹介編］
五十嵐酒店・金田洋品店・山中煎餅本舗・蔵見世・大和川酒蔵・松本屋・大善・菅井屋薬房

染織工房れんが

［蔵の活用事例］
喫茶くら・染織工房れんが・夢屋・うるし美術博物館・あづまさ・和飲蔵・金忠／豆○

きものの大善

［まちづくりの提案編］
島三・嶋新・きものの大善・吉の川酒造・笹屋旅館前・若喜商店

島慶園

［まちづくりの成果編］
島慶園・カフェモーツァルト・小田付まちづくり寄合所・渡部家店蔵

樟山珈琲店

［人物紹介編］
蔵人・樟山珈琲店・ぎゃらりー山形

07 外部空間の魅力増大

くらにわ社会実験

19「小原酒造・名水と緑の門」（休憩所）

「くらにわ」とは

「くらにわ」とは、喜多方のまちなかにおける、蔵（など）を前（横）にして設けられた、魅力的な外部空間（オープンスペース）のことである。くらにわには、1）蔵の町並みへの魅力向上、2）オープンスペースを用いた連続的な町並の創出、3）まちなかに不足するオープンスペースの供給によるふくらみのある街路づくり、4）（一部）まちなかの賑わい創出のポイントづくり、5）これらを通したまちなかの回遊性の向上と滞在時間の延長、などの狙いがある。

今回のくらはくでは、全27カ所に、次の6タイプのくらにわを設けた（位置はP106-107のくらはくマップを参照）。

●休憩処：椅子やパラソル、植栽を配し、気持ちよく休憩できるスポットを創出。
●カフェ：椅子やパラソル、植栽を配するだけでなく、飲み物、食べ物を販売。
●農産物直売所：喜多方の周辺農村部で穫れた新鮮野菜や穫れたて卵販売。
●試食：喜多方産のお米のおにぎりや豚汁試食。
●半間修景：軒下などにある半間分の空間に植栽。
●既設：新たに創出するだけでなく、既にある素敵なくらにわにサインを設置して紹介。

くらにわの設営にあたっては、植栽のみならず、小屋組み、竹椅子、イーゼル、くらにわサイン、和傘などを使用し、喜多方蔵のまちづくり協議会や地元住民がくらにわの場所に応じて工夫をしながら各物品をレイアウトした。

地元の多様な主体の連携により実現

「くらにわ」の実施にあたっては、準備から当日に至るまで、多様な主体が連携した。

●くらにわの場所の選定：喜多方蔵のまちづくり協議会
●くらにわの設営・管理・運営：喜多方蔵のまちづくり協議会、地元住民
●植栽の調達：喜多方観光協会が「喜多方の秋にふさわしいものを」と喜多方市内の5軒の花屋に依頼した。

「くらにわ」の各種効果を確認

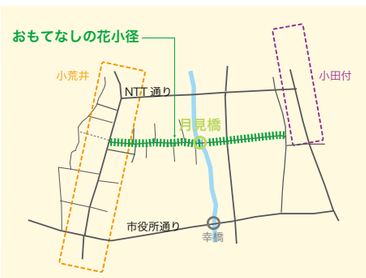
今回のくらにわ社会実験の実施により、得られた成果をねらいと照らし合わせて考える。1）普段はあまり使われていない空き地などにくらにわを設置し、緑を創出したことで蔵の町並みの魅力を引き立てることができた。2）1と同様に、空き地や駐車場などにくらにわを設置することで、連続的町並みを創出できた。3）各くらにわでは、まち歩きや日常の買い物の途中でくつろぎ、憩う人の風景があちこちで見られた。4）試食などでは、お年寄り、高校生、子どもなど色々な人達がわいわいと楽しむ光景が見られた。5）回遊性の向上が確認できた（P120参照）。これは、くらにわのみならず、くらはく全体によってもたらされた効果であるが、まちじゅうに27カ所も設置したくらにわの影響は大きいと考えられる。

今回の社会実験では、くらにわがもたらす多様な効果を確認できた。今回の実験成果を活かして、くらにわの実現が期待される。

08 小荒井と小田付をつなぐよこみちの魅力向上
おもてなしの花小径

「おもてなしの花小径」により通りに賑わいが生まれた

花々に彩られた通りの様子



おもてなしの花小径の位置

観光協会が提供したボサ菊に合わせて住まい手も花を飾った

地元幼稚園も花を提供してくれた

江戸期から小荒井と小田付をつなぐ道

喜多方のうらみち・よこみちは、蔵などの資源がひっそりと佇み、表通りとは異なる趣がある。しかしながら、「なんとなく入りにくい」「案内板がなくてわかりずらい」などを理由に、そこを歩き、楽しむ観光客はわずかしかいない。もっと、多くの人に喜多方のうらみち・よこみちの良さを感じて欲しい。

このような認識の下で、2007年「くらはく」時に実験的に行ったのが、「おもてなしの花小径」である。これは、うらみち・よこみちに、花、サイン、くらにわを設置して、うらみち・よこみちの魅力向上を図るという取組みである。今回のくらはくでは、取組みの場所として、江戸時代から、小荒井エリアと小田付エリアをつないできた、緑町～西四ツ谷のよこみちを選んだ。このよこみちは、江戸時代より、職人街として栄えた。現在でも、畳屋、下駄屋などが軒を連ね、当時の趣を今に残している。

おもてなしの取組み

よこみちに並べる花については、喜多方市観光協会がボサ菊104鉢を緑町のよこみちに面する各家庭に配布したり、市内の幼稚園からプランターを提供してもらったりした。また、「くらはくマップ」にも、小荒井と小田付を結ぶ道として「おもてなしの花小径」をプロットして、緑町のよこみちをクローズアップした。

歩行者の増加と沿道住民の意識向上

「おもてなしの花小径」の実施の結果、くらはく期間中は、平時より、多くの観光客がこの道を歩き（詳細はP120参照）、楽しむ様子が見られ、まちの回遊性が向上した。

また、これまで、まちづくりにおいてはあまりクローズアップされなかった通りだけに、今回の取組みは沿道の住民に対しても意識向上に有効だったと思われる。これまでとは全く異なる通りの風景に、数多くの住民にも好評であり、喜多方観光協会が配布した鉢植えと合わせて、自ら鉢植えを家の前に飾ったりした住民もいた。

さらに、西四ッ谷の沿道住民は、「おもてなしの花小径」に合わせて、自宅にある水琴窟を一般公開し、観光客等との交流を楽しんでいた。

今回は実験は、よこみちの魅力向上による多方面での効果を実証したと言える。

09 空き蔵の活用実験
蔵カフェ

島三商店の店蔵の活用可能性の検討

喜多方のまちなかには、数多くの空き蔵がある。空き蔵状態が長く続くと、雪や雨で蔵は次第に朽ちていったり、壊れていったりする。一方、蔵は、喜多方の地域資源であり、その活用の可能性は多分にある。

そこで、今回のくらはくでは、使い手のいない蔵を「実際に使ってみる」ことにより、その蔵のもつ活用可能性を検討し、かつ、その蔵の魅力を市民や観光客に発信することをねらいとする実験を行った。

対象とした空き蔵は、島三商店の店蔵。島三商店が商売を行っていた頃は、何でも揃う店として繁盛した。しかし、現在は、大和川酒蔵方面からふれあい通りを見たときの、アイストップであるにも関わらず、現在は空き蔵となっており、非常に寂しい印象を受ける。つまり、島三商店の店蔵は、ふれあい通りの印象を決める建物の一つであるにも関わらず、閉じたままであった。そこで、「NPOまちづくり喜多方」が実施主体となり、くらはく期間中、この蔵をカフェとして実験的に活用することとした。

コンセプト：気軽に立ち寄れるカフェ

今回の活用のコンセプトは、「誰でも気軽に立ち寄ることのできるカフェにすること」であった。そこで、ふれあい通りを歩いている人が蔵カフェの様子を見られるよう、蔵の内部については、道路側半分のみ使用し、蔵の前面にも椅子と机を設けた。

設えに使用した家具は、今回の蔵カフェ運営者Yさんが若喜商店などから調達、アレンジしたものである。黒と赤を基調としていて、蔵をより魅きたてていた。また、蔵カフェの張り紙などもYさんの手づくりである。

観光客と住民のタマリバに

島三商店の前を通る人達は、必ずと言ってよいほど、カフェをのぞいていた。住民も観光客問わずカフェでくつろいでいる光景が見られた。

オープンカフェも好評だった。「外で人が談笑している風景は和やかな気持ちになる」という声も聞かれた。

くらはく終了後、「島三商店を空き蔵にしていてはもったいない」という声がそこかしこで聞かれた。今回の実験は島三商店はもちろん、まちなかにある空き蔵の活用可能性を広く証明したといえよう。

蔵の前に椅子とテーブルを設けてオープンカフェも行った

島三商店を活用した蔵カフェ

近所の子どもも遊びにきた

通りがかりの人が店内を覗き込む

くらはくマップを見ながらくつろぐお客さん

10 まちの可能性を引き出す仕掛け
まちづくりイベント

真っ白な漆喰の壁に映像を映す

地域の人が集まった

カフェモーツァルト２階から映す

小田付・夜の幻燈会

白漆喰の蔵がもつ、真っ白で大きな壁は、世界でも他に類を見ない。日本の蔵特有の空間要素と言える。

そこで、この壁の魅力を再認識し、また活用する一つの方法として、壁に映像を映す「幻燈会」を実施した。今回対象とした場所は、小原酒造所有の蔵の真っ白な大きな壁と隣接するオープンスペースである。

くらはく期間中の週末の19時～21時頃に実施した。映像の内容は、「会津染めの型紙」（H14蔵みっせ時に作成）、「まちづくり塾（2006）」、「のれんワークショップ（2007）」である。

当日は、気温が低く、寒かったが、地域の方が集まって真っ白な大壁に映された映像を楽しんでいたり、散歩途中に足をとめて見学する人もいた。

夜で灯りが少ない中、白壁に映像が映される様子は非常に幻想的で、見ている人は「キレイだね」などと声をあげていた。「次はあたたかい時期にみんなで映画でも見たいね」といった声も聞かれた。今回の試みは、白壁の美しさがあってはじめてできることであり、この取組みにより蔵の新たな一面を発見することができたと思われる。

小田付・のれんの町並み

2007年、小田付地域を中心に行った「のれんづくりワークショップ」にて、地元住民と高校生が協働で作成したのれんを飾り、町並み景観に対する意識啓発を図ることを目的に行った。

2007年の蔵してる通りフェスティバルやワークショップの成果発表会の時に、「また見たい」「これで終らせるのはもったいない」という声が多く寄せられた。そこで、今回のくらはくでもう一度のれんをお披露目することになった。小田付町衆会と有志が呼びかけ、くらはく期間中の3日間（10/6,7,8）に実施、12～3枚ののれんが並んだ。その結果、今回も好評であり、今後もこうした取組みの継続の必要性が改めて確認された。

のれんの町並み

ベロツアー

ベロツアー

ベロタクシーは、喜多方の環境を守る、エコな乗り物であり、またまちなかの細い「うらみち」まで入り込める、小回りの効く乗り物である。ベロツアーでは、喜多方を訪れた観光客に「くらはく」をより深く知ってもらうために、ベロタクシーでくらはくを案内した。

くらはくだけをベロタクシーで案内するのではなく、ベロタクシーに乗車した観光客に、喜多方のお店や歴史だけでなく、くらはくの内容も伝えると言うスタイルをとった。例えば、大和川酒蔵を案内する際には、まちづくり展（メイン会場）を案内した。観光客からは「こんなに色々な取組みをやっているんですね」「実は奥の深い歴史文化があるんですね」といった声がきかれた。

11 今後のサイン計画立案に向けた社会実験
サイン実験

実験での蔵サインのデザイン

蔵紹介サイン

現在、喜多方市には、蔵を紹介するためのサインがいくつかあるが、いずれも老朽化が進んでおり、かつ目にとまるような魅力的で分かりやすいものとは言い難い。2007年度には、まちなかの数十棟を対象とした「蔵サイン事業」が喜多方市総合政策部まちづくり推進課で予定されているが、具体的なデザインや設置方法については決まっていない。

そこで、今後の蔵紹介サインに関する計画の立案に向けて、市まちづくり推進課が実施主体となって、くらはくに合わせて、蔵紹介サインを実験的に設置した。

設置箇所は、サテライトスポットとほぼ同じで、嶋新商店、れんが染織工房、島慶園、島三商店、菅井屋薬房、大善の6カ所である。サインは、スチレンボードなどを材料として、600mm×600mmの大きさで作成された。

実験の結果について、市は「色は白が目立つ」、「目線の高さでないと気づかれない」、「文字が多すぎる」、「白色は目立った」などコメントしている。

今後は、喜多方の蔵の町並みに合ったデザインと設置方法のさらなる検討と、サインに掲載する情報整理が必要である。

島三商店の蔵サイン

島慶園の蔵サイン

れんが染織工房の蔵サイン

実験での誘導サインのデザイン

誘導サイン

現在、喜多方市には、まちなかを表示するサインは見られるが、それらは一体的に整備されたものではないため、デザインに統一感は見られない。また、主要な観光スポットや蔵などがあまり表示されておらず、観光客にとっては不親切なものとなっている。そのため、今後、誘導サインがリニューアルされる予定であるが、具体的なデザインや設置方法については決まっていない。

そこで、今後の誘導サイン計画の立案に向け、蔵紹介サインと同様の方法で、くらはくに合わせて、誘導サインを実験的に設置した。

設置箇所は、おもてなしの花小径上にある、ふれあい通り、月見橋、COOP、おたづき蔵通りの４カ所である。サインは、スチレンボードなどを材料として作成された。

実験の結果について、市は「緑町方面の誘導には効果があった」「サイズが大きすぎた」等とコメントしている。今後は、地図に載せる情報の整理、デザインや設置箇所の検討が必要である。

COOP横の誘導サイン

ふれあい通りの誘導サイン

月見橋の誘導サイン

12 まちづくり語り合い

まちづくりフォーラムに先立ち、地域やテーマについて自由な雰囲気で意見を出し合う

第一夜　おもてなしの部　訪れる人の思い、迎える人の思い

観光ボランティア、蔵主、農家、行政、各立場から意見を交わし合い、喜多方の「おもてなし」のあるべき姿について議論を行った。

「蔵があるのは喜多方のステイタス」というきっかけトークからはじまり、「補助制度が十分に整うのはいつか来ると思うが、技術面の制度は今整えるべき」、「蔵の保全は行政に過度な期待をしたくない。自己責任で守れる範囲でやっていきたいのが率直な意見。」といったような、蔵保全の具体的な課題や理想だけではすまされない蔵主のお考えも聞かれた。

まとめとしては、1）金銭面と技術面と、それぞれ誰がやるかが課題。2）蔵一つ一つに意味があって、それをできるだけ正確に伝える。3）蔵を案内する側と持っている側の理解が重要、である。

日時：10月5日（金）18:30-20:00
場所：蔵の里（蔵座敷）
進行：佐藤まゆみ氏（喜多方市観光課）
参加者：約40人

議論の内容
・観光客の「蔵のまち喜多方」への期待と実際
・蔵の所有者の「蔵」に対する思いとは
・農村における蔵に対する思い、農村にとっての観光とは　etc

第二夜　小田付の部　10年後の「おたづき」はどうすんべ？

のれんWSの感想から議論はスタート。「次回はのれんに変わるものを、例えば提灯。」といった意見がでた。また、「おもてなしの花小径」を通して感じたこととして、「小田付は案内しにくいので、通りに名前をつけたい」、「花小径のように、全員参加のまちづくりが大切。」という意見がでた。さらに、蔵を見る通りとして、速度を20kmに制限するアイデアも出た。まとめとして、1）道路の使い方について、今はバイパスできたので昔の使い方に戻すチャンス、裏通りも含めて考えていきたい。2）イベントは全員が参加できるようにしたい、となった。

また、のれんWSに参加して下さった奥様方が当日都合がつかず参加できなかった。そのため、喫茶豆○二階で語り合い第二部を開催した。自分たちができることから取り組むこと、住民の側は市をおっと言わせる可能性をもっているという意見がでた。

日時：10月6日（土）18:30-20:30
場所：喜多方北町郵便局2階
進行：樟山惇一氏（会津北方小田付郷町衆会）
参加者：約15人

議論の内容
・のれんワークショップの感想
・おもてなしの花小径について
・東大から小田付へまちづくりの提案　　etc

第三夜　くらしの部　まちの将来、あるべき姿

まちなかに住む人、郊外に住む人、観光ボランティア、さくらっこ保育園理事、市の社会福祉課、元清くうかんなど、多彩な顔ぶれが揃った。まず、実際に坂下でファミリーサポートセンターを行政と協働で立ち上げている「NPO法人こころの森」の渡部栄子氏により、同団体の活動が紹介された。続く、3グループに分かれたディスカッションでは、女性の視点でのまちづくりの話や子育ての話から蔵の利活用に至るまで、色々な意見が飛び出し、その場の議論はなかなかまとまらなかった。

しかし、その後の展開として、喜多方市福祉課が坂下NPOに再度話しを聞き、今後サポートセンターの立ち上げの勉強会が行われるようであり、今後が期待されるところである。

日時：10月7日（日）18:00-20:00
場所：そばカフェじーま2階
進行：斉藤百合子氏（あづま旅館）
参加者：約30人

議論の内容
・坂下NPOファミリーサポートセンターの説明
・蔵の活用について
・まちなかでの子育てについて　　etc

第四夜　小荒井の部　10年後のふれあい通りはどうなんべ？

アーケード撤去、街路事業が間近にせまっているふれあい通り。ふれあい夢くうかんには、立ち見が出る程、多くの人が集まった。

先ず、県や市、東大からはふれあい通りに関する計画や整備状況、調査結果などについて報告があった。続いて、各商店街からまちづくりの方向性について発表があった。その後の議論は、今後の商店街としてのあり方（ソフト面）が中心となった。「イベントだけでなく、各商店が味のある店になることがなによりも大事」といった意見がきかれた。

最後に、まちづくりのシミュレーションを行い、旗揚げアンケートを実施した。「もし若喜商店の場所に高層マンションが建ったら？」については、9割が反対、「商店街に大きなショッピングセンターができたら？」については、大半が反対であった。

日時：10月11日（木）18:30-20:30
場所：若喜商店ふれあい夢くうかん
進行：長島慶司氏（仲町商店街）
参加者：約40人

議論の内容
・ふれあい通りの現状について報告（県、市、東大）
・各商店街からまちづくりの方向性について
・「もしもこうなったら」旗揚げ　　etc

13 まちづくりフォーラム

過去・現在・未来の喜多方まちづくりを議論し共有する

フォーラム会場となった大和川酒蔵・昭和蔵は満員

「くらはくを振り返る」江花氏と東大永瀬

コメントする瓜生氏

会場からもたくさんの意見がでた

まちづくり塾（2006）、のれんWS（2007）に参加した高校生も来てくれた

まちづくりフォーラムの会場となった大和川酒蔵・昭和蔵には、喜多方のまちづくりに携わる市民、行政、学生が集まった。

第1部は、「まちづくりを振り返り、未来を描く」。矢部協議会会長のあいさつの後、東大が2000年以降の喜多方まちづくりの歩みとくらはくに至るまでの経緯を報告した。次に、今回のくらはくの各コンテンツの内容とそれらの意義について協議会の江花氏と東大永瀬が熱弁をふるった。続いて、東大学生から「まちづくり7つの提案」をリレー形式で行った。前半の最後は、「語り合い」の報告である。4つの語り合いをナビゲートした各氏が、担当の語り合いの内容を報告した。

第2部は、「まちの将来像を共有する」。北沢教授から、第1部を踏まえて3つのテーマが提示され、パネリストはもちろん、会場からも色々な意見が飛び出した。

1）喜多方の地域資源である蔵の維持活用
2）生活者の視点からみた喜多方、住み続けられるまちづくり
3）周辺、農家との連携

1）喜多方の地域資源である蔵の維持活用
・農家の蔵は手入れが行届いている。
・4200棟ある蔵全てに対し、補修をするのは現実的に厳しい。行政に頼りすぎない方策も考える必要がある。
・蔵に関する信頼できるシステムの構築を。
・蔵小屋（蔵を使った教育の場）、蔵改修左官公務員制度といったアイデア。
・用途や業種に合わせて蔵を使いこなしていくことも求められるのでは。

2）住み続けられるまちづくり
・色々な人が自分の立場でまちづくりが重要。
・観光客に媚びず、「本物」を売る観光を。
・子どもも大人も誰でも、自分の身の丈に合わせてまちづくりに参加することが重要。
・まちを市民が使えばまちは活性化する。
・「うすらかすら（毎日まちを歩くこと）」、「お茶飲み営業」は喜多方の文化である。
・ファミリーサポートセンター実施の必要性。
・「日常観光（普段の生活を楽しむ）」視点。

3）周辺、農家との連携
・農業だけで生活できる人口は減る一方だが、農業は今後ますます重要になる。
・車を抜きにして連携できる方法の確立も。
・ガソリンスタンドを観光案内所に。
・旧喜多方には、旅館で例えれば「フロント」の役目を果たしてほしい。

Program

日時：10月13日（土）16:00～19:00
場所：大和川酒蔵・昭和蔵

第1部
「まちづくりを振り返り、未来を描く」
司会：永瀬節治、鈴木智香子
（東京大学都市デザイン研究室）
・協議会会長よりあいさつ
・「くらはく」を振り返る
・「まちづくり7つの提案」発表
・「まちづくり語り合い」報告

第2部
「まちの将来像を共有する」
司会：北沢猛（東京大学教授）
パネリスト：瓜生泰弘氏（山形屋）
風間勝氏（まつりばやし保存会）
佐藤まゆみ氏（喜多方市観光課）
樟山惇一氏（会津北方小田付郷町衆会）
斉藤百合子氏（あづま旅館）
長島慶司氏（仲町商店街）

14

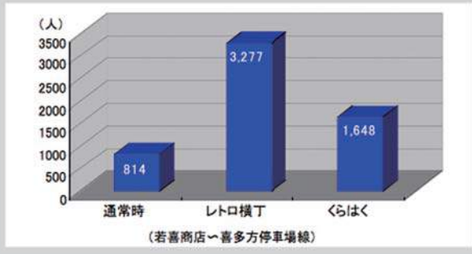
くらはくによる、まちなかの回遊性向上の検証

くらはく歩行者交通量調査 :くらはく結果分析

10月7日歩行者交通量

10月13日歩行者交通量

参考）通常時との歩行者交通量の比較



通常時との歩行者交通量の比較

ふれあい通りの歩行者交通量は、通常時の2倍程度となっており、車両通行止めにして開催したレトロ横丁の半分以上の交通量となった。

・2003年休日
　・・・814人／日
・2007年レトロ横丁時（車両通行止め）
　・・・3,277人／日
・今回のくらはく
　・・・1,648人／日

くらはくにて歩行者の動きを調査

まちなかでは、幹線通りなど表通りを歩く人が多く、喜多方の魅力の一つであるうらみち・よこみちを歩く人は殆どいないことが予想された。そこで、今回のくらはくでは、まちなかの回遊性向上も、ねらいの一つとして、まちなか各所に戦略的に色々なイベントを仕掛けたり、くらにわやおもてなしの花小径を設置したり、サインを設置したりした。この効果を検証するため、くらはく時における、まちなかの歩行者交通量調査を実施した。

（調査概要）
・日時：10月7日（日）、10月13日（土）10:00～18:00
・調査カ所：①吉の川酒造前、②冠木商店前、③若喜商店前、④れんが染織工房そば、⑤市役所前、⑥大善

（調査結果）

市役所通りが最多、次いでふれあい通り

・歩行者が最も多かったのは、7日、13日とも市役所通りで、7日は約3000～4000人、13日は約1200～1500人程度であった。
・7日のふれあい通りとおたづき蔵通りについてみてみると、ふれあい通りでは多い箇所で約1800人程度、おたづき蔵通りでは約1000人程度の歩行者交通量であった。

南側に人が集中するふれあい通り

・北上するにしたがって、歩行者交通量が少なくなる傾向がある。甲斐本家を訪れる観光客は、市役所通りにいる観光客の1/5にも満たないのではないか。北上する途中で、「もう見るべきものはない」と思い、引き返す人が多いことが推測される。
・おもてなしの花小径にも人通りが見られる。ただし、ふれあい通り方面から歩いて行って田付川までは行き着くが、そこから小田付にまで行く人は少ないと考えられる。田付川をわたって、小田付に向かってもらうための魅力的な空間づくりや仕掛けが必要である。
・歩行者交通量より来訪者の回遊状況について推測すると、市役所周辺⇔（市役所通り）⇔若喜商店周辺⇔（ふれあい通り）⇔冠木商店周辺⇔（おもてなしの花小径）⇔市役所周辺という流れが多くなっている。

表通りに人が集まるおたづき蔵通り

・表通りは人通り多い。
・一方、うらみち・よこみちを巡っている人は僅かである。表通りにのみ人が集中する傾向は、ふれあい通りよりも顕著である。

5章　喜多方まちづくり提案

前述のように、喜多方のまちづくりの中で実践されてきた数々の行政や地域を中心とした活動、これまでの何年にもわたる東京大学等による調査提案、そして、地域を中心にしたまちづくりに関する数々の議論を踏まえながら、これからの喜多方のあり方や考え方、必要なこと、やるべきことを再整理するために喜多方へのまちづくり提案（7案）を行う。

くらはくにおける「7つの提案」をベースとして、喜多方において今後、目標像をを基にしながら、具体的に実践できることは何かという側面を重視しながら、喜多方のあり方を検討する。そのために、優先的に行うべきこと、明日からできること、時間はかかるがじっくりとやるべきこと、少しハードルは高いがチャレンジすべきこと等を踏まえた提案とする。

7年間のまちづくり提案の集大成と実践に向けての具体的な方法論

喜多方まちづくり提案 から まちなかプラン へ

喜多方まちづくり7つの提案

これまで、喜多方のまちづくりにおいては、数々の議論を踏まえつつ、これからの喜多方のあり方について様々な提案や検討が行われてきた。特に、学術機関として東京大学都市デザイン研究室がまちづくりに参加した2001年以降は、まちのあり方、コンセプトから、具体的な空間戦略、まちづくりの体制に至るまで、様々な検討・議論が重ねられてきた。

「くらはく」(喜多方蔵のまちづくり博覧会)では、「喜多方まちづくり7つの提案」と称して、東京大学都市デザイン研究室による7年間の提案活動を中心に、行政・地域と共に議論を重ねてきた提案の中から、今後の喜多方にとって重要とすべき考え方を整理し、7つのカテゴリーに分けて発表した。ここでは、その後の議論も重ねあわせ、具体的にこれからの喜多方まちづくりのアイデアとなるもの、そして、これを実現するために、具体的にすべきことを整理した。また、この整理を基として、てはじめに、喜多方市街地をベースとした「まちなかプラン」の策定の基礎検討も行った。具体的には、

1 もう一度蔵を使いこなす
(蔵と資源の再生活用)
2 歩いて心地よいみちにする
(快適な歩行者環境)
3 極上の会津文化を味わう
(まちなかと周辺も含めた文化連携)
4 滞在時間を倍増する
(喜多方の新しい観光スタイル戦略)
5 くらとにわを育む
(くらにわによる外部空間整備)
6 水と緑を中心にまちをつくる
(景観と環境を生かしたまちづくり)
7 まちづくり仲間を増やす
(組織体制支援体制の確立)

という大きく7つの方向性とこれに対する具体的なアイデアとしてまとめた。

この中から、あるいはこれを基にして、優先的にまず行うべきことは何か、チャレンジすべきは何か、それぞれができることは何か、具体的で実践的なまちづくりを考えるガイドとなることが期待される。

喜多方まちづくり7つの提案

地区別プランの検討・提案

喜多方市全体のまちづくりの考え方、市街地の考え方の整理が重要であるとともに、各地域のおける都市空間、あるいはまちづくりの考え方の整理も非常に重要である。地域のまちづくりの積み重ねが喜多方のまちづくりを紡ぎあげることとなる。

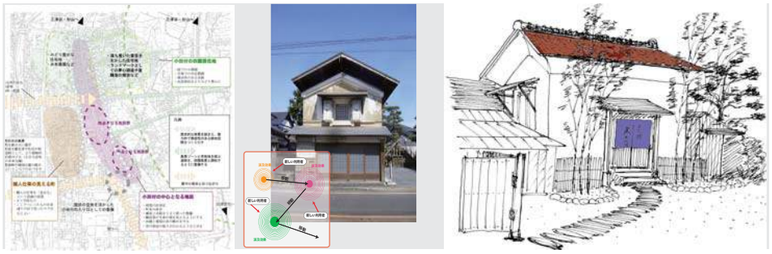
喜多方のまちづくりでは2000年以降、様々な主体が関わりながら、まちなかの各地域でのまちづくりが議論された。駅前通りエリアでは、道路拡幅整備に伴う、道路と沿道を一体としたまちづくりの方向性が議論され、市役所通りでも通りのあり方沿道のありかたが議論されつつある。ふれあい通りでは、アーケード撤去に伴う街並みのあり方と、今後の商店街のあり方が議論され、おたづきでは、まちづくり団体を中心として今後のあり方について活発な議論が続けられている。

喜多方市全体のまちづくりの考え方、市街地の考え方の整理が重要であるとともに、このように、それぞれの地域のお方向性の議論もまちづくりの重要な要素として考えられる。

1. ふれあい通りエリア

ふれあい通りでは、アーケード撤去に伴う街並みのあり方、そして、喜多方の中心商店街の今後のあり方が議論の中心である。2001年度の蔵みっせでは、地域資源を活かした活性化の提案と実験、「民官学の連携」(2005、東京大学)では、蔵と外部空間を活かした「くらにわ」の街並みを含めた提案がなされた。県道整備では、「くらにわ」が実践に向けて進められ、「くらはく」(2007)でも社会実験が行われた。

2. おたづき蔵通りエリア



ここ数年では道路整備などの大きな変化はなく、魅力的な蔵の街並みの残る小田付では、「小田付郷サバイバルプラン」(2003、東京大学)によって、蔵だけでなく、職人技術や、まちなかとの関係を含めた提案がなされた。「くらはく」(2007)では、空き蔵の活用方法に向けてな提案がなされるとともに、実際にも、資源を活かした空蔵再生事業でもある「まちづくり寄合所」により、数軒の空蔵が活用されるなど、現実のまちづくりに向かっている。

3. 駅前通りエリア

駅前通りでは、拡幅に伴う沿道の街並みとともに、喜多方の玄関口としてのあり方が問われている。中心部とは異なる駅前では、資源を活かすだけでなく、新たな都市空間の創出が求められる。喜多方の建築様式・空間構造を継承しつつ、商業だけでなく、交通弱者を含めた駅前居住も視野に入れた複合的な都市空間への可能性が考えられる。また、喜多方の玄関口のあり方として、豊かな水と緑といった喜多方の自然、そして、ゆとりある外部空間による「喜多方の杜」としての駅前地域も検討されている。

4. 市役所通りエリア

市役所通りは、最も観光客が移動する通りでもある一方、特に歴史的な資源が連続するわけでもない上に、歩行者環境としても課題がある。「民官学の連携」(2005、東京大学)では、今後の通りのあり方が。市役所通りを良くする会(2005)などを通して、ゾーンごとの具体的なあり方が提案されている。

喜多方生活文化の象徴、「蔵」の魅力を存分に引き出す

提案01 もう一度 蔵 を使いこなす

1. 蔵相談窓口+アドバイザー制度

市内には蔵が、4100棟あるものの、年々減少も激しくなってきている。蔵の状態や蔵主の状況は、個々に異なり、維持に関する問題を抱えている。技術的には解決可能なことであっても、知識不足や相談先がないことから、解体撤去の選択に向かうことも多い。

そこで、蔵をはじめとした歴史的建造物や工作物等の改修や活用に関する気軽に相談できる第三者的（専門家による）な相談窓口を設けることで、蔵主あるいは蔵の利用希望者の問題点を気軽に相談できることとなり、結果として、段階的な維持改修・解体に関する判断が可能となる。逆に設置者側は、蔵改修に関する情報技術のストックが蓄積するメリットがある。

[蔵窓口事業概要]

① 蔵に関する相談窓口の設置（行政、NPO等）

② 蔵に関するアドバイザーの設置・登録

蔵相談窓口：蔵の補修改修に関する相談、保全活用に関する相談等を行う窓口

蔵アドバイザー：蔵及び歴史的建築物等の専門家（設計士・大工・教員・研究者等）、行政による蔵に関する相談窓口を開設［月2回などの非常勤］

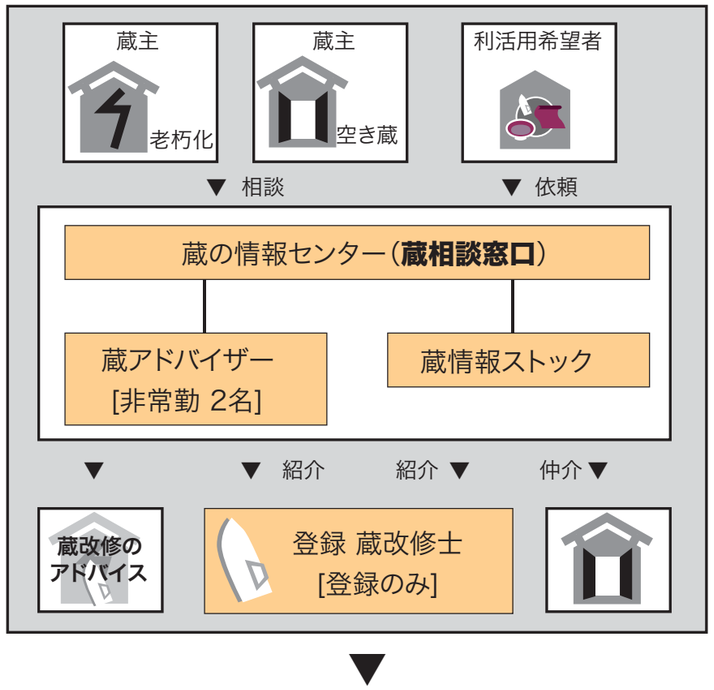
③ 蔵改修士の設置

蔵の改修技術者（左官・大工等）・改修業者を、蔵改修士として位置づける。

（蔵）改修士：公的な蔵改修士として雇用し、建物修診断、場合によっては補修等を行う［非常勤］

登録蔵改修士：技術者を登録し、改修希望者・相談希望者との仲介を行う

[組織イメージ（初年度～3年度）]



[組織イメージ（4年度以降）]

1-2　蔵バンクの設立へ

2. 蔵の保全に関する諸制度の利用

■ 伝統的建造物群保存地区指定

伝建制度は、街並みを総合的に保全していくための仕組みである。住民、行政、専門家による調査とまちの価値の再認識、合意形成、保存地区の画定と保存計画策定を経て、国から認可を受ければ重伝建地区となる。

まず、住民自身がその街並みの価値を十分に認識することが重要。

優遇措置として、区域内の土地の地価税は非課税に、固定資産税も減免される。修景において補助金の支給やその他様々な支援・援助が行われる。

■ 登録文化財制度の活用

文化財登録制度（96年～）により登録される。その条件は、築50年を経過している建造物で①国の歴史的景観に寄与しているもの②造詣の規範となっているもの③再現することが容易でないもの のいずれか。

文化財登録制度の新しさは、文化財を自由に活用できることにある。外観を大きく変えなければ、積極的な活用ができる。

欠点は、所有者にメリットがやや少ないこと。地価税や固定資産税などが減免され、必要な修理費の設計管理費の半分が国から補助されるが、工事費に対する補助はない。

■ 景観法に基づく観重要建造物指定

2004年に施行された景観法に基づき景観条例を策定し、景観行政団体（景観計画の策定、景観協定の認可などを行う地方公共団体）の長が、地域の景観上の核となるような景観上重要な建造物を指定する。

管理行為を除く現状変更については景観行政団体の長の許可が必要になる。ただし内部の利用は自由。

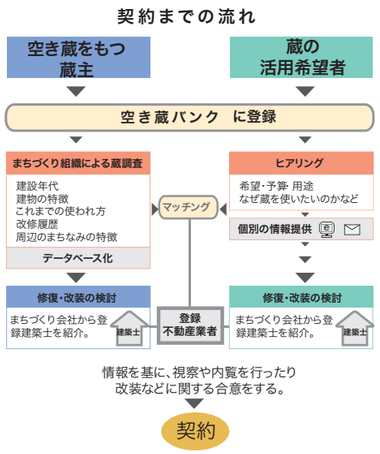
建築物及び土地については相続税の適正評価がなされる。その他、景観整備機構（NPOや公益法人）と所有者が管理協定を結んで管理することにより、所有者の負担軽減を図ることが可能。

喜多方における蔵の魅力、大切さと文化的意義に関しては述べるまでもないが、いざ保全活用となるとその具体策が整理されていないため、こうしている間にも少しずつ蔵は消えている。そこで、蔵の保全・活用について、実践的・具体的な方策を再整理する必要がある。

空蔵活用システムとしては、空蔵（と、活用希望者とを登録・仲介し、活用のための改修・設計を行う技術者も紹介する「空き蔵バンク」や、まちづくり組織等がまちづくりセンターとして空蔵を整備・利用し、借り手が見つかり次第、借主と貸主を結びつける仕組みが考えられる。

保全に関しては、伝建、登録文化財の活用、市独自に蔵の登録制度による独自補助、景観協定等の自主的保全の仕組みが考えられる。また、資金調達システムとしての蔵ファンドの存在も重要である。蔵再生は、個別に進んでおり、そのための改修・修景補助システムが必要となろう。

3. 空き蔵バンク（空き蔵活用仲介）システム



今後の喜多方の文化の継承と発展のためには、地域資源である蔵を保全し活用させていく必要がある。市内外には、低・未利用の空き蔵や潜在的な蔵活用のニーズは存在しているものの、それらがうまく結びついて実現しているケースは少ない。

よって、これらのニーズを仲介する組織として、「空き蔵バンク（空き蔵仲介）システム」を提案する。空き蔵バンクは不動産のような役割をもつ。具体的には、市内外の空き蔵を調査し、所有者に対してアンケート等を行い蔵の賃貸に対する意識向上や賃貸者の増加を促す一方で、蔵活用希望者に対しては、市内外から広く情報を収集、一元化する。さらに、空き蔵バンクは、喜多方市における建築士や左官などの専門家や行政といった相談役を双方に仲介し、喜多方市内外の蔵活用を促進する。

実情に照らし合わせると、まちづくりNPOが中心スタッフとなり、自治体・技術者などの相談役が連携した組織とし、貸し手、借り手、先進事例の情報収集と発信、蔵活用体験事業の企画運営を統合的に実施・運営する。また、後々には拠点を設け、蔵活用資料館も併設することにより、蔵活用希望者に情報を提供し事例や低未利用の蔵を展示紹介していく。

また、若手専門家の登用により、地域の担い手育成も積極的に推進する。

空き蔵バンク（空き蔵活用仲介）システム

■組織構成のイメージ

まちづくりNPO　1名[兼任]

市職員・建築士・左官　2名　［随時相談役］

■事業イメージ

蔵活用体験

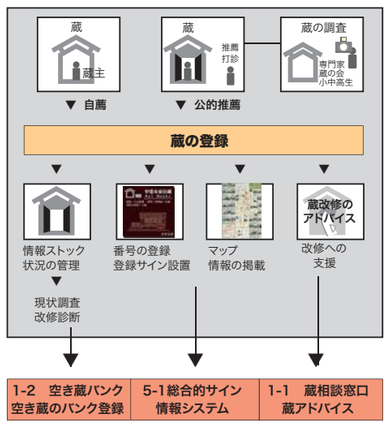
相談役の紹介

情報発信（貸し手・借り手・事例）

情報収集（貸し手・借り手・事例）

4. 喜多方版・蔵（地域資源）登録制度の創設

[システムのイメージ]



4100棟あるといわれている喜多方の蔵も、実際の数・状態は把握できておらず、規制や保全の制度もない。

蔵は喜多方の生活文化と密接に絡み合うとともに、来街者にとっても喜多方の文化を感じる重要な資源となっている。よって、この蔵に対する情報を把握し、公的に位置づけることで、資源としての価値を明確にするとともに、情報をストック・管理することで、保全活用の一助となる。

［蔵登録による考え方］

1）蔵の地域資源としての価値を公的に位置づける（登録証もしくは蔵サインの設置及び資金補助）

2）蔵に関する現況把握及び情報のストック・管理

3）蔵を資源とした情報発信としての活用

4）保全活用支援等も行うシステムを構築する

喜多方蔵登録制度

①喜多方における資源情報の明確化と管理

※蔵解体時における届出制度

※蔵の登録

・自薦

・公的位置づけによる所有者への推薦

→1. 蔵窓口、2. 蔵バンク と一体的連携

②登録資源に対する支援

※登録サイン設置とサインへの補助援助

※マップ等との連動と情報発信への活用

※免税による補助および市独自の補助制度の可能性

③周辺集落も含めた市域全体の蔵情報の収集

※蔵の会による測量・図面ストック

※中学生による蔵調査の成果

※東大他の既存情報の利用

歩行者にとって、安心で快適、魅力的で個性的な「みち」の育成

提案02 歩いて心地よい みち にする

現在の喜多方のまちなかは、通りから中にはいると、車はあまり通っておらず、比較的に快適な場所となっている。一方で、初めての人にとっては、非常にわかりにくく、「蔵のまちはどこですか」と聞かれることも多い。少しゆっくり立ち止まったり、休んだりする場所や、うるおいある風景も不足している。さらに、駅とまちなか、小荒井と小田付など、ちょっと離れている距離も課題となっている。

こうした、まちなかのあり方を改善する、心地よい「みち」空間をまちなか全体で紡ぎ上げる必要がある。

具体的には、わかりやすい街路網と快適なみち空間形成のための「まちかど」、まちに奥行を与える「よこみち」や「うらみち」、道路整備に伴う沿道空間の一体的整備、全体のネットワークを伝える「蔵サイン」計画などが挙げられる。

1.「まちかど」づくり

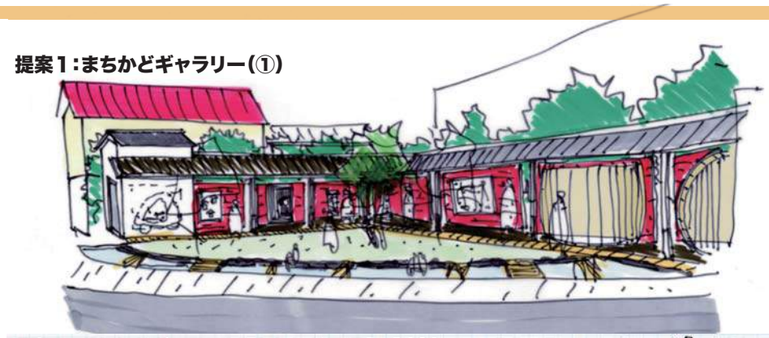
現在のまちなかはメリハリがなく、自分がどこにいるのかも分かりにくい。一方、都市のわかりやすさに、交差点（まちかど）は重要な役割を果たすため、まちかどにシンボルとなるような空間をデザインし、また公共サインなども合わせて整備することで、わかりやすいまちを創出する。

また交差点は、通りと通りが交差する結節点としてだけでなく、憩いの場としても機能する。井戸端会議、昼時のランチ、観光客にとっては、まちあるきの合間の休息スペースにもなる。

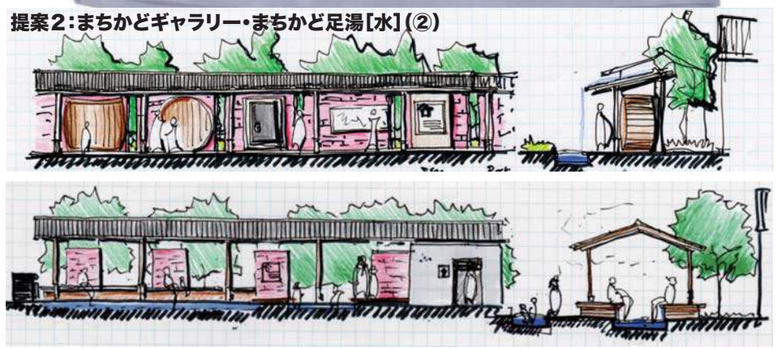
ふれあい通りやおたづき蔵通りのまちかどには、景観を創る上でカギとなる建物も多いため、それらを上手く活かすためにも、心地よくわかりやすいまちかど空間の創出が期待される。

まちかど整備の期待される交差点
①吉の川酒造交差点（ふれあい通り）
②笹屋旅館・若喜商店交差点（ふれあい通り）
③三浦屋前交差点（小田付）
④菅井屋薬房前交差点（小田付）

提案1：まちかどギャラリー（①）



提案2：まちかどギャラリー・まちかど足湯［水］（②）



2. 街路整備と沿道の一体的整備

現在、まちなかでは、**駅前通り**および**ふれあい通り**にて道路の整備やアーケードの撤去も検討され、**市役所通り**でも事業が検討されている。これらの街路環境を魅力あるものとするため、街並み・沿道空間と一体的な整備が必要となる。よって、道路空間及び沿道空間における一体的整備・付属物および沿道建造物における改築・改修・修景のルールを策定し、これに合わせた修景に対する指導・補助のシステムを創設する。

（①くらにわによる道路-沿道の一体整備）
②道路施設と沿道施設の一体的整備
（ガイドラインの策定）
建築物修理修景基準（蔵修理基準・蔵と調和した建築物修景基準・空地基準[黒塀・生垣・植栽]）
③ファサード整備に関する補助制度の確立
時限的基準による高率保護
③沿道街並み修景の組織体制
街並み委員会による協定運営（cf：川越）
④喜多方型建築を検討する技術者組織の構築

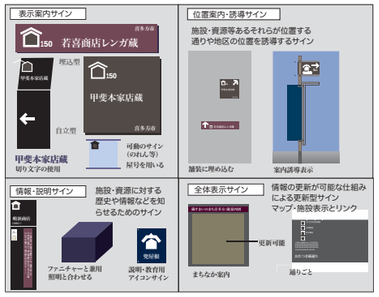
沿道との一体的整備イメージ

修景基準のイメージ

ふれあい通りでの展開イメージ（初年度ー10年度）

（アーケード撤去）
▼
魅力ある街路空間整備
▼
沿道外部空間の整備
（電線地中化に伴うくらにわ整備）
民間オープンスペース
（くらにわ）整備
▼
景観協定によるファサード管理
ガイドラインによる街並みルール
空地協定による空地による修景
▼
個別の建築物建替え
蔵の保全改修
▼
街並み委員会による景観運営
（地域団体を中心として、専門家、オブザーバーの行政等からなる自主的組織）

3.「蔵サイン」全体計画



喜多方市では、個別サイン・看板を各主体が設置した結果、乱雑な景観が氾濫している。

一方、くらはくでの実験の結果、蔵の前で情報に目をやる姿が見受けられ、情報に対する期待の高さがうかがえた。よって、統合的なサインのデザイン・システムを使いながら、わかりやすく身近なまちなか空間の形成を図る。

具体的には、喜多方の資源でありながら、情報欠如で来訪者に気づかれない蔵に関する情報を伝える「蔵案内サイン」設置（各蔵に個別に設置）、「誘導サイン」とともに、個別サインのルール策定、マップやHP等との連携を行う。

統合的サイン情報システム
①「蔵案内サイン」の設置（事業開始済：市）
名称・蔵記号・番号・文章・図面
設置位置・設置方法の検討
初年度：宝くじ事業（数十箇所）
初年度以降：登録申請等に応じて増やす
②「誘導サイン」の設置統合
蔵以外の施設サイン
③個別看板・サイン等の統合
市内・通りごとに統一した店舗サイン
屋外からの間接照明による看板等
④マップ・HP等を利用した統合的な情報システムの構築
まちなか蔵マップの統合・作成：サインとリンク（蔵登録制度ともリンク）
HP等による地域資源の情報発信：サインとリンク
⑤まちなか散策が可能なタウントレイル事業
来訪者の観光ルート及び地域のまちあるきによる市民の探索ルートの提供
サイン・舗装・案内・解説による情報提供

4.「よこみち」「うらみち」の再生

▲緑町のよこみちと周囲との関係

喜多方の魅力の一つは、表通りの脇に入った「うらみち」「よこみち」である。蔵や水路といった資源がひっそりと佇み、また車が殆ど通らないため歩行者にとっては非常に歩きやすい空間となっているが、その魅力が十分に活かしきれていない。そこで、裏通り（うらみち）、これらをつなぐ横丁（よこみち）を再生し、これにより、まちの回遊性の向上を図る。

「くらはく」における緑町のにぎわいの結果は、喜多方における「よこみち」の重要性を改めて示した。この緑町の街路をはじめとして、通りの脇にはいる「よこみち」の整備を行う。

(1)趣ある街路舗装（煉瓦や石畳）・水路の開渠化
(2)町並みの骨格を整える塀・柵の修景
(3)鉢植え・植樹等による民地側を緑化
(4)民地側の空地に、「くらにわ」の設置
(5)統一された、蔵サイン、通り名サイン等の設置
(6)「うらみち」「よこみち」ならではの足元から照らす温かみのある照明

[うらみちよこみち整備のステップ]
①街路整備による快適なよこみち空間の整備
（緑町でのモデル事業）
②よこみち整備の方針策定
③民間主導による「おもてなし」のみち実現

緑町おもてなしの花小径事業
■道路の舗装：部分的に喜多方煉瓦や石畳等を利用した歩行者に優しい街路（一方通行だが車も通る）
■低位置歩行者照明の設置（ナトリウム系の温かみのある光色）と落ち着きあるうらみち空間の演出
■くらにわ事業との連携による小広場の創出（冠木商店前・月見橋たもとなど）
■外部照明による看板の設置とサインの統一
■緑化の誘導推進
■塀や柵・建物修景：喜多方の風土に合う素材・色彩で

緑町の参加型「はなこみち」
■ 植栽の提供・表出（植木鉢の統一等）
■ 景観協定による魅力あるみちの創出

パッと見ではわからない、広がりと深みのある喜多方の暮らしを高める

提案03 極上 の会津文化を味わう

1. 文化堪能型滞在観光プログラムの構築

喜多方のラーメンだけの町ではない。蔵に象徴される喜多方独自の「蔵ずまい」の文化、蔵を用いて栄えた商売や流通業蔵の特性を利用して育った味噌醤油業、醸造業、これらを支えている田畑や美味しい水、その奥にある豊かな自然・・・喜多方に眠る豊かな資源は、単体で魅力的であるだけでなく、お互いがつながっており、この結びつきを感じ、紐解きながら巡ることでさらに深い喜多方文化への理解と愛着が高まる。

このような広がりある喜多方文化を理解する助けとなるような観光プログラムを挿入することによって、観光客、地域双方が喜多方文化の深みをさらに理解することとなる。

例：喜多方体験プログラム　-蔵婚式-

喜多方のもつ多様な文化を一つのセットプログラムとして編みこむ（ここでは例として結　婚式を開催するというプログラムとする）

■喜多方の伝統工芸文化を堪能するプログラム
酒、味噌、桐、漆器、会津染など、喜多方を代表する産業・手工業・工芸品を上手に用いたプログラム

■式における調度品、食事、酒など全てを地元産の材料、製品、食材を用いて行うだけでなく、体験などを通して、喜多方の文化の深さを感じられるプログラムを編成する。

■半年前から、祝い酒の仕込みをはじめる
↓
SLにて喜多方駅到着後ベロタクシーがお出迎え
↓
蔵座敷を用いた婚礼の式
↓
酒蔵で仕込んだ祝い酒と宴
↓
蔵座敷に宿泊

喜多方の暮らし自体の魅力は、日々感じないとしても、来街者には、貴重で魅力的なものである。また、近くにいすぎて実は体験していないこともあるかもしれない。一方で、まちなかにある蔵や喜多方文化は一目ではわかりづらく、魅力や個性が内外に伝え切れていない。さらに、伝統産業も後継者不足により継承が困難な状況にある。

そこで、これらの喜多方が持つ奥深い文化を伝えるための方法論が必要となる。一つ一つの試みをつなぎ、まち全体を博物館としてとらえる試み（まちかど博物館）や、まちなかと周辺が協力し合うことで、奥深い喜多方-会津文化を示す。

このような会津文化・生活の魅力を地域・観光客双方が実感できる場を増やすことが重要である。

2.「まちなか」ー「周辺」の連携した、「奥行」ある喜多方文化の育成

喜多方の深い文化はまちなかにとどまらない。むしろ、これを取り囲む豊かな自然と農村部の力が喜多方文化を支えているといっても過言ではない。

これらの周辺部にも眠る豊かな文化と力の存在を意識し、まちなかと周辺部がお互いのメリットを交換し合うことで、相乗効果を図りながら、奥行ある喜多方文化を守り育ててゆくためのプログラム構築が期待される。

まちなかから周辺へと波及する仕組み、周辺がまちなかを利用する仕組みなど、その形態は多様である。

■ フィーダバスシステムなどを利用した広域周遊観光の創出

喜多方の周辺地域には、特色ある集落や温泉地、自然環境など、様々な資源と魅力が散りばめられてるが、移動手段は自動車（マイカー）に依存しており、既存のバス交通も、観光客・生活者双方にとって、利用しにくい。まちなかと周辺地域とのモビリティ（移動のしやすさ）を改善し、誰もが使いやすい環境をつくる。

喜多方駅・まちなかと周辺地域の拠点を細やかにつなぐフィーダーバス・システムを提案する。フィーダーバスは、列車にスムーズに接続して、公共交通ネットワークを生み、滞在型の広域観光を促進するとともに、ニーズに応じて、休日や観光シーズンは観光拠点、平日は学校・病院や生活利便施設を中心に停留所やルートを使い分けることで、効率的な運行が可能となる。　運営は、「フィーダーバス運営委員会」を設立し、地元バス事業者に運行委託し、JRと運行連携を行う。市と観光・宿泊事業者も、共同で運営資金の支援を行う。

■「登り窯」を始めとした産業遺産・文化遺産の保全活用

喜多方には、登り窯をはじめとして、かつての産業の存在を示す資源が残存するものの、維持管理や継続使用に課題を抱えている。一方、経済産業省の産業遺産を活用した観光など、産業遺産の活用の動きが全国的にも進展している。そこで、これらの産業遺産・文化遺産を活用しながら保全する戦略を展開する。

[産業遺産保全活用事業]

■登り窯の保全再生と窯を用いた事業（煉瓦の利用）の実施

■漆器・桐下駄・会津染などの伝統産業とこれ　に付随する施設の保全活用

■観光あるいは文化財等の立場から、産業遺産の保全活用を進め、「重要文化的景観」へ（市）

喜多方の魅力を堪能する、新しい観光スタイルの確立

提案04 滞在時間 を 倍 増する

現在、喜多方を訪れる観光客の平均的な滞在時間は約2時間程度であり、ラーメンを食べ、いくつかの蔵等を見て日帰りする滞在形態が大半となっている。

喜多方のまちの魅力をよりたくさん伝えるには、充実した「喜多方ステイ」を実現する戦略を構築することが必要となる。

具体的には、蔵座敷等に宿泊できる施設（蔵ホテル）による、「くらはく（蔵泊）」、グリーンツーリズムで農家に宿泊する「のうはく（農泊）」における蔵の活用など、喜多方の暮らしと魅力を堪能できる宿泊コンテンツが求められる。

また、日中だけでなく、夜の喜多方の魅力向上にむけて、蔵BAR等の充実、町並みライトアップ、夜の散策を促進する。

喜多方の魅力を発信する一体的なシステム・プロモーションも不可欠である。

1.「蔵泊（くらはく）」「農泊（のうはく）」による宿泊できる喜多方

喜多方への来訪者の滞在時間が短い理由として、未成熟な宿泊環境が挙げられる。一方で、蔵座敷に代表される「魅力ある蔵ずまい」が知られている。趣きある蔵座敷で寝泊まりできる「くらはく（蔵泊）」の実現により、来訪者に魅力的な喜多方ステイを提供する。

[蔵泊（くらはく）事業]

蔵泊実現に向けての戦略

① 制度上の問題に向けて

（旅館業法・消防法・公衆衛生法）

- 日中ステイ：まずは、宿泊機能はもたず、日中の食事やくつろぎの空間として、蔵座敷を　提供する。
- 短期賃貸方式：独立した蔵を一棟まるごと宿泊者に貸し出す（短期賃借）形式（京都町家ステイ方式）
- グリーンツーリズムの拡張：グリーン・ツーリズム（GT）の一環として、農家で民泊する「のうはく（農泊）」が実施されており（P.54参照）、農家蔵での宿泊も実現されつつある（改修の補助も含めた支援）。この仕組みを拡大応用する可能性を検討する。

②設備上の問題に向けて

※水廻り等改修・簡易トイレの設置事業等の支援補助

※農家と蔵主を一体的に資金支援できる体制

③事業性の問題に向けて

（一棟の収益限界・負荷の削減）

※蔵泊事務局による総合的な事業運営

市内に点在する宿泊・利用可能な蔵を束ねた「蔵泊事務局」を設置する（運営はNPO）。

事務局はそれぞれの蔵主の理解を得て、蔵の貸借契約を結ぶとともに、水回り設置等の改修を実施する。

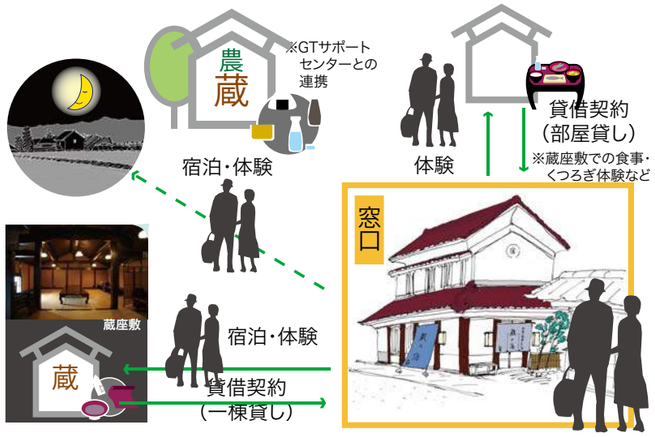
※宿泊可能な蔵を取りまとめる窓口の設置

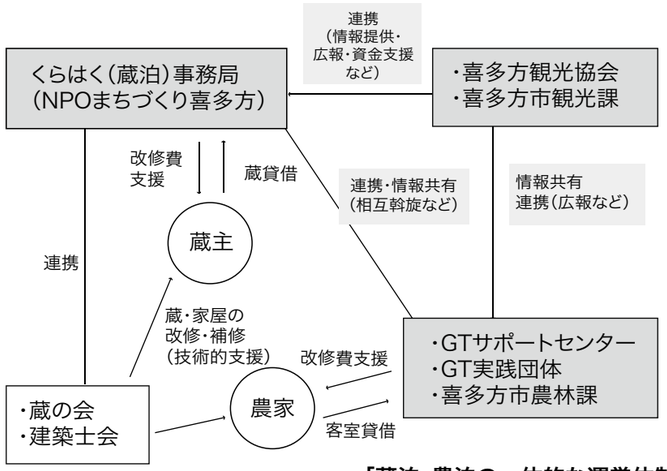
まちなか蔵に「くらはく案内所窓口」を設け、利用者への宿泊・利用の斡旋・受付、滞在情報の提供等を行う。

※「農泊」を含めた幅広い広報・情報体制

農泊の窓口と蔵泊窓口が連携しながら、一体的に広報・情報提供し、来訪者の利用しやすいシステムの実現（窓口で、農泊斡旋も行えるような仕組みなど）。

蔵を維持・改修し、宿泊に活用するためには、農家と蔵主を一体的に資金支援できる体制が必要となる。蔵の会や建築士会とも連携し、改修の技術的支援体制も整える必要がある。





[蔵泊・農泊の一体的な運営体制]

2. 喜多方 DE ナイト

蔵BAR

まちなかの蔵を、地酒や郷土の食材を堪能できる飲食空間へと改修し、「蔵BAR」を運営する。蔵の落ち着いた雰囲気を活かした「蔵BAR」は、喜多方での夜のひと時をゆったりと過ごすのに、絶好の場所となる。既存の店舗もネットワーク化し、来訪者によりアピールする（英世ちゃんではしご酒のような企画）。

クライトアップ

これまでの、ふれあい通りやおたづき蔵通りでライトアップの実績を受け、魅力的な蔵がみえるライトアップ技術の向上とともに、直接照明だけでなく、道端の行灯や、白壁を使った演出、蔵の開口部からの洩れ明かりを効果的に用いることで、しっとりとした夜間景観を演出することができる。

嶋新の蔵群を活用し、地酒や地場の食材（米、味噌、野菜）、ラーメン等を楽しめるバーを運営。

3.「喜多方公式ガイドブック」の作成と一体的情報発信

喜多方の観光資源は、一見するとわかりにくいという評判もある。これらの魅力を伝えるためには、ガイドとなる情報が必要である。

その一方で、喜多方の魅力を上手く伝える出版物や、奥深い文化や、何度も来たくなる様な情報がコンパクトにまとまったガイドブックが少ない。

よって、ガイドブックを作成することで、来街者にも気軽に喜多方の魅力を情報として受け取りながら深みのある観光を確立する。

同時に、市民にも気軽な「日常観光」を実現し、地域を見つめなおす機会とする。

また、この策定プロセスにおいて、地域情報を発掘・収集し、ストックとしておくとともに、積極的な情報発信を様々なメディアのコンテンツとして活用する。

喜多方ガイドブック事業

① 地域資源の発掘・情報収集

これまでの各種調査結果、現地調査のストック

HP等による書き込み情報の収集とストック地域情報は蓄積・更新される

② ガイドブック作成販売

数回訪れた来街者および市民対象に、地域の魅力とその奥深さを伝えるガイドブック作成

③ その他メディアを用いた発信

マップ　：地域情報を掲載したマップと連動

ポスター：統一したテーマ・デザインで各種の魅力を示す

HP　：市内外に魅力を発信する

インタラクティブに情報収集

情報を蓄積・更新する

[書き込み可能なHP]

▼喜現地調査、HPの書き込み情報などを基にした地域情報の収集とストック

▼魅力ある地域資源や情報の発信（ガイドブックのコンテンツ）

▼喜多方のまちなかの魅力をコンパクトにまとめたガイドブック

▼収集情報を活かした他メディア等を用いた発信

蔵、喜多方独自の都市空間、蔵を活かす外部空間「くらにわ（蔵庭）」

提案05 「くら」と「にわ」を育む

次世代型の街並みづくりでは、必ずしも道路整備後に従来型の連続した建築物が現れるとは限らない。喜多方でも、まちなかは空地や空き店舗が増加している。

一方で、現在の喜多方には、ゆっくりとくつろぐ「憩い」の空間が少なく、街並み整備では「ゆとり」と「ふくらみ」を手に入れる必要がある。

蔵並みの構造をよく見てみると、喜多方の蔵は、川越とは異なり、蔵の前に少し空いた民地空間が存在している。こうした外部空間を活かして、魅力的な緑地・空地（くらにわ）を創出する。

くらにわの多くは、民間の空間であり、公共事業である道路整備と一体的に考えつつも、官民の協働と各自の努力で育む必要がある。

そのくらにわが引き立つには、シンボルである「くら」そのものの魅力も磨かれる必要がある。まちなかに点在する空き蔵を、機能的にも空間的にも再生し、外部空間と一体的に活用することで特徴的で魅力的なまちなかをつくりだす。

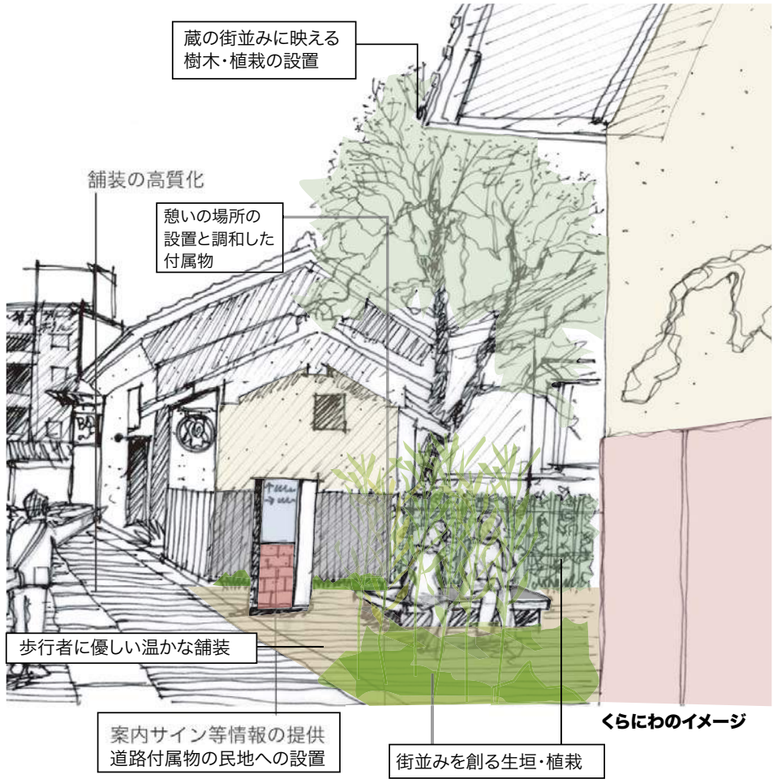
1.「くらにわ」を育む

市民や観光客で賑わうまちなかでは、自然やゆとりあるオープンスペースが不足している。一方、空き地や駐車場空間も増加してきている。そのため、街並みとしての空間が途切れており、賑わいやうるおいの低下の要因となっている。そこで、街路沿い、もしくは蔵の前や横にある外部空間の整備修景を行うことにより、蔵や魅力的な建造物とオープンスペースや植栽が織りなす美しい街並みを実現し、かつ、うるおいと賑わいのある魅力あふれる街路空間の創出を図る。「くらにわ」としての外部空間のルールを協議しながら、各空間において各主体が積極的に実行する（第4章内、くらにわも参照）。

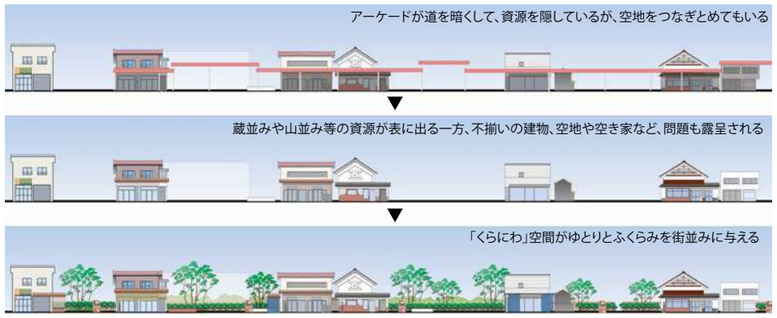
【くらにわ整備の考え方】
1）くらにわを利用した蔵の映える街並み創出
2）植栽・工作物等による連続的な街並み形成
3）休憩スペース・ゆとりスペースの創出
4）賑わい創出（イベント・オープンカフェ・直売等）
5）路上構造物の設置空間

【くらにわ整備の方針】
1）植栽あふれる魅力ある庭空間の創出
（蔵と調和した高中木＋生垣低木等の植栽）
2）舗装の高質化等による街並みとの調和・人に優しい空間の創出・地場産材等の利用
3）付属物（ベンチ・照明等）設置とデザインの統一
道路付属物（トランス等）の設置と調和
4）わかりやすいサイン等の設置
5）駐車場等の低未利用地に対する植栽・工作物修景

【くらにわ整備の分類】
1）街路整備に伴う公共用地化（街路整備と無電柱化・無散水消雪化等との連携）
→道路付属物の設置・植栽・みどりの広場
2）民地を借地・公衆用道路等として公共整備・管理
→小路・小広場（休憩所）・みどりの広場
イベント・直売等での利用
3）民地で直接オープンスペース整備
→駐車場・オープンカフェ・植栽スペース



くらにわのイメージ



2. さまざまな「くらにわ」創出

くらにわの生成
■民地の（各自での）再生
■公衆用道路：不動産登記上の地目の一つ。自分の所有地の一部で、いっぱんの人の通行に　使われている土地。公共性が認められれば、　固定資産税が解除されうる。
■借地公園；都市公園としての借地公園整備。
■空地も含めた景観協定
■くらにわ認定補助制度、顕彰制度
■指定管理者制度

くらにわ茶屋

半間くらにわ
（庇下の半間分
だけ庭にする）

3.「空き蔵再生」事業（蔵を活用した広がりある地域資源の活用）

喜多方市内には、多くの蔵があるものの、使われていないものも多い。また、空き家・空き店舗も増加してきている。これらは、利用しないと老朽化が進むだけでなく、安心安全面からも課題があるとされる。今後、このように空き蔵の増加が予想され、活用のモデルを構築する必要がある。

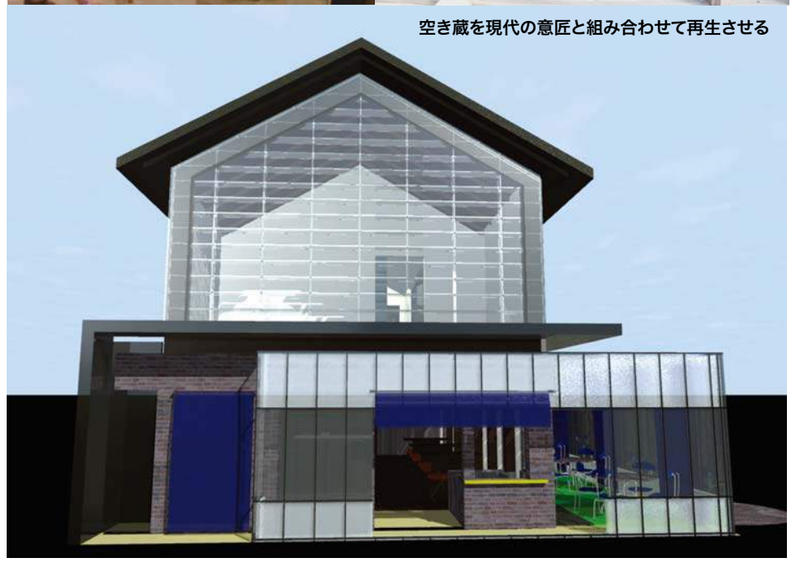
また、「くらはく」において、展示（ふれあい夢空間）やカフェ（島三商店）などの実施により、魅力ある蔵は活用可能性も高いことが示された。これらの空き蔵・空き家等を積極的に再生活用させることによりまちなかの賑わいを創出する。

空き蔵の活用に関しては、蔵の空間的景観的魅力を最大限に活かした良質なストックとすることが重要となる。

空蔵再生事業
①魅力ある空き蔵（空き家）の再生活用事例の創出（具体的活用モデル対象の検討）
②空き蔵再生活用に関する補助・支援
■まちづくり寄合所事業（市+NPO）
空き蔵再生モデル事業
※市まちづくり推進課・観光課の総合オフィス
※まちづくりNPO（まちづくり喜多方）拠点
※地域デザインセンター拠点
※観光案内所としての機能
※蔵相談窓口
■蔵カフェ支援事業（市+商店街）
蔵を利用したカフェ実施に関する支援
（トイレの共同利用・水周り改修の補助等）

蔵カフェ

空き蔵を現代の意匠と組み合わせて再生させる



喜多方の原点である「水」と喜多方をうるおす豊かな「緑」であふれるまちに

提案06 「水」と「緑」を中心につくる

1.「田付川」グリーンライン計画（田付川を中心とした緑再生計画）

豊かな水を持つ喜多方であるが、その中でも、小荒井、小田付という2つの中心地区にはさまれた田付川は市内の中央部を流れ、また、生活空間の中心に位置し、市民にとって憩いを与える重要な資源であるものの、現在は有効に利用されていない。

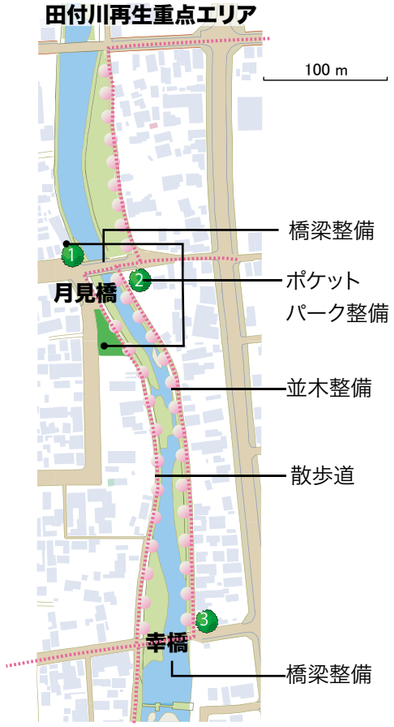
この、重要な憩いの空間であり、車で訪れた観光客にも、喜多方の玄関である田付川沿いを、市民の憩いの場としての空間、魅力ある景観の創出を図る。遊歩道沿いの空間も一体的にとらえ、水辺空間の活用を図る。

具体的には、幸橋から月見橋付近を中心として、沿道も含めた並木・遊歩道の整備を行いながら、訪れる人にも暮らす人にも快適な憩いの空間を創出する。

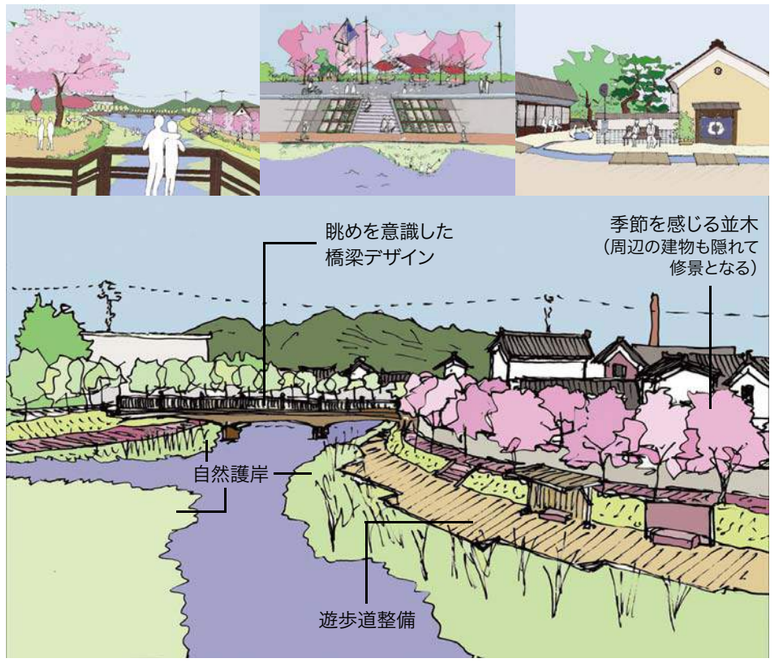
■田付川修景計画■

①田付川の水環境改善運動
　小学校・NPO等による「清掃活動」「生態系体験」授業
　「喜多方市内の川を考える会」等の市民団体を中心に、川のファンドの寄付金を基にした、源流探検、ふるさとの川セミナーなどの環境改善活動
②田付川を美しくする事業
　※水辺にあう桜並木等の街路樹の植樹事業（観光客にとっても魅力的な玄関を創りだす）
③河川沿い修景整備事業
　※河川修景整備計画
　　水と緑の散歩ゾーン
　　水と緑のくつろぎ空間ゾーン
　※川沿いのポケットパークの再整備
　※月見橋沿い「くらにわ整備」
　　（くらはく実験）
　　※「まちかど」のくらにわ整備
　　※散歩路整備整備
　　※河川の修景整備（生態系保全・自然護岸）
　　※橋梁整備（幸橋・月見橋）
④田付川を活用するソフト事業
　※祭り等の一時的なイベント活用事業
　※オープンカフェ整備事業
⑤田付川沿いの沿道における景観協定と運営

田付川再生重点エリア



川を/川から眺める橋梁デザイン　**自然護岸の魅力ある河川**　**水をまちなかに引き込む**



田付川再生整備のイメージ

喜多方の魅力であり、まちなかの課題であるのが、水と緑がもたらすうるおいである。

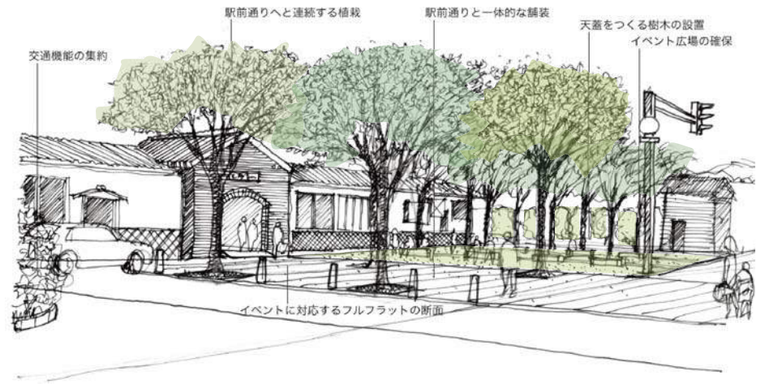
周縁部に広がる美しい風景、まちなかに不足している緑地空間、本来はあるにも関わらず市民の資源として十分に活用されていない豊富な水と緑を活かし、市民が気軽にふれることの出来る都市空間・都市環境を実現する。

とりわけ、まちなかでキーポイントとなるのは、中央を流れる「田付川」の環境・景観整備である。市民や観光客が、水とそこから望める、ひろびろと開けた風景を楽しむことのできる場が期待される。川沿いに並木道を設け、風景としても美しくするとともに、遊歩道、ポケットパーク、憩いの場の設置等の整備が考えられる。

今まで蓋のされた水路においても、可能な部分では開渠化し、歩道者にうるおいとやすらぎを与える場をつくる。

通りの公的空間とくらにわの私的空間の緑をつなぎ、自然の連続性を創出する。また、喜多方駅前広場・駅前通りのポテンシャルを活かし、緑あふれる喜多方の玄関口を創出する。

2. 水と緑あふれるまちなか計画



緑のネットワーク

緑の少ないまちなかにおいて、緑のネットワークを創出するために、オープンスペースを積極的に緑化することが必要となる。喜多方の玄関口である駅前広場や駅前通りなどは、「喜多方の杜」として、緑豊かな公共空間を創出する可能性をもつポテンシャルの高い空間である。

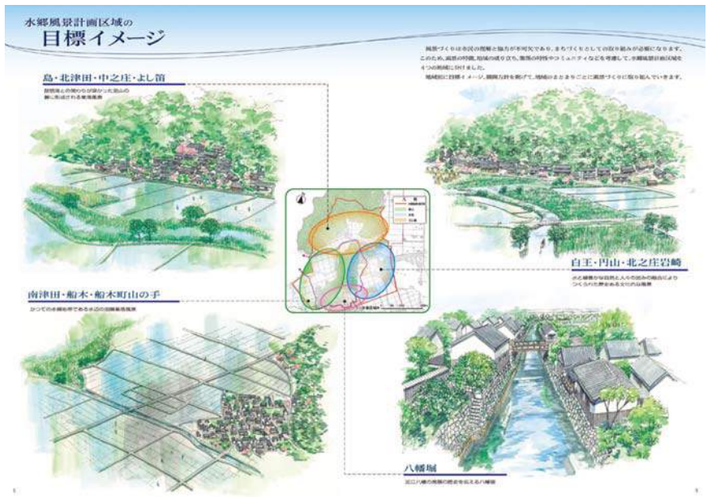
水路再生

また、本来豊富であるはずの水を取り戻すため、蓋のされた水路を再生する。

蓋を開ける：今まで蓋された水路を開け、直接水にふれあえる場をつくります。意匠にも優れた水路用のグレーチングパーツを開発し、開けたいところだけ蓋を開け、蓋をかけたい部分には意匠に配慮した材料で蓋をかけるといったような、柔軟性かつ部分的な水路の整備を実現することによって、少しずつ水路網を回復してゆく。

3.「景観計画」による喜多方の広がりある風景の管理

▶近江八幡市景観計画における将来イメージ
具体的な将来像について、行政計画においてかなり具体的なレベルで記載されているということが分かる



景観法制定後、日本全国の自治体において景観計画の策定、景観条例の制定改正が進められている。県でも景観条例改正が検討されている。

喜多方市においても、周辺集落や自然環境も含めた広がりのある風景を維持管理するために、景観計画や景観条例等も含めた景観の保全・創出手法及び管理が必要となる。

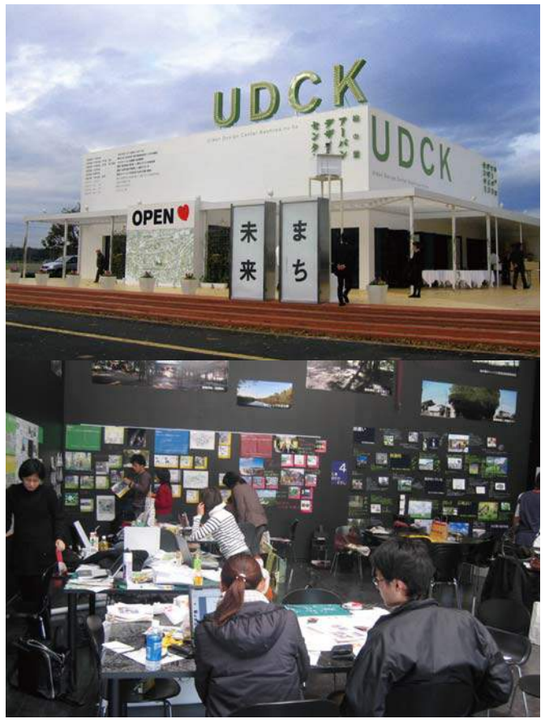
[景観計画のイメージ]

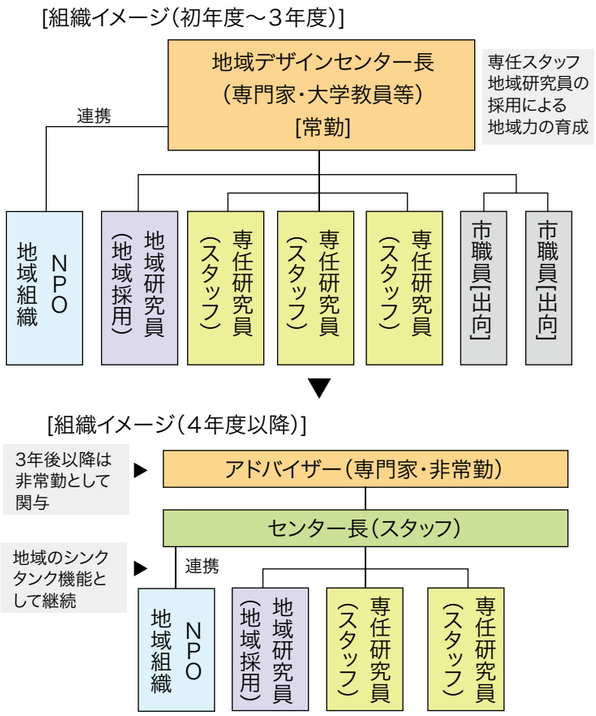
■魅力ある喜多方の風景の要素
■喜多方風景計画
　※幹線道路の風景計画
　※にぎわいの軸の街並風景計画
　※よこみち・うらみちの街路風景計画
　※落ち着きある住宅地風景計画
　※魅力ある農地風景計画
　※自然風景計画（河川・丘陵）
　※周辺集落風景計画
■景観形成基準によるコントロール
（眺望・街並み・街路・植栽等自然要素・**空地**における景観上ののルール）
■景観重要建造物の指定（蔵や地域景観資源）
■景観協定の位置づけ
　景観協定基準明確化・修景補助基準の再検討

まちづくりの裾野を広げ、知を蓄積するための仕組みをつくる

提案07 まちづくり仲間を増やす

1. 喜多方地域デザインセンター（シンクタンク）の設立





これからの会津喜多方における中長期的将来像を検討するためには、地域の情報を収集しながら専門的な都市戦略について研究する必要がある。県・市での地域調査・都市調査は法制度・事業ごとに多くあるものの、地域にとっての蓄積となっていない（東京・仙台等の大都市のコンサルタント業務が多い）。

よって、これらの都市・まちづくり戦略を検討する機関として、「喜多方地域デザインセンター」（地域シンクタンク）を設立し、地域のまちづくり情報を収集・一元化しながら、喜多方市におけるまちづくり戦略・都市戦略について研究検討する機関とする。

実情に照らし合わせると、専門家や大学教員等が中心スタッフとなり、自治体・NPO・地域組織などが連携したシンクタンク組織とし、地域の基礎調査、分析予測、政策・戦略立案、市民参加の仕組み、モデル事業、空間デザインなどを統合的に検討する。また、地域採用や若手専門家の登用により、地域の担い手育成も積極的に推進する。

①喜多方地域デザインセンター
（シンクタンク）

■組織構成のイメージ
専任センター長（専門家）　1名[常勤]
専任研究員　（スタッフ）　3名[常勤]
市職員　2名[出向]
地域研究員　（地元採用）　1名
※専門家は、3年で非常勤（アドバイザー）となる。それ以降は、スタッフ（地域の担い手）が中心となって継続的に事業を実施する。

■事業イメージ
地域調査（自然・歴史・産業・人材・資源）
地域レビュー（課題抽出・評価）
地域分析・将来予測
地域施策・地域戦略・住民参加型計画策定
モデル事業の規格策定
公共空間デザイン

②会津・喜多方まちづくりアドバイザーによる研究支援[非常勤]

喜多方のまちづくりは、地区レベル組織による実践的活動の積重ねにより毎年成果を挙げており、この小さなまちづくり活動の"束"が喜多方まちづくりのモデルでもある。そこには、各種まちづくり活動や、関与する多数の組織から「情報集約」をし、資金を「一括管理」し、事業を「持続運営」できる器が必要となる。

「情報」に関して、「喜多方蔵のまち協議会」を基盤としつつ、情報集約・意思決定・独自事業が可能となるマネジメント組織への発展が必要である。

「資金」に関しては、「キタカタファンド（投資機構）」あるいは「まちづくり会社」により、散漫とした補助・寄付・投資を一括管理が考えられる。「持続」に関しては、教育機関（高校・エリアマネジメント学科）や学生の参加を促し、連携して事業とも行う仕組みを経て、若者の就職・進学サポートにつながってゆくことが期待される。

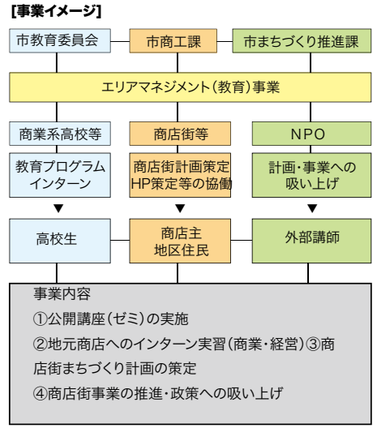
2. 学校（高校等）との連携によるエリアマネジメント

喜多方市では多くのまちづくり団体による活動が行われている。一方、近年における教育機関における商店街との連携や、喜多方商業・工業高校の統合後にエリアマネジメント学科の創設も検討され、高等教育の現場とエリアマネジメントの現場との連携も進むことが考えられる。また、「まちづくり塾」では、高校生のまちづくりへの参画の可能性が示された。この動きをさらに発展させ、商店街やまちづくり組織等の連携により、エリアマネジメント参画を図る。

[エリアマネジメント事業]
■エリアマネジメント教育プログラム■
①講座（ゼミ）：講師による輪講講座（公開）
②商店街実習：地元商店へのインターンをはじめとして、商店街まちづくり計画へ
③年間実技演習：商店街まちづくり計画の策定演習。外部講師、地元まちづくり有志の講義。
④喜多方まちづくりライブラリー@高校
まちづくり情報のストックを高校で行う

■事業プロセス■
① 企画案の策定（市・NPO・任意団体等）
② 高校・商店街・NPOによる企画案策定・調整
外部講師等の選定
④ 教育プログラムの調整
⑤ 高校生の派遣、プログラムの運営
⑥ 商店街等での商売・経営実習
講座学習（公開講座）・演習学習
⑦ 協働で商店街まちづくり計画の策定
⑧ 計画吸い上げ（商店街事業・政策提言等）
⑨ 振り返り・次年度の地区決定（継続して関わるなど、作戦を練り直す）
⑩（結果としての）まちづくり関連就職先斡旋

[事業イメージ]



3. キタカタファンド：民間同士で出資・事業決定・事業参加できる器

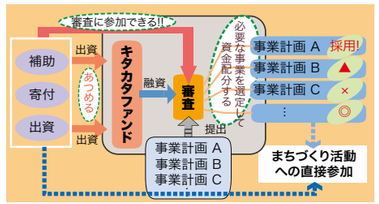
喜多方のまちづくり事業は、単年度ごとに、さまざまな箇所から助成金を確保し、毎年事業を積み重ねてきている。この「助成金確保(まちづくり活動の経費調達)と各年事業の構築の手法」について、新たな仕組みが必要となる。

まずは市内で確保できる助成金や個人カンパなどの資金を「キタカタファンド」というひとつの器（機関）の元へ集める。このとき「キタカタファンド」への出資(寄付)者は（喜多方市内に限る）数多くのまちづくり事業(予定)案に対し、助成対象となる事業を選択/審査できる権利を持つ。また、出資者はまちづくり活動へ「参加」もできる権利も同時に持つ。

こういったまちづくり投資機関を設置することで喜多方市内で動くまちづくり活動に対し、能動的なまちづくり投資が行えるようにする。

各年度、喜多方市内で起こる様々なまちづくり事業に対し、喜多方市内に住む自ら(民間)が事業投資/選択を（民間同士で）行えるようにすることが最大の狙いである。

[事業イメージ]

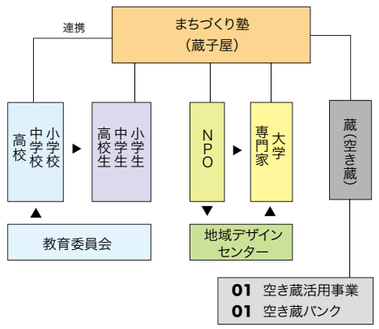


4.蔵子屋事業

2006年度から会津北方小田付郷町衆会にて実施された、高校生を中心とした「まちづくり塾」や、蔵の会主催で市内の中学校を連携して行われた「蔵調査」では、大学・地域との連携あるいは地域の中高生のまちづくり活動への参加が非常に重要であるということが示された。よって、この「まちづくり塾」等による広い喜多方市民によるまちづくりについての学びの場を継続発展させ、中高生とともに行うまちづくり活動の実践と支援を行う。

① **「まちづくり塾」事業**（総合学習等を利用した小中高生まちづくり教育）
② **蔵子屋事業**（蔵を用いた小中高生のまちづくり・生涯学習教育）
※NPOまちづくり喜多方及び小中学校（PTA）・市教育委員会の協働による事業運営
※専門家・教員・講師の招聘
※市内小中高校生からの塾生派遣・募集（高校等では単位の認定）
※近隣大学等との連携
※塾開催場所としての空き蔵の活用

[事業イメージ]



6章　喜多方まちづくり参考事例集

喜多方のまちづくりで抱えている課題・問題と同じような悩みを抱えている都市は全国に多く存在する。また、これからの喜多方のまちづくりを進めてゆく上で、参考になる事例や、学んでおくべき事例、比較すべき事例などがたくさんある。

ここでは、前章の提案における考え方をベースにして、これらに参考となるような事例について載せることとする。まちづくり事例を参考・参照しながら、喜多方のまちづくりにおける具体的な動きにつなげてゆくとともに、こうした事例ストックをみながら気軽にまちづくりを進めてゆくためのツールとする。

事例01　地域資産の登録制度事例
地域風景資産　【東京都世田谷区】

選定プロセスをきっかけとした住民参加のしくみづくり

■「資産」選定から風景づくり活動へ

世田谷区では、平成11年3月に区が制定した「世田谷区地域風景づくり条例」に基づき、「地域風景資産」の選定による風景の保全と風景づくりへの住民参加のきっかけをつくる試みを行っている。平成13年12月に第1回地域風景資産の選定を行い、36件の第1回「地域風景資産」が選定された。「地域風景資産」ごとにまちづくりの活動主体が生まれ、地域固有の場所に人と活動が伴う「風景づくり活動」が、いくつかの地域で進行し具体的な成果をあげている。

選定の4条件は、
1. 風景としての資産の価値があること
2. 地域の共有・共感があること
3. 風景づくりにつながるアイデアがあること
4. コミュニティづくりにつながる可能性があること
である。

■選定前後の過程での参加の仕組み

第1段階：地域風景資産を公募し、推薦者が風景づくりプランを作成し、かつこれをもとに活動をしなければならない（風景活動を伴う）。さらに、これを支えるサポーターを集める必要がある。
第2段階：行政（選定人）が風景づくりプランを現地で選定評価する。
第3段階：公開で選定の可否を判断し、位置づけを行う。
第4段階：活動に対して支援を行う
このように、推薦者による活動支援プログラムとなっている。

■取り組みの成果

風景づくり活動から風景づくりへの展開として、大きくは
①資産そのものの活用：修理、修景など
②資産を手がかりにして共有された風景づくりイメージの具体化：地区計画→界わい形成地区（一般的な景観形成地区に相当）、点から面への拡大
③資産周辺へのデザインの波及：隣接地へのデザインの協議、管理協定など
④資産の風景づくり活動による公共空間の運営：住民の公園の維持管理など
の4つに整理される。

■課題

1）既存の風景づくり条例は、市民活動メニューの充実が図られ、選定された資産の保全・創造を促進しているが、そのための方策は、条例で支援可能な範囲を超えており、多施策と連携した総合的な施策が必要である。
2）資産の選定時に推薦者が中心となって作成する風景づくりプランは、地域風景資産選定要綱に位置づけられたものの、条例による担保がないことから、活動が停滞してしまっているものも見られる。

参考HP:
「風景づくりを考える」
http://www.community-design.jp/tokyo/fukei.html

事例02　空き家バンク事例1
空き家・空き蔵活用仲人事業　【伊勢市河崎】

「NPO」による拠点運営と、「体験」を通した空家・空蔵の仲介システム

空家・空蔵活用仲人事業とは、河崎町内にある空家や空蔵の情報収集、活用と保存を目的に、所有者に提案し活用者との橋渡しをする事業のことである。

■伊勢・河崎蔵バンクの会

NPO法人伊勢河崎まちづくり衆が、平成8年に古い問屋街である河崎地区のまちづくり活動（市民運動）の一環として、地域資源である土蔵に着目した「伊勢・河崎蔵バンクの会」を創設した。

■活動内容

1. 空き家・空き蔵の仲介
地域の空き蔵を調査、所有者に対し、賃貸利用の可能性に対するアンケート等を実施。これをもとに、喫茶店や美容院開業希望者等に対する仲介をしてきた。現在、対象を空き家にも広げ、「空家・空蔵活用仲人事業」として、空き家・空き蔵の仲介を継続的に行う。
2. 資料館をまちづくり拠点に
伊勢市に古い商家の買い上げ・改修を働きかけ、平成14年に「伊勢河崎商人館」（資料館を中心としたまちづくり拠点）として運営を開始。
3. 町家暮らし体験
町屋での暮らし体験が可能な「暮し体験・河崎南町の家」も近年オープン。暮らし体験についてはインターネットで体験希望者を募集し、有料で3日～最長1ヶ月程度の使用が可能。

【利用者】
・商業施設、飲食施設等の開業希望者（蔵バンク、仲人事業）
・観光客（伊勢河崎商人館）

【空き家提供者】
・地域の空き蔵、空き家所有者（蔵バンク創設時に、地域の空き蔵は90棟程度、利用者アンケート実施は50棟程度、提供希望者はその半数程度。）

■マッチングの工夫

まちづくり衆が提供者、利用者の間に入って仲介を実施。所有者との直接の契約者になった事例もある。

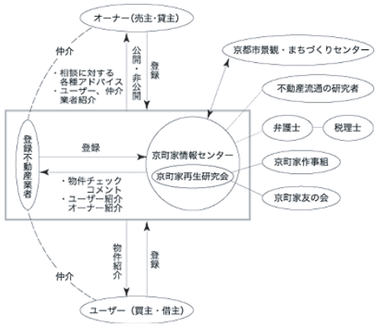
▲伊勢河崎商人館外観。
内部は資料館、飲食・物販施設。

将来的にはコミュニティビジネスとして採算の取れる事業を目標としている。
参考HP：
http://www.mlit.go.jp/singikai/kokudosin/keikaku/lifestyle/9/06.pdf

事例03　空き家バンク事例2
京町家情報センター　【京都府京都市】

インターネットを使わずして仲介する一見さんお断りシステム

京町家情報センターは、京町家流通の活性化を目指し、京町家の流通情報の収集や、仲介、京町家購入・賃貸希望者及び再生・活用の相談を行っている。



▲京町家情報センター主体関係図

■運営主体

京町家情報センター
平成14年4月に設立。京町家情報センターに登録した不動産業者と京町家再生研究会により構成されている。

■活動内容

1. 京町家の流通情報の収集・調査
京町家の流通に関する情報を集め、それにコメントをつけることにより、活用したい人が選択しやすいようにする。
2. 京町家購入・賃貸希望者及び再生・活用の相談窓口
登録不動産業者や、京町家作事組、京町家友の会、弁護士、税理士、不動産流通の研究者、京都市景観・まちづくりセンターとも連携しているため、持ち主の相談内容に応じて、次の一歩を踏み出すためのアドバイスをすることが出来る。
3. 京町家の不動産仲介（登録不動産業者）
4. 町家流通に関するシンポジウム・見学会・勉強会の開催
5. ニュースレターの発行

■マッチングの工夫

ユーザー希望者に必ず京町家情報センターに来てもらい、面談の上登録し、京町家情報センターは登録内容に見合った物件をユーザー登録者に提供する。気に入った物件があれば、物件情報シートに書かれた登録不動産業者に連絡し、その後は通常の不動産仲介の流れと同様に進む。（物件情報をインターネットなどで不特定多数の人に流すことはしない。）

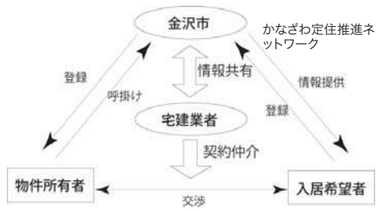
参考文献:「季刊まちづくり」0407
参考HP：京町家ネット
http://www.kyomachiya.net/index.html

事例04　空き家バンク事例3
かなざわ町家情報バンク　【石川県金沢市】

行政と民間業者の連携による空き家の情報提供・相談型

かなざわ町家情報バンクは、金沢の町家・古民家の利活用を促進し、町家等の保全を図ることを目的とし、金沢らしい町家に住んでみたい人や活用してみたい人に、売買や賃貸に関する物件情報をインターネットにより広く提供するもの。

市と地元宅建業者の連携による、町家の現地調査や情報提供、借り手からの改修相談、仲介までの一貫した支援を行う。



▲主体関係図

■運営主体

かなざわ定住推進ネットワーク：住宅宅地関連団体と金沢市で組織。

[町家情報バンクの管理、情報提供]
「かなざわ定住推進ネットワーク」の事務局である市住宅政策課

[町家の空き家の掘り起し]
かなざわ定住推進ネットワークのメンバーである不動産業者などが実施。

■活動内容

町家物件情報の提供・改修費の支援
ホームページにおいて取り扱う町家は、原則として昭和20年以前に建築された木造建築物であり、建築士によるコメントも掲載。単なる情報提供だけでなく、外観、構造、内部水回り改修などの改修工事の補助制度も利用可能であり、景観保全やまちなか居住の実績が上がっている。なお、建物を改修する際には、まちなか住宅リフレッシュ支援事業を利用することができる。

■マッチングの工夫

1. 利用希望者登録制度
かなざわ町家情報バンクは、町家・古民家の利用希望者の登録も可能。ホームページ記載物件以外に新たに物件が登録された際、利用希望者への告知、金沢住まいの情報をメールマガジンで提供を行う。
2. 相談制度
<町家等改修相談制度>
建築士による町家等の改修相談を実施している。かなざわ町家情報バンクへの登録に先立ち、建築士による町家の調査を実施している。

<まちなか住宅リフレッシュ支援事業>
（平成14年度）
・昭和20 年以前に建てられた住宅を改修する場合に補助
・対象工事：外観、構造、内部の水回り
・対象工事費の1/2、限度額100 万円等

事例05　工夫を凝らした不動産情報提供事例1

東京R不動産　【東京都心】

物件の魅力を新たな視点で掘り起こし、ネットで紹介、有料で仲介

「Real Tokyo Estate/ 東京R不動産」は、不動産、建築、編集各分野のプロフェッショナルが共同運営するインターネット上の不動産。独自にセレクトした物件をサイト上で紹介し、仲介を行う。各物件につけられた興味をひくキャッチコピー、アイコンによる情報表示など、ホームページ全体のデザインも、使い手の嗜好が配慮されている。

■仲介のしくみ

ただし、顧客相手に個別に相談に乗ることはない。希望者はサイトで物件を決めてメールで問い合わせを行い、契約までをR不動産スタッフが一貫して行う仕組み。
なお、仲介手数料は、賃貸物件の場合、「賃料の1ヶ月分＋消費税」、売買物件の場合は、売買価格により仲介手数料が異なる。

▲顧客の志向に合わせて工夫されたホームページのデザイン

http://www.realtokyoestate.co.jp/

http://career.gree.jp/?mode=static&act=page&page=ext_style_03rte03

事例06　工夫を凝らした不動産情報提供事例2

水辺不動産　【大阪府大阪市】

水辺だけの不動産情報をネット上で紹介、NPOが無料で仲介

水辺不動産は、インターネット上の不動産屋という設定で、NPO水都OSAKA・水辺のまち再生プロジェクトが企画運営する、大阪市内の水辺にある不動産のみを専門に取り扱う広告サイト。仲介料は取り扱い業者に払ってもらい、オーナーからの協賛金で運営している。

■仲介のしくみ

市中心部の川沿いの物件情報を収集し、所有者の同意が得られれば、写真を添えてホームページに掲載。「水辺の家」を探している人に無償で所有者を引き合わせ、売買、賃貸契約は所有者と入居者が直接結ぶ。実際に存在する物件の紹介だけでなく、様々な水辺の暮らしも提案していく。

その他、水辺の土地建物相談も行っており大阪の水辺に不動産を所有しているオーナーの相談窓口を開設して、不動産コンサルタントなどの専門家が無料で相談に対応している。

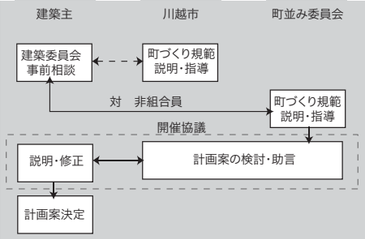
▲ホームページのイメージ

http://www.suito-osaka.net

事例07　町並み修景事例1

町並み委員会　【埼玉県川越市】

住民主体のまちづくり組織によるデザイン協議



▲町並み委員会での協議プロセス

▲町並み委員会協議事例
（RC造だが、屋根の軒高などを継承している）

参考）日本建築学会（2004）町並み保全型まちづくり、丸善株式会社
川越一番街HP:http://www.kawagoe.com/ichibangai/

「蔵の町」として名高い川越において、とりわけ蔵が多く集積しているのが、伝統的建造物群保存地区に指定されている一番街であり、この一番街のまちづくりの中心組織が、「町並み委員会」である。メンバーは、一番街商業協同組合員委員、学識経験者、地元有識者であり、市と商工会議所もオブザーバーとして参加している。この町並み委員会は、町づくり規範に従い、計画の一番街のまちづくり目標への適合性を検討し、助言を行う。

■町づくり規範とは

町づくり規範は、一番街における町づくりの原則集である。C.アレクサンダーのパタン・ランゲージに範をとり、協定書に従って町並み委員会が作成した。「1．固有な都市・川越」に始まる町づくり規範は、川越全域を対象とする大きなスケールに関するものから、建築物の細部といった小さなスケールに関するものまで67項目あり、大きく都市に関するものと建築に関するものに分けられる。各項目の始まりには、内容を短く的確に表す「タイトル」と、町並み委員会が普遍的な「課題」を「検討」して導き出した、川越の固有解としての「結論」が記してある。これらは、単なる規制ではなく、提案の形で表現されており、住民に広く受け入れられている。

■町並み委員会と連携した協議

伝建地区で建築行為などをする場合、計画案について事前に市と相談する必要がある。ここで伝建地区制度やデザイン誘導基準、町づくり規範が説明され、町並み委員会に届出るよう勧められる。市との協議はここから始まり、基本的に町並み委員会と連携しながら建築計画の詳細な調整が図られる。

・町並み委員会には約25名が参加、毎月1回は開催されている。
・行政からも関係諸課が参加。行政の横の連携もとりやすいメリットがある。

事例08　町並み修景事例2

町屋外観再生プロジェクト　【新潟県村上市】

市民基金による外観修景

▲再生第一号店舗【早撰堂】

▲再生第三号店舗【池田屋】

参考）村上のまちづくりHP：http://www.k-shinji.info/originate/kurobei.html

■市民基金の設立

市民有志で2004年に始動したプロジェクト。その計画は、年会費で一年に一千万円の基金を集め10年で一億円の基金を作り、その基金で外観を再生する場合に補助金を出すというもの。民間ベースのプロジェクトとしては全国初の取り組みである。この基金を通じて町屋の外観を整えることで、一年を通して散策して楽しめる町にすること、そして交流人口を増やすことがねらいである。2004年6月再生第一号が完成し、2005年春には第二号が完成する等、着実に成果を残している。

■町屋の外観再生

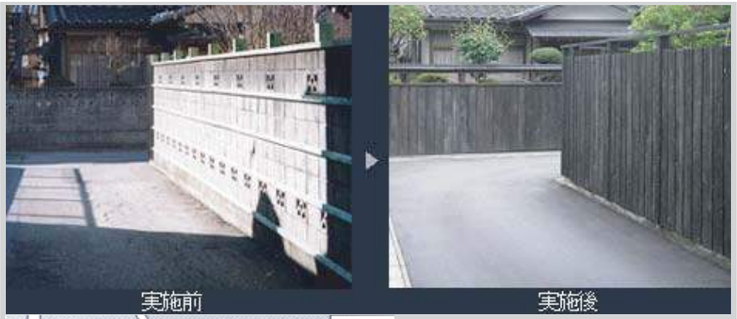
具体的には、サッシやトタン、アーケード等で近代化された町屋の外観を、格子窓や下見板などの木の外壁、木製のガラス戸などの昔ながらの町屋の形に再生することにより風格のある町並みを作る事業である。外観だけなので低経費ですみ、一方町並みの趣きは大きく変わることがポイント。できるだけ歴史的考証に則った村上らしい再生を行うことを基本とし、(財)日本ナショナルトラストの調査をベースにして再生計画を立てる。但しその町屋が村上らしい魅力的な外観にするための再生でもあり、全く昔と同じ形にしなければならないというものではないが、村上に無い形の意匠は避けたいとしている。

□ 事業の枠組み
・事業予算：1億円(10年間)
・年間予算：1000万円(会費・寄付金・その他の収入による)
・補助金額：外観再生補助金　上限80万円
（費用の60%の補助）
・対象物：町屋、塀、など外観を構成するもの
・対象地域：村上市　旧町人町地区(大通りに面した地区を重点的に)

実施主体：「むらかみ町家再生プロジェクト」
会員数：1900人以上（2008年4月現在）
年間再生軒数：年間予算に応じて決定するが10軒から15軒ほどを予定

町並み修景事例3
事例09 黒塀プロジェクト　【新潟県村上市】

黒塀を使って市民の手づくりで修景



▲黒塀による修景の様子

◀黒塀プロジェクトの位置（現在、「安善小路と周辺地区の景観に関する住民協定」が締結され、電線の地中化や道路の石畳化を目指して活動が行なわれている。）

▲黒塀プロジェクトチラシ

参考）村上のまちづくりHP：http://www.k-shinji.info/originate/kurobei.html

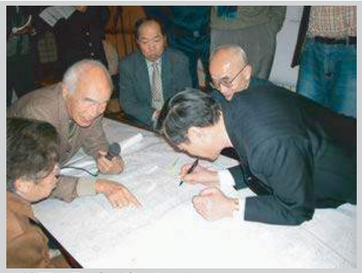
新潟県村上旧町人町にある安善小路とその周辺には、城下町の歴史的建造物が集積している。この小路を市民の手で城下町らしい昔ながらの黒板塀の景観に戻そうという思いから、市民自ら2002年「黒塀プロジェクト」を開始した。

これは、城下町の風情ある小路のブロック塀を昔ながらの黒塀に変える取り組みである。既存ブロック塀を壊さず、その上に木の板を打ちつけ黒く塗ることで、表向き黒塀に変えるものである。「黒塀一枚1000円運動」と銘打って展開し、市民の手作りで黒塀作りを始めた。その結果、簡易工法ではあるが、ブロック塀を黒塀に変えるだけで町の景観を変えることができた。2005年には約160mの黒塀が作られ、現在も延長中である。

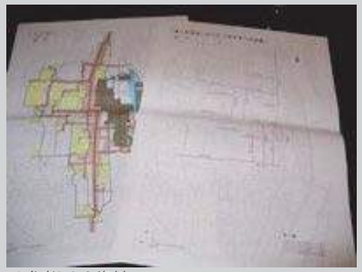
実施主体：「黒塀プロジェクト」
「黒塀一枚1000円運動」：市民や観光客に買って頂き、名前を刻んで打ちつける取組みのこと。

通り名事例
事例10 通り名の復活をめざすプロジェクト　【福井県武生市】

通り名や辻子名をまちの歴史文化遺産として再生



▲地図に通り名を書き入れる



▲参考にした資料

参考）武生ルネサンスHP：http://www12.ocn.ne.jp/~takefurn/index.htm

■まちの個性としての古い通り名

戦災、震災を免れた武生の市街地には、江戸、明治時代からの通りがそのまま残っている。これらの通りは、かつては、その通りの意味や成り立ちから、のぼり町通り、大門通り、などと呼ばれていた。

このプロジェクトは、市民団体（武生ルネサンス）がこうした通り名は武生の町の個性であり、もし街中に通り名の表示があれば、場所の特定にも便利だと考えて実施された。

■地元の語り部や古地図から

作業の流れは次の通りである。1)会員で、武生の語り部としても活躍している方を中心に、古い通り名、辻子名などを地図に書き入れる。地図は、武生工業高校の先生と高校生がCADで制作したものを使用。江戸、明治、現在の3つの地図を同じ縮尺にし、重ねることができるように制作されている。まずは代表的な通り名14を書き入れる作業を行った。2)色々な資料を基に次の通り名と辻子名を地図に書き込んだ。3)元・市史編纂委員や、郷土作家、善光寺仏研究者が加わり、武生の町名や、通り名などについて話を聞いた。4)2004年10月、武生市に対し、「通り名」復活、継承についての提案書を提出。提案書とともに、福井県立武生工業高校建築クラブの作成した通り名の入った地図を提出した。

提案内容は、通り名の復活、継承に向けた具体的な行動として、次の5つである。1)提出する地図に掲げた「通り」「辻子」を、市が発行する地図等に記載する。2)武生の駅前、公会堂、市役所などに、通り名の入った地図を展示する。3)まずはモデル地区を選んで、通り名を表示する。4)各団体へのアピールに心がける。（観光協会、タクシー会社など）5)まちづくり講座の中に「通り名講座」を持つ。

実施主体：武生ルネサンス
http://www12.ocn.ne.jp/~takefurn/index.htm
実施年：2004年
協力：武生工業高校、地元の語り部

うらみち・よこみち整備事例
事例11 小路とサインの一体的整備　【広島県尾道市】

地域資源としてのうらみち・よこみちの顕在化とまちの回遊性向上

▲浮御堂小路

▲浜の小路

▲尾道「小路」マップ（西村幸夫編著（2006）路地からのまちづくり、学芸出版社、p185より引用）

参考）真野洋介（2006）尾道−地域コンテンツによる「場所の力」の展開、路地からのまちづくり、学芸出版社

小路とは、尾道町と呼ばれる、港を中心にして東西に伸びる町々を貫く旧西国街道（山陽道）から南北に枝分かれしていく路地のことであり、尾道ならでは空間の一つである。

中心市街地活性化と観光の側面から小路の環境整備が行われたのは、1980年代後半のプレート整備が始まりであるが、本格的に基盤整備が進められるのは2000年以降である。尾道市は、北側斜面の寺社・山手地区と商店街、海岸通りの回遊性を高めるため、2000年から「ふれあいの小路」整備事業を開始し、商店街につながる小路のいくつかを石畳舗装に整備した。また、この事業と一体的に観光案内サイン整備計画も策定し、2002年よりサイン整備が始められた。サインのデザインは小路に相応しいものとして、石柱が採用されている。

事業の成果：小路が地域資源として市民に広く認知され、小路沿いの建物のリノベーションによる出店の動きが相次いでいる。

まちかど整備事例
事例12 まちかど整備事業　【岐阜県高山市】

住環境向上と観光整備に貢献

▲高山市におけるまちかど整備の例

参考）高山市＋造景編集部（2000）まちかど整備に徹する、造景別冊まちづくり事業企画マニュアル

高山市のまちづくり運動は、1950年代後半の河川美化運動にまでさかのぼることができる。その後、1966年の屋台組による町並み保存や、1971年の条例に基づく市街地景観保存などに発展していく。一方で、観光地化が進展するにつれて、環境保存か観光優先かで市民の意見に対立が生じるようになった。そこで高山市は、住環境向上と観光整備に共に役立つ事業として「まちかど整備事業」を企画、実施した。この事業は、1979年に国土庁の伝統的文化とし環境保存地域整備計画調査を実施した際、高山市が提案した事業である。

同事業は、市の景観行政の目玉として継続され、2000年現在、105箇所の実績を積み重ねている。

まちかど整備の修景にあたって考慮した点
1)まちにゆとりをもたせ住みやすくすること。
2)景観を美しく見せること。
3)市民と観光客（外部の人）との間に新しい関係をつくること。

事例13　サイン事例1
横浜市公共サイン　【神奈川県横浜市】

地区の個性をサインの色彩やデザインで表す

地区サイン例：地区毎にデザインや色彩が異なる

横浜市中心市街地全体のネットワーク形成を図ることを目的とした公共サイン計画である。事業主体は横浜市、設計は（株）GK設計で、2001年に完成した。

「関内」「関外」「山手」「みなとみらい21」などの個性ある各地区の特徴を、サイン本体のデザインや色彩で特性づけながら、表示デザインは全て共通とすることで、地域全体のわかりやすさを形成している。

例えば、山手地区では、既存の案内サインとの調和と、山手らしさを意図し、クラシカルな矢羽形状の表示板と六角断面の柱としている。また、みなとみらい21地区では、サインカラーには「MM　ブルー」が基調色となるようにデザインされている。

喜多方サイン計画への示唆
・表示デザインは全て共通としながらも、サイン本体のデザインや色彩で地区や地域を特徴づける。

参考）株式会社GK設計HP：http://www.gk-design.co.jp/sekkei/japanese/works/work_C_03.html

事例14　サイン事例2
広域公共サイン(看板)整備事業　【長野県木曽地域】

広域を一体的にカバーするサインシステム

▲サインシステムの構成
・圏域サインシステム：主目的→圏域的要請による情報提供、機能→案内・誘導・記名
・町村サインシステム：主目的→きめ細やかな情報提供、機能→案内・誘導・記名・説明・規制
［公共サイン整備に係る各種の補助金名称及び設置年度］
・地域間交流支援事業（国土庁）H9-11
・観光案内設備整備事業（運輸庁）H11-12
・信州の木で家づくり促進事業（林野庁）H13
・日本宝くじ協会公共事業（財団法人日本宝くじ協会）H13
・直接事業環境省国庫補助事業中部北陸自然歩道（環境省・長野県）H12

▲圏域サイン例

▲町村サイン例

このサインシステムは、以下のように構成され、役割の異なるサインも系統的に連係して全体が機能するようにデザイン・設置されている。
・圏域サイン：統一デザインのサインを木曽郡の隣接地域に配置する事で、圏域全体の地域イメージを統合しようとするもの。
・圏域界サインと圏域案内サイン：デザインは、デザインコンペを通じて採用されたもの。
・十一宿サイン：現代の中山道ともいえる国道19号沿道で木曽11宿の存在をアピールするもので、デザインは伝統様式を踏襲しており、板葺きと銅版葺きの2種類がある。
・各町村毎に設置するサイン：圏域全体の統一感を保ちつつ各町村の個性を表現してデザインする事で、各地域の特徴を表現する。

サイン整備事業経緯
・1994：木曽の景観基本構想調査、コンペ等
・1998：サイン設置
・2000：スキー場やゴルフ場との覚書を調印し、不統一に建てられていた約450本ある看板のうち、110本が撤去された

参考）木曽広域連合HP：http://www.kisoji.com/kisokoiki/index.html

事例15　交通戦略事例
石見銀山方式　パーク&ライド　【島根県大田市】

世界遺産のまちの真価を認識してもらうための交通戦略

参考）大田市観光課HP：http://www.iwamigin.jp/ohda/kankou/index.html（上図も同HPより引用）

「自然との共生」が高く評価された、世界遺産のまち、石見銀山。その魅力は、じっくり歩いて回ってこそ分かる。また、観光の中心エリアである大森町並み地区、銀山地区は、道幅が狭く自動車の往来が困難で、駐車場も十分に確保されていない。

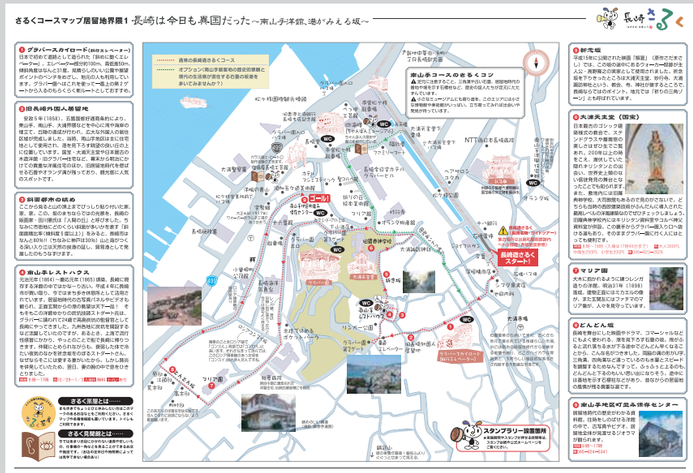
そこで、史跡の環境を守り育てながら、交通の混乱を解消して、安全で快適な観光を実現するために、この2地区について独自の交通ルールを設定。乗用車で来る場合は、町の外の「石見銀山駐車場（無料）」に駐車し、そこからの移動は徒歩もしくは路線バス（有料）、タクシー（有料）の利用となっている。

誘導等についても、市民のボランティアを中心に行われただけでなく、計画も「石見行動計画」に位置づけられ、市民自らの手によって企画されている。

実施主体：大田市観光課
今後の展開：「歩く観光」としての石見銀山観光スタイルを一層強くするため、現行の路線バスの路線廃止も検討する構えだ。

事例16　まちあるき事例
長崎さるく　【長崎県長崎市】

まちあるきを120%楽しむ仕掛け



▲長崎さるくコースの例（図は長崎さるく博'06で人気第一位を獲得した「居留地の面影残る南山手コース」
◀◀さるくの様子
◀長崎さるくマップブック（1冊500円）
※なお、「長崎さるく」は、「まち歩きの仕組み」で2006年度グッドデザイン賞を受賞。

参考）長崎さるく公式HP：http://www.saruku.info/
社団法人長崎国際観光コンベンション協会（2007）長崎さるくマップブック

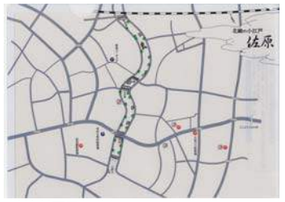
長崎市では、2006年4月から212日間にわたって「日本ではじめてのまち歩き博覧会長崎さるく博'06」を実施した。"さるく"とは、まちをぶらぶら歩くという意味の長崎弁。この博覧会が好評だったため、2007年4月から「長崎さるく」として再スタートしている。

「長崎さるく」では、特製マップ片手に自由に歩く「長崎遊さるく」、長崎名物・さるくガイドの説明を聞きながら歩く「長崎通さるく」、専門家による講座や体験を通してさらに深く探求する「長崎学さるく」のほか、団体での利用など観光客のニーズに合わせたオーダーのさるくなども用意。また、より一層さるくを楽しむ仕掛けとして、「長崎さるく手形」（30コースの通さるくに期間中本人に限り何度でも参加可能）や「長崎さるくマップブック」（各種情報や割引券等）などを販売している。

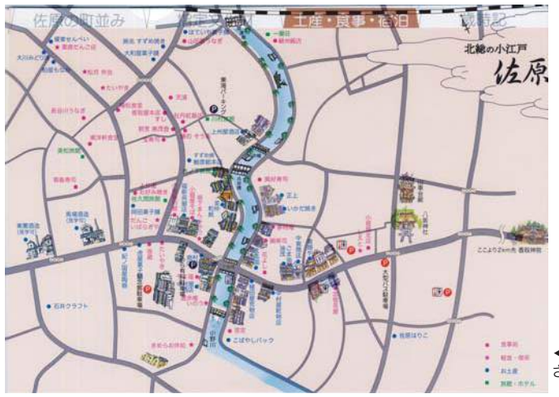
長崎さるくの3本柱
・長崎遊さるく：マップどおりに、あちこち立ち止りながらゆっくり歩いて1コース約1時間半。全42コース。
・長崎通さるく：地元ガイドといっしょにまち歩きを楽しむ。全33コース。（要予約）
・長崎学さるく：長崎ならではのテーマについて、専門家による講座や体験を通して、さらに深く探求できるメニュー。参加型講座、本格的なウォーキング、1テーマ掘り下げタイプのワークショップなどなど。（要予約）

まちあるきマップ事例
事例17 佐原マップ　【千葉県香取市】

まちを楽しむまちあるきマップの工夫


▲クリアファイル。
道路と川だけが描かれている。

▲クリアファイルにはさむ紙。
道路などは描かれず、伝えたいことだけが描かれている。



◀クリアファイルに紙をはさむと、地図ができあがる。

佐原マップは、A4版クリアファイルと、その中にはさむテーマ別の紙とを組み合わせて使う。ファイルには下地となる道路と川の地図が描かれており、中に各テーマ・目的ごとに描かれた紙を挟むと、テーマ別地図が完成する。

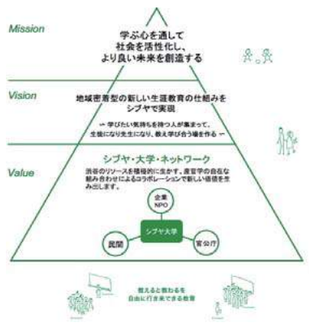
簡単に新しい地図を作ることができ、また、それぞれのテーマ別に自由に内容が更新できる。現在は佐原のまちなみ、指定文化財、土産・食事・宿泊の3つの地図がある。イベント時には、催しを行っている建物の地図なども配布される。

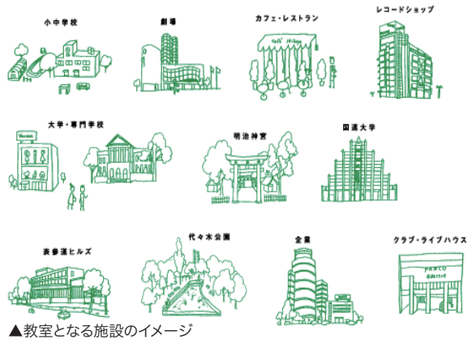
2006年に行われたコンペで最優秀賞を受賞した案をもとに作成され、一部百円で販売されている。作成・配布主体である「NPO法人小野川と佐原の町並みを考える会」は、1991年に任意団体として発足。2004年にNPO法人を取得して、佐原の歴史的町並みを保存運動やまちづくり活動を行っている。

佐原の町並みは1996年に国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されている。
http://www.sawara-machinami.com/

地域学事例
事例18 シブヤ大学　【東京都渋谷区】

地域を中心とした、活動・教育・情報の器





▲教室となる施設のイメージ

■地域密着型の教育プログラム

シブヤ大学とは、生涯学習を推進するNPO法人であり、いろいろなものがありさまざまな人がいる「シブヤ」という場所を活かした新しい地域密着型の教育をめざすプログラムのこと。渋谷じゅうの施設と連携しながら、講演会やイベント、小学校への授業カリキュラム提案などの教育事業を行うことで、「地域」というゆるやかな枠組みの中でのフレキシブルな活動・教育・情報の器をつくる。

新しいカルチャーやビジネスが集まるまちである渋谷と、知性や好奇心を満たす場である大学の、それぞれの良いところを取り入れようというのがコンセプト。渋谷の様々な場所が教室になる。

■授業の方法

授業は毎月第三日曜日に行われる。web上で手続きをし、授業に申し込んで、受講することになる。先生は渋谷区に住んでいる人か、渋谷区で働いている人から、年に数回、ユニークな講義をHP上で公募して決める。まちに眠っている「才能」や「経験」をつねに発掘することが目的。審査委員会による審査後、面接を経て、晴れて先生となる。誰もが先生となり、生徒となる、「教える」と「教わる」を自由に行き来できる教育の場を目指している。

また、渋谷区内の小学校や中学校からの要望を聞き、授業をプロデュースする活動も行っている。企業やNPO、NGOとのコラボレーション授業など、子どもたちに「生の社会」に触れてもらうためのさまざまなプログラムを実行している。

授業の例としては、シブヤ西武B館6階を教室としたスーツの着こなし講座や、区内のボウリング場で行うボーリング講座、明治神宮での夜間参拝など、渋谷区ならではのものが多く実施されている。

2005年11月 有志によるシブヤ大学設立プロジェクトスタート 。その後、東京都より特定非営利活動法人設立の認証を受け、2006年9月に開校。
http://www.shibuya-univ.net/

町家泊事例
事例19 庵の京町家ステイ　【京都府京都市】

空き町家を改修して、一棟まるごと賃貸方式で貸し出す

■古き良き日本の文化を見直す

「庵の京町家ステイ」は、東洋文化研究家のアレックス・カーなどが京都の町家と日本文化の保存を目的に、2003年12月に株式会社庵を設立して事業化した。現在、修理補修が完了した8軒の町家が、2人～10人くらいまでのグループや家族に、数日の短期から数十日の長期ステイまで利用されている。

庵の収益と、将来的には「庵：日本伝統文化基金」（美しい日本を後世に伝え、観光立国日本を推進する、という構想に賛同する者のための基金）を設立し、空き町家の改修費用などにあてる。

■賃貸方式を採用

京都市街地に平成20年現在、8軒展開してする「庵」は、旅館やホテルのような宿泊施設として営業しているのではなく、宿泊希望者に短期的に町家一棟を貸すレンタル施設として営業している。賃貸方式を採っているため、旅館業法などの許可を取得する必要がなく、営業許可を得ることが簡単になっている。

現在は8棟の町家が営業していて、WEBページにて情報を閲覧、予約できる。
定員は2名～14名。

■「体験」「経験」「滞在」

最近の観光の新しい潮流は、「体験」「経験」「滞在」と言われる。庵は、生活の原点である「家（町家）」を通じて日本の美と伝統を体感してほしいというコンセプトがある。庵ではお客向けに食事の用意はしないため、夜は各自が京の街にでて自分で食事をとり、朝食は各自が事前に用意をしたものを食べる。営業許可と同様に、お客向けサービスをほとんどしないため、多くの従業員を必要としないこともこの事業の有利な点。

京都の町家での宿泊は、外国人観光客に人気が高く「庵の京町家ステイ」では約3割を占めるまでになっている。

2003年12月にアレックス・カーが中心となって株式会社 庵を設立し、事業化。
http://www.kyoto-machiya.com/

農泊事例
事例20 安心院グリーンツーリズム　【大分県宇佐市】

旅館業法の規制を緩和させた、グリーンツーリズム(GT)の先駆者

■安心院独自の会員制ＧＴ

農家が宿泊場所や食事を提供する場合、旅館業法や食品衛生法が適用され、その認可には多額の資金投資と厳しい審査が必要とされていた。安心院町では不特定多数を対象とはせず、会員制にして特定の人を宿泊させるという方法で、謝礼として農村文化体験料を受け取る方式を採用。これにより農家等は新たな改築等を必要とせず農泊を行うことができ、経済的に無理をしないことが「惜しみのないもてなし」を支え、それが感動を呼び体験宿泊者を増加させる好循環をつくってきた。現在年間4,900名（平成17年度実績）が農泊を利用している。

■大分県が農泊の緩和措置

会員制にすることで旅館業法等の規制をクリアするという手法を用いつつ、町としても規制緩和を強く要求していった。これを受け、大分県は町内で実践している農村民泊を調査し、平成14年3月、ＧＴに関する運用の緩和措置を右図のように行った。

安心院町が実施してきた「農村民泊」事業の実績が評価され、多額の資金投資が不要となった。「安心院方式」が「大分方式」と言われるようになり、平成15年4月には国が民泊の規制緩和を盛り込んだ旅館業法施行規則の改正を行うまでに至り、官民協働による地道な活動の前進が、日本のＧＴにも大きな影響を与える第一歩となった。

旅館業法	食品衛生法
【これまでの取扱い】 [1]ホテル　主として洋室で客室は10室以上、1客室床面積9m2以上 [2]旅館　　主として和室で客室は5室以上、1客室床面積7m2以上 [3]簡易宿所（バンガロー等に限定）　客室の延床面積は、33m2以上 ※S33.8の厚生省通知により、通年的に宿泊客を受け入れる場合はホテル、旅館の施設基準を満たすことが必要	【これまでの取扱い】 宿泊客に飲食物を提供する場合は、 [1]客専用の調理場などの施設基準（条例）のクリアが必要 [2]飲食店（旅館）営業の許可が必要 ただし、自炊型などで宿泊客自ら調理し飲食する場合は、営業許可不要 ※S33.8の厚生省通知により客専用の調理場を設けることとされている
【規制緩和後】 ＧＴは実態を踏まえ、簡易宿所の営業許可対象とした（H15.3大分県条例改正）	【規制緩和後】 ＧＴで宿泊客が農家と一緒に調理、飲食する体験型であれば客専用の調理場及び営業許可は不要とした

1992年に発足したグリーンツーリズム研究会が、1996年より農村民泊を開始。2004年NPO法人として認可。2006年現在、16軒の家庭が常時受け入れ可能。
http://www3.coara.or.jp/~ajimu/

事例21　地域中心のホテル事例

オーベルジュ土佐山　【高知市土佐山】

地域住民の自発的な団結によって整備された交流拠点施設

■住民主導の有限会社で地域づくり

1990年に中川地区の３集落（東川、久万川、中切）の住民が団結して住民主導で住民参加の地域づくりを開始。数多くのワークショップを開いて勉強会を重ね、「有限会社中川開発」を住民出資で設立した。

■何もない贅沢空間

村、中川地域、泉源地権者、ホテル業者の４者による第３セクター(有)オーベルジュ土佐山を設立。ホテルの運営は、ノウハウのあるホテル業者に指定管理者として委託している。コンセプトの１つに「何もない」が挙げられ、里山と自然が一体化したその本物の癒しの時空間を感じることができるホテル（故郷）となっている。ホテルの設計には住民も参加し、住民のアイディアにより「農業用水」がホテル敷地内を流れる。また、新建材を一切使わず地域資源の有効利用として有形化することにより、地元産杉、土佐漆喰、土佐和紙を使用した純土佐風な木造建築となっている。加えてテレビ、時計等を置かず「何もない」ことが最高に贅沢な時空間を演出している。対岸にある棚田の作付けや山桜等の花木の植栽も癒しの景観を形成している。

また直売所など、地域住民に現金収入の場を提供し、現金収入を得るためには集客や商品農産物の増加が不可欠であり、そのため住民が進んで景観整備、田畑の作付けを行うという良循環が生まれている。

■地域の活性化に成功

開業当初から女性向けの雑誌を中心に紹介されたことから週末を中心に県外客の予約で一杯で、宿泊人数は好調を維持し増加を続けている（1998年：3,500人、2003：8,800人）。利用者は女性が中心でリピーターも増加している。また温泉があることにより高知市街等からの日帰り入浴客も増加している。

そして、老人から子供まで全ての地域住民が団結して取組んだ地域おこしの輪は確実に広がって大きな輪となり、地域に活力が生まれた。また、年間を通じてイベント、他地域との交流等に取り組んだ事などにより、Iターン者も出てきている。

1998年度に交流拠点施設「オーベルジュ土佐山」を整備。
現在はオリエントホテル（高知県）が指定管理者となっている。
http://www.orienthotel.jp/tosayama/

事例22　周遊観光システム事例

ポートラムフィーダーバス　【富山県富山市】

駅でポートラムに接続して、周辺市街地へ向かうフィーダーバス

◀岩瀬浜駅での対面接続の様子
▲ポートラムに合わせた車体デザイン

フィーダーバスとは、鉄道駅に接続するバスのことで、バスと鉄道の利便性の向上をはかるものである。

富山ライトレールの蓮町駅、岩瀬浜駅より接続して、周辺市街地へ向かう２種類のフィーダーバスがある。接続時間は大半が３～６分であり、岩瀬浜駅では対面接続している。ポートラム（富山ライトレール（株））開通にあわせ、2006年より運行開始された。

現金または専用共通ICカードpassca（プリペイド券、定期券）が利用できるが、passcaを利用すると、乗り継ぎ割引が適用される。

富山ライトレール（株）が2006年より運行開始。
http://www.t-lr.co.jp/bus/

事例23　眺望景観事例１

都市景観形成ガイドライン　【岩手県盛岡市】

ガイドライン及び景観計画による山並み眺望確保

▲形成重点地区（中津川河川景観軸）での建築設計ガイドライン

▲中津川沿いの風景

▶「愛宕山の眺望を確保するライン」
愛宕山の眺望を確保するため、視点場である与の字橋（標高127m+人の目の高さ1.5m）と愛宕山標高170mを結ぶ。

盛岡市では、1994年に「盛岡市都市景観形成建築等指導要綱」に基づく「都市景観形成ガイドライン」を策定している。中でも、岩手山を主峰とする奥羽・北上山系の山並み眺望は、盛岡市固有の都市景観となっている。都市景観形成ガイドラインでは、こうした山並み眺望を確保するため、山への眺望の水平視角に相当する範囲で、距離帯別にゾーン指定を行い、眺望のために確保しなければならない仰角から眺望阻害を起こさない標高を求め、地盤高さを差し引いた高さの制限をかけている。

2005年には景観行政団体となり、市民の景観意識調査を再度実施した上で、2008年に景観計画を告示、景観法関連の条例を策定する。計画により建築物の高さや色彩を制限することで、景観形成の体制が強化される。

参考HP：
http://www.mlit.go.jp/tochimizushigen/mizsei/mizusato/shichoson/tohoku/morioka.htm

事例24　眺望景観事例2

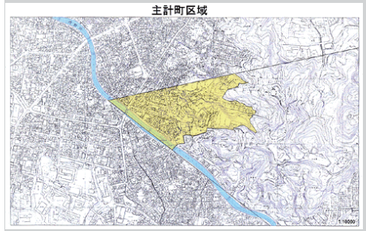
景観自己診断による眺望づくり　【石川県金沢市】

歴史と風格のある河川沿いの眺望景観を保全する

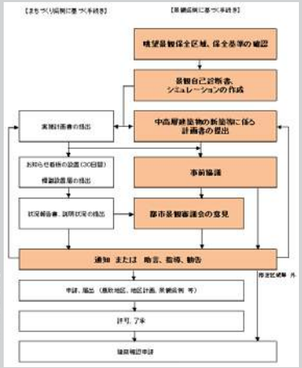
▲眺望景観保全区域の一つである主計町区域の風景

某全方針		主計町の伝統的街並みや浅野川大橋などの歴史的な雰囲気と、浅野川の清流や河畔、卯辰山などの自然的要素が調和した、情緒ある落ち着いた景観を保全する。
	高　さ	主計町からの卯辰山検線への見通しを確保するように努める。
	形　態	勾配屋根を基調とし、周辺の街並みや自然環境と調和した形態とする。
	色　彩	周辺の街並みや伝統的建築物の色に準じた落ち着いた色合いを基調とし、周辺の自然環境に融和するような色彩とする。
	高　さ	屋外広告物を設置する場合は、卯辰山検線への見通しを確保するように努め、主計町から直接見えないように工夫する。
	意匠等	屋外広告物を設置する場合は、周辺の街並み及び卯辰山や浅野川などの自然環境と調和する意匠とし、華美な広告は避ける。
設　備		外部に露出させないよう工夫する。 露出する場合でも、主計町から直接見えないよう工夫する。
その他		主計町からの眺望をより魅力的にするため、敷地内には季節感のある樹木等での緑化に努める。

▲主計町区域の眺望景観保全の基準



▲主計町区域



▶事前協議
さらに眺望景観保全区域内において、中高層建築物等の新築をしようとする建築主は、事前に景観自己診断書及び事業の計画書を市長に提出するとともに、市長との協議を行うことになる。

金沢市では、都市景観の形成のため、憩いとやすらぎをもたらす場所として多くの市民に親しまれ、かつ、特に眺望が優れていると認められる6つの地点を次のように保全眺望点として指定している（1. 浅野川大橋上流側、2. 主計町、3-1. ひがし茶屋街A、3-2. ひがし茶屋街B、4. 犀川大橋上流側、5. 兼六園眺望台、6-1. 金沢城公園丑寅櫓跡、6-2. 金沢城公園辰巳櫓跡）。

また、全眺望点からの眺望を保全するため、必要な土地の区域を眺望景観保全区域として指定し、フォトモンタージュ手法を用いて高さ、意匠、色彩、屋外広告物の有無等の検証を行い、導き出された結果から保全基準を設定した。さらに、眺望景観を保全するために、建築物の建築に際して事業者の方に建築計画書および景観自己診断書を提出することになっている。

参考HP：
http://www4.city.kanazawa.lg.jp/29020/jyourei/jo_hozen.jsp

水を活かした事例1

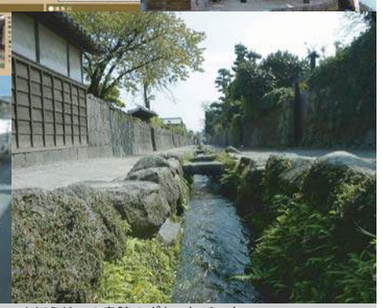
事例25 湧水を活かしたまちづくり　【長崎県島原市】

水をテーマとした様々な整備事業

◀湧水めぐりマップ

▼武家屋敷と、道の真ん中を流れる水路

▲鯉の泳ぐまち地区



▲ほうじゅの泉脇のポケットパーク

島原は古くから水の都といわれ、通水を流した水路や、水屋敷、共同の洗い場、井戸など、通水活用の技術が伝統的に培われており、このような水を活かしたまちづくりが、1970年代以降も行われている。

1978年の、下新町での鯉放流のイベントを始まりとして、「わが家でも水と緑の街づくり」を基にするHOPE計画の推進や、「まち並景観賞」の創設など、水をテーマとした様々な取組みが行われてきた。1993年度からは町並み環境整備事業が始まり、全体的に「湧水を楽しみながら街中を散策する」ことを念頭に置き、湧水を活かした島原中央公園の再整備、「鯉の泳ぐまち」の整備、七万石坂沿道の整備などを行っている。また、民間団体として「島原中心市街地街づくり協議会」と5つの研究部会が発足され、各種整備事業や、まちの街づくり協定に関わっている。

参考HP：
http://www.mlit.go.jp/tochimizushigen/mizsei/mizusato/shichoson/kyushu/shimabara.htm

水を活かした事例2

事例26 近江八幡市の水郷風景づくり　【近江八幡市】

景観行政団体による風景づくりの様々な取り組み

▲近江八幡市を構成する6つの風景ゾーンと水郷風景計画区域

▲近江八幡の歴史を象徴する八幡堀の情緒ある風景

▲市民ボランティアによる清掃活動

近江八幡市の八幡堀と水路、湖等の水辺とそこに生育するヨシ原は、まさに水郷と呼ぶにふさわしい景観を呈していたが、戦後のモータリゼーションの進展などによる八幡堀の埋立て計画に対し、地域の伝統な風景を保全しようと「よみがえる近江八幡の会（1975年設立）」を中心に市民運動がわき起こり、堀は再生されることとなった。

そして、当時からの自治会や各種団体による清掃活動、そして「八幡堀」を舞台とする「たそがれコンサート」等などの活動は現在まで続けられている。また、八幡堀の再生は町並み保存へと引き継がれ、新町通りなどは重要伝統的建造物群保存地区（1991年）として指定される。このような流れの中、近江八幡市風景づくり条例（2005年制定）に基づいた、風景計画が6つの区域ごとに策定され、現在施行・運用されている。

参考文献：
「水辺景観を活かしたまちづくり -- 近江八幡市」、まちづくり7、2005

河川デザイン事例1

事例27 既存の石積みを活かす河川デザイン　【愛知県豊田市】

個々の石垣を尊重し、根続きで補強する整備

石積みの間から、キキョウや大きなセンリョウが赤い実をつけている

■特徴を活かすデザイン配慮事項

●「既存のものを利用し、足助らしさをつくる」ために既設の石積みに根継ぎ工で補強した。
●根固め工のテラス部分に幅を待たせて人が通れるようにした。
●根固めの高さをなるべく低くして手で水面に触れられる程度とした。
●根固め工の法面を自然石積みとした。

■概要

・河川類型：上流区間、都市的河川、中小河川
・河川景観の特徴：人間の営為が反映された景観、流域文化に彩られた景観
・工種：根継ぎ工、階段工、水質浄化施設
・デザインキーワード：歴史的な街並み、市民と一体となった川づくり、既存の石積みの活用

足助川は、上流の河川に沿って約2kmにわたり古い街並みが連なる、歴史的景観を呈している。特に河岸まで住居等がせり出し、川沿いはかつてそれぞれの家で建造した、住居を支える石積みの連続や、住居から直接川に降りられる階段が特徴となっている。

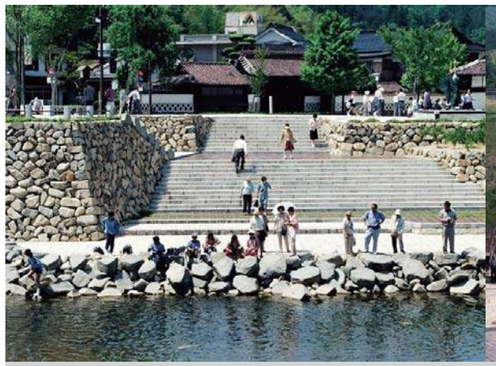
川の前面に遊歩道を設ける際には、このような石積みの景観を尊重し、新たな護岸を造るのではなく、根続きで補強してきた。一方、足助川は石垣に代表される歴史的景観を保全・復元する際の参考になる事例であるが、遊歩道の鉄平石の使い方や、家屋が川側を向いていないことには課題が残る。こうしたハード事業に前後して、住民運動で、中馬のおひなさん、たんころりん、万灯まつりが企画され、人通りの少なかった町に人並みがよみがえってきた。

参考HP：
http://www.mlit.go.jp/river/kankyou/riverscape/pdf/c-08_1.pdf

河川デザイン事例2

事例28 津和野川ふるさとの川整備計画　【島根県津和野町】

川沿いの町並み空間と一体化した整備



■特徴を活かすデザイン配慮事項

●地域の祭りとイベントの場となるテラスを整備する。
●河川周辺の道路には、用地のある限り高木を植栽し、用地のない区間に協定や補助金制度の創設等により民地での植栽に協力を仰ぎ、緑の散策路をつくる。
●地域のコミュニティセンターや郷土館といった堤内地の施設と津和野川が一体となった整備をはかる。護岸は石積みとし、階段を設け水際に降りられるようにし、高水敷に遊歩道を整備する。

■概要

・河川類型：上流区間、都市的河川、中小河川
・河川景観の特徴：広がりや連続性を感じさせる景観、人間の営為が反映された景観、流域文化に彩られた景観、水と触れあいと賑わいのある景観
・工種：テラス、石積護岸、散策路
・デザインキーワード：まちづくり、河川周辺の施設との連続性、素材感の統一、専門

1991年、観光地として人気の津和野町の市街地を流れる津和野川区間を対象に、整備事業が始まった。この種の整備事業としては初期のものでありながら、川沿いの町並みと一体的に整備し、石積み護岸や石州瓦のパラペット、緑の土盛りなどを巧みに配置することで、それまで裏的存在であった川辺を住民や観光客に親しまれる表の空間にする土木施設デザインを進めた好例である。

津和野大橋を中心に、下流の丸山橋から上流の幸橋までを重点的に、藩校養老館の庭園を川と一体化することで、橋のたもとに快適な水辺空間が出現した。石積みの護岸とともに、川とふれあう広場や散歩道が点在する変化に富んだ川辺となった。「川と町のかかわり」を意識した景観デザインは、観光客だけでなく住民の目を川に向けるきっかけとなった。

参考HP：
http://www.mlit.go.jp/river/kankyou/riverscape/pdf/c-08_1.pdf

事例29 オープンカフェ事例1
日本大通りオープンカフェ　【神奈川県横浜市】

歴史ある通り沿いの賑わいを創出する

◀▶歩道部を拡幅した道路を中心とし、歴史的建造物をもつ町並みにふさわしいオープンカフェの様子

◀事業の運営は委員会がするが、屋外のパラソル、テーブル、椅子などは各店舗が管理する。出店者は全店に公募し、外部委員会を中心にした審査会を経て選定される。

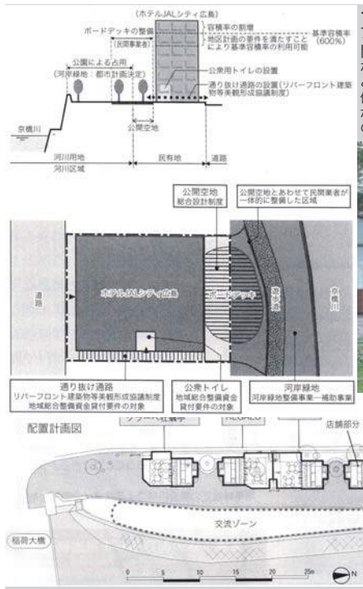
2002年5月、日本大通りパラソルカフェ＆ギャラリー実行委員会を中心にオープンカフェ社会実験も兼ねて実施された「日本大通りパラソルカフェ＆ギャラリー」をきっかけに、「日本大通りオープンカフェ実行委員会」が発足した。7月には既存の沿道3店舗が店舗前を利用し、週末営業を中心としたレストランに続けて、9月から11月までは継続的に営業する本格実験を行うこととなった。このようなオープンカフェは現在までも続けて実施されている。

また、道路管理者は実行委員会と横浜市が締結する協定に基づいた管理を条件として、実行委員会に一括して道路占用を許可し、各店舗とは、実行委員会が具体的な出店場所や内容などについて調整する方法としている。なお、営利行為であるため、市は実行委員会から、道路占用料（2600円/㎡・月）を減免することなく徴収している。

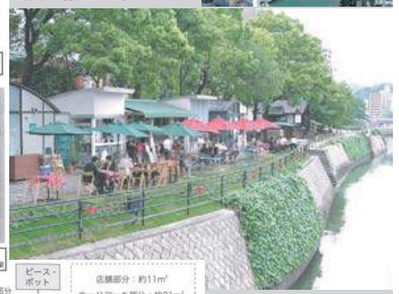
日本大通り活性化委員会が運営。
http://www.nihonodori.jp/

事例30 オープンカフェ事例2
水辺のオープンカフェ　【広島県広島市】

河岸緑地を利用し、水辺空間に常設的な集いの場を創出する



◀京橋川「水辺のオープンカフェ（地先利用型）の利用空間整備の例」
ホテル建て替えに際し、公開空地と河岸緑地の一部を一体的に整備することで、民有地と河岸緑地が一体となった良好な河川空間の形成を行っている。



◀京橋川「水辺のオープンカフェ（独立店舗型）の施設配置図」
オープンカフェは、事業協賛金の徴収、緑地掃除の位置づけという点では地先利用型と共通であるが、公募による出店者募集と選定委員会での選定などの点では相違している。

広島市を流れる京橋川では、水辺と市街地が直接面しているという特徴を活かした水辺のオープンカフェが営業されている。これは河川敷地占用許可準則に関する特例措置適用区域の指定に基づく社会実験として、次の2通りの形態で実施されている。

まずは、河川周辺の事業者が民間地の営業活動として、所有地と地先の河岸緑地を一体的に利用してオープンカフェを営業する地先利用型（2000年~）があり、「公開空地」「市民トイレ」等の整備・提供を求めるのが特徴である。また、厨房等の施設（テーブル、椅子等は除く）が民有地内にある前者に対して、一般公募により選定された事業者が河岸緑地の定められた区画に店舗を常設し、営業する独立店舗型がある。河川区域内に民間施設を常設し、民間で営業活動を行うという点では全国初の試みである。

参考文献：
（財）都市づくりパブリックデザインセンター編
「公共空間の活用と賑わいまちづくり」、学芸

事例31 オープンガーデン事例
小布施 オープンガーデン事業　【長野県小布施町】

20年間の官民協働による花のまちづくり

▲オープンガーデンブック

■花を活かしたまちづくり

栗と北斎で知られる小布施町。住民と町は過去20年間にわたって「フラワーコンクール」、「小布施景観賞（生け垣・緑化部門）」など「花のまちづくり」を進めてきており、イギリス視察でヒントを得て、参加家庭はコンクール等で入賞した方々の協力より、全国で初めて、オープンガーデン事業が始まった。

その一つに2000年度から始まった「オープンガーデン」がある。町に登録した一般家庭や商店、学校、寺院などの自慢の庭を一般観光客に公開するものである。公開する庭園は、初年度は38軒、2年目は51軒、3年目は60軒、4年目は67軒に増え、現在は70軒強であるという。このにわを見るため、連日町内外から大勢の人が見学に訪れている。

■小布施オープンガーデンブック

町は、参加家庭の庭を写真入りで紹介する「小布施オープンガーデンブック」を2万部作成し、町内各所で無料配布している。観光客はこの冊子の情報をもとに、見てみたい庭を自由に訪ね歩く。「共通の趣味を持つ方々とおしゃべりできて楽しい」「見てもらうと張り合いになる」「立派な庭園より一般の方の庭のほうが参考になる」など、見学する側も、迎える側も評価は上々である。

参考HP：
http://www.pref.nagano.jp/syoukou/sinkou/hiroba/j_obuse.htm

事例32 相互支援システム事例
NPO「こころの森」ファミリーサポートセンター【福島県坂下町】

現代版「もちつもたれつ」を実現するための生活支援

■行政と民間のパートナーシップ

平成16年4月から、子育て支援をしていく「ファミリー・サポート事業」が始まった。この事業では、市町村がファミリー・サポート・センターを設置し、事業を行っていくもので、福島県内ではいわき市、須賀川市で実施されている。坂下町のファミリーサポート事業開始により、町職員とNPOが地域の小学校、幼稚園、保育所の保護者を対象にアンケートを実施したところ、863人のうち428人が「利用したい」と回答し、高いニーズがあることが分かった。また「援助したい」という回答も多く寄せられたことから、坂下町での事業をスタートさせた。出資は坂下町が行い、運営はNPO「こころの森」が行う。坂下町出資のため、活動は坂下町内に制限されているが、喜多方市内からの問い合わせもある。

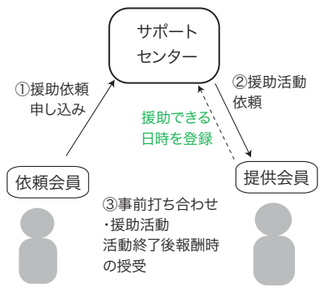
■依頼会員と提供会員のマッチング

子育ての援助をしてほしい人（依頼会員）と子育てを手助けしたい人（提供会員）が互いに会員となり、仲介するコーディネーターが相互調整を行う。昔ご近所で行っていたような「持ちつ持たれつ」の、1対1の相互支援のマッチングを行い、子育て支援を図っている。核家族化が進行する中で、地域が連携し子育てを支援することが目的である。

提供会員はセンターが開催する23時間の研修を受け、有償ボランティア制で支援を行う。1時間600円（7時～19時まで）で、時間外は100円割増となる。1時間以下の時間区分もあるため、気軽に利用できるようである（eg.　30分なら300円、など）。30～60代まで、幅広い年代の人が提供会員として登録している。主に子どもの送り迎え、美容院に行っている間の子どものお守り、などの内容が多いようである。子育ては、平成18年は2000件、介護も1000件ほどの援助実績があるようである。

■喜多方への示唆ー支所としてスタート

地域内でサービスを提供するこのシステムは提供会員の意思とサポートセンターの事務局があればすぐにも実現可能なものである。坂下町でのノウハウを参考にまずは支所として始めてみてはどうだろうか。



▲支援活動フロー
サポートセンターは依頼者とサービス提供者の仲介を行う。

出資：坂下町、運営：NPO
2004年（平成16年）より開始。

事例33 エリアマネジメント事例
専門高校での実践教育による防災まちづくり　【千葉県市川市】

工業高校の技術を実践に生かして教育効果も狙う

■高校生による「町内まるごと耐震診断」

市川工業高校は15年度から文部科学省の事業（目指せスペシャリスト、3カ年事業）を導入し、木造住宅耐震診断の実践教育を推進してきた。

具体的には、市民向けの公開講座や、地域の大工・工務店向け耐震実験などを開催している。実地の耐震診断を行った対象の木造住宅は、これまで35軒にのぼり、担当した生徒は46人にもなる。全国初の高校生による実施の一斉簡易診断「町内まるごと耐震診断」では、パソコン上で耐震診断ができる公開講座を通じ意識の高まった市民からの希望者宅を対象に行った。診断結果は対象宅に通知され、防災まちづくりにつながっている。

■高い教育効果と地元の意識向上

地域での実践的な体験学習を経た生徒達は、自らの専門知識に誇りを持ち、さらに学習を深めていきたい、と大学進学を希望する者も多くなった。一般的な耐震診断・補強に不安を持つ地域住民も、学習活動を信頼し、教材に自宅を提供することを厭わない。その結果、生徒の教育・地域防災力アップにつながるモデルとなる。

今後の課題としては、全国の工業高校ネットワーク化、および実際に工事を行う地元工務店などとのネットワーク構築が挙げられる。この事業の担当教諭は「毎年工業高校の建築科からは約1万人の卒業生が誕生する。彼らが防災を切り口とした地域のまちづくりの担い手となる」と述べている。

■喜多方への示唆

喜多方商業高校と工業高校の合併により、商工の両技術を持つ専門性の高い高校が生まれる。現在工業高校にある機械科・電気科・電子科・土木科それぞれの技術で得たことを、ハードの形でまちに落とすことが出来るだろう。商業高校はそのビジネス実務・情報システムの両科で学んだことを地元商店の経営をともに考えるといったインターンシップ実習などの教育プログラム開発が考えられる。

▲活動を紹介するまちづくり新聞

開始年：2003年（平成15年）～
実施主体：市川工業高校
活動概要：防災教育チャレンジプラン
http://www.bosai-study.net/2006houkoku/plan23/index.html

事例34 地域デザインセンター事例
柏の葉アーバンデザインセンター(UDCK)　【千葉県柏市】

誰もが参加できる、まちづくりの交流・発信施設

■産官学連携の地域デザインセンター

急速に開発が進む柏の葉地区を中心に、国際性豊かな「環境・健康・創造・交流」のまちづくりの実現に向けて地域（柏市、柏商工会議所、田中地域ふるさと協議会）と大学（東京大学、千葉大学）、民間企業や関係機関、市民が協働する場として2006年11月に開設された。運営は千葉県、柏市、東京大学、千葉大学が主な主体となって行われている。その時その時のイベント、ワークショップ、展示などのセンター内イベントの調整の他、柏の葉キャンパスタウン構想計画の策定、地元企業とのデザイン開発など、地域のハード面での計画やブランディングに大きく貢献している。

■多様な催し物

センター自体は大きな展示スペースを兼ね備えたもので、会議からイベントまで様々な活動に対応している。中でも毎年開催される3大学合同演習の「都市デザインスタジオ」では学生が柏の葉地区に公共空間の提案を行い、地域の人を招いての講評会・展示で、まちを変えるためのアイディアを発信している。

また、担い手育成のためのまちづくりスクールの開催、子どものための「あそびの学校」など、地域の様々なイベントや地域づくりワークショップ等、年間を通して様々な活動が行われている。

■人と人とをつなげる場

毎月1回の「Kサロン」やその他のイベント、交流会などでは、まちづくりに携わる人々が集まり、互いの情報交換、また活動の連携などに発展している。

■専門家が居る地域センター

喜多方では、実際に地区を考え、変えて行く上で、多様な人が集まる場、常に何かが起こっている場を整備する必要がある。その際、計画・提案の精度を上げるために常勤の専門家を置くことが重要だろう。

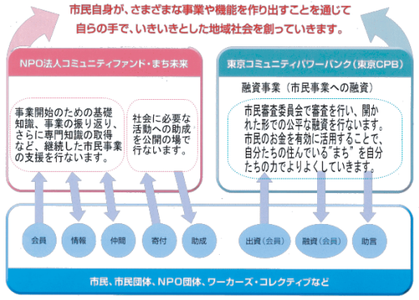
開設年：2006年11月
実施主体：千葉県、柏市、東京大学、千葉大学、三井不動産
HP：http://www.udck.jp/

事例35 まちづくりファンド事例1
東京コミュニティーパワーバンク　【東京都】

生協を母体としたまちづくりファンド

■市民の本当の「自立」

生活クラブ生活協同組合が母体となり、2003年9月に設立されたまちづくりファンドである。生協とは別に、市民が自分たちで経済活動の一環として解決していくための組織「ワーカーズコレクティブ（従業員一人ひとりが出資をした事業体）」というコミュニティビジネスと同様の事業を約20年前から生み出し、生活に根ざした様々な事業を行ってきた。その事業を行う中で、地域の社会的事業を援助するためには融資だけでなく、経営ノウハウやネットワークなども同時に提供する必要を感じたことから、「融資の仕組みを持ったコミュニティビジネス支援の仕組み」を確立するため、融資機能を「東京コミュニティパワーバンク（東京CPB）」、その他の機能を「NPO法人コミュニティファンド・まち未来」として二分割して立ち上げた。融資のための原資は約560の出資者からの出資金約8600万円（90%以上が個人出資）である。



◀コミュニティパワーバンクの活動概念図。市民自身が事業を起こし、自らの手で地域社会をつくるための支援を、経営方法支援のNPOと資金的支援の融資バンクの2本立てで行う。

■東京CPBファンドの仕組み

融資を受けるためには、会員になって出資をすることが条件。1口5万円で、個人は1口、法人は3口から出資できる。東京という地域内での資金循環を目指しているため、融資対象は東京内の共益性・社会性のある事業である。事業目的重視のため、営利性が強すぎなければ非営利である必要は無い。融資先は、NPO運営の高齢者グループホーム、コミュニティカフェ、空き店舗を利用した乳幼児在宅育児支援事業、障がい者デイケアセンターなどである。

■社会的信頼のある母体をファンドに

喜多方では、生協のように社会的信頼がある既存団体を母体としてファンドを設立し、蔵など重要建築物のの修復支援、子育て・高齢者の生活支援事業に優先的に助成することが考えられる。

設立年：2003年
実施主体：NPO法人東京コミュニティパワーバンク（個人会員+団体会員出資）
HP：http://www.h7.dion.ne.jp/~fund/

事例36 まちづくりファンド事例2
世田谷まちづくりファンド　【東京都世田谷区】

公益信託によるまちづくり助成金と区民参画型運営

■区民サポーターによる市民参画型運営

公益信託制度を活用して設立された、まちづくりの市民参画型ファンド。財団法人世田谷トラストまちづくりが実施主体となっている。助成による資金的支援によって、区民のまちづくり活動を応援する。助成対象は「世田谷区を対象とした住みよい環境づくりにつながる活動」。活動はモノ・環境づくりに限らず幅広い動機や目的のものを含むが、その成果が将来的に地域の住みよい環境づくりにつながる活動とする。

特筆すべきはその運営方法で、区民サポーターによる運営は全国のモデルになっている。1992年から15年間に、まちの緑化や公共の場づくりへの提案、子どもの視線から環境を考える、福祉マップづくりなど、今までに助成したグループは196に上る。

■部門別の助成

2007年度は、以下の4部門を設け、5～500万円を助成している。

1.「はじめの一歩助成」：これからまちづくりの第一歩を踏み出そうとしているグループ活動に対して助成する。
2.「まちづくり活動助成」：住みよい環境づくりをめざす住民グループのさまざまなまちづくり活動に対して助成する。
3.「ネット文庫制作部門」：自らのまちづくり活動で得られた経験、知見、スキル等をまとめ、インターネット上に電子図書の形で公開する活動に対して助成する。
4.「まちを元気にする拠点づくり部門」：地域の多様なネットワークを形成し、環境共生や地域共生のまちづくりやコミュニティの課題解決力を高める拠点づくりの整備事業に助成する。

■世田谷まちづくりファンド主な特徴

①公開審査会方式による助成決定
　ガラス張りの助成決定により、選考プロセスの透明性と中立性を確保。
②「学びあい育ちあう場」としての運営
　活動発表会（年2回）を通して、活動グループ相互の情報交換や学習、ネットワーク形成の機会を設置。
③区民サポーターによるファンド支援
　区民サポーターの参画により、発表会の企画や運営、ファンド支援チャリティコンサートの開催。
④個人・企業や行政からの寄付金による基金づくり
　行政からの出損金以外に、世田谷区内外の個人や企業からの寄付金を基金とする。

■三セクファンド＋市民サポーターの支援

財団法人など第三セクターによるファンドシステムを構築し、市民サポーターによる企画運営を行う。

設立年：1992年12月
世田谷トラストまちづくりHP：まちづくりファンド情報
http://www.setagayatm.or.jp/trust/center/fund/index.html

編集後記

東京大学都市デザイン研究室有志喜多方プロジェクトチーム

野原卓

いわゆる田舎のない自分にとって、喜多方は故郷を感じさせる落ち着きある場所です。彫りのある意匠が陰影を深くし、一棟でも凛として建つ喜多方の蔵の佇まい。夜明けとともに耳に入る雪解け水のせせらぎとまな板を叩く包丁の音。いつも、喜多方を訪れると、その澄みきった空気に背筋が伸びる思いです。

この、まっすぐな喜多方であり続けること、そして、そのために自分たちができることを考え、これからも考え続けてゆきたいと思います。

永瀬節治

この冊子に凝縮された喜多方のまちづくりの歩みに、微力ながらも携われたことで、地域固有の資源と向き合いながら、様々な人々を束ね、ある方向へとまちづくりを動かしていくことの難しさ、面白さ、喜びを、リアルに経験することができました。特に「くらはく」の場に関われたことは、自らの大きな糧となりました。このような機会を与えていただいた全ての方々に感謝しつつ、今後のさらなる展開を見守っていきたいと思います。

鄭一止

喜多方には隠れたポテンシャルがいっぱいあります。蔵やラーメンはもちろん、小田付の裏通りを流れる水路、田付川から望める飯豊連峰の山々、東北方言の風情、リターンする若手などがあげられます。このような喜多方の「ひと」を含む様々な資源をこの報告書に入れ込んでみましたので、喜多方における可能性を読み取っていただきたいと思います。

鈴木智香子

今回の編集作業を通じて、喜多方は、「男四十にして蔵をもつ」といった様々な人の様々な「情熱」と、そうした情熱を形にする様々な「知恵」が作り上げたまちであることを改めて実感しました。

この本が、今後喜多方まちづくりに携わる様々な人の「情熱」を形にする「知恵」として、少しでもお役に立てればと願っています。

最後に、喜多方でお世話になった全ての方々にこの場を借りて改めて御礼致します。有り難うございました。

蛎灰谷愛

喜多方の歩みとプロジェクトのこれまでを振り返り、新たな一歩を踏み出すための集大成の年であった今年の、さらに集大成の本ができました。大事な節目の年に参加できたことをとても光栄に思っています。また、のれんWSをはじめ、住民の方々と語り合い、まちについていろいろな想いを共有できました。喜多方プロジェクト７年間の軌跡が、喜多方のまちの益々の発展と私たちの研究活動に活かされていければと思います。

柏原沙織

喜多方に関わった一年は、私にとって初めて知らない町に行って地元の人と話し、将来を考えるという年でした。先輩方の行った調査、提案の熱意に気圧されながら、「地域の人がもっと関わるには何がきっかけになるのか」を考えながら取り組みました。7年目という節目の年に自分が出来たことは少ないですが、お手伝いできたことが一人でも多くの方のまちづくり参加へのきっかけとなれば幸いです。最後に、いつも優しく活動を見守ってくださった喜多方の皆様に感謝致します。

平岡惟

喜多方のさまざまな資源や、これまでのいろいろな活動をまとめたこの冊子づくり。作業を進めていくうちに、喜多方ってこんなものがあったんだ、こんなこともやっていたんだ・・・とあらためて多くの発見がありました。喜多方プロジェクトに関わったのはたった一年。でも、たくさんの喜多方の魅力とたくさんの熱い取り組みにふれることができた、とても大きな一年でした。ありがとうございました。

矢原有理

くらはくに向けたヒアリングや語り合いにおける地元の方々の意見を通して、蔵を継承する難しさ、まちづくりの楽しさなど、多くのことを学ぶことができた1年でした。この報告書がこれまでの喜多方のまちづくり活動を振り返るものとしてのみならず、新しいまちづくりの種としても役立つものとなれば幸いです。様々な活動を通してお世話になった皆様、どうもありがとうございました。

くらはく最終日に
2007. 10.14

東京大学喜多方プロジェクト
歴代メンバー

北沢猛	野原卓	窪田亜矢
今村洋一	池田晃一	石山千代
村田康明	關佑也	片岡公一
土井祥子	大野友平	小林有吾
安田啓紀	内山隆史	黒瀬武史
戸田惣一郎	柴田直	鈴木智香子
早坂勝一	鄭一止	永瀬節治
石井宏典	奥田紘子	横田俊介
吉田拓	蛎灰谷愛	柏原沙織
平岡惟	矢原有理	ジャックファリス

喜多方まちづくりブック
地域資源を活かしたまちづくりの軌跡と展望

発行　2008年5月

発行　喜多方蔵のまちづくり協議会
Tel 0241-24-4541 (NPOまちづくり喜多方)

編集　東京大学大学院工学系研究科
都市工学専攻都市デザイン研究室
(北沢猛、野原卓、鄭一止、鈴木智香子、
蛎灰谷愛、柏原沙織、平岡惟、矢原有理、
ジャック・ファリス、永瀬節治)